(財)東大阪市文化財協会年報

１９８３年度

1984．3

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市域は、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く存在しています。これらの遺跡・遺物は、先人の残した貴重な遺産であり、現在に生きる我々が保護・活用し、後世に伝えることは国民共通の使命であり、義務でもあると申せましょう。

近年、種々の開発事業に伴って遺跡の調査事業が飛躍的に増加しておりますが、その調査事業の大半を当文化財協会が実施しております。各々の調査の実施に当っては多くの関係各位からの誠意あふれる協力と御指導をいただく中で、数々の調査成果が得られ、当市域のみならず、近畿地方の歴史を解明する上に重要な位置を占めているものと確信しております。

今回報告の運びとなりました鬼虎川遺跡・縄手遺跡・瓜生堂遺跡・西岩田遺跡・若江遺跡は、当市域における代表的な遺跡であり、河内あるいは近畿地方の歴史研究の上で欠くことのできない遺跡であります。鬼虎川遺跡では、遺跡の西限を推定し得る資料が得られ、縄手遺跡では、新たに縄文時代後期の土器・土偶等の資料が加わり、遺跡の北限を確認しました。瓜生堂遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓の検出、遺跡の東限の確認、あるいは弥生時代中期・平安時代における土器の様相がより明確になりました。さらに西岩田遺跡では、全国的に出土例が少ない角杯の検出、東海地方との交流を示すS字状口縁土器の検出、さらには古墳時代の土器の様相をより解明にし得る資料が出土しました。また若江遺跡では、南限地域を示す資料と隣接する山賀遺跡の東限地域を示す資料が得られました。

以上のように、各遺跡で得られた数々の調査成果をまとめた本報告書が、当市域のみならず周辺諸地域の歴史を明確にする一助となり、広く市民の方々に活用され、文化財に対する御理解と保護理念の確立に役立てば幸いかと存じます。

最後に、各遺跡の調査に当たり御協力をいただいた関西電力株式会社、縄手農業協同組合、大阪ガス株式会社、東大阪市役所水道局・同下水道部、さらには指導・助言をいただいた方々に対し心から御礼申し上げるしだいであります。

昭和59年3月31日

財団法人　東大阪市文化財協会

理事長　木寺　宏

例　　言

1．本書は、財団法人東大阪市文化財協会が、昭和52年から昭和58年までに実施した鬼虎川遺跡・縄手遺跡・瓜生堂遺跡・西岩田遺跡・若江遺跡の発掘調査概報集である。

2．調査並びに本報告書作成については以下の事務局体制で実施した。(昭和59年３月31日現在)

事務局長　寺澤　勝
庶務部長　吉田照博
庶務部員　安藤紀子
調査部長　原田　修
調査副部長　下村晴文
調査部主任　福永信雄
調査部員　上野節子

3．調査は、鬼虎川遺跡を福永信雄、縄手遺跡を下村晴文、瓜生堂遺跡・西岩田遺跡を勝田邦夫・才原金弘、瓜生堂遺跡・若江遺跡を原田修・上野利明・吉村博恵・阿部嗣治がそれぞれ担当して実施した。

4．本書の執筆は下記の通りである。なお編集は阿部が担当して実施した。

鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報……福永信雄
縄手遺跡発掘調査概報……下村晴文
瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報……Ⅰ、Ⅲ－１、Ⅳ－１　勝田邦夫
　Ⅱ、Ⅲ－２、Ⅳ－２　才原金弘
瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報……Ⅰ、Ⅲ－１－1)、2)、Ⅳ－１－1) 原田　修
　Ⅱ、Ⅲ－１－9)、２－1)~4)、Ⅳ－１－3)
　Ⅳ－２　吉村博恵
　Ⅲ－１－3)~8)、Ⅳ－１－２) 阿部嗣治
　Ⅲ－１－2)　上野利明

5．本書に掲載した遺構・遺物の実測図、製図、遺物の拓本、復元は、調査担当者及び、大野佳子、中西裕美、川吉謙二、田中久雄、岡村多美子、浪江由美、金弘美、久場満理、中川佳津子、中川香奈芽、小出真規子がおこなった。

6．本書に掲載した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は、新生堂フォト落合信生氏に委託して撮影した。

7．各調査の実施にあたっては、縄手農業協同組合、関西電力株式会社、大阪ガス株式会社、東大阪市水道局、東大阪市建設局下水道部から格別のご協力をいただいた。記して謝意を表する。

目　　次

鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
　1．第1ピット……4
　2．第2ピット……7
Ⅳ．まとめ……12

縄手遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過……13
Ⅱ．位置と環境……14
Ⅲ．調査の概要……15
　1．層序……15
　2．遺構……16
Ⅳ．出土遺物……17
Ⅴ．まとめ……21

瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過……23
Ⅱ．位置と環境……24
Ⅲ．調査の概要……27
　1．瓜生堂遺跡……27
　　1）層序……27
　　2）遺構……28
　　3）出土遺物……35
　2．西岩田遺跡……42
　　1）層序……42
　　2）遺構……42
　　3）出土遺物……47
Ⅳ．まとめ……59
　1．瓜生堂遺跡……59

2．西岩出遺跡……59

瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過……61
Ⅱ．位置と環境……63
Ⅲ．調査の概要……65
1．瓜生堂遺跡……65
1）第1トレンチ……65
2）第2トレンチ……72
3）第3ピット……74
4）第4ピット……82
5）第5ピット……90
6）第6ピット……97
7）第7ピット……99
8）第8ピット……103
9）第9トレンチ……105
2．若江遺跡……115
1）第1ピット……115
2）第2ピット……122
3）第3ピット……124
4）第4ピット……128
Ⅳ．まとめ……130
1．瓜生堂遺跡……130
1）第1トレンチ……130
2）第3ピット～第8ピット……130
3）第9トレンチ……132
2．若江遺跡……133

挿　図　目　次

鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報

第1図　調査地点位置図……1
第2図　遺跡周辺図……3

第3図　第1ピット南壁断面実測図……5
第4図　溝1出土石包丁実測図……6
第5図　第1ピット出土弥生土器実測図……7
第6図　第2ピット西壁断面実測図……9
第7図　縄文土器拓影……10
第8図　第2ピット出土弥生土器実測図……11

縄手遺跡発掘調査概報

第9図　遺跡周辺図……13
第10図　調査地点位置図……15
第11図　第5層出土韓式系土器実測図……16
第12図　第7層出土土偶頭部実測図……16
第13図　北壁断面実測図……16
第14図　遺構平面実測図……17
第15図　縄文土器拓影……18
第16図　須恵器・土師器実測図……19
第17図　現在までの調査地点位置図……20

瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報

第18図　遺跡周辺図……25
第19図　調査地点位置図……26
第20図　断面実測図……29
第21図　遺構平面実測図……31
第22図　遺構平面実測図……32
第23図　11地区ピット遺構平面実測図……34
第24図　12地区ピット遺構平面実測図……34
第25図　1地区～10地区出土遺物実測図……36
第26図　土馬実測図……37
第27図　D－10地区出土遺物実測図……38
第28図　11地区ピット出土遺物実測図……39
第29図　12地区ピット出土遺物実測図……40
第30図　断面実測図……43
第31図　遺構平面実測図……44
第32図　遺構平面実測図……45
第33図　庄内式土器実測図……48

第34図　庄内式土器実測図……49
第35図　布留式土器実測図……51
第36図　須恵器実測図……52
第37図　土師器実測図……54
第38図　土師器実測図……56
第39図　土師器・瓦器実測図……57
第40図　土錘実測図……58

瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

第41図　調査地点位置図……62
第42図　遺跡周辺図……64
第43図　第1トレンチ調査地点位置図……66
第44図　甕棺出土状況実測図……67
第45図　方形周溝墓断面実測図……67
第46図　平面実測図・断面実測図……68
第47図　第16層出土弥生土器拓影……69
第48図　甕棺実測図……70
第49図　周溝内底部出土土器実測図……71
第50図　第2トレンチ調査地点位置図……72
第51図　井戸状遺構実測図……73
第52図　第3ピット～第8ピット調査地点位置図……74
第53図　第3ピット南壁断面実測図……75
第54図　第3ピット遺構平面実測図……76
第55図　第3ピット遺構平面実測図……76
第56図　第3ピット溝1出土遺物実測図……78
第57図　第3ピット第3層出土遺物実測図……79
第58図　第3ピット第16層出土遺物実測図……81
第59図　第4ピット南壁断面実測図……83
第60図　第4ピット遺構平面実測図……84
第61図　第4ピット第2層出土遺物実測図……85
第62図　第4ピット溝3・第16層・第17層出土遺物実測図……87
第63図　第5ピット南壁断面実測図……90
第64図　第5ピット遺構平面実測図……91
第65図　第5ピット井戸1平面・断面実測図……94
第66図　第5ピット井戸1出土遺物実測図……94

第67図　第５ピット落ち込み１・第２層出土遺物実測図……95
第68図　第６ピット南壁断面実測図……97
第69図　第６ピット遺構平面実測図……98
第70図　第７ピット南壁断面実測図……99
第71図　第７ピット遺構平面実測図……100
第72図　第６ピット土坑４・第７ピット溝８出土遺物実測図……101
第73図　第６ピット第３層・第７ピット第７層出土遺物実測図……102
第74図　第８ピット東壁断面実測図……103
第75図　第９トレンチ調査地点位置図……105
第76図　第１区・第４区東西断面実測図……106
第77図　第１遺構面・第２遺構面検出遺構位置図……107
第78図　第１区・第１遺構面平面実測図……108
第79図　溝９断面実測図……108
第80図　第１区・第２区第２遺構面平面実測図……109
第81図　第２区第１遺構面平面実測図……110
第82図　第４区第２遺構面平面実測図……111
第83図　土坑８断面実測図……112
第84図　第３層出土遺物実測図……112
第85図　土坑５出土遺物実測図……113
第86図　出土遺物実測図……114
第87図　第１ピット～第４ピット調査地点位置図……115
第88図　第１ピット東壁断面実測図……116
第89図　第１ピット溝１平面実測図……117
第90図　第１ピット第２層・第３層出土遺物実測図……118
第91図　第１ピット溝１出土遺物実測図……119
第92図　第１ピット第２層・溝１出土遺物実測図……120
第93図　第１ピット溝１出土木製品実測図……121
第94図　第１ピット第14層出土遺物実測図……122
第95図　第２ピット東壁断面実測図……122
第96図　第２ピット溝１平面実測図……123
第97図　第２ピット出土遺物実測図……124
第98図　第２ピット出土遺物実測図……124
第99図　第３ピット東壁断面実測図……125
第100図　第３ピット遺構平面実測図……126
第101図　第３ピット出土遺物実測図……127

第102図 第３ピット出土遺物実測図…… 127
第103図 第４ピット東壁断面実測図…… 128
第104図 瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡における方形周溝墓分布図…… 129

図 版 目 次

鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報

図版１ 鬼虎川遺跡 遺構 １．第１ピット東壁断面
２．第２ピット南壁断面
図版２ 鬼虎川遺跡 遺物 弥生土器壺・甕（１・４、第１ピット、11～13、第２ピット出土）
図版３ 鬼虎川遺跡 遺物 １．弥生土器甕・甕用蓋・底部（第１ピット出土）
２．弥生土器壺・底部（第２ピット出土）
図版４ 鬼虎川遺跡 遺物 １．弥生土器甕・底部（第２ピット出土）
２．弥生土器鉢・蓋・底部（第２ピット出土）
図版５ 鬼虎川遺跡 遺物 １．縄文土器（９）、弥生土器（第２ピット出土）
２．石包丁、打製石剣、木製蓋（第２ピット出土）

縄手遺跡発掘調査概報

図版６ 縄手遺跡 遺構 １．調査前の状況
２．機械掘削風景
図版７ 縄手遺跡 遺構 １．A溝・B溝全景
２．北壁断面
図版８ 縄手遺跡 遺構 １．縄文時代遺物包含層検出状況
２．縄文時代遺物包含層検出状況
図版９ 縄手遺跡 遺構 １．土師器高杯出土状況
２．土師器高杯出土状況
３．土師器甕出土状況
図版10 縄手遺跡 遺物 須恵器杯、土師器甕・高杯、土偶
図版11 縄手遺跡 遺物 １．土師器鉢・高杯・壺
２．土師器高杯、弥生土器壺
図版12 縄手遺跡 遺物 １．須恵器杯・器台、韓式系土器
２．縄文土器浅鉢・深鉢

瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報

図版13 瓜生堂遺跡 遺構 1．2－Ⅰ地区 土師器杯出土状況
2．2－Ⅰ地区 土師器、須恵器出土状況

図版14 瓜生堂遺跡 遺構 1．2－Ⅲ地区 ピット6土師器甕出土状況
2．溝2、溝3、ピット10

図版15 瓜生堂遺跡 遺構 1．3－Ⅲ地区 須恵器甕出土状況
2．6－Ⅴ地区～7－Ⅰ地区 溝5、ピット11

図版16 瓜生堂遺跡 遺構 1．6－Ⅳ地区 溝4
2．7－Ⅰ地区～Ⅱ地区 溝6～溝9、ピット12～ピット23

図版17 瓜生堂遺跡 遺構 1．7－Ⅰ地区 溝6、溝7、ピット12～ピット15
2．7－Ⅱ地区 溝8、溝9、ピット16～ピット19

図版18 瓜生堂遺跡 遺構 1．7－Ⅲ地区 馬歯出土状況
2．8－Ⅱ地区 溝11、ピット24～ピット27

図版19 瓜生堂遺跡 遺構 1．6－Ⅱ地区 土馬出土状況
2．6－Ⅴ地区 溝12、ピット29～ピット32

図版20 瓜生堂遺跡 遺構 1．7－Ⅰ地区～Ⅱ地区 溝8、ピット33
2．7－Ⅲ地区 溝18、溝19、ピット39、ピット40

図版21 瓜生堂遺跡 遺構 1．第11ピット 溝、ピット
2．第11ピット 溝、ピット

図版22 瓜生堂遺跡 遺構 1．第11ピット 南壁断面
2．第11ピット 東壁断面

図版23 瓜生堂遺跡 遺構 1．第12ピット 下駄出土状況
2．第12ピット 溝検出状況

図版24 瓜生堂遺跡 遺構 1．第12ピット 弥生土器出土状況
2．第12ピット 弥生土器出土状況

図版25 瓜生堂遺跡 遺構 1．12地区 ピット、溝
2．第12ピット南壁断面

図版26 瓜生堂遺跡 遺構 1．D－10地区 溝17
2．Ⅰ－10地区 井戸全景

図版27 瓜生堂遺跡 遺構 1．Ⅰ－10地区 井戸
2．Ⅰ－10地区 井戸

図版28 瓜生堂遺跡 遺構 1．Ⅰ－10地区 井戸
2．J－3地区 溝19、溝20

図版29 西岩田遺跡 遺構 1．溝1、土坑1

2．土坑1
図版30　西岩田遺跡　遺構　1．土坑3
2．土坑6
図版31　西岩田遺跡　遺構　1．溝6、溝7
2．溝6、溝7、土坑7
図版32　西岩田遺跡　遺構　1．溝7、溝8
2．遺物出土状況
図版33　瓜生堂遺跡　遺物　土馬、土師器杯、須恵器杯蓋·杯身·平瓶·甑（1地区～10地区）
図版34　瓜生堂遺跡　遺物　弥生土器細頸壺・壺・甕（D—10地区、11地区ピット）
図版35　瓜生堂遺跡　遺物　須恵器杯身・高杯、弥生土器水差・鉢・高杯・台付鉢（11地区12地区ピット）
図版36　瓜生堂遺跡　遺物　1．土師器甕・杯・羽釜、須恵器杯蓋·杯身·脚部（7地区～10地区）
2．土師器羽釜・杯・盤・甕・脚部（1地区～6地区）
図版37　瓜生堂遺跡　遺物　1．弥生土器甕・鉢・高杯・無頸壺・脚部（D—10地区溝内）
2．弥生土器底部（D—10地区溝内）
図版38　瓜生堂遺跡　遺物　1．弥生土器甕・壺・鉢・脚部(11地区ピット暗青灰色砂層）
2．弥生土器底部（11地区ピット暗青灰色砂層）
図版39　瓜生堂遺跡　遺物　1．弥生土器高杯・鉢・壺・甕(12地区ピット青灰色粘土）
2．弥生土器甕・壺・底部（12地区ピット溝内）
図版40　西岩田遺跡　遺物　庄内式土器甕・台付鉢・鉢・器台・壺
図版41　西岩田遺跡　遺物　庄内式土器、土師器甕・壺・高杯・小型丸底壺
図版42　西岩田遺跡　遺物　土師器高杯・小型丸底壺
図版43　西岩田遺跡　遺物　土師器、須恵器高杯
図版44　西岩田遺跡　遺物　須恵器蓋・杯・角杯、瓦器椀
図版45　西岩田遺跡　遺物　1．庄内式土器甕
2．庄内式土器甕
図版46　西岩田遺跡　遺物　1．庄内式土器壺・高杯
2．庄内式土器底部
図版47　西岩田遺跡　遺物　1．布留式土器甕・高杯・杯・器台
2．須恵器杯・蓋・高杯
図版48　西岩田遺跡　遺物　1．須恵器高杯・甕
2．土師器甕
図版49　西岩田遺跡　遺物　1．土師器小型丸底壺・高杯
2．土師器高杯

図版50　西岩田遺跡　遺物　　1．土師器高杯・甕
2．土錘

瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

図版51　瓜生堂遺跡　遺構　　1．調査状況（南より）
2．方形周溝墓検出状況（南より）
3．周溝部とマウンド（北より）
図版52　瓜生堂遺跡　遺構　　1．甕棺出土状況
2．周溝部弥生土器出土状況
図版53　瓜生堂遺跡　遺構　　1．調査状況
2．井戸状遺構
図版54　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第3ピット溝1
2．第3ピット溝2
図版55　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第3ピット土師器甕出土状況
2．第3ピット南壁断面
図版56　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第4ピット溝3、溝4、土坑1、ピット1、ピット2
2．第4ピット南壁断面
図版57　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第5ピット井戸1、溝5
2．第5ピット井戸1
図版58　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第5ピット井戸1遺物出土状況
2．第5ピット井戸1断面
図版59　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第5ピット井戸1完掘状況
2．第5ピット南壁断面
図版60　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第6ピット溝6、土坑2
2．第6ピット南壁断面
図版61　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第7ピット溝8、土坑3、落ち込み1、落ち込み2、落ち込み3
2．第7ピット溝8、土坑3
図版62　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第7ピット土師器壺出土状況
2．第7ピット庄内式土器壺・甕出土状況
図版63　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第7ピット東壁断面
2．第7ピット東壁断面
図版64　瓜生堂遺跡　遺構　　1．第8ピット南壁断面
2．第8ピット南壁断面
図版65　瓜生堂遺跡　遺構　　1．溝1、土坑1

2．土坑２
図版66　瓜生堂遺跡　遺構　１．溝２（第１区）
２．溝２（第２区）
図版67　瓜生堂遺跡　遺構　１．溝６
２．土坑５
図版68　若江遺跡　遺構　１．調査前の状況
２．第１ピット第３層内遺物出土状況
図版69　若江遺跡　遺構　１．第１ピット溝１
２．第２ピット溝１
図版70　若江遺跡　遺構　１．第３ピット第２遺構
２．第３ピット第３遺構
図版71　瓜生堂遺跡　遺物　１．弥生土器甕棺（１・２）、弥生土器壺（周溝内出土）（３）
２．弥生土器（周溝内出土）
図版72　瓜生堂遺跡　遺物　土師器杯・甕（第３ピット溝１・第３層、第４ピット第２層、第７ピット溝８・第７層）、須恵器蓋・鉢（第４ピット第２層、第５ピット第２層）
図版73　瓜生堂遺跡　遺物　土師器杯・甕・羽釜、須恵器杯・甕（第５ピット井戸１）
図版74　瓜生堂遺跡　遺物　弥生土器壺・甕（第３ピット第16層、第４ピット第16層）、土師器壺・甕（第６ピット第３層、第７ピット第７層）
図版75　瓜生堂遺跡　遺物　１．土師器杯・坩・甕・把手、須恵器杯・蓋・壺（第３ピット溝１）
２．土師器杯、須恵器杯（第３ピット溝１）
図版76　瓜生堂遺跡　遺物　１．土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・壺底部・氏器甕（第３ピット第３層）
２．弥生土器壺・甕・鉢（第３ピット第16層）
図版77　瓜生堂遺跡　遺物　１．弥生土器底部・石鏃・砥石（第３ピット第16層）
２．すり石・すり棒状石製品（第４ピット第16層）
図版78　瓜生堂遺跡　遺物　１．弥生土器甕（第４ピット第16層・溝３）
２．弥生土器無頸壺・鉢・高杯脚部（第４ピット第16層）
図版79　瓜生堂遺跡　遺物　１．弥生土器高杯脚部・底部（第４ピット第16層）
２．土師器甕・須恵器杯（第４ピット第２層）
図版80　瓜生堂遺跡　遺物　１．土師器杯・甕（第４ピット第２層）
２．砥石（第５ピット井戸１）
図版81　瓜生堂遺跡　遺物　１．土師器杯（第５ピット井戸１）
２．土師器底部、須恵器杯・蓋（第５ピット井戸１）

図版82 瓜生堂遺跡 遺物 1．須恵器杯・甕・底部（第5ピット第2層）
2．土師器杯・甕（第6ピット土坑4、第7ピット溝8、第6ピット第3層）、須恵器蓋・底部（第5ピット落ち込み1）

図版83 瓜生堂遺跡 遺物 埴輪、瓦質土器、土師器皿、黒色土器、瓦器椀・皿（第2層・第4層・土坑2）

図版84 瓜生堂遺跡 遺物 1．瓦器椀・皿・鉢（土坑2）
2．土師器、須恵器

図版85 若江遺跡 遺物 土師器皿、磁器（第1ピット第2層・第3層・溝1）

図版86 若江遺跡 遺物 1．陶器、瓦質土器（第1ピット第2層・溝1）
2．土師器皿、磁器、瓦、弥生土器（第1ピット溝1・第14層）

図版87 若江遺跡 遺物 埴輪、木製品（第2ピット第2層・溝1）

図版88 若江遺跡 遺物 1．土師器、瓦器椀、羽釜、瓦（第2ピット）
2．土師器（第3ピット）

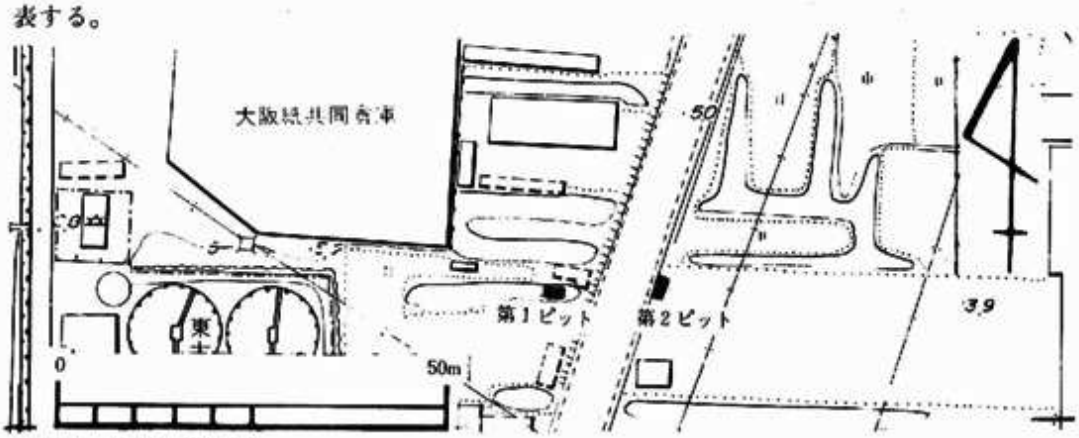
鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

鬼虎川遺跡が発見されたのは、さほど古いことではない。昭和38年に国道180号線(大阪外環状線) の建設に関連した工事の際に掘りだされた土砂の中から大量の弥生土器が見出されたことにより遺跡の存在が明らかとなった。昭和41年には、水道管埋設工事に伴って木棺が採集された。[1] しかし、いずれも不時発見であり本格的な調査が行われたのは、昭和50年に瓦斯管埋設工事に先立って行ったものが最初である。以降、今回の調査まで、15次に亘る調査を実施し鬼虎川遺跡の実態が徐々に明らかになりつつある。

従来の調査結果によれば、遺跡の範囲が国道308号線と国道180号線の交差点から東へ約300m、西に約200m、南へ約400m、北に約100m以上広がる大集落址であること、集落が営まれた期間が、弥生時代前期から中期末であること、方形周溝墓群が東の扇状地よりに営まれていること、西側の低湿地に水田が存在すること、銅鐸や銅鏃の鋳型の出土により集落内での金属製品の鋳造がほぼ確実なこと、住居は、舌状に張り出した微高地上に営まれたことなどが判明している。また本遺跡は、立地条件から他に比して木製品や骨製品などの遺存が非常に良い点も注目されている。これらのことから鬼虎川遺跡は、河内のみならず、弥生時代を考える上で必要不可欠の遺跡として評価がなされるようになった。

今回の調査は、関西電力株式会社が鬼虎川遺跡の南端推定地に近い東大阪市宝町22番地先において国道180号線を東西に横断する電線の地下埋設工事を実施するのに先立って行ったものである。調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて(財)東大阪市文化財協会が、関西電力株式会社と委託契約を交わし実施することになった。調査は、施工方法の関係で、昭和57年3月23日～4月10日と昭和57年4月22日～4月30日の2回に分けて行った。調査の実施にあたって多大の協力を賜った関西電力株式会社大阪南支店および近畿電気工事株式会社に対して謝意を表する。



第1図　調査地点位置図

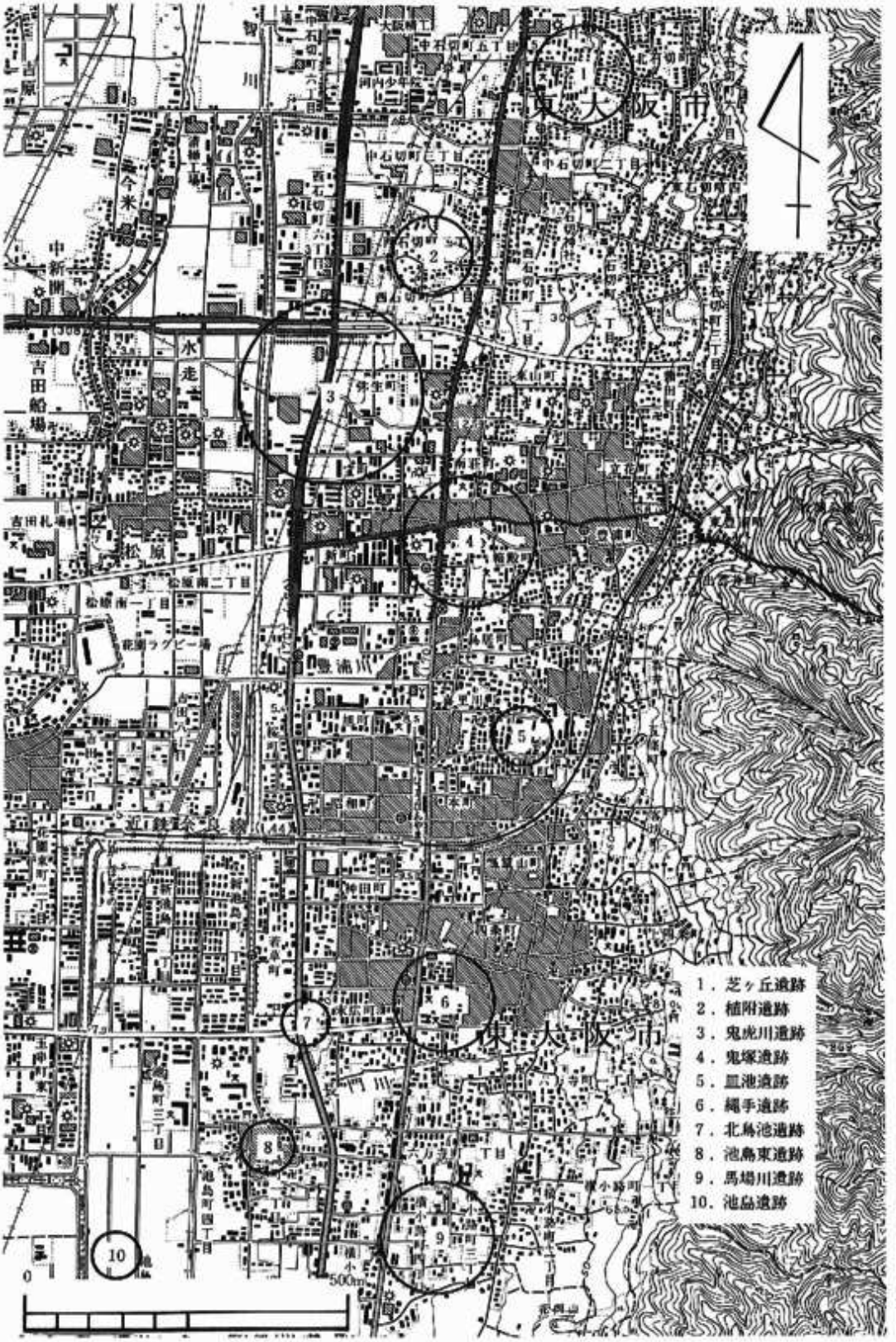
Ⅱ．位置と環境

鬼虎川遺跡は、東大阪市弥生町、宝町、水走にかけて所在する。今回の調査地は、前述の国道308号線と国道170号線の交差点から、170号線に沿って南へ350m入った所で昭和41年に採集された木棺出土推定地からは、南へ約100mの地点に当たる。

遺跡の位置する弥生町一帯は、上町台地と生駒山によって東西を画される河内平野の東端、生駒山西麓の扇状地と平野との傾斜変換点付近に位置する。

遺跡の西端は、生駒山から西下する小河川を集めて南から北に流れる恩智川により、また東端は生駒山から派生する前記の小河川によって形成された扇状地扇端部によって画される。南および北端の地形的な特徴は現在認められないが、おそらく往時は小河川などの自然地形によって制約を受けていたであろうことは想像に難くない。遺跡付近の現在の標高は5m内外を測る。恩智川と扇状地扇端部に画されたこの一帯は河内平野の中でも特に低湿な地であることから、近世以降「カキアゲ田」と呼ばれる耕地利用が行われた。最近までこのカキアゲ田の特異な景観は付近一帯に良く残っていたが、開発によって徐々に姿を消しつつある。前述したこの遺跡の木製品や、骨製品の遺存状況の良さは、土地本来の水分の多さとともに、「カキアゲ田」の溝にたたえられた水も大きな役割を果たしたものと考えられている。(2) 恩智川より東に所在する遺跡付近の古くからの集落は、北東に植附（標高12m）南東に額田（標高15m）があるが、いずれも扇状地上に存在する。

周辺には、縄文時代から歴史時代までの遺跡が数多く分布するが大部分は、扇状地扇央部上に位置している。鬼虎川遺跡と同様の時期に存在したと考えられる市域の遺跡をみても、扇状地上には、北より芝ヶ丘、植附、西ノ辻、鬼塚、縄手の5遺跡が認められるのに対し、恩智川と扇状地扇端部の間に位置するのは、現在のところ南約4.5kmに池島遺跡のみが知られる。この地域には、他の時期の遺跡も少なく、池島遺跡の北約2kmの北島池遺跡（弥生時代後期～古墳時代中期）と北約1kmに池島北遺跡（古墳時代中期）があるにすぎない。しかも池島遺跡を含む各遺跡とも現状では、遺物の出土範囲からみて小規模な集落址と考えられる。これは、低湿な平野部が、当然のことながら人間の居住に適した地でなかったことの反映であろう。このような地に鬼虎川遺跡だけが弥生時代前期から中期末の間に河内を代表すると言っても過言でない大集落たりえた理由は、おそらく北に河内湖をひかえ、集落の周辺の低湿地が農耕の適地であったことがその第一に挙げられよう。しかし、当時も地形からみて居住に最適の地であったとは考えられない。大洪水などに見舞われた様子がみられないにもかかわらず、中期末に消滅し、以降集落が営なまれなかったことはそれを示していると考えられる。畿内の同時期の大集落址が分村活動を行う直前の中期末に本遺跡のみが消滅していることは、東の扇状地上に位置する西ノ辻遺跡が、後期に大きく発展していることと合わせて、畿内弥生社会の動向の一つの反映と考えられるが、その具体的な要因の究明は今後の課題である。


1．芝ヶ丘遺跡
2．植附遺跡
3．鬼虎川遺跡
4．鬼塚遺跡
5．皿池遺跡
6．縄手遺跡
7．北鳥池遺跡
8．池島東遺跡
9．馬場川遺跡
10．池島遺跡
東大阪市
0
500m

第2図　遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

今回調査を行ったのは、前述の如く、国道170号線と国道308号線の交差点より南へ170号線に沿って390m下った、170号線の東西に相対して各1ヶ所のピット掘りを行った。東側のピットは、歩道上、西側のピットは、歩道より5m西によった地点に設けた。西側のピットを第1ピット（東西6.5m、南北3.2mの長方形）東側のピットは第2ピット（南北5.7m、東西3mの長方形）と仮称した。調査範囲が狭いことによる制約から断面観察を中心に調査を行った。以下、第1、第2ピットの順に、層序、遺構、出土遺物について記す。なお、各層における遺物の土器の出土量は、適切な表現ではないかもしれないが、10片以下を少量、10片～50片を中量、50片以上を多量と記す。また、土器のうち、特に胎土、色調を説明していないものは、胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈する生駒山地西麓産の土器である。

1．第1ピット

層序（第3図）

第1層　茶褐色粘土（耕土）　厚さ約20cm。国道170号線開設以前の耕土。耕土の上に盛土が、1～1.5mの厚さで存在する。

第2層　淡茶褐色粘土（床土）　厚さ約20cm。摩滅した瓦器、土師器、円筒埴輪などの細片を少量含む。

第3層　青灰色砂質粘土　厚さ約50cm。陶磁器、摩滅した須恵器、土師器、弥生土器の細片を少量含む。カキアゲ田の溝内堆積土と考えられる。

第4層　青灰色粘土　厚さ約10cm。遺物は出土していない。カキアゲ田の溝内堆積土。

第5層　黒灰色砂質粘土　厚さ約100cm。杭1本出土。カキアゲ田の溝内堆積土。

第6層　暗灰色砂質粘土　厚さ40cm以上。遺物は出土していない。上部をカキアゲ田の溝によって削平されている。

第7層　緑灰色粘土　厚さ約20cm。炭化物を含む。

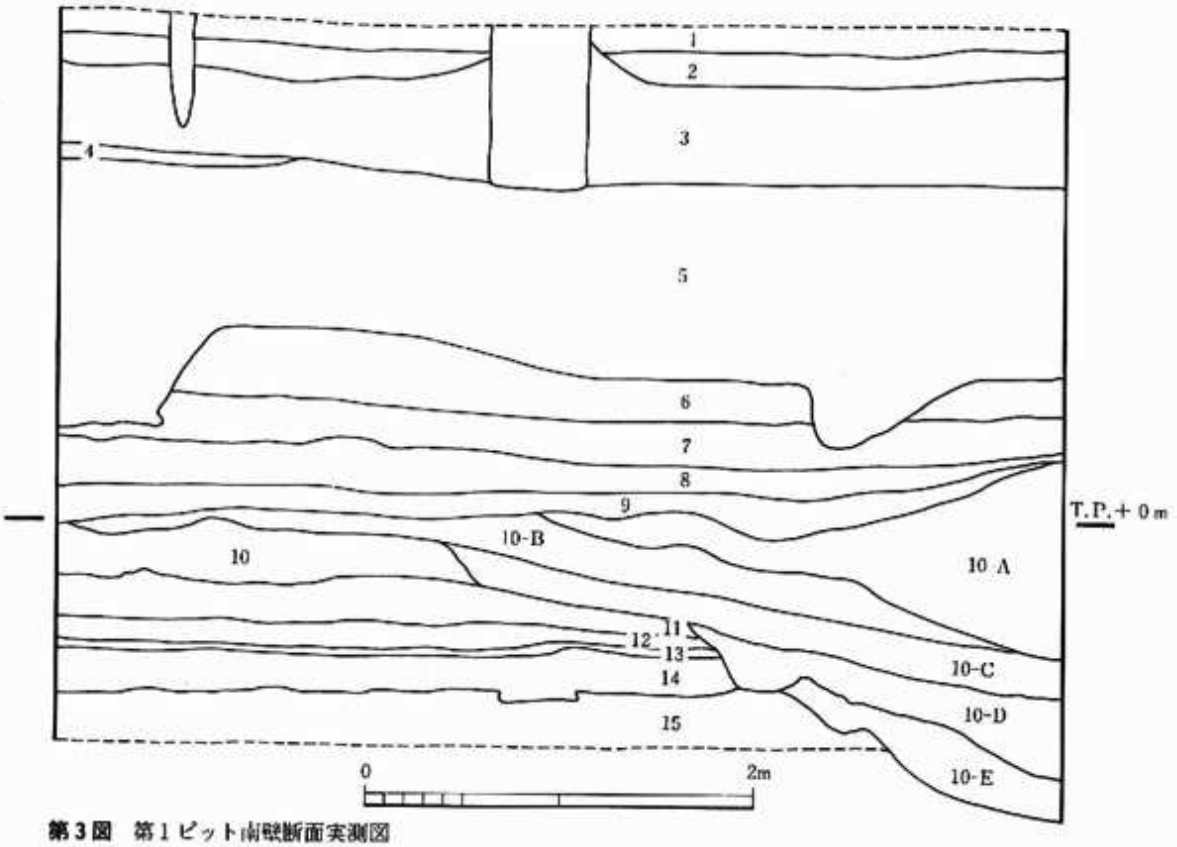
第8層　暗緑灰色粘土　厚さ約20cm。自然木を含む。

第9層　灰褐色粘土　厚さ10cm。上面から落ち込み1が切り込む。完形品に近い畿内第Ⅲ様式の壺・甕各1点と、畿内第Ⅱ様式の土器片中量出土。第1ピットで最も多量の遺物が出土した。

第10層　青灰色粘土　厚さ30cm。11・12層のブロックが混じる盛土。溝1が上面より切り込む。弥生土器少量含む。この層の上面は、T.P.0m前後。

第10—A層　灰白色砂　最大の厚さ100cm。溝1の上部堆積土。畿内第Ⅱ様式の土器少量と石包丁1点出土。

第10—B層　暗灰色粘土　最大の厚さ24cm。溝1の堆積土。畿内第Ⅱ様式の土器中量出土。



第3図 第1ピット南壁断面実測図

溝1内で最多の土器が出土。

第10—C層　灰色砂質粘土　最大の厚さ26cm。溝1の堆積土。木の枝などの植物遺体多数含む。弥生土器少量出土。

第10—D層　黒褐色粘土　最大の厚さ44cm。木の枝などの植物遺体多数含む。弥生土器少量出土。

第10—E層　黒褐色粘土　最大の厚さ30cm。15層の黄灰色粘土のブロックを含むことによって10層Dと区別できる。弥生土器少量出土。

第11層　黒色粘土　厚さ約0.2m。地山。この層の上面は、T.P.—0.3m前後。

以下、12層、黒灰色粘土、厚さ10cm。13層、青灰色粘土、厚さ5cm。14層、黒灰色粘土、厚さ20cm。15層、黄灰色粘土と続く。鬼虎川遺跡一帯で確認されている15層上面の標高は、T.P.—0.9mである。

遺構

今回検出した弥生時代の遺構は、落ち込み1と溝1である。落ち込み1は、第9層上面から切り込む。断面で確認したため、上部の形状は、不明であるが、幅40cm、深さ20cmの土壙になる可能性が高いものである。弥生土器1片が出土した。溝1は南東コーナーから西壁中央にかけて北側の肩の一部を検出した。東西方向に掘られた溝で、全形を確認することはできなかったが、上場の幅2m以上、深さ1.5m以上の大溝であることは確実である。土壙1は、出土遺

物が、弥生土器片１点であるため、時期は不明である。しかし、第９層内で、畿内第Ⅱ様式の土器に混って完形品に近い畿内第Ⅲ様式の壺、甕各１点が出土している。第９層内出土の畿内第Ⅲ様式の土器は、この２点のみで有り、完形品に近いという点と層の前後関係からみて、上層より切り込まれた遺構内に存在した土器とも考えられる。そうすれば、土坑１も畿内第Ⅲ様式に属す可能性が考えられる。溝１は、堆積土内より、畿内第Ⅱ様式の土器が出土していることからみて、この時期に比定できる。

出土遺物（第４図・第５図）

第１ピットで出土した遺物は、陶磁器、土師器、瓦器、須恵器、弥生土器、石器である。しかし陶磁器、須恵器は、細片であり図化することができなかった。したがって、ここでは、説明を省き弥生時代の遺物について記す。

畿内第Ⅱ様式の土器

甕Ａ（３・５）倒鐘形の器体に外反する口縁部をつけた甕である。口縁端部外面は角ばって終わる。体部から頸部にかけての外面は縦方向の粗いハケメ、口頸部内面は横方向の粗いハケメを施す。頸部から体部外面の一部に煤が付着する。胎土に石英、長石、チャート等を含む。色調は灰白色を呈する。（５）は、溝１出土。

甕Ｂ（２）倒鐘形の器体に直角に近く外反する口縁部をつけた甕である。口縁端部は角ばって終わる。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデを施す。胎土に石英、長石、雲母を含む。色調は赤褐色を呈する。

甕蓋（６）笠形の蓋で、口縁部を欠失する。外面は斜め方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。外面全体と内面の一部に煤が付着する。

底部（７）ややあげ底気味の底部である。外面は縦方向の粗いハケメを左から右の順に施す。外面の一部に煤が付着する。胎土に石英、長石、チャートを含む。色調は乳褐色を呈する。

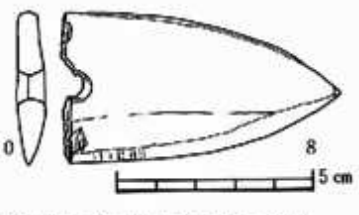
畿内第Ⅲ様式の土器

壺（４）球形に近い器体に内傾する頸部から口縁部が角度を変えて外反する口頸部をつけた壺である。口縁端部外面に一条の擬凹線をめぐらす。体部下半外面はユビナデの後、縦方向のヘラミガキ。内面は粗いハケメを施す。体部上半から頸部にかけての外面は横方向のヘラミガキ、内面はユビナデを施す。

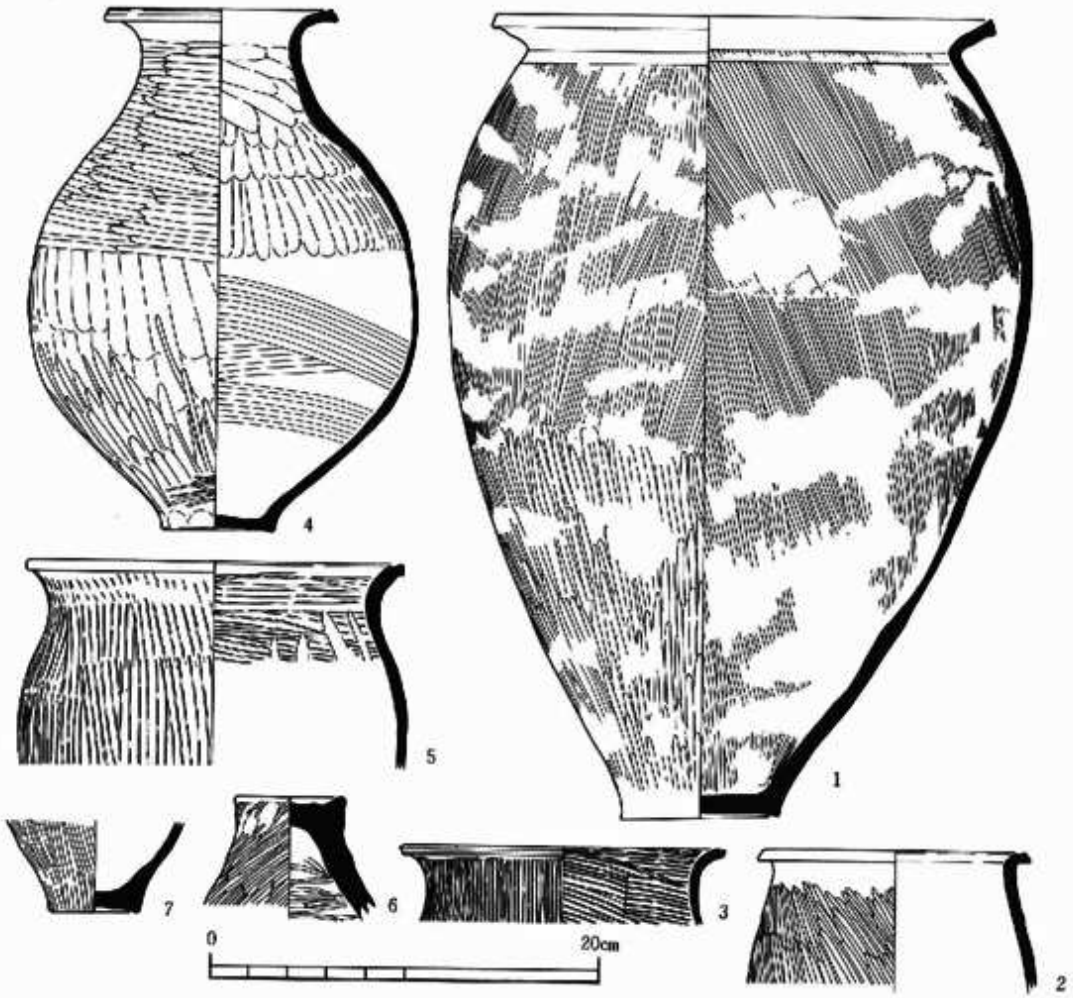
甕（１）倒鐘形の器体にくの字に外反する口縁部をつけた甕である。口縁端部は角ばって終わる。体部下半外面は縦方向のヘラミガキ、体部上半外面は縦方向のハケメを施す。体部内面はハケメを施す。体部下半外面の一部に煤が付着する。胎土に石英、チャート、くさり礫を含む。色調は灰白色を呈する。

石器（第４図）

石包丁（８）半月形外弯刃の石包丁である。約¾を欠失する。刃は片刃で中央付近に使用痕が認められる。全体に暗緑灰色を呈する緑泥片岩系の石材を使用している。溝１出土。



第４図　溝１出土石包丁実測図



第5図 第1ピット出土弥生土器実測図

2．第2ピット

層序（第6図）

第1層　赤褐色砂質土（床土）　厚さ約50cm。摩滅した須恵器、土師器、瓦器などの細片少量含む。

第2－A層　青灰色シルト質粘土　溝2（カキアゲ田の溝）の堆積土、厚さ約20cm、この層の上面はT.P.2.6m。

第2－B層　青灰色粘土　溝2の下部堆積土。厚さ約70cm。摩滅した土師器、弥生土器の細片少量含む。

第3－A層　青灰色砂礫　溝3（カキアゲ田の溝）の堆積土。厚さ約25cm。切り合い関係

よりみて溝2よりも古い時期に造られている。摩滅した瓦器、須恵器、土師器の細片少量含む。

第3－B層　青灰色シルト質粘土　溝3の堆積土。厚さ約20cm。

第3－C層　灰色砂質粘土　溝3の堆積土。厚さ約80cm。摩滅した瓦器、土師器、弥生土器の細片少量含む。

第3－D層　黄灰色粘土　溝3の堆積土。厚さ約80cm。弥生時代の包含層を破壊した際に混入したと思われる弥生土器、サヌカイトフレーク、鹿の頭骨など少量出土。

第3－E層　黄灰色シルト質粘土　溝3の最下層。第9層がブロックで混じる。厚さ20cm。

第4層　灰黒色粘土　厚さ約50cm。土師器および摩滅した弥生土器の細片少量含む。土師器小皿は、12世紀後半に比定できる。

第5層　緑灰色砂質粘土　厚さ約20cm。遺物は出土しなかった。

第6層　緑灰色粘土　厚さ約10cm。全く遺物が出土しなかった。

第7層　暗緑灰色粘土　厚さ約20cm。畿内第Ⅱ様式弥生土器片中量と打製石剣1点出土。

第8－A層　緑灰色砂質粘土　落ち込み2の堆積土。厚さ28cm(最大値)。

第8層　明緑灰色粘土　上面から落ち込み2が切り込む。厚さ20cm。弥生土器少量含む。

第9－A層　暗緑灰色粘土　落ち込み3の堆積土。厚さ約16cm(最大値)。

第9層　暗緑灰色シルト質粘土　上面から落ち込み3が切り込む。厚さ約30cm。

第10－A層　灰白色砂　溝2の堆積土。厚さ約50cm(最大値)畿内第Ⅱ様式の土器片中量出土。

第10－B層　暗灰褐色砂質粘土　溝2の堆積土。厚さ約15cm(最大値)植物遺体多量。畿内第Ⅱ様式の土器中量含む。

第10－C層　暗灰黒色粘土　第18層をブロックで含む。溝2の最下部堆積土。厚さ約30cm(最大値)。

第10層　黒灰色砂質粘土　上面から溝2が切り込む。厚さ約30cm。畿内第Ⅱ様式の土器片中量出土。この層の上面の標高はT.P.0.6m。

第11層　黒灰色粘土　第16層の青灰色粘土などをブロック状に含む人工的な盛土と考えられる。厚さ約20cm。畿内第Ⅱ様式の土器を多量に含む。中に畿内第Ⅰ様式新段階の壺、鉢の破片各1点含む。

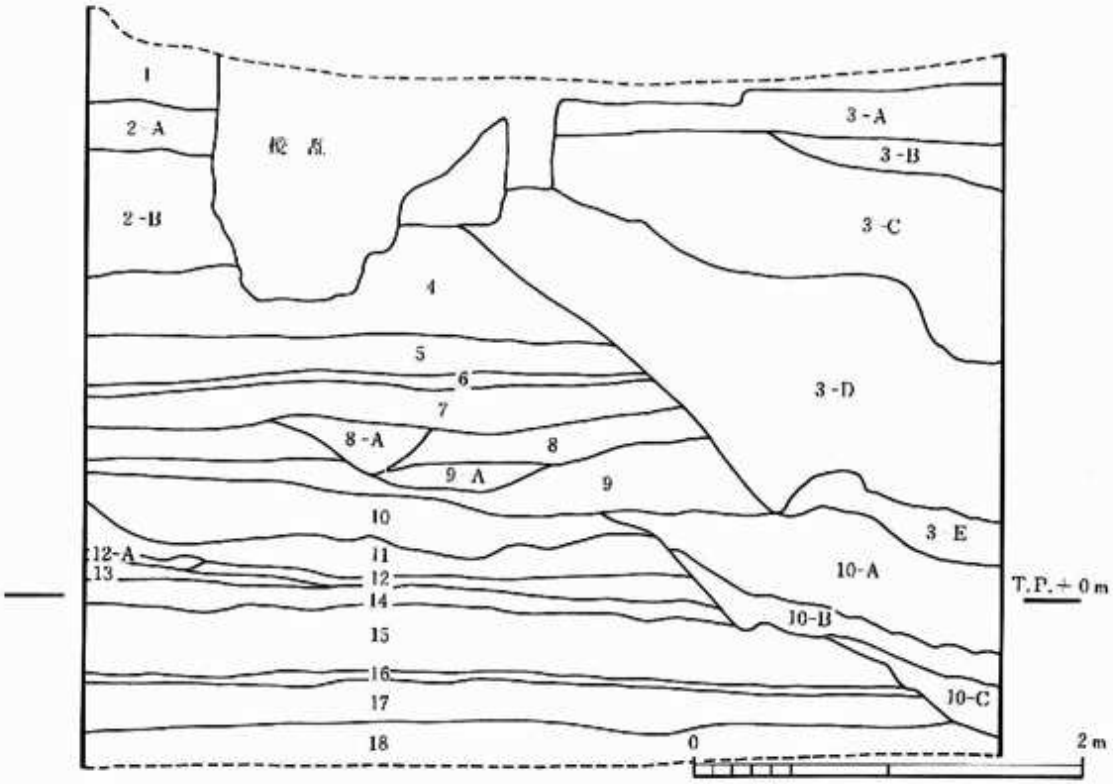
第12－A層　黒灰色砂　厚さ6cm(最大値)無遺物である。

第12層　暗灰白色シルト質粘土　厚さ約6cm。弥生土器片少量含む。

第13層　黒灰色粘土　厚さ約10cm、第2ピットの南半で認められたが、この層より船橋式の深鉢片1点と土器片が少量出土。

第14層　黒色粘土　厚さ約10cm。この層以下が地山と考えられる。上面の標高は、T.P.0.1mである。

以下、第15層　黒灰色粘土、厚さ約30cm。第16層　青灰色粘土、厚さ約4cm。第17層　黒灰



第6図 第2ピット西壁断面実測図

色粘土、厚さ約20cm。第18層　黄灰色粘土、厚さ約20cm以上と続く。第1ピットの層序との関係は、出土遺物と土層からみて第1ピット2層と1層、6層と5層、7層と6層、8層と7ないし8層、9層と9層、10層と10ないし11層、11層と14層、12層と15層、13層と16層、14層と17層、15層と18層に対応するものと思われる。第1ピットの地山の各層との比高は第2ピットの方が約20cm高い。これは、東から西に傾斜する地形を示している可能性が高い。

遺　構

検出した遺構は、落ち込み2・3と溝2である。落ち込み2は、第8層から切り込む。落ち込み3は、第9層から切り込む。断面観察によれば落ち込み2は、幅80cm、深さ28cm、落ち込み3は、幅90cm、深さ16cmの規模をもつ。ともに時期の判明する遺物は出土していないが、第1ピット9層の畿内第Ⅲ様式の土器の出土をみると、落ち込み2は、この時期の遺構になる可能性も考えられる。溝2は、南西から北東方向に東側の肩の一部を確認した。幅2m以上、深さ1.1m以上の規模をもつ大溝であることは確実である。方向からみて第1ピットで検出した溝1と続くかどうか不明であるが、埋没時期は、ともに灰白色砂によって埋っていることからみて、同時期と思われる。溝2より出土した遺物は、すべて畿内第Ⅱ様式に属している。また切り込んでいる10層も同様式の遺物が出土していることから、溝1と同様、畿内第Ⅱ様式の時期に機能した溝と考えられる。

出土遺物（第7図・第8図）

第2ピットの出土遺物も、第1ピット同様であるので弥生時代の遺物を中心に記す。

船橋式の縄文土器（第7図）

深鉢（9）口縁端部は角ばって終り口縁端部外面より少し下がった位置に凸帯をつける。凸帯の下端より2条のヘラ描き沈線を斜め下方に向けて施す。

畿内第Ⅱ様式の土器

壺（10・11・12・13・14・16）短く外反する口頸部をつけた壺（10・13・16）と長い筒状の頸部に短く外反する口縁部をつけた壺（11・12・14）がある。(10)は、口縁端部が角ばって終わり、頸部から体部外面に櫛描き直線文を施す。(13)は、口縁端部外面を上下に拡張し、外面に櫛描き直線文を施した後その上にヘラによって斜線を描き、さらに外面下端にヘラによる刻み目を施している。(16)は、口縁端部外面に櫛描きの波状文、頸部から体部外面に櫛描き直線文を施す。(11)は、口縁端部外面上端に、ヘラによる刻み目を口縁部内面には横方向の粗いハケメを施す。頸部から体部外面は、粗い縦方向のハケメの後櫛描き直線文を施す。文様帯間に一条の横方向のヘラミガキを施す。(12)は、無文の壺である。(14)は口縁部を欠失するが、頸部から体部に8帯以上の櫛描き直線文を施す。櫛原体は頸部7条、体部6条と使いわけている。(11・16)は溝2出土。

甕A（15・19）短く外反する口縁部をつけた甕である。口縁部内面に横方向の粗いハケメを施す。(15)は、口縁部外面上端にヘラによる刻み目を施す。体部外面は、縦方向の粗いハケメ内面はナデで仕上げる。(19)は、体部外面に縦方向のハケメの後、縦方向のヘラミガキを施す。ともに外面に煤が付着する。(19)は、胎土に石英、チャートを含み黒褐色を呈する。(15)は溝2出土。

甕B（18・20・21・22）倒鐘形の器体に短く外反する口縁部をもつ甕である。ナデを施すものが多いが、(18)は頸部以下に縦方向のハケメの後、ヘラミガキを雑に施す。いずれも外面に煤が付着。(21)は、胎土に石英、チャートなどを含み、灰褐色を呈する。(21)は溝2出土。

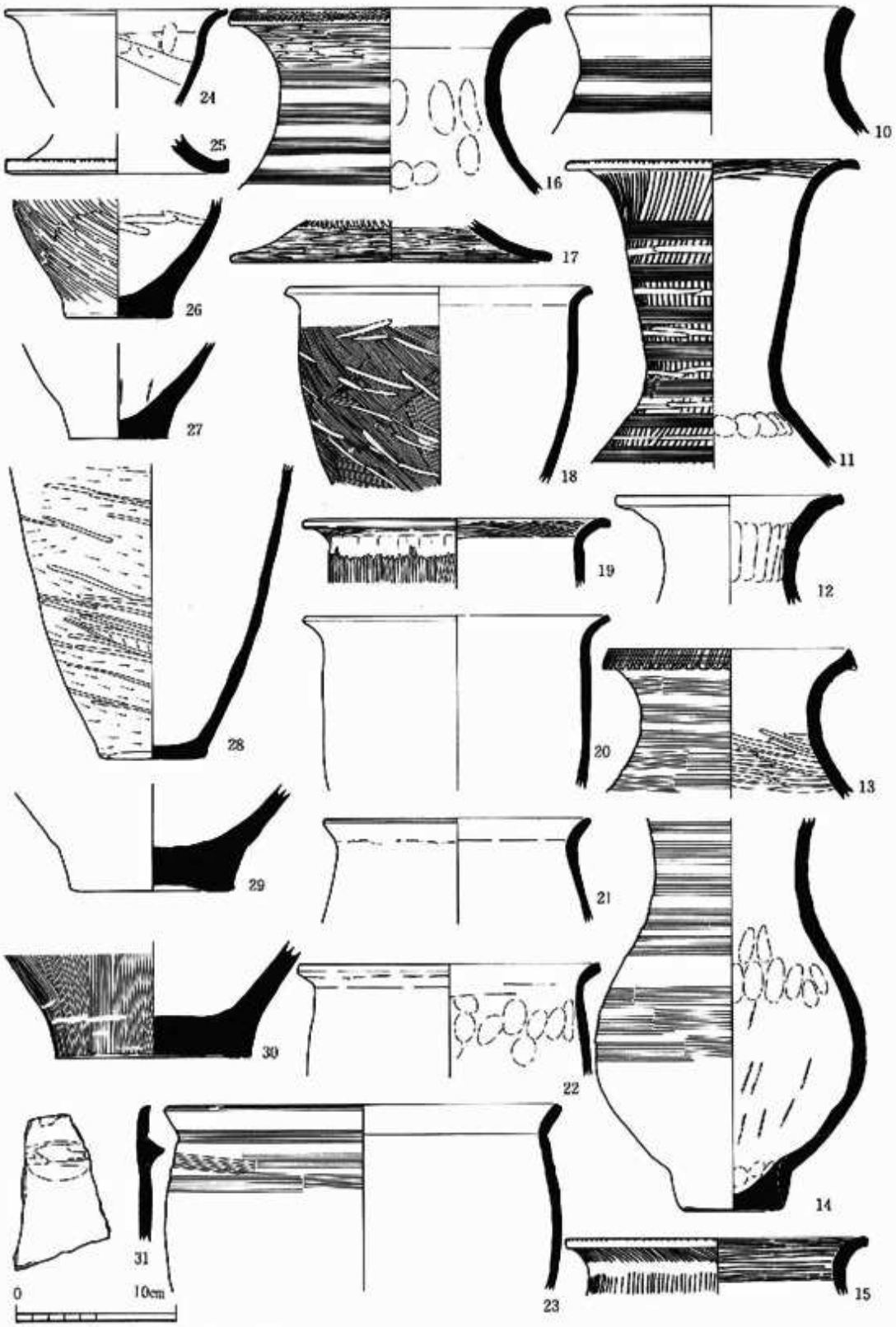
甕C（23）倒鐘形の器体に短く外反する口縁部をつけた甕である。頸部以下に5条の櫛描直線文を3帯施す。口縁端部外面に浅い一条の沈線がめぐる。外面に煤が付着。

蓋（17・25）笠形の蓋である。(25)は口縁端部外面上端にヘラによる刻み目を施し(17)は、内外面に煤付着。胎土に石英、長石を含み赤褐色を呈する。(17)は甕用の蓋である。溝2出土。

鉢（24・31）外反する口縁をつけた鉢である。把手をもつものともたないものがある。(24)の内面はハケメ、(31)は、内外面ともナデを施す。

底部（26～30）外面にハケメかナデを施す底部（28・25・27）とヘラミガキを施す底部（24・27）がある。24は、胎土に石英、長石、チャートなどを含み黄灰色を呈する。(26・30)は溝2出土。

第7図　縄文土器拓影



第8図　第2ピット出土弥生土器実測図

Ⅳ．まとめ

1．鬼虎川遺跡は、生駒山地より西に派生する扇状地扇端部と北流する恩智川によって画された低湿な地に位置する。今回の調査地は、遺跡の南端付近にあたる。

2．東大阪市内において本遺跡と同様の立地条件をもつ同時代の遺跡は、南約4.5kmに池島遺跡が知られるのみである。

3．第２ピット13層は、文様からみて山陽地方の影響を受けたと思われる縄文時代晩期末船橋式の土器が１点出土したが、他に特徴ある土器がなく、また土器自体も少数である。したがってこの層を船橋式の単純な包含層と断定できないが、従来の調査で他地点[③]からも船橋式ないし長原式に属す土器が出土しており、本遺跡の開始時期を考える上で注意しておきたい。

4．第１ピット10層と第２ピット11層は、出土遺物と上面より切っている溝１と溝２の時期より、畿内第Ⅰ様式新段階から畿内第Ⅱ様式の時期に比定できる。他の層の形成時期の比定は、調査範囲が狭いのと遺物の出土量も多くないことから明らかにできなかった。

5．検出した遺構は、落ち込み３ヶ所と、溝２条である。落ち込みの性格は明らかにできなかったが、落ち込み１・２の時期は畿内第Ⅲ様式に属す可能性が考えられる。溝２条は、いずれも出土遺物からみて畿内第Ⅱ様式の時期に比定できる。

6．溝１は、幅２m、深さ1.5m以上、溝２は幅２m、深さ1.1m以上の規模をもつ大溝である。今回の調査では、それぞれの肩の一端しか検出しなかったため、両者が同一あるいは別個の溝か不明である。しかし埋没時期は堆積土からみて同一時期と考えられる。昭和58年度の第19次調査で今回の調査地点の北400mで、畿内第Ⅱ様式の時期に、集落を囲む大溝（幅５m、深さ1.5m）の東西に延びる一画が検出されており、時期を同じくする溝１、２との関連追求が今後の課題である。

7．弥生時代の出土遺物は、第１ピットに比して第２ピットの方が圧倒的に多かった。遺構面のレベルも、第１ピットより第２ピットが高かったことと合わせて、調査地点付近では東方に集落の中心が広がる可能性が高い。

8．弥生土器のうち畿内第Ⅱ様式の甕は、大和型（甕Ａ）河内・和泉型（甕Ｂ）播摩型（甕Ｃ）[④]が見られる。播摩型の甕Ｃは、１点のみ出土したが、胎土に角閃石を含む生駒山地西麓産の土器である。西摂から播摩地方と河内地方の交流を考える上で興味深い。

調査を実施するに当たって、宮崎恵三、越野一郎両氏の参加を得たほか、出土遺物の実測に、小西優美氏の援助を受けた。記して謝意を表する。

注　① 島田義明「弥生時代木棺の一資料」（『河内考古学』１　河内考古学研究会　1968年）10頁

② （『鬼虎川遺跡出土遺物にみる弥生人のくらし』東大阪市立郷土博物館　1983年）６頁

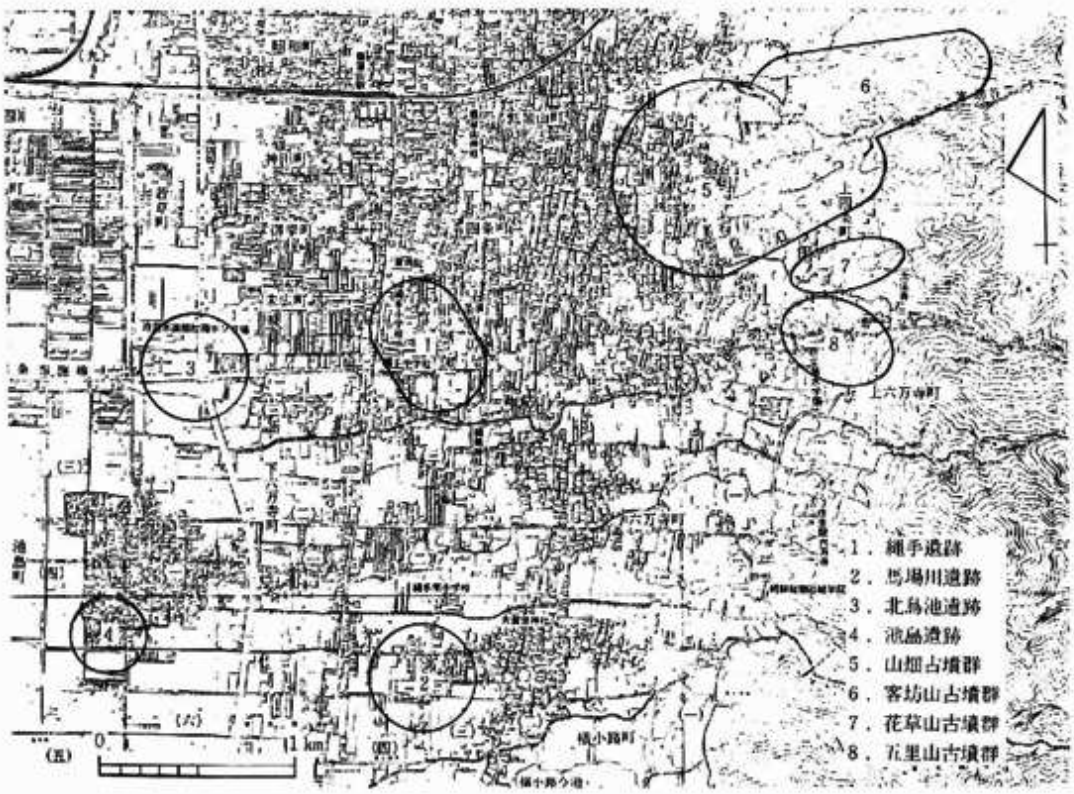
③ 才原金弘「鬼虎川遺跡発掘調査概要」（『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度　1981年）18頁

④ 井藤暁子「弥生土器―近畿２―」（『考古学ジャーナル』202　1982年）19～20頁

縄手遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

昭和52年８月に縄手農業協同組合より倉庫増築工事に伴う土木工事等の発掘届出が東大阪市教育委員会文化財課にあった。文化財課では、工事予定地が周知の縄手遺跡の北端にあたるため、遺構・遺物の状況を確認するための試掘調査が必要であると判断し、市文化財課職員の立合いのもとで試掘調査を実施した。調査の結果、地表下約50cmで、古墳時代の遺物包含層を確認したため、ただちに埋め戻し、遺跡の取り扱いについて縄手農業協同組合と協議をおこなった。協議の結果、工事予定地の中で南側半分には、すでに浄化槽が設置されているため、調査範囲から除外し、北側で建築物の基礎工事によって破壊される部分を調査対象として実施することになった。発掘調査は、縄手農業協同組合の委託を受けて、東大阪市遺跡保護調査会が昭和52年９月５日より９月９日まで実施した。(1)



第９図　遺跡周辺図

Ⅱ．位置と環境

縄手遺跡は、東大阪市南四条町に所在し、現在は東大阪市立縄手小・中学校敷地となっている。遺跡は、現在までの調査で、縄文時代中期から弥生・古墳時代まで幾層にも重複する複合遺跡であることが明らかになっている。

本遺跡は、標高642mを測る生駒山西麓の裾部、標高15mから20mの地点に位置している。現在は、周辺に住宅が建ちならび旧地形はうかがい知れないが、現在でも遺跡の南側を生駒山から急傾斜で流れ落ちる大門川が流れ、北側にも過去の調査で弥生時代以前の谷川が認められるところから、谷川に挟まれた尾根上に位置する集落遺跡であったことがわかる。

本遺跡の位置する生駒山西麓地域には、縄文時代の遺跡が多いのが一つの特徴である。本遺跡の南約1kmには縄文時代中期末から晩期まで続く馬場川遺跡が存在する。特に本遺跡が小規模化する晩期には、逆に遺跡の範囲も拡大し、両遺跡の距離が近接していることと合わせて、密接な関係が考えられている。北2kmには、縄文時代から弥生時代へ継続する遺跡として有名な鬼塚遺跡が存在する。最近の調査で中期にさかのぼる土器も出土しており、時期的に並行して存在する遺跡である。この他に北3.5kmに芝ヶ丘遺跡（後～晩期）、さらに北4kmに日下貝塚（後～晩期）などの縄文遺跡が存在する。これらの縄文遺跡は、谷川によって区切られた尾根上に点々と営まれており、相互に密接な関係を有していたと思われる。

弥生時代になると低湿地に進出することもあり、遺跡数は増加する。弥生町所在の鬼虎川遺跡は、低湿地に位置し、前期から中期末まで継続する大規模な農耕集落であることが、最近の調査で明らかになってきている。この遺跡の周辺には、楠附・西ノ辻・山畑・皿池・和泉遺跡などが分散した小集落として存在する。本遺跡でも量は少ないものの、前期～後期の土器が出土しており、拠点集落を中心とした分村的な集落が予想される。

古墳時代には、鬼虎川遺跡のような大規模な集落は、現在までのところ発見されていないが、小規模な集落が点々と見つかっている。これらの遺跡は、他の時期と複合することが多い。たとえば、芝ヶ丘・鬼塚・馬場川・西ノ辻遺跡などは弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。本遺跡の場合も古墳時代の遺構は、弥生時代の遺跡と複合するようで、以前の調査でも小規模な範囲であるが点々と遺構が発見されている。また山麓部には6世紀から7世紀にかけての群集墳が認められる。これらの古墳は、横穴式石室を内部主体とし、径15～20mの小円墳で構成されている。主なものを列記すると50基以上の存在が確認されている山畑古墳群を筆頭に、客坊山古墳群(17基)、出雲井古墳群(6基)、墓の尾古墳群(5基)、花草山古墳群（20基)、五里山古墳群（13基）などがある。これらの古墳数と比較すれば西麓地域の集落跡の発見例は少なすぎるように思われる。今後、先に記したような複合遺跡の、特に上層遺構の良好な資料が増加すれば、山麓部における群集墳の被葬者集団の集落も解明されることと思われる。

Ⅲ．調査の概要

発掘調査は、既設の縄手農業協同組合事務所の北側敷地約130㎡を対象として実施したが、浄化槽や木造建物の基礎をはずしたために実際には約60㎡について実施したことになる。

1．層序（第13図）

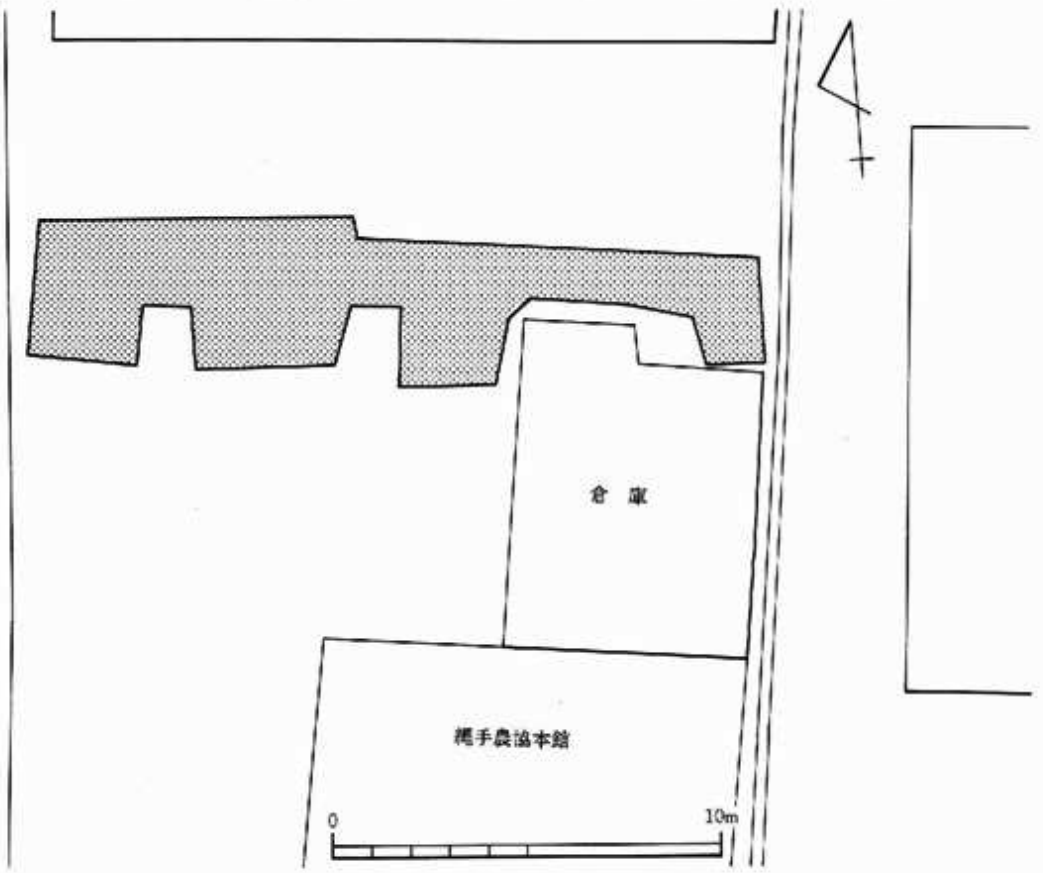
調査地内の基本層序は、8層に区分することができた。上から順に説明していくことにする。

第1層　旧表土。既設の木造倉庫の基礎及びコンクリート床などが残っていたため、機械掘削によって排除した。層厚20～30cm。

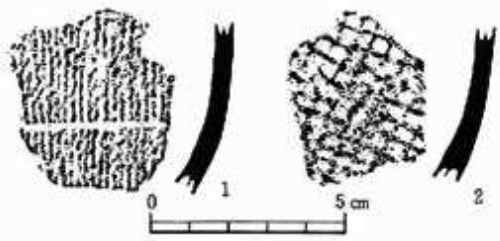
第2層　茶褐色土。旧耕土の床土として客土されたものと思われる。事務所建設以前は、畑地であったと考えられ、全面に整地をおこなっている。少量の土師器片を含むが時期は詳らかでない。層厚10～20cm。

第3層　淡青灰褐色砂層。遺物を含まず時期は不詳。薄く調査地全域を覆う。

第4層　淡青灰色砂礫層。遺物をほとんど含まず時期は不詳。調査地全域を覆っているが、



第10図　調査地点位置図



第11図　第５層出土韓式系土器実測図

第12図　第７層出土土偶頭部実測図

南東から北西への傾斜が認められ、北西隅では層厚約30cmになる。

第５層　黒褐色粘土層。弥生～古墳時代の遺物包含層であるが、弥生時代の遺物はごく少量で混入と考えられ、大部分は古墳時代のものである。層厚30～40cmでわずかに東から西への傾斜が認められ、東で厚さを増している。第５層直上で溝２本を検出した。古墳時代の包含層をベースとするところから６世紀以降の遺構と考えられる。

第６層　淡青灰色砂層。湧水が激しく詳細は不明。調査地の東側では認められず、中央付近から西で認められ、徐々に厚さを増している。

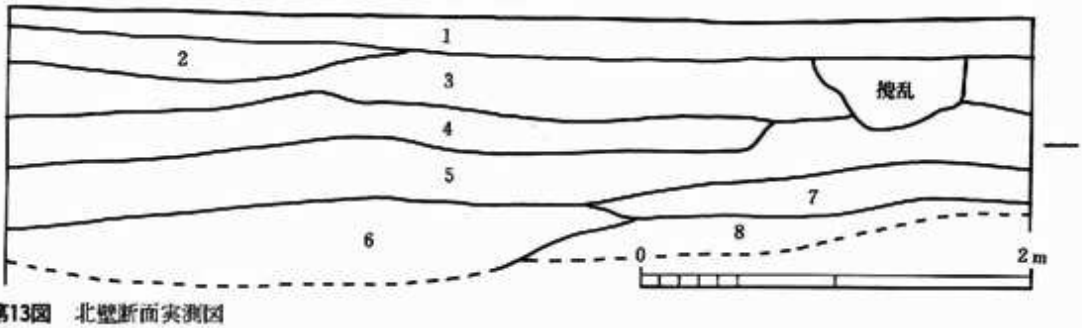
第７層　黒褐色砂礫層。縄文時代後期の遺物包含層でこぶし大の礫を多量に含む。西で第６層によって削りとられている。第５層との境は比較的明瞭である。

第８層　礫層。調査地内での地山面を構成する。こぶし大から人頭大の礫を多量に含む。縄文時代後期以前には、自然の谷状地形を形成していたものと考えられる。谷が埋まっていく過程に堆積したものと思われる。

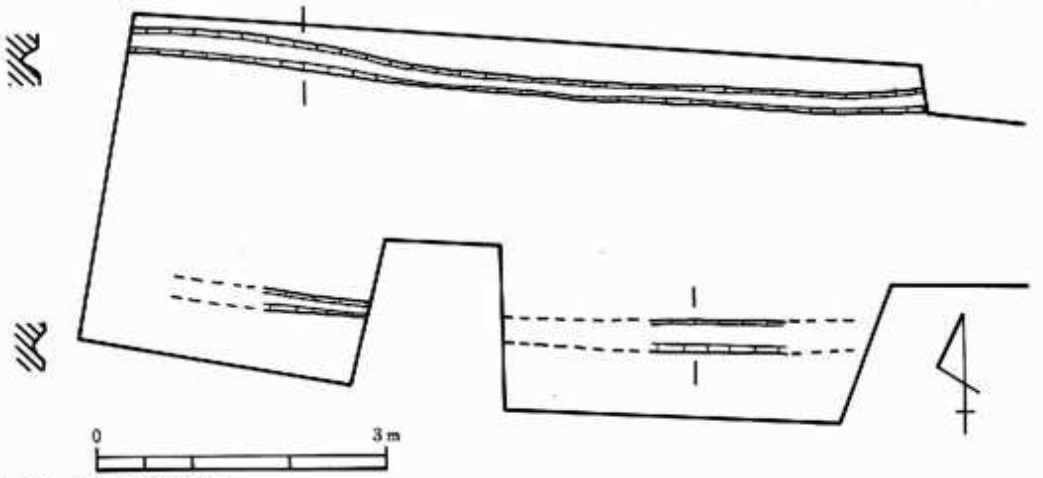
２．遺構（第14図）

縄文時代の遺構は、流れ込みによる遺物包含層を検出したのみで全く検出できなかった。古墳時代の遺構面は第７層直上で考えられるが、精査をおこなったにもかかわらず遺構は検出できなかった。今後、広範囲に調査を実施すれば検出できるものと思われる。第５層直上で、溝２本を検出している。北側をＡ溝、南側をＢ溝として記述する。

Ａ溝　幅約20cm、深さ10～15cm程度で調査地内で延長８ｍを確認した。溝底で西から東へわずかな傾斜が認められる。溝内より土師器の細片が少量出土した。



第13図　北壁断面実測図



第14図　遺構平面実測図

B溝　幅約20cm、深さ8～10cmで調査地内で延長5mを確認したが、残存状態が悪く不明確な地点がある。

二本の溝の時期は、溝内出土遺物が皆無に近い状況であり決定できないが、第5層の古墳時代の遺物包含層をベースとしているところから、少なくとも6世紀以降に掘られたものであろう。また、溝間の距離が2.5mでほぼ平行して走ることから、何らかの関係を認めることができる。付近には、柱穴などの遺構は存在していなかった。

Ⅳ. 出土遺物

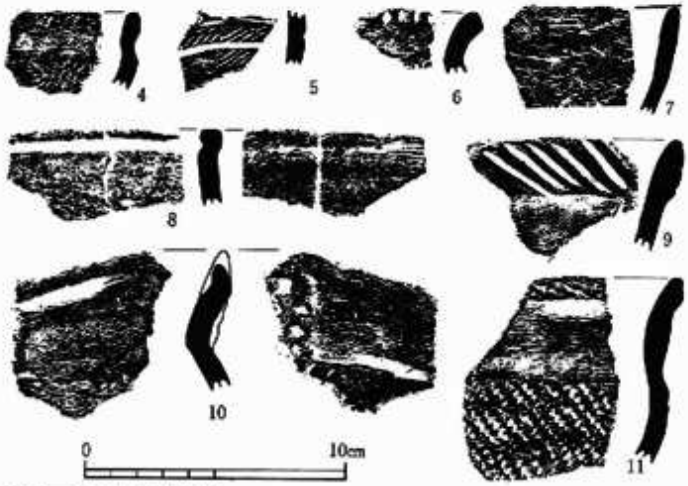
今回の調査地点で出土した遺物には、縄文土器、土偶、弥生土器、須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器があるが、土師器を除いて他の遺物は少量である。総量でコンテナ箱約半分の土器が出土している。なお、製塩土器は、すでに紹介済みであるため、今回の報告からは実測図は除外している。②

縄文土器（第15図）

後期中葉の縁帯文土器を中心とする一群であり、十数片が出土している。(9)は、口縁部の上端を肥厚させ、外面に斜方向の沈線を施している。頸部内面はナデ仕上げしている。(10)は波状口縁をなし、波頂部から頸部にかけて刺突を施した突帯が垂下する。(4)(11)は、口縁部外面を肥厚させ、頸部がくびれた浅鉢である。口縁外面と胴部上半に斜縄文を施している。頸部、及び内面はナデ調整を施す。(7)(8)は粗製の浅鉢で、(8)は内面に一条の凹線をめぐらす。(4)(11)は非河内産で他はすべて生駒西麓産の胎土である。

土偶（3）（第12図）

長さ4.5cm、幅5.0cm、厚さ1.4cmを測る平板な土偶頭部である。左右に連続して隆起する眉及び中央から同じく隆起して垂下する鼻梁を貼付けている。鼻には孔をあけている。目、口は刺り込みで以って表現しており、耳の表現は観察できない。右ほほにかすかな沈線が認められ、



第15図　縄文土器拓影

入れ墨をあらわしているのかもしれない。裏面の後頭部に相当する部分に、粘土を貼り付けた痕跡が認められる。この部分に頸がついていたのかもしれない。胎土は、通常の土器と同様の粘土を使用しており、生駒西麓産の在地でつくられた土偶である。土偶は、7層より出土しているが、7層が二次堆積であるため、詳らかな時期は決定できない。ここでは、混在した土器が後期中葉の時期をしめすところから、ほぼこの時期に比定しておきたい。

弥生土器

弥生土器は、数点が出土している。第5層から古墳時代の遺物と混在して出土した。図版11—㉖は壺胴部の破片で簾状文＋円形浮文が認められる。又、後期の土器片もわずかに出土しているところから、中期～後期の土器の混入が認められる。

土師器（第16図）

第5層より出土し、今回の調査地点内の出土遺物の大半を占める。土師器には、甕、高杯、鉢があるが、全体の形状がわかるものは出土していない。

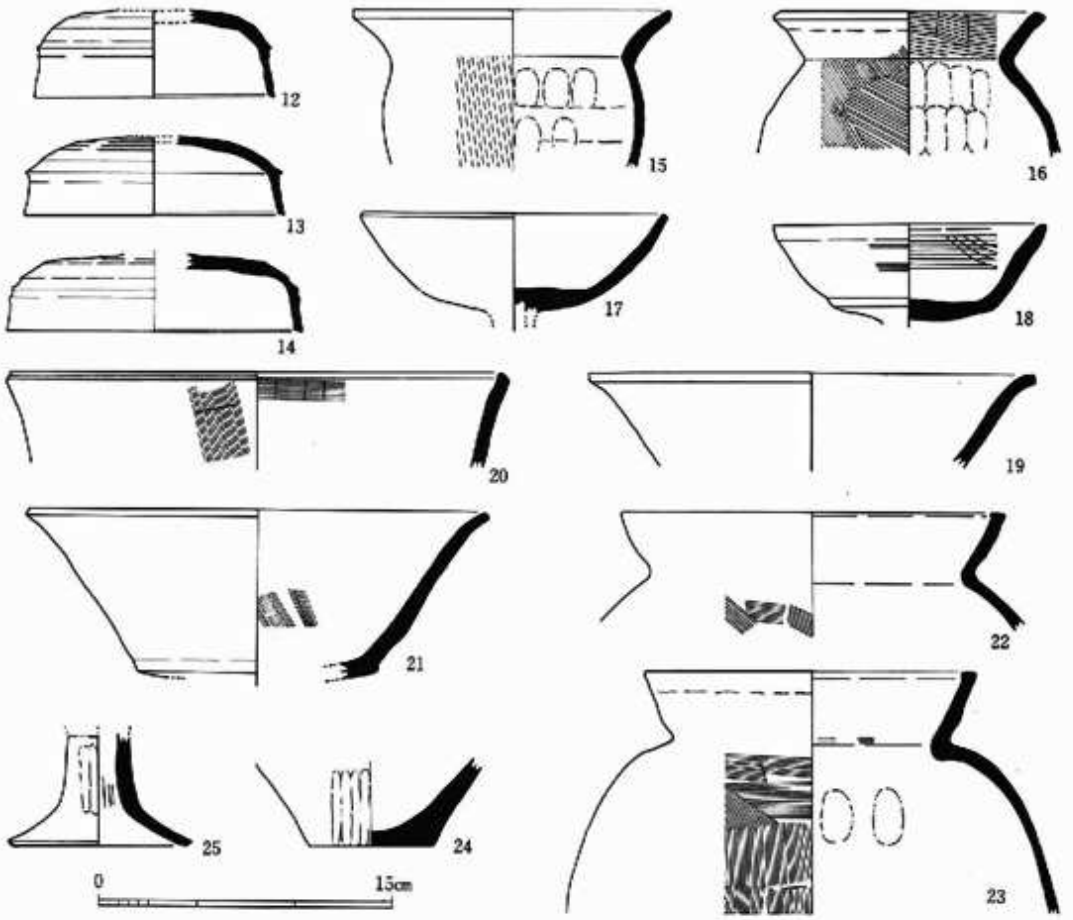
甕　くの字状に外反し、内弯気味に立ち上がる口縁部に、端部を内側に肥厚させ、上端は、平坦面をなしている。径13～15cmの小型と17～20cmの大型のものがある。体部内面は、ユビオサエの痕跡を残している。⑮⑯は、くの字状に外反した口縁部が外弯気味に立ちあがり、端部を肥厚させない。⑯は外面のハケメが粗く、内面のユビオサエも顕著である。⑮を除いて他はすべて生駒西麓の胎土をもつ。

高杯　㉑は平たい杯底部から外反する口縁部が大きく広がり、杯底部末端の外側に鋭い稜をもつ。内面はハケメを施したのち、ナデ調整によって仕上げている。⑱は、比較的厚い杯底部から一度内弯気味に広がったのち、わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。内面は粗いハケメが残る。⑰は、平たい杯底部から内弯気味に広がる口縁をもつ。内外面はナデ調整を施していると思われるが、風化が激しく明確ではない。⑰を除いて他はすべて生駒西麓の胎土をもつ。

須恵器（第16図）

杯蓋・身・器台が出土している。

杯蓋　口縁部は外反し、端部はシャープな内傾面をもっている。口縁部との境の稜は鋭く、口縁部径は稜の径をごくわずか上回っている。天井部は、わずかにふくらみをもつ。外面は、



第16図　須恵器・土師器実測図

ヘラケズリをおこない、内面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。(14)は、中央部につまみが付くと思われ、周囲に刺突文が施こされている。

器台　図版12—(27)脚部は外反気味に外傾しながら、端部付近でわずかに内弯し、外上方にのびている。端部は面をなしておわる。残存部で中位に2条単位で凸線がめぐり、長方形のスカシを四方向に穿ち、2条の波状文で埋めている。内外面ともナデ調整で仕上げられている。

韓式系土器（第11図）

2点出土している。いずれも4cm前後の小破片で第5層より須恵器、土師器とともに出土している。(1)は外面に縄蓆文、内面はナデ調整をおこない、角閃石、長石などのこまかな石粒を含む精良な胎土で、淡赤褐色を呈す。(2)は外面に格子目の叩き文、内面をナデ調整し、角閃石長石の石粒を多く含み、褐色を呈す。いずれも生駒西麓の土器である。

製塩土器

すべて少破片であり、10数片を検出したが、全体を復元できるものではない。復元口径4.5cmのものと6.2cmのものがある。口縁端部は丸く尖り気味に終る。頸部を少しくびらせるものと直

線的に開くものがある。器壁は、3㎜～5㎜と薄く、体部に細かな叩き目(5条/㎝)が認められるものが多い。胎土は、比較的精良な粘土を用い、赤橙色～にぶい橙色を呈するものが多い。いずれも細片であるため詳細はわからないが、才原氏分類のAタイプとDタイプに比定することができる。所謂備讃瀬戸地方からの搬入品と考えられる。

V. まとめ

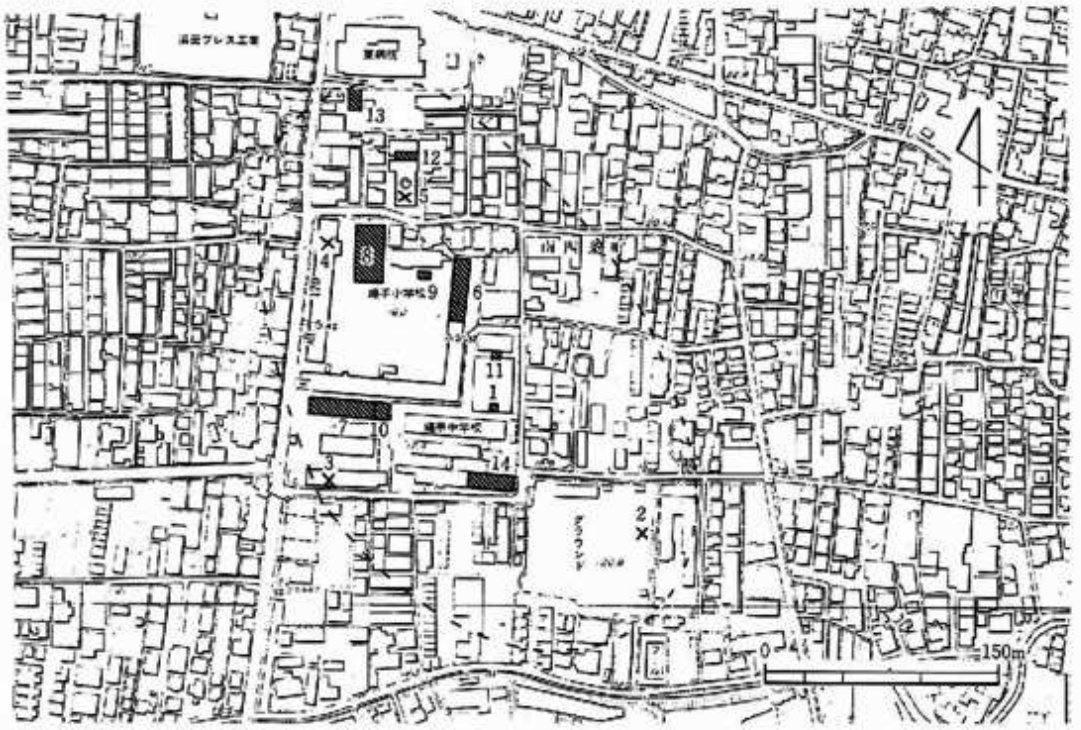
今回の調査地点は、縄手農業協同組合の本館や倉庫がすでに建っており、しかも木造の建物や浄化槽などの基礎工事で破壊されている部分も多く、ごく限定された範囲内の調査であった。しかしながら、新知見もあり、これらを列記してまとめにかえておきたい。

① 下層で確認した縄文時代の遺物包含層は、礫を含み、東から西への堆積が認められた。西では礫層によって削られており、かなり急傾斜をもつところから流れ込みによる二次堆積と判断できた。このため、今回の調査範囲内では遺構は検出できなかった。出土遺物には、少量の土器と土偶1点があった。出土土器は、後期中葉の時期に属し、これは昭和45年度の調査で検出した11軒の住居跡の時期と一致する。両地点間の距離も150mしか離れておらず、ほぼ縄手遺跡がもっとも規模が大きくなる時期に対応すると言える。このことから、今回の調査地点は、縄手遺跡の縄文時代後期の遺跡範囲の北限を示すと判断できる。土偶は、土器洗浄中に発見したもので出土状況は不明である。しかしながら、出土土器の大半が後期中葉を示すところから、ほぼこの時期に比定できる。縄手遺跡では、従来の調査で1例の土偶が出土しており、2例目を加えたことになる[3]。以前の発見の土偶は、頭部を失っているが、高さ約6.5cmの小型のものである。今回は、頭部だけの出土であるが、市内で50点近く見つかっている土偶のうち、これほど明確に顔を表現したものはなく、他例と比較しても特異な存在である。今後の類例をまってあらためて検討したい。

② ごく少量であるが弥生土器が出土した。弥生土器はいずれも古墳時代の包含層に混入していたものである。器種には壺底部、口縁部、胴部片など5～6点が認められる。胴部片の中には簾状文がわずかに認められ、底部には凹底を呈するものがあり、中期から後期の時期の遺物が混入したものと考えられる。

③ 上層で検出した古墳時代の遺構は、小規模な溝を二ヵ所確認したのにとどまった。しかしながら遺物包含層も良好なところから周辺にはさらに遺構が広がることが推測される。出土遺物には須恵器杯身・蓋・器台、土師器甕・高杯・椀及び韓式土器片がある。須恵器は、杯蓋の型式から田辺昭三氏編年のTK 208型式段階に[4]、陶邑編年ではⅠ－3段階に[5]属している。土師器は、船橋遺跡KⅡないしOⅢ型式に比定できる[6]。このことから、須恵器、土師器ともにほぼ同一時期に比定することができる。検出した遺構の時期も5世紀後半から6世紀初頭以降と考えておきたい。

さて、この時期の遺構として縄手遺跡内では、遺跡の南西端縄手中学校敷地内で巾6m、深



第17図　現在までの調査地点位置図

さ0.6mの溝が確認されている。溝内には須恵器、土師器とともに鞴の羽口、韓式系土器などが大量に投棄された状態で出土した。溝は、延長で8mしか発掘されていないので全貌は不明であるが、特殊な用途が考えられる。また、今回の調査地点のすぐ南で縄手小学校体育館建設工事に伴う調査では、周濠を有する円墳が1基検出され、猪の木塚古墳と命名された。この墳丘上から5世紀後半の時期の須恵器杯、土師器羽釜・甑が出土している。古墳の築造と直接結びつくのかどうか報告書が未刊であるため不明であるが、何らかの関係が指摘されている。この他に遺跡の南端で現在縄手中学校のグランドになっているところで、4世紀代の土師器が、大量に出土している他、昭和44年の縄手小学校校舎増築工事に伴う調査でも4世紀代の土師器が出土している。このことから、4世紀から6世紀前半までの遺構の広がりは予想以上に広いと考えられる。下層の縄文時代の遺構を検出する目的の調査が多いため、上層の古墳時代の遺構の広がりについてあまり深く追求はされていないが、少なくとも縄文時代の縄手遺跡の範囲を越えて、さらに周辺に広がることだけは今回の調査結果からもうかがうことができる。

注① 調査参加者は、畑本政美、青野幸彦、横山卓夫、中澄幸彦、辻　徹である。

② 才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度) 1980年.

③ 藤井直正・原田　修「縄手遺跡1」(『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』9) 1971年

④ 田辺昭三「出土遺物の検討」(『陶邑古窯址群』Ⅰ) 1966年

⑤ 中村　浩「大野池・光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」(『陶邑』Ⅰ　1976

⑥ 田辺昭三「船橋遺跡の遺物の研究」(『船橋』Ⅰ・Ⅱ) 1972年

縄手遺跡の調査一覧（第17図の番号に一致する）

①昭和26年２月　枚岡市立縄手中学校開校に伴う整地工事によって、土師器・須恵器などの土器類が多数出土。

②昭和31年　縄手中学校グランド造成工事に伴い敷地の東側で須恵器・土師器など多数出土。

③昭和35年　縄手中学校校舎建設工事に伴い２基の弥生時代後期の壺棺が発見され、調査を実施する。

④昭和40年　縄手小学校校舎建設工事に伴い弥生時代中期の土器及び小型丸底壺、器台を主とする古式土師器が出土し、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であることがわかった。

⑤昭和40年６月　縄手農業協同組合事務所建設工事に伴い縄文時代後期の土器を採集。猪木遺跡と名付ける。

⑥昭和44年11月～１月　東大阪市立縄手小学校校舎建設工事に伴い縄手遺跡調査会が発掘調査を実施。縄文時代後期の住居跡１軒、土坑墓２基、石組遺構１基、溝１ヵ所を検出する。この結果、縄手遺跡が縄文時代から古墳時代の複合遺跡であり、従来の猪木遺跡の範囲も含むことが判明した。

⑦昭和45年９月～３月　縄手中学校校舎建設工事に伴い縄手遺跡調査会が発掘調査を実施。古墳時代の溝、弥生時代中期の溝、後期の壺棺１基、縄文時代後期の住居跡10軒、特殊石組遺構１基を検出する。

⑧昭和46年７月～８月　縄手小学校屋内体育館建設工事に伴い縄手遺跡調査会の主体で発掘調査を実施する。古墳時代の円墳（えの木塚古墳）１基、羽釜棺、縄文時代後期の遺構、遺物を検出した。

⑨昭和47年７月　縄手小学校砂場建設工事に伴い東大阪市遺跡保護調査会の主体で発掘調査を実施する。縄文時代後期のピット、土坑を検出する。

⑩昭和48年４月～５月　縄手中学校校舎建設工事に伴い東大阪市教育委員会の主体で発掘調査を実施。弥生時代後期の土坑墓１基、溝１ヵ所、縄文時代後期中葉の住居跡１軒を検出。

⑪昭和50年８月　縄手中学校屋内体育館建設工事に伴い、東大阪市遺跡保護調査会の主体で発掘調査を実施する。

⑫昭和52年９月　縄手農業協同組合倉庫建設工事に伴い東大阪遺跡保護調査会の主体で発掘調査を実施する。

⑬昭和54年12月　住宅建設工事に伴い東大阪市教育委員会が発掘調査実施。弥生時代後期の土器多数出土する。

⑭昭和55年４月～５月　縄手中学校管理棟建設工事に伴い東大阪市教育委員会が発掘調査を実施。古墳時代の大溝（幅６ｍ、深さ0.6ｍ）を検出。内部より須恵器、土師器、鞴の羽口、鉄滓、馬骨などが出土した。

瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

瓜生堂遺跡は、東大阪市瓜生堂１～３丁目から若江西新町１～２丁目にかけて所在する弥生時代から歴史時代の複合遺跡である。古くから水田の井路工事や楠根川(現第二寝屋川)の改修工事などで地下より土器の出てくることが知られていたが、昭和40年府道大阪中央環状線敷設に先だつ工業用水道管埋設工事の際、掘り上げられた土の中から多量の土器や銅戈が発見され、遺物包含層が南北300m にも及ぶことがわかった。①

昭和41年には第二寝屋川開削工事が行なわれ、組み合わせ式木棺・壺棺・甕棺等の墓が発見され、この地域が弥生時代中期の墓域であることが明らかになった。さらにこの地点から西北300 m のところでは弥生時代前期の住居跡、多数の柱穴、木杭、溝などの遺構、土器・石器・鹿角製品・木製農具などの遺物が出土した。②

昭和45年12月以降は、下水管渠築造、小阪ポンプ場増設、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代の住居跡・溝・方形周溝墓・土壙墓をはじめとして、古墳時代前期～後期、奈良～室町時代の各時代にわたって遺構や遺物を検出し、弥生時代前期から歴史時代に至るまで引続き集落の営まれたことが明らかとなった。また瓜生堂遺跡の範囲は、東限が中央環状線の東方約120 m 、西限が八戸ノ里東小学校、北限が近鉄奈良線、南限が楠根川と中央環状線が交差する付近の南北約800 m 、東西約600 m と推定された。ただ南限については弥生時代の包含層が瓜生堂から山賀遺跡まで続いていて一連のものと考えねばならないことがわかった。③

一方、西岩田遺跡も西岩田２丁目から意岐部中学校敷地にかけて土器の破片が散布しているのが早くから知られていた。昭和39年、工業用水道管敷設工事で弥生土器、土師器、須恵器が出土した。昭和46年には下水道管渠築造に伴う調査が実施され、古墳時代中頃の建物跡、井戸などの遺構、古墳時代初頭から歴史時代に至る遺物が出土した。④

今回の調査は、東大阪市水道局及び大阪瓦斯株式会社が瓜生堂遺跡・西岩田遺跡の中央部を南北に縦断する形で管敷設工事を実施するのに先立って行なったものである。水道管敷設工事は昭和49年度から３ヵ年事業として計画されたうちの最終年度にあたる。調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて東大阪市遺跡保護調査会が、東大阪市水道局、大阪瓦斯株式会社と委託契約を交わし実施したものである。調査は、上水道配水管敷設に伴うものが昭和51年９月４日から昭和52年１月20日まで、瓦斯管敷設に伴うものが昭和51年11月15日から昭和52年５月30日まで行なった。調査の実施にあたっては東大阪市水道局施設部計画課、同工務課、大阪瓦斯株式会社東部支社に多大の協力を賜った。記して謝意を表します。

Ⅱ．位置と環境

瓜生堂遺跡は現在の行政区分では若江西新町１～２丁目および瓜生堂１～３丁目にあり、西岩田遺跡は西岩田２丁目から３丁目にある。瓜生堂遺跡は近畿日本鉄道奈良線八戸ノ里駅より南東0.5km、西岩田遺跡は北東0.7kmに位置する。遺跡内を南北に大阪中央環状線が通る。近年遺跡内の開発が進み、大阪中央環状線をはさんだ東西にはマンションが建ち並ぶ。両遺跡は河内平野のほぼ中央部に立地し、東約５kmには生駒山脈がある。河内平野には旧大和川の河川が流れこみ、沖積平野を形成している。旧大和川は現在の恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川の大小５本の河川よりなる。各河川は自然堤防を形成し、その周辺部は後背湿地となる。これらは人々が農耕をおこない、また、生活を営むには適していたらしく、弥生時代以降の遺跡が多く残る。瓜生堂、西岩田遺跡も楠根川の自然堤防上に立地し、標高２～３ｍを測る。

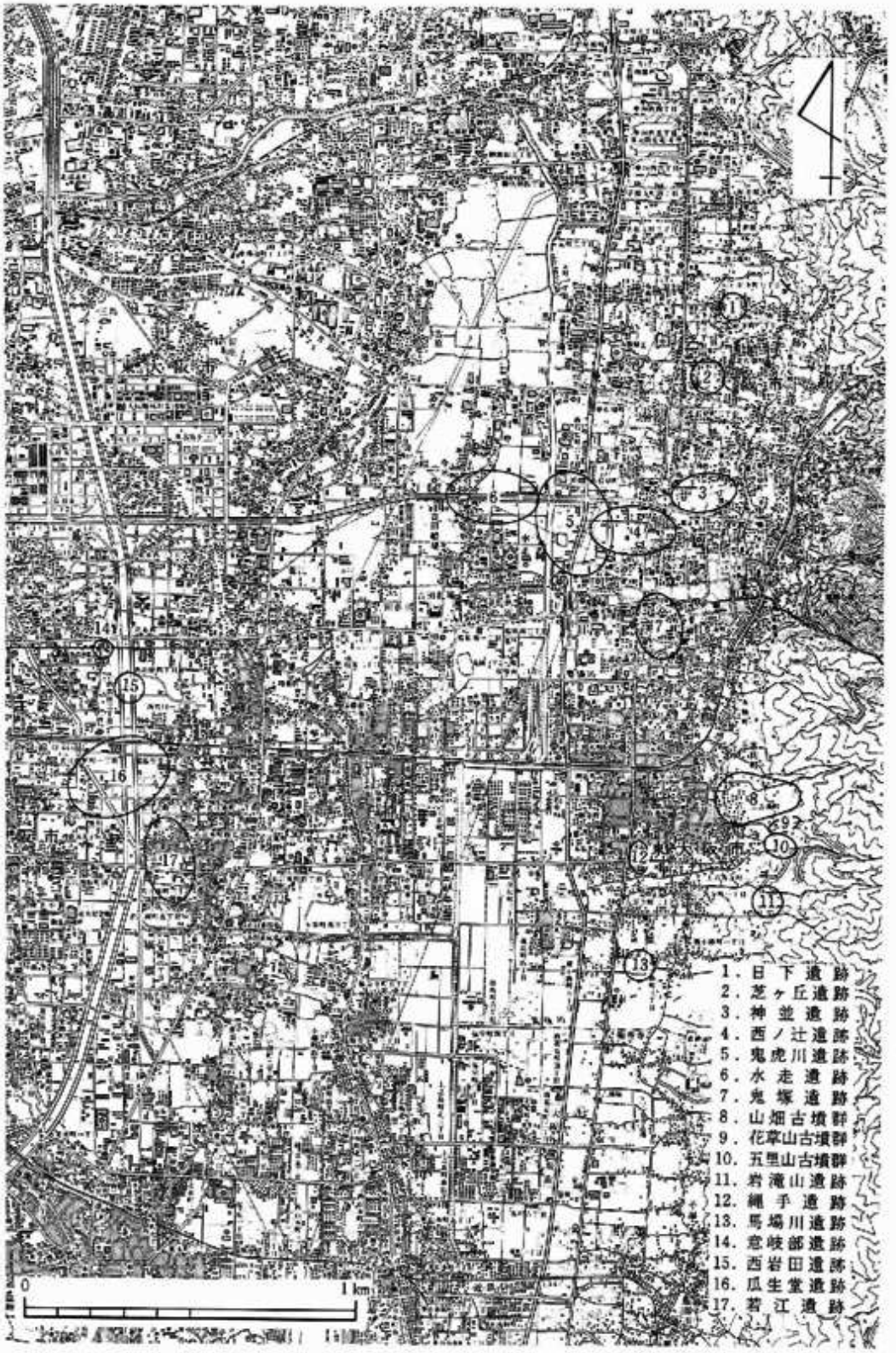
瓜生堂、西岩田遺跡の周辺部に人々が住みはじめるのは、弥生時代前期からである。弥生時代の遺跡は、瓜生堂、若江北、山賀、上小阪遺跡などがあげられる。瓜生堂、若江北、山賀遺跡は、前期から後期にかけて生活が営まれており、住居址、水田址、墓などの遺構が検出されている。瓜生堂遺跡は盛土を有する方形周溝墓が確認されたことで古くより知られている。

若江北遺跡では、焼けた家屋材の残る掘立柱建物も検出されている。近年の調査成果をみると瓜生堂、山賀遺跡などは河内平野に大集落を形成し、弥生時代全期間を通じて中心的な役割を果たしていたと考えられる。一方、生駒山西麓にも大集落を形成していたと考えられる遺跡があり、中垣内、鬼虎川、西ノ辻、恩智遺跡などがあげられる。鬼虎川遺跡は近年調査が進み、方形周溝墓、住居址と考えられる柱痕、集落をめぐる大溝などが検出されている。西ノ辻遺跡でも方形周溝墓が検出されている。生駒山西麓と平野部の集落を比較研究する資料が蓄積されつつある。また、弥生後期には前記した上小阪遺跡以外に、生駒山西麓には芝ヶ丘、北鳥池、上六万寺、岩滝山遺跡などが出現する。これらはいずれも大集落を形成していたとは考えられず、遺跡の範囲も狭く、存続期間も短い。

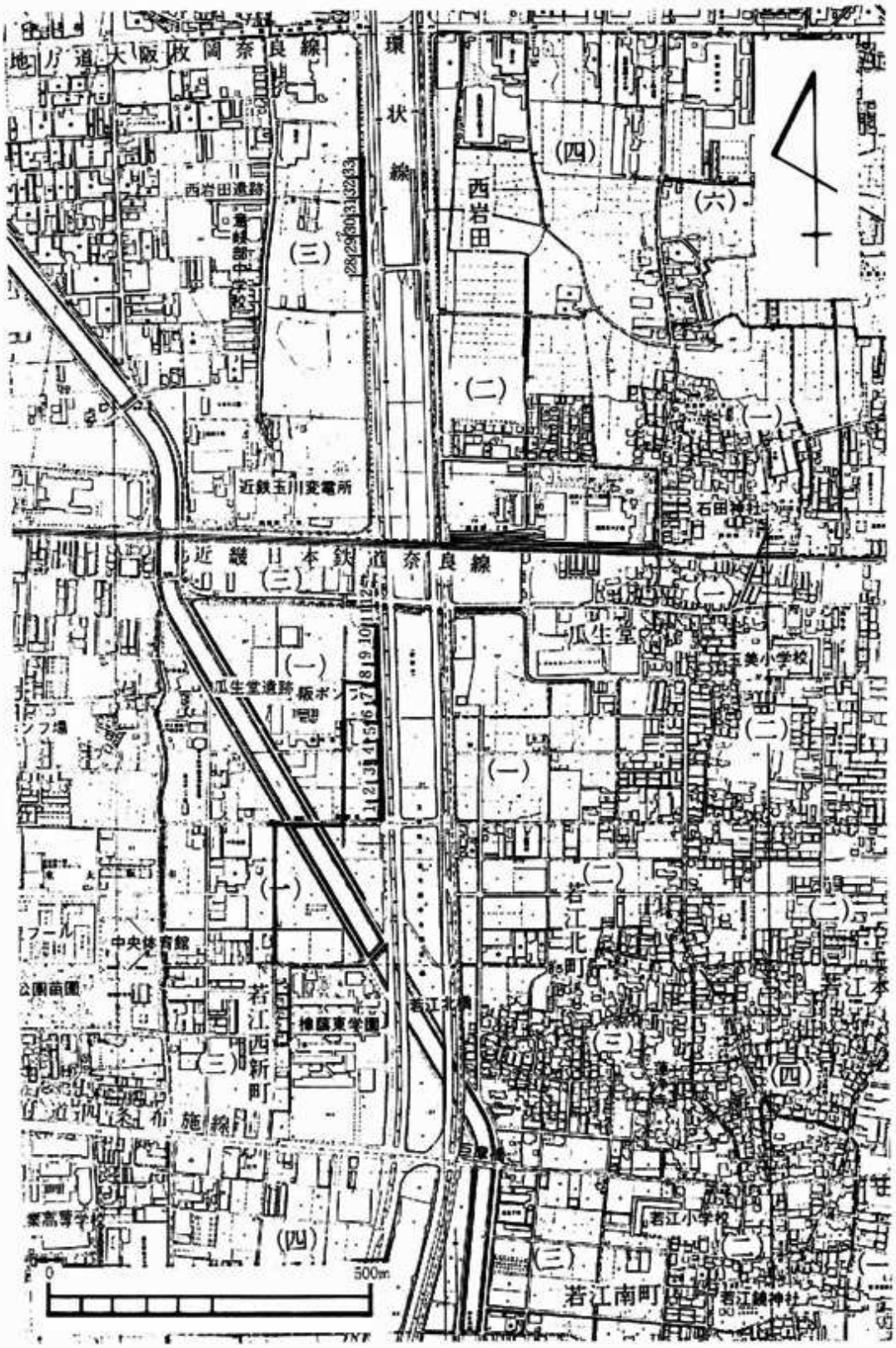
古墳時代になって西岩田遺跡も出現する。西岩田遺跡で検出された主な遺構は前期の竪穴住居や円形周溝がある。周辺部には瓜生堂、山賀、小若江、意岐部遺跡が点在する。小若江遺跡は古式土師器の標式遺跡として学史的にも著名である。また、生駒山西麓にも日下、芝ヶ丘、鬼塚、縄手遺跡などが存在する。東大阪市域で古墳の築造が開始されるのは中期からである。

中期の古墳は塚山、大賀世、えのき塚古墳などがあり、単独であることが多い。後期になると古墳の築造も急激に増加し、群集するものが多い。みかん山、客坊山、山畑、五里山古墳群などがあげられる。

瓜生堂、西岩田遺跡は河内平野のほぼ中央に位置し、自然堤防上に立地する遺跡である。弥生時代から古墳時代の集落を考える上で重要な遺跡である。


1. 日下遺跡
2. 芝ヶ丘遺跡
3. 神並遺跡
4. 西ノ辻遺跡
5. 鬼虎川遺跡
6. 水走遺跡
7. 鬼塚遺跡
8. 山畑古墳群
9. 花草山古墳群
10. 五里山古墳群
11. 岩滝山遺跡
12. 縄手遺跡
13. 馬場川遺跡
14. 意岐部遺跡
15. 西岩田遺跡
16. 瓜生堂遺跡
17. 若江遺跡
0
1 km

第18図　遺跡周辺図



第19図　調査地点位置図

Ⅲ．調査の概要

調査は、上水道管及び瓦斯管敷設に伴うものであったため幅１～1.4m、深さ約2.3mについて実施した。工事の工程との兼ねあいもあり、技術的、時間的に多少の制約を受けた。本格的な調査に入る前に遺構や包含層の広がりを確認するため瓜生堂遺跡内で15ヵ所、西岩田遺跡内で20ヵ所の試掘調査を実施した。その調査結果にもとづき、若江西新町１丁目28番地から瓜生堂３丁目103番地までの約400mと、若江西新町１丁目28番地から若江西新町２丁目16番地までの約450mと、西岩田３丁目224番地から131番地までの約120mを本調査とし、残りは立会調査とした。調査は敷設工事との関係で若江西新町１丁目28番地の中央環状線西側自転車道から北へ順次調査を実施し、道路を横断する部分については５×５mの方形の立坑を掘りシールド工法（押し込み）によって地下７m余りのところを通すというものであったので、この部分も上層から順次調査を実施した。調査の地区設定は幅が狭く南北に長く延びること、アスファルト舗装された自転車道が調査地であること、安全確保のため長い期間掘ったままにできないことなどにより、工事の起点から北へ30mごとに１、２、３…地区とし、さらにそれを敷設管の長さ分の６mごとに区切り１－Ⅰ、１－Ⅱ、Ⅲ…というように設定した。調査は盛土部分を機械で掘削したあと人力で一層ずつ順次掘り下げ、遺構・遺物の検出作業、層位図・平面図等の作成、写真撮影等の記録を行ない、管敷設の深度である地下約2.3mまで行なった。立坑部分についても同様の方法で実施し、深度約5mまで実施した。調査は、中央環状線西側の自転車道に沿って敷設する水道管に伴うものを先に実施し、すぐ東側の歩道部分にほぼ並行して敷設する瓦斯管に伴うものを次に実施した。

１．瓜生堂遺跡

瓜生堂遺跡は弥生時代前期～中期の遺跡として有名であるが、その上層には弥生時代後期、古墳時代前期～後期、奈良～室町時代に属する遺構や遺物も検出されている。そのため調査は遺物や遺構を確めながら、順次掘り下げて行くこととした。調査の地区割については、既に記述したが、昭和46年に瓜生堂遺跡調査会が設定した基準にあてはめると今回の調査地は５ＨＩ12～３ＬＩ23、５ＮＹ９～５ＧＡ18、５ＧＶ11～３ＯＷ25、３ＯＷ25～３ＰＩ24である。

１）層序

調査地内の層序は、沖積作用の違いや人為的な作用も加わっているため場所によりかなりの違いが認められるが、基本的な層序は以下の通りである。

第１層　旧耕土　厚さ20cm前後。調査地内の約５分の２でみられた。道路が建設される以前の旧地表で水田の耕土である。O.P.（大阪湾標準海面からの高さ）約3.5mをはかる。耕土の上には盛土が1.1～1.6mの厚さで存在する。

第２層　褐色土　厚さ25～40cm。古墳時代から平安時代にかけての須恵器・土師器の小片を

割合多く含むが、瓦器片も少量混っており中世以降の整地等に伴うものとみられる。この上面でピット、溝等を検出した。

第3層　灰褐色粘質土～淡茶褐色砂質土　厚さ20～40cm。7地区を中心に広がっており、この上面でピット、溝を検出した。遺物より奈良～平安時代のものと思われる。

第4層　褐色砂質土　鉄分・マンガンが沈着したもので非常に堅く締っている。厚さ4cm前後で7地区を中心に広がっている。無遺物。

第5層　茶灰色砂質土　厚さ10cm前後。7地区を中心に広がっているが遺物は全く含まない。

第6層　褐色粘土～黄灰色粘土　厚さ10～27cm。調査地全体に広がっている。

第7層　灰色砂層～褐色砂層　厚さ14～60cm。1～4－Ⅱ地区と7～10地区が比較的厚く堆積しているが4－Ⅴ～6地区は薄い。厚く堆積しているところは上半が粒度が細かく下半が粗い傾向にある。貝殻や自然木を含むが土器は含まれていない。

第8層　灰色粘土　厚さ20～50cm前後。4～5地区にかけて厚く堆積しているが、3、11～12地区にもみられる。水平な堆積状態とはいえず起伏をもつ。

第9層　灰色砂層　厚さ1.3～1.9m。弥生土器を含むがすべての土器の表面が摩耗しており、洪水の時に上流から流れ込んできて二次堆積したものと考えられる。

第10層　黒灰色粘土　厚さ10～24cm。12地区ではこの上に薄く青灰色粘土が堆積しており畿内第Ⅲ様式の壺・甕・鉢などの土器を中心に包含している。

第11層　茶灰色粘質土　厚さ6～25cm。南にゆくにしたがい厚くなる。

第12層　暗灰色砂質土　厚さ16～36cm。溝・ピットなどの遺構を覆う堆積土であり、畿内第Ⅲ様式の壺・甕・鉢・把手付鉢・水差形土器などが出土した。

第13層　青灰色シルト　遺構のベース面となっているもので厚さ20～35cmである。

第14層　茶灰色シルト質粘土

第15層　灰色粘土　　第16層　暗茶灰色粘土　　第17層　暗灰色粘土　　第18層　茶灰色粘土　　厚さ10～26cmで層の変化も漸移的で堆積もほぼ水平である。第18層上面の標高はO.P.－0.4mである。

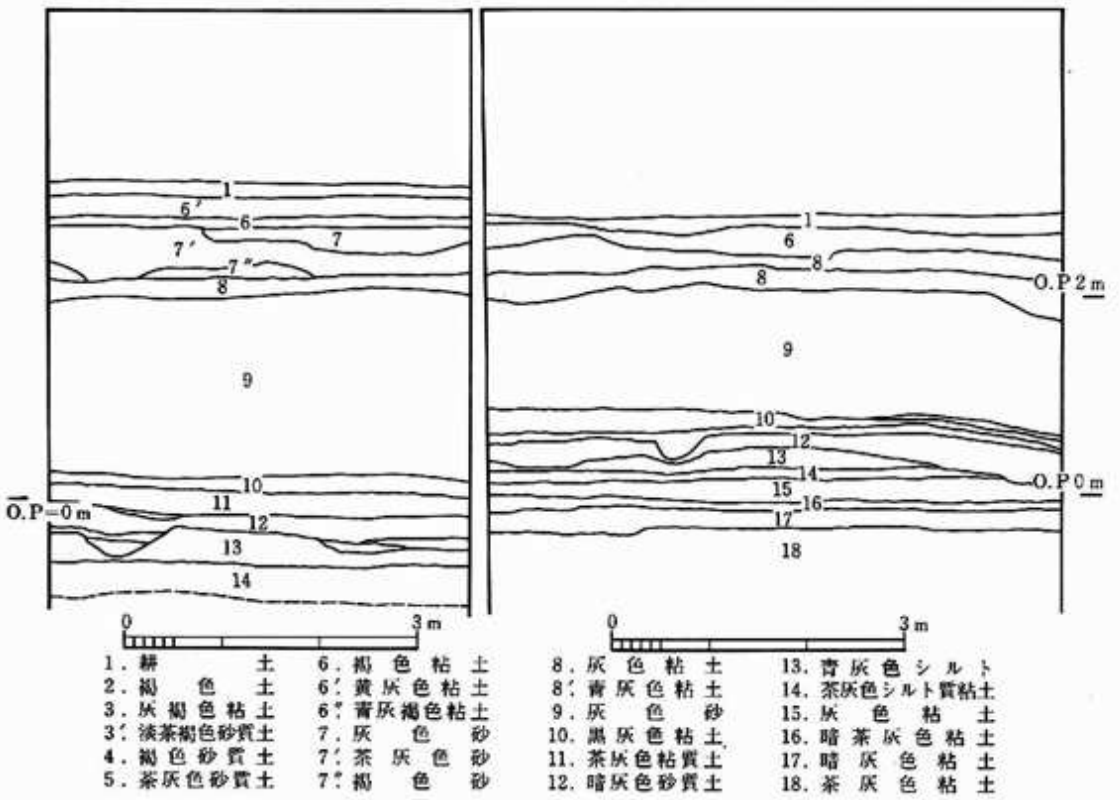
2）遺構

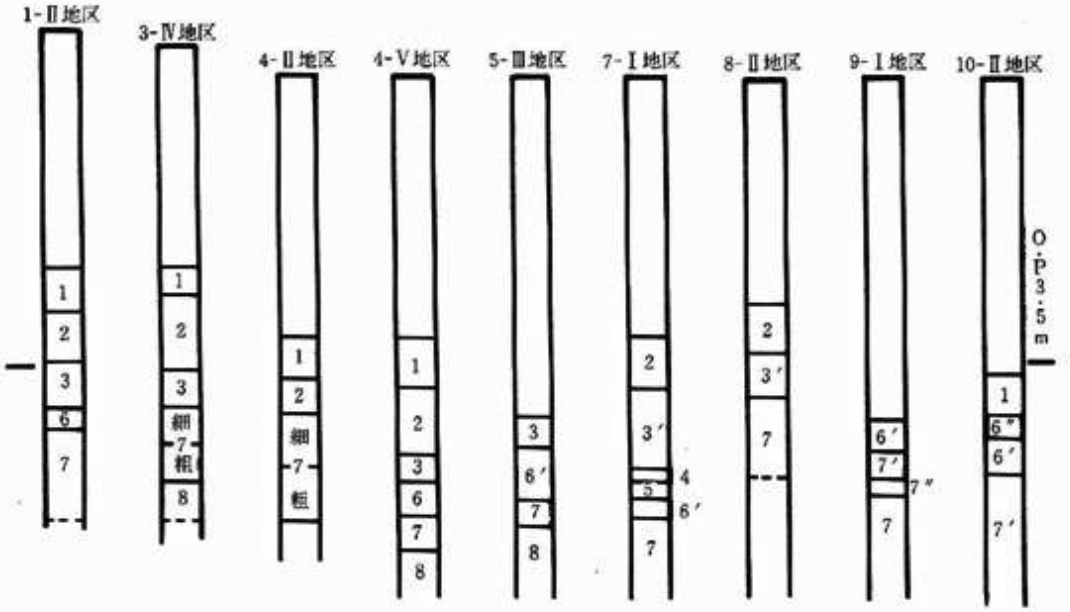
今回の調査で遺構が検出されたのは1－Ⅱから2－Ⅴ地区、6－Ⅳから7－Ⅲ地区、8－Ⅱから8－Ⅳ、Ⅰ－8からJ－3地区で古墳時代から歴史時代のものが、11地区、12地区、D－9から10で弥生時代中期のものが検出された。遺構面となっているのは基本層序の第2層褐色土上面、第3層灰褐色粘質土～淡茶褐色砂質土上面、第13層青灰色シルト層上面である。以下、遺構の記述を行なうが、まず水道管敷設に伴う調査のを先に記述し、つぎにガス管敷設に伴う調査、立坑部分の調査を記述する。

溝1　2－Ⅳ地区で検出した。東西方向に延びる溝で幅50cm、深さ16cmを測る。

溝2　2－Ⅴ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅70cm、深さ20cmを測る。

溝3　2－Ⅴ地区で検出した。北北東から南南西方向に延びる溝で幅20cm、深さ4～5cmを


O.P=0m
O.P 2m
O.P 0m
0
3m
1. 耕土
2. 褐色土
3. 灰褐色粘土
3'. 淡茶褐色砂質土
4. 褐色砂質土
5. 茶灰色砂質土
6. 褐色粘土
6'. 黄灰色粘土
6". 青灰褐色粘土
7. 灰色砂
7'. 茶灰色砂
7". 褐色砂
8. 灰色粘土
8'. 青灰色粘土
9. 灰色砂
10. 黒灰色粘土
11. 茶灰色粘質土
12. 暗灰色砂質土
13. 青灰色シルト
14. 茶灰色シルト質粘土
15. 灰色粘土
16. 暗茶灰色粘土
17. 暗灰色粘土
18. 茶灰色粘土


1-Ⅱ地区
3-Ⅳ地区
4-Ⅱ地区
4-Ⅴ地区
5-Ⅲ地区
7-Ⅰ地区
8-Ⅱ地区
9-Ⅰ地区
10-Ⅱ地区
O.P3.5m
細礫

第20図 断面実測図

測る。南側を溝２によって切られている。

溝４　６－Ⅳ地区で検出した。南西から北東方向に延びる溝で幅50～70cm、深さ20～22cmを測る。

溝５　６－Ⅴ地区で検出した。東南東から西北西方向に延びる溝で幅20cm、深さ９cmを測る。

溝６　７－Ⅰ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅31～38cm、深さ４～９cmを測る。

溝７　７－Ⅰ地区で検出した。南北方向に延びる溝で幅24cm、深さ２cmの浅いものである。溝６にほぼ直交し合流する。

溝８　７－Ⅱ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅34cm、深さ14cmを測る。

溝９　７－Ⅱ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅13～33cm、深さ３～９cmを測る。奈良時代の土師器杯・須恵器杯が出土した。

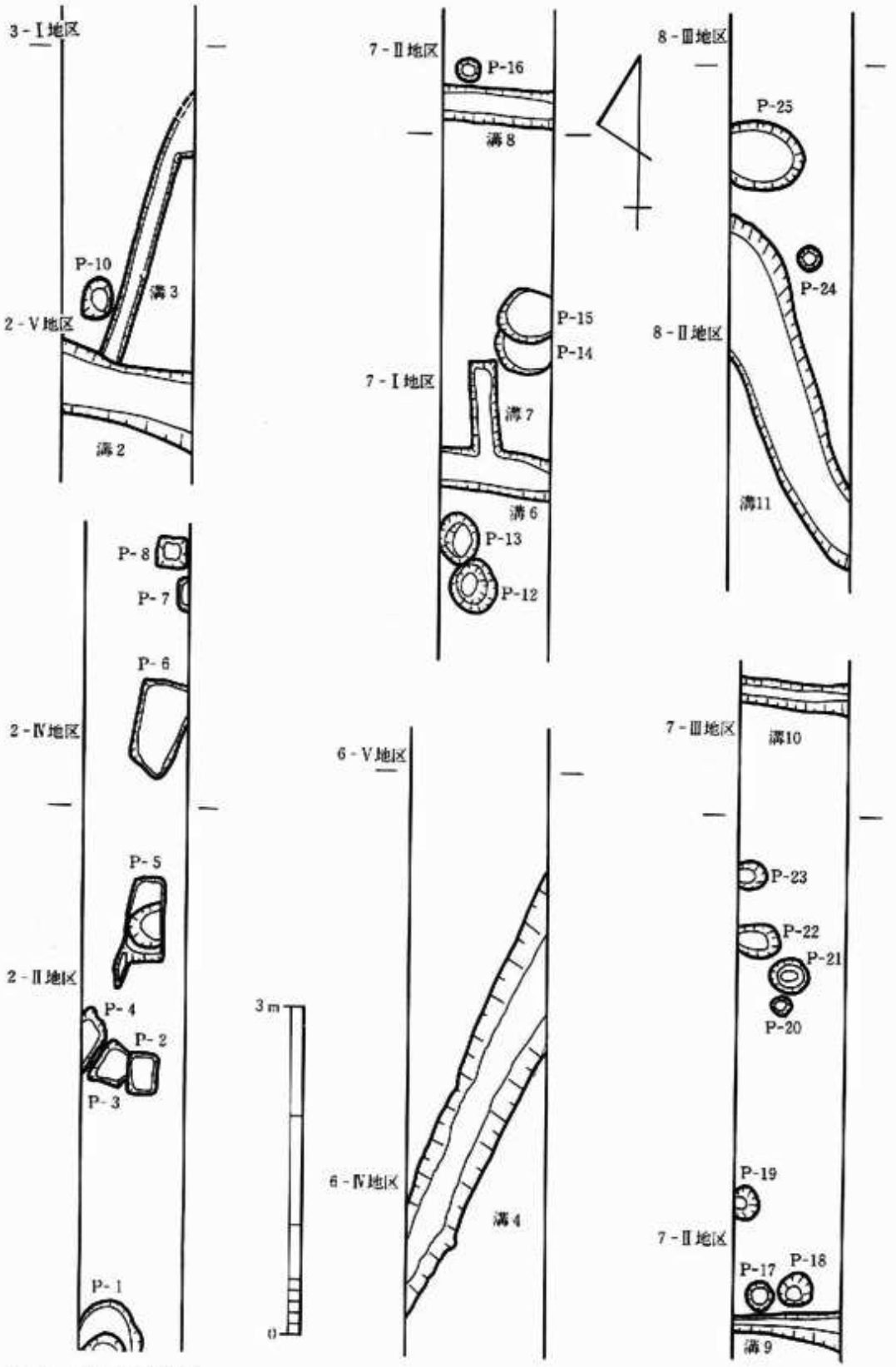
溝10　７－Ⅲ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅25cm、深さ６cmを測る。

溝11　８－Ⅱ地区で検出した。南東から北西方向にやや蛇行しながら延びる。幅50～62cm、深さ13cmを測る。須恵器杯、土師器杯、同羽釜、瓦器片が出土した。

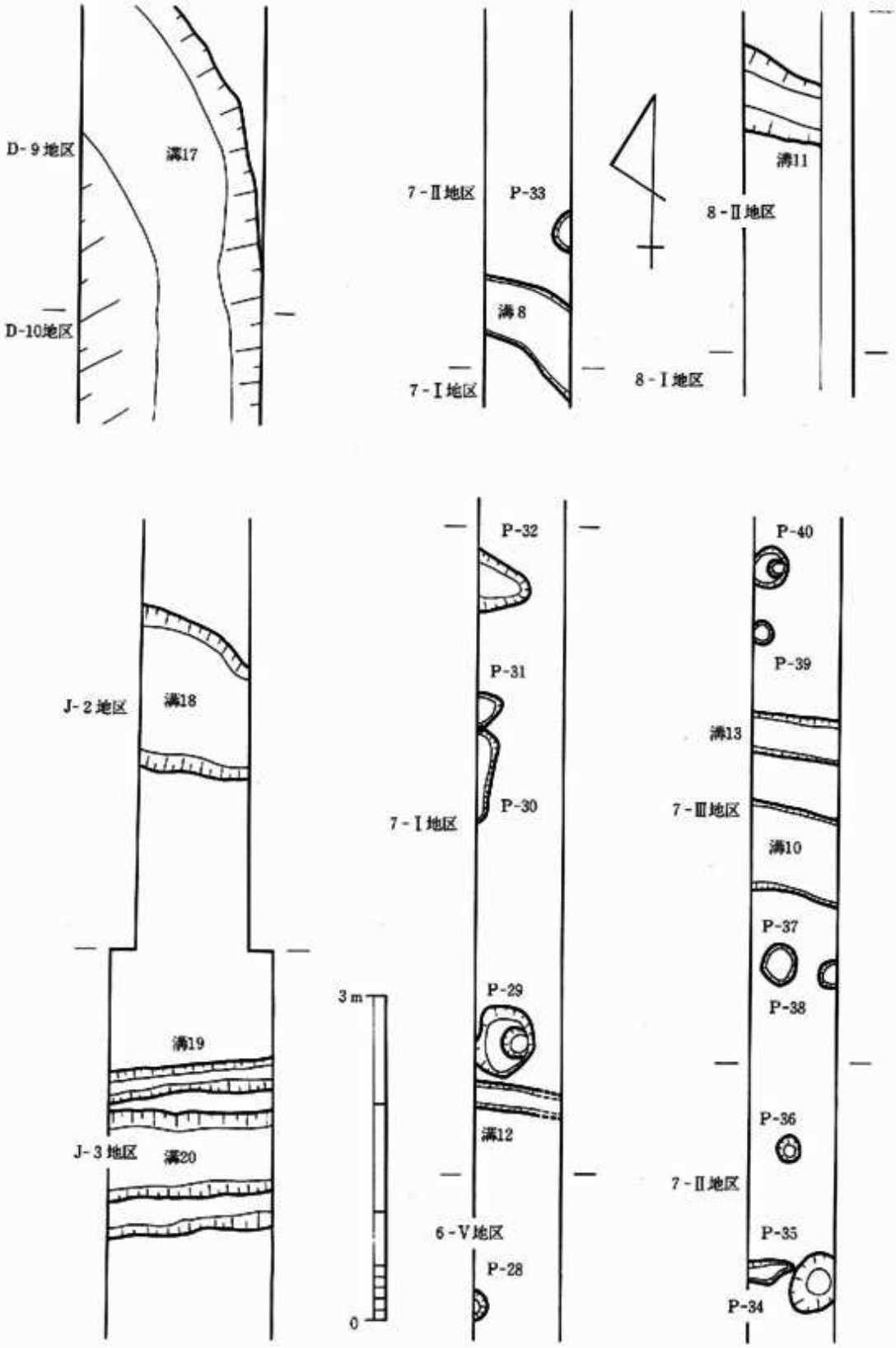
ピット　当該調査地区からは27個のピットを検出した。ピット１は楕円形で２段に落ちる。推定長径約90cm、短径70cmで南半は後世に破壊されている。深さ27cmで土師器の小片が出土した。ピット２～８は平面形が方形または長方形である。ピット２、５、７、８は主軸がほぼ南北で、ピット３、４、６はN19°Eを指す。ピット２、３の切り合いから主軸の南北方向のものが新しいと思われる。ピット２は36×26cm、深さ６cmで土師器杯口縁部の小片が出土、ピット３は42×30cm、深さ６cm、ピット４は46×30cm、深さ９cmで土師器椀口縁部の小片と土師器細片が出土、ピット５は76×33cm、深さ23cmで土師器杯、甕の小片と須恵器片が出土、ピット６は86×44cm、深さ７cmで土師器甕、杯片が、ピット７は一辺が31cm、深さ16cmで土師器片が出土、ピット８は一辺29cm、深さ20cm、ピット９～27は平面形が円形または楕円形である。ピット９は長径41cm、短径33cm、深さ15cm、ピット10は長径38cm、短径28cm、深さ８cm、ピット11は直径33cm、深さ25cm、ピット12は長径50cm、短径40cm、深さ31cmで、須恵器、土師器の小片が、ピット13は直径40cm、深さ40cmで、須恵器杯、須恵器片、土師器片、黒色土器片が出土、ピット14は直径48cm、深さ36cm、ピット15は直径40cm、深さ36cmでピット14を切っている。ピット16は直径22cm、深さ４cm、ピット17は直径28cm、深さ６cm、ピット18は直径30cm、深さ９cm、ピット19は直径32cm、深さ12cm、ピット20は直径18cm、深さ８cm、ピット21は直径33cm、深さ24cm、ピット22は直径32cm、深さ17cm、ピット23は直径25cm、深さ15cm、ピット24は直径20cm、深さ６cmで土師器片が、ピット25は直径60cm、深さ18cmで土師器片が、ピット26は直径60cm、深さ20cmで土師器片が、ピット27は直径27cm、深さ９cmで土師器片が出土した。

ガス管敷設に伴う調査では、溝12本、ピット13個を検出した。

溝12　６－Ⅴ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅24cm、深さ11cmを測る。



第21図　遺構平面実測図



第22図　遺構平面実測図

溝8　水道管敷設に伴う調査で検出したものと同一で、幅52～60cm、深さ7～10cmを測る。
溝10　幅約80cm、深さ9～11cmを測る。
溝13　7－Ⅲ地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅38～40cm、深さ8～10cmを測る。
溝11　8－Ⅱ地区で検出した。東南東から西北西方向に延びる溝で幅54～64cm、深さ15cmを測る。さらに西へ行くと方向が北西へと変わる。
溝14　8－ⅡからⅢにかけて検出した。南西から北東方向に延びる溝で幅24cm、深さ8～11cmである。底の高さはほぼ一定で傾斜はみられない。
溝15　8－Ⅲで検出した。北北東から南南西に延びる溝で幅14～26cm、深さ5～6cmを測る。
溝16　8－Ⅳで検出した。北東から南西方向に延びる溝で幅約1m、深さ約14cmを測る。
ピット　平面形が円形を呈するものが多いが隅丸長方形のものもある。ピット29は長径66cm、短径52cm、深さ31cm、ピット30は一辺84cm、深さ8cm、ピット31は直径32cm、深さ7cm、ピット32は直径52cm、深さ13cm、ピット33は直径36cm、深さ8cm、ピット34は長径58cm、短径42cm、深さ7cm、ピット35は不定形で深さは7cm、ピット36は直径22cm、深さ4～5cm、ピット37は直径34cm、深さ5cm、ピット38は直径22cm、深さ3cm、ピット39は直径20cm、深さ3cm、ピット40は直径38cm、深さ31～33cmである。
溝17　D－10からE－1にかけて検出した。北西から南にゆるやかに弯曲しながら延びる溝である。推定幅約2m、深さ36cmでなめらかなU字状の溝である。遺構は青灰色細砂上面から掘られており溝内には暗灰色砂層が堆積しており、ここから畿内第Ⅲ様式の土器が多量に出土した。溝の底の標高はO.P.1.54m前後である。
溝18　J－2地区で検出した。西北西から東南東方向に延びる溝で幅約1.4m、深さ17cmである。遺構は黄褐色から黄灰色の粘質土上面から掘られていて、溝内の堆積土は暗茶褐色粘質土であった。ここからは土師器片、須恵器片が出土した。
溝19　J－3地区で検出した。東北東から西南西方向に延びる溝で幅28cm、深さ13cmを測る。
溝20　溝19と平行に延びる溝で肩は2段に落ちる。黄褐色砂質土の上面から掘られていて、溝内には淡灰褐色粘土が堆積している。土師器片、須恵器片が出土した。
井戸　Ⅰ－10地区で検出した。基本層序の第6層褐色粘土～黄灰色粘土層の上面から掘り込まれて構築されたもので、掘形の直径約2.6mで、その掘形の東寄りに側を掘える。井戸側は上が方形横桟縦板、下が曲物である。横桟は4×10cmの角材を一辺52cmの方形に組んだもので、その外側に厚さ2cm、幅6～24cm、長さ60～80cmの板材で2～3重に囲っている。曲物は4段積まれていて口径、深さは上からそれぞれ30cm、8cm、28cm、12cm、25cm、12cm、23cm、14cmで、検出面から底まで約1.5mであった。湧水層はO.P.2.3mの灰色砂層で現在でも湧水量は豊富である。井戸内の堆積土は、遺構検出面から横桟縦板の上端までの約32cmが暗褐色粘質土でその下は井側の外では黄褐色粘土で叩き締めて貼り付けている。井戸の内は褐色粘土が厚さ4cmでレンズ状に堆積し、その下は湧水層まで暗青灰色粘質土であった。井戸

内からは土師器甕口縁部の破片と土師器小片、須恵器片が少量出土した。

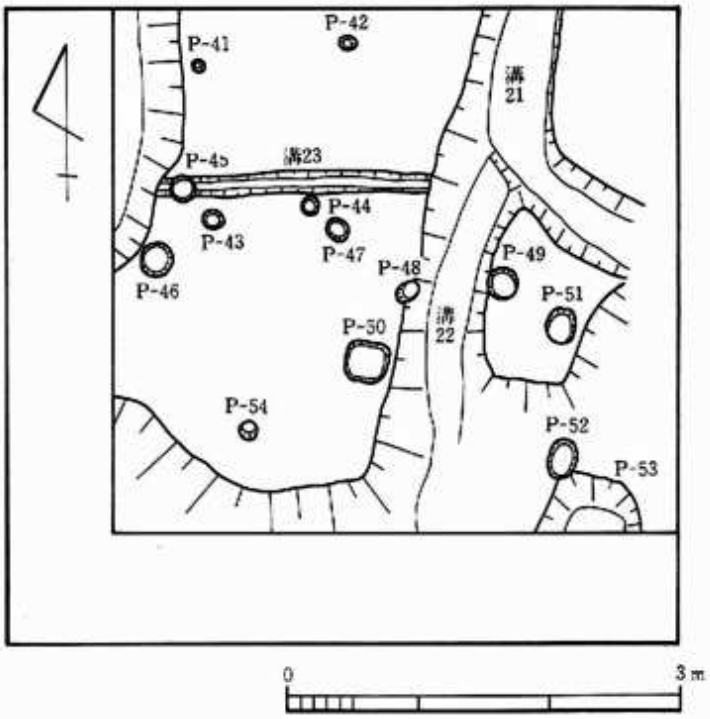
立坑部分の調査では、上層にあった歴史時代の遺構面は存在せず、弥生時代中期の遺構のみを検出した。遺構面は基本層序第13層青灰色シルト上面で11地区ピットでは溝3本、ピット14個、12地区ピットでは溝1本を検出した。

溝21　北東から西に向きをかえて延びる溝で幅約60cm、深さ13～22cmのU字状の溝である。

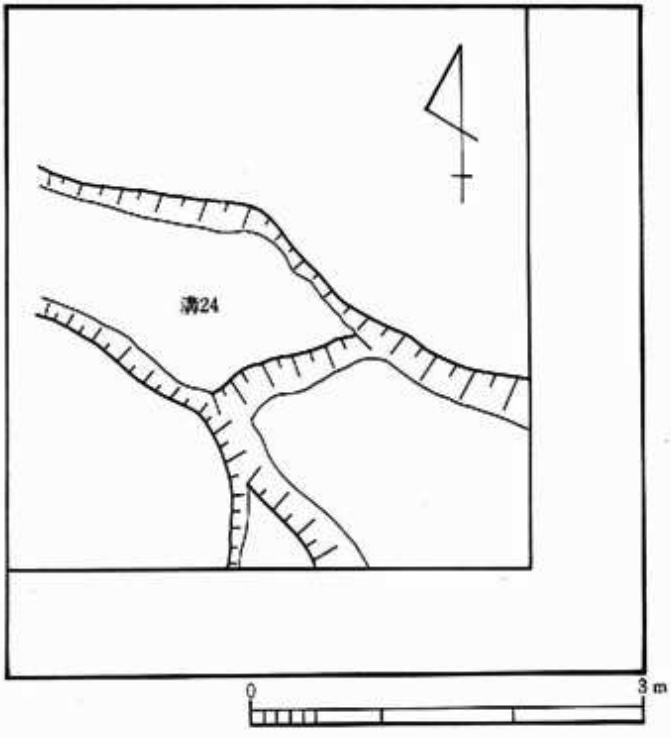
溝22　東南東から西北西方向に延びる溝で幅60cm前後、深さ20cm前後で溝21に合流している。

溝23　北から南に延びる溝で幅17cm、深さ3～5cmで北側は溝22に、南側は溝または土壙によって切られている。

ピットの平面形態は41～46、49、54が円形、47、48、51、52が楕円形、50、53が方形である。深さは41が5cm、42が7cm、43・47が9



第23図　11地区ピット　遺構平面実測図



第24図　12地区ピット　遺構平面実測図

cm、44・47・50が15cm、45が3cm、46が12cm、48が8cm、49が14cm、51が34cm、52・54が11cm、53が12cm、であるが規則的な配列はみられない。

12地区ピットの溝24は北西から南東方向に延びる溝で幅1.1～2m、深さ16cm前後で溝内から畿内第Ⅱ～Ⅳ様式の甕・壺・把手付鉢・高杯・木製狭鍬が出土した。

3）出土遺物

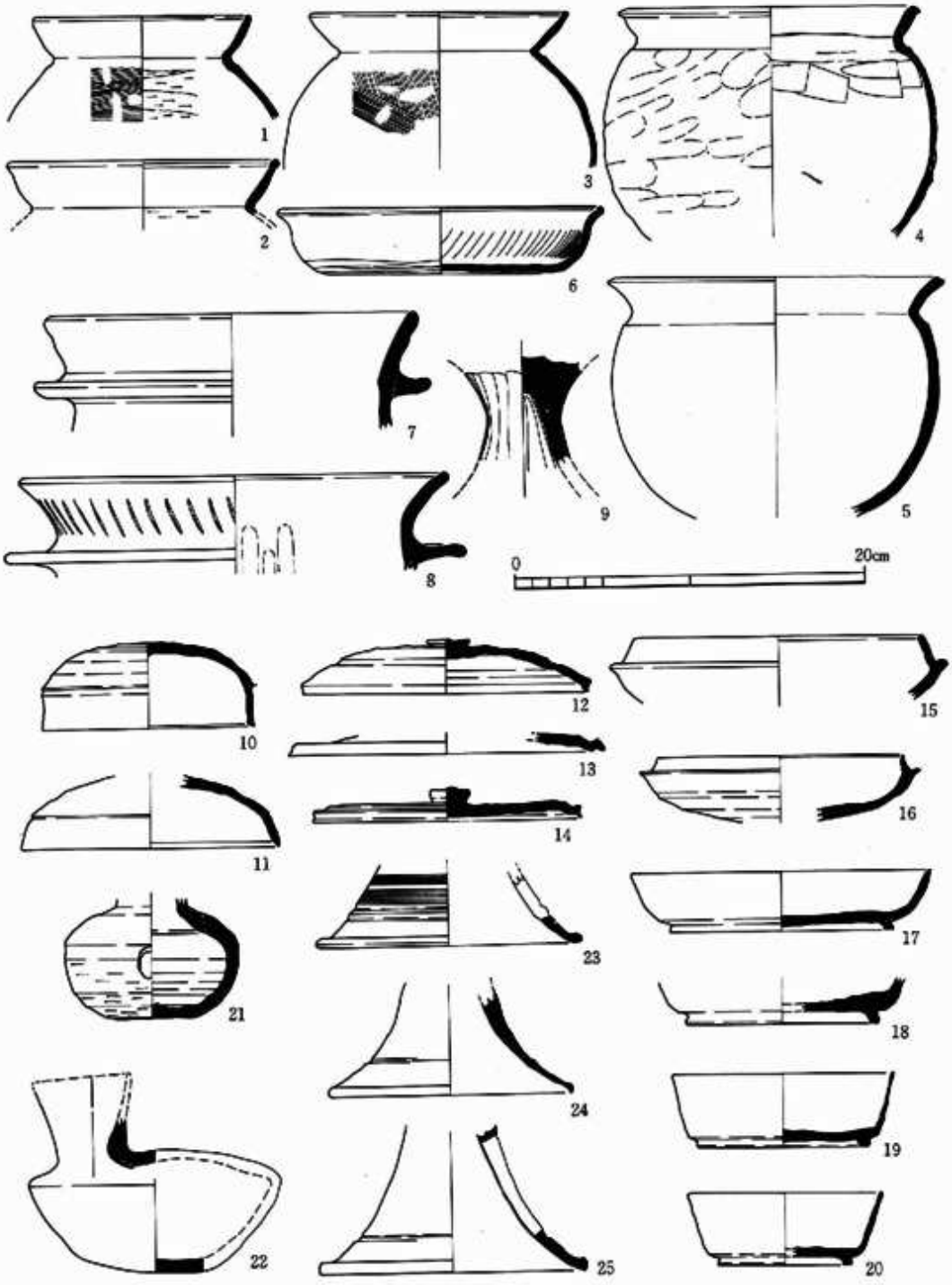
今回の調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・瓦・埴輪、土馬・石器である。弥生土器を除くとほとんどが包含層からの出土で、遺構からの出土はごくわずかである。包含層では基本層序第2層褐色土から多量の遺物が出土した。古墳時代前半から平安時代前半にかけての遺物が大部分であるが中世の瓦器も少量含まれている。

土師器

1・2・7・9地区からの出土が多い。甕・杯・羽釜・高杯などがある。（1～5）は甕である。（1～3）は口縁部が「く」の字形に屈曲し、やや内弯しながら外上方に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。(2・3）の頸部内面には鋭い稜がある。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は9～10本/cmのハケメ、内面はヘラケズリである。色調は茶褐色～黄褐色で胎土には石英・角閃石・金雲母等の細粒を多く含む。(4・5）は口縁部がやや外弯しながら外上方に立ち上がる。口縁端部は外側にややつまみ出され肥厚する。端部は外傾する面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はユビオサエによる調整の後ナデ、内面はヘラによる調整の後ナデである。体部上半には強いヨコナデによる稜がある。色調は茶褐色～暗褐色で胎土に石英・金雲母の細粒を多く含む。杯は口径18cm前後、器高3.8cm前後のものである。口縁部の開いた浅い土器で、口縁部が外反弯曲し、端部は内側に粘土をおりかえしている。口縁部内面には斜放射状の、底部内面にはラセン状のヘラミガキ暗文がつけられている。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリである。羽釜（7・8）はゆるやかに外反した口縁部をもち、頸部の周囲にほぼ水平にのびる鍔をめぐらす。端部は丸くおさめる。口縁部内外面、鍔はヨコナデである。体部内面はユビオサエの後ヨコナデである。(8)の口縁部外面にはヘラによる刻線がほぼ等間隔にある。色調は茶褐色で胎土には金雲母・石英・長石が多く含まれている。高杯は脚部のみ3点出土している。平らな杯部をもつもので脚部は縦にヘラで削って面取りをしている。(9)は15面みられ下方から上方にヘラケズリされている。

須恵器

杯身・杯蓋・甕・平瓶・高杯脚部・甕などがある。1・7地区からの出土が多いが、2・3、10地区からも少量出土している。(10～13）は杯蓋である。（10）は天井部が全体に丸味をもつ。天井部全体の⅚をヘラケズリしている。口縁部は高さ2.3cmで、端部はわずかに内方へ傾斜している。（11）は天井部と口縁部とをわける突出部の稜はほとんど失われ、変って凹線をめぐらす。天井部は余りふくらみながなくヘラケズリは粗さが目立つ。口縁端面は内傾する。（12～14）は天井部中央に扁平な宝珠形のつまみをもつ。（12）は天井部にまだふくらみがみられるが、（13・14）はふくらみが少なく平らに成形している。また天井部と口縁部との境界は段を



第25図　1地区～10地区　出土遺物実測図

なす。口縁端部は下方へ短く屈曲し、内面はわずかにふくれる。(14) は7－Ⅲ地区ピット40出土。(15～20) は杯身である。(15) はたちあがりの内傾度がやや大きくなり、端部は丸くおさめる。受部は外上方に短くのびるが端部は丸くおさめる。(17～20) は高台をもつ杯である。高台はあまり高くなく、わずかに外方へふんばる。底部と体部との境界はやや丸味をもつ。

体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。(21) は雄で体部には凹線がみられず単に丸味をもつものでカキ目もみられず下半をヘラケズリするのみである。円孔は体部が最も張り出したところにあり、外面から穿つ。(22) は平瓶で、口縁部は漏斗状を呈し、体部上面の中心から外して接合する。体部は扁平である。

土馬

6－Ⅲ地区第3層灰褐色粘質土から出土した。土馬は頸部と右側の前足、後足が欠失している。現存長9.6cm、高さ6.4cmの裸馬で、胴部に棒状の足や尻尾を接合し、接合部に薄く伸ばした粘土をかぶせ、ヘラで仕上調整を行なっている。形態は足を大きく外側へ開き力強く安定感がある。尻尾はまっすぐ斜め上に伸びる。頸部より上は欠失しているが頸部の両側に指で押さえた痕があり、たてがみをひきだしたものと思われる。⑤

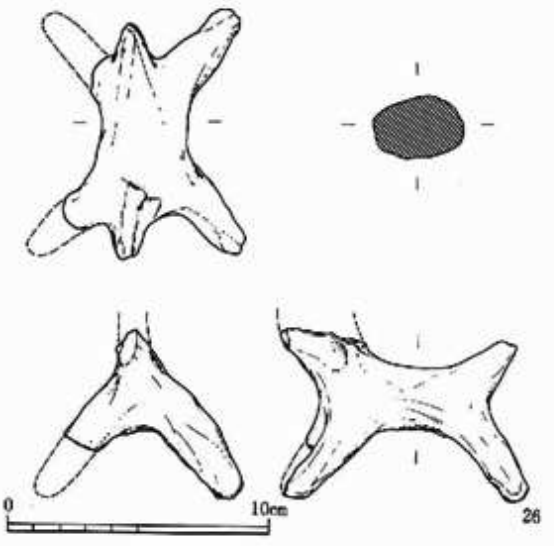
D－10地区溝17出土遺物

畿内第Ⅲ様式を主体とする壺・細頸壺・無頸壺・甕・鉢・高杯が出土した。

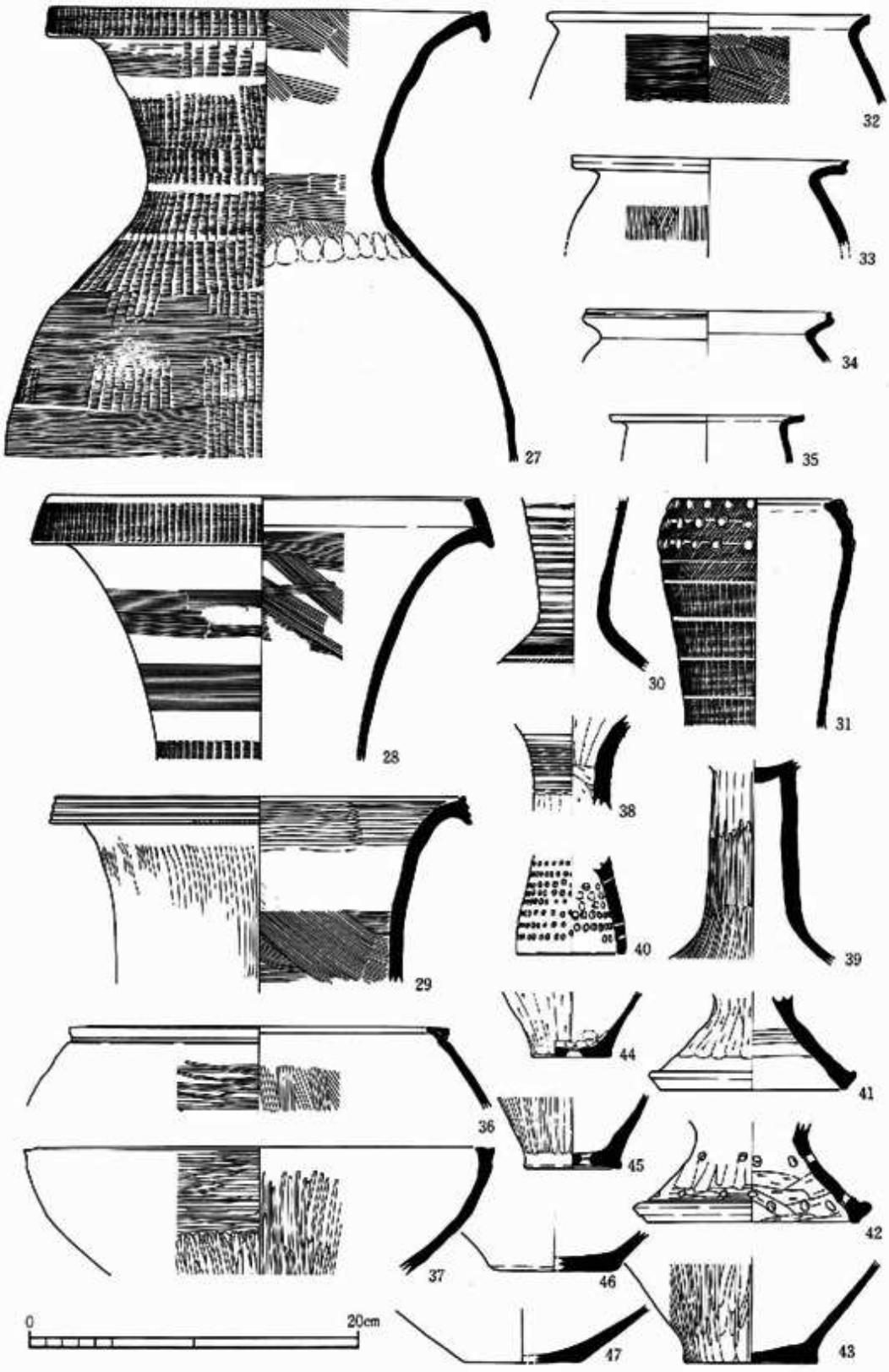
壺 (27～29) (27)は球形に近い、あるいは腰部に張りをもつ器体に漏斗状にひらく口頸部をもつ。口頸部から腹部にかけて幅の広い櫛状器具を用いた簾状文が十帯以上施されうずめつくしている。口縁部の端を下方に拡張し、その端面に簾状文を施す。口頸部から腹部にかけての内面には指頭圧痕が多くみられる。口頸はハケメ調整、腹部内面にはほとんど調整痕がみられない。暗茶灰色で胎土には角閃石・金雲母を含む。(28) も漏斗状にひらく口頸部であるが、口頸部の端を上方に拡張しているため受口状を呈する。口縁端面はやや内傾する面をもつ。口頸部外面はヨコナデの後櫛状器具で直線文・簾状文をめぐらすがまばらである。内面はハケメであるが一部ナデ消されている。茶褐色を呈し雲母・長石等の石粒を多く含む。(29) は口縁部の端を上下に拡張させ、端面に凹線文を施す。口頸部内外面とも粗いハケメによる調整である。

細頸壺 (30・31) 胴部に張りをもつ器体から筒状の細い口頸部がつづく壺である。(31)は口縁部が上端に向って内弯し、端部が内方にやや肥厚する。頸部から腹部にかけて簾状文・直線文などの櫛描文を施すが、(31) はその上に円形浮文でかざりたてている。口頸部内面はナデである。暗茶褐色を呈し石英・雲母等の石粒を多く含む。

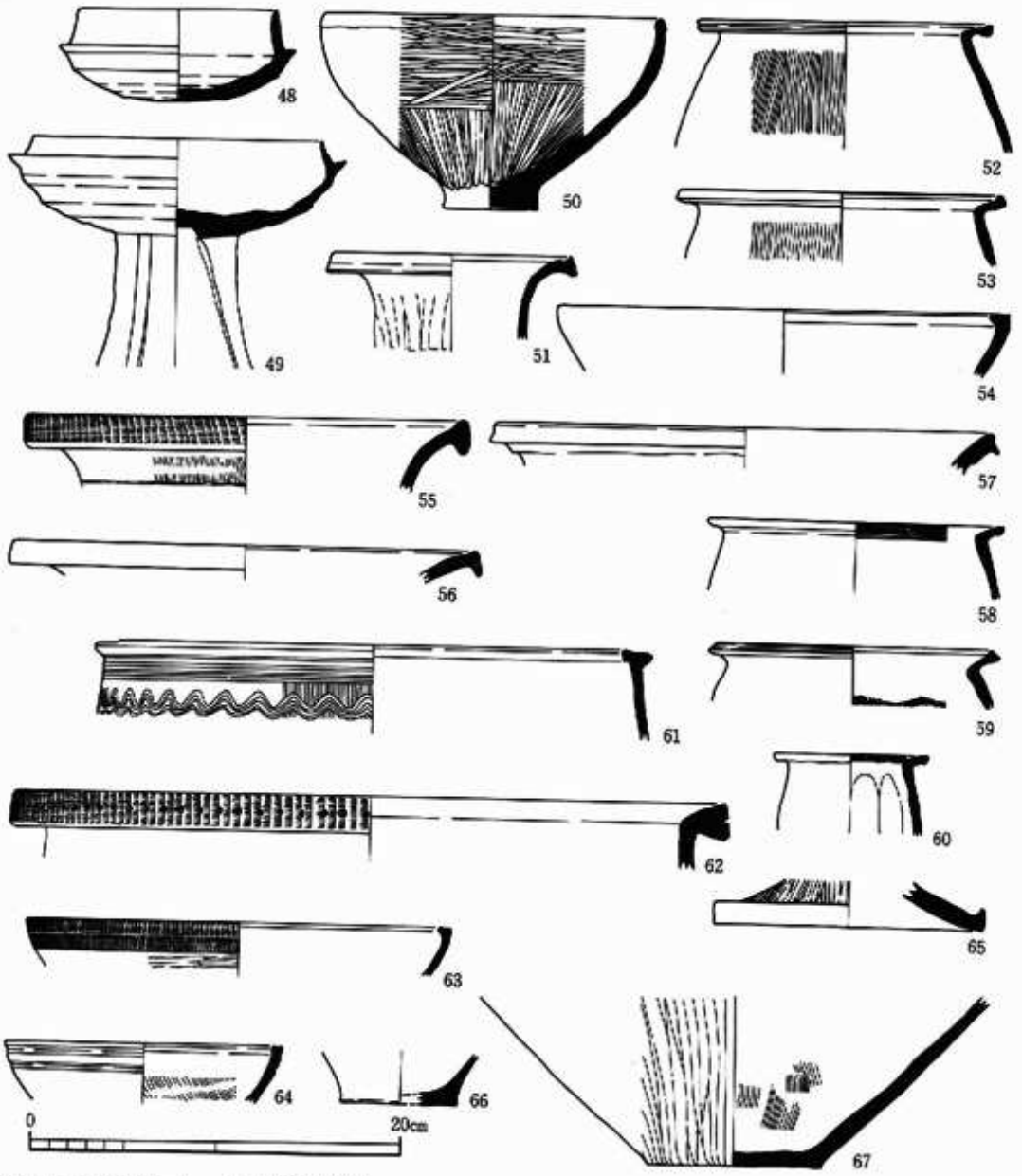
甕 (32～35) 倒鐘形をなす土器である。胴部はゆるやかにふくらみ、口縁部は短かく「く」の字形に外反する。端部は (32・35) が丸く、(33・34) は上方につまみ上げられ拡張する。(34) は端面に凹線文をもつ。口縁部はすべてヨコナデ調整、腹部



第26図 土馬実測図



第27図　D－10地区　出土遺物実測図

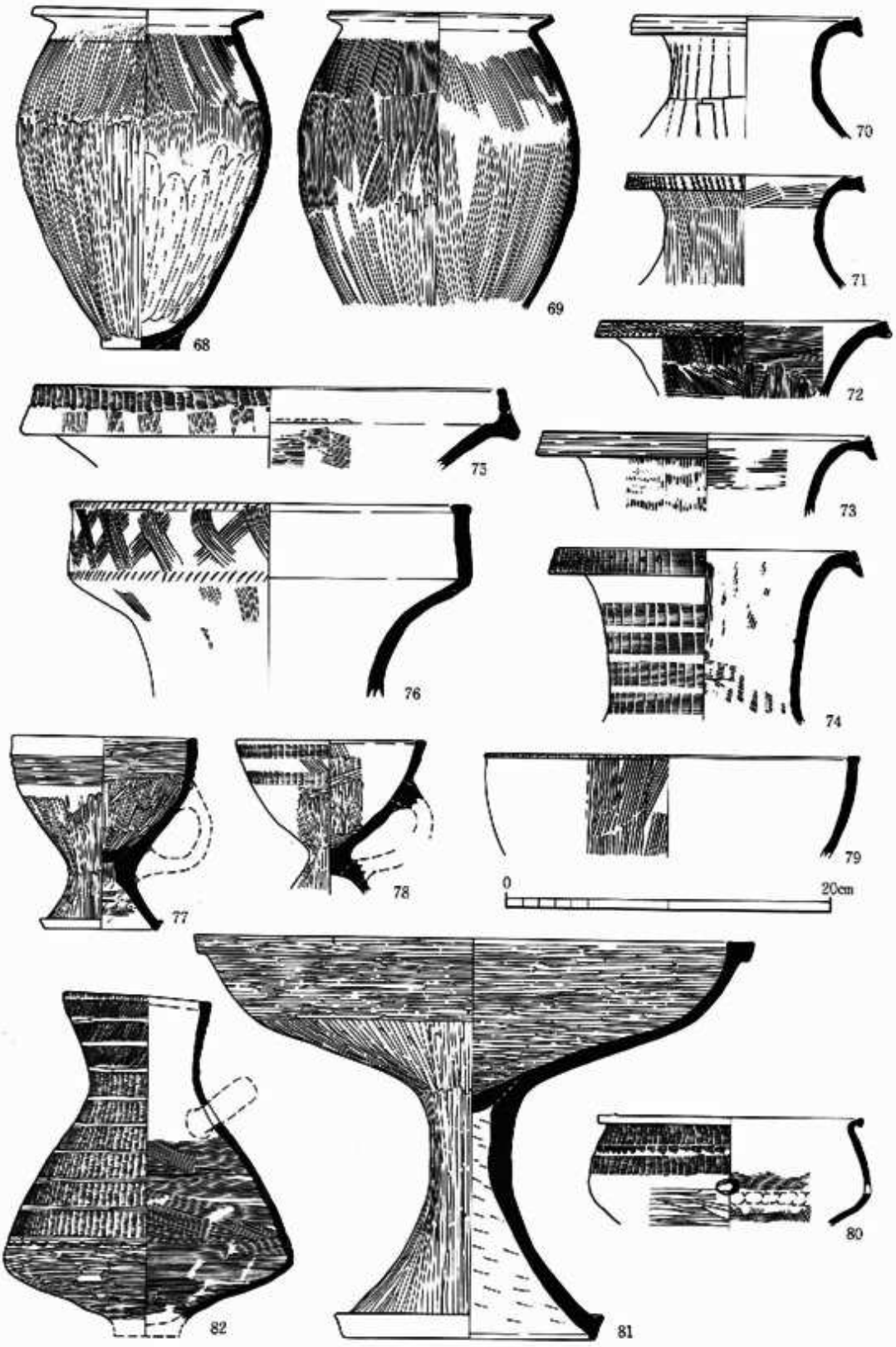


第28図　11地区ピット　出土遺物実測図

は（32）は内外面細いハケメ、（33）は外面ハケメ、内面ナデである。（32～35）の外面には煤が付着している。図示しなかったものの中には口縁部が上下両方に肥厚するものがあるが端面は無文である。

無頸壺（36）胴の張った器体に段状の口縁部をもつ。口縁端部外面に粘土を貼りつけ肥厚させるが端面は無文である。体部外面はヘラミガキ、内面は粗いハケメである。

高杯（37～39）浅い椀形の杯部に脚部をもつ。口縁部は直立しておわり端部は内方に肥厚する。内外面ともヘラミガキを施す。(38・39)は脚台柱状部が中空のものである。(38)の内外面はヘラケズリ、(39）の外面はヘラミガキ、内面は上半がユビオサエ、下半がナデである。



第29図　12地区ピット　出土遺物実測図

第11・12地区ピット出土遺物

(48・49)は第8層灰色粘土、(50～54、72、79、82) は第10層上面の青灰色粘土、(55～71、73～78、80、81) は第12層暗灰色砂質土から出土した。

須恵器 (48、49) (48)は杯身である。たちあがりの内傾度は大きくはないが端部は丸くおさめている。受部は水平にのびるが端部の稜はあまい。ヘラケズリは底部全体の¾におよぶ。(49)は短脚一段透しの有蓋高杯である。たちあがりの内傾度が大きくなってきている。

弥生土器 (50～82) 壺・甕・鉢・台付鉢・高杯・水差形土器などがある。

壺 (51、55、56、70～76) 球形に近い、あるいは腰部に張りをもつ器体に漏斗状にひらく口頸部をもつ。口縁部が水平に折れ曲がり端部が上下に拡張し肥厚するもの (51、70、71～73)、端部が下方に拡張し端面を簾状文で飾るもの (55、74)、端部が上方に拡張あるいは曲折して立ち上がるもの (75、76) などがある。口頸部外面は (51、70) がヘラケズリ、(71、72) がハケメ、(55、73) がハケメの後ナデを行なう。口縁部端面は (71) が櫛描列点文、(72) が波状文、(73)が凹線文、(74、75) が簾状文に刺突文、(76) が斜格文である。

甕 (52、53、57～60、62、68、69) 腹部はゆるやかにふくらみ、口縁部が短く「く」の字形に外反する。口縁端部が上方に拡張し肥厚するもの (52、53、59、69)、下方に肥厚するもの (57、60、68)、丸くおわるもの (58) がある。(52、59、69) の端面には凹線文を施す。(52、53) は腹部外面がハケメ、内面はナデ、(59) が内外面とも細いハケメ、(68、69) は外面がハケメのちヘラミガキ、内面はハケメであるが、(68) の下半はヘラケズリをしている。

鉢 (50、54、61～64、79、80) なだらかなカーブを描いて立つ直口の鉢 (50、54、63、64、79) と腰に稜をもち段状口縁部をもつもの (61、62、80) とがある。口縁部外面に櫛描直線文・波状文を描くもの (61)、簾状文・扇形文を描くもの (62、63、80)、凹線文を描くもの(64)がある。(79) は外面にハケメを施し、口縁端面に刻み目を施す。

把手付鉢 (77、78) 椀形の鉢の側面に縦位の半環状把手が斜め下に大きくのびてつく。内外面ともヘラミガキする。(77) の口縁部外面には凹線文、(78) には簾状文を施す。いずれも脚台をそなえたものである。

高杯 (81) ゆるやかに内弯しながら立ち上がる浅い椀形の杯部をそなえた高杯である。口縁部の外面に粘土を貼り付けたいわゆる段状口縁をもつ。脚台の柱状部分は中空のものであり円板を杯部に充塡している。杯部内外面と脚部外面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリである。杯部のヘラミガキに先だって口縁部はヨコナデ、腹部はハケメを施している。杯底部から脚部にかけては先にヘラケズリを施している。脚端部はヨコナデである。

水差形土器 (82) 腰のはった器体に筒状の口頸部をつけ、肩に横位の半環状把手をそなえたものである。口縁部の把手側を傾斜させて低くする。口縁部直下から胴部にいたるまで、櫛描きの列点文・簾状文・扇形文を施している。文様帯の間は施文の後ヘラミガキしている。口縁端部外面には刻み目を施す。底部外面はヘラミガキ、内面はハケメである。底部外面には黒く焦げて煤が付着しているのがみられる。

2．西岩田遺跡

調査は上水道管及びガス管埋設工事に伴うものである。工事の性格から調査地は、幅が約1mと非常に狭く、細長いトレンチである。調査は南より約30mを完了した後、北へ順次実施した。また、上水道管は西側部に、ガス管は東側部に相接して埋設されることになった。工事許可等の都合により、西側の上水道管を数十mの調査を完了した後、東側のガス管の調査を並行して開始した。調査地は大阪中央環状線西側歩道部を大部分は通過するが、一部車道部にもかかる。調査は西岩田3丁目の公害監視センター前120mを本調査し、これより、南と北は立会調査とした。上層の盛土約1.5mは機械掘削し、下層は人力掘削した。

1）層序（第30図）

現地表より約1.5mは大阪中央環状線等の工事の盛土である。旧耕土はNo33－Ⅳ～Ⅴ地区にかけて約20cmで残っていたが、他の地区では削平を受けていた。旧耕土下には青灰色粘土層ないしは黄褐色粘土層が堆積する。その下にNo29－Ⅰ～Ⅱ地区の淡茶灰色砂混り粘土や、No32－Ⅴ～No33Ⅰ地区の暗灰褐色粘質土が堆積する。これらは古墳時代後期の須恵器や土師器を含む遺物包含層である。遺物包含層は部分的にしか残っていない。茶灰色粘土層や茶灰色粗砂層が古墳時代後期の遺構面である。また、茶灰色粗砂層内には庄内式～布留式の遺物を含む。遺物はいづれも磨滅が著しく、二次堆積のものと考えられる。

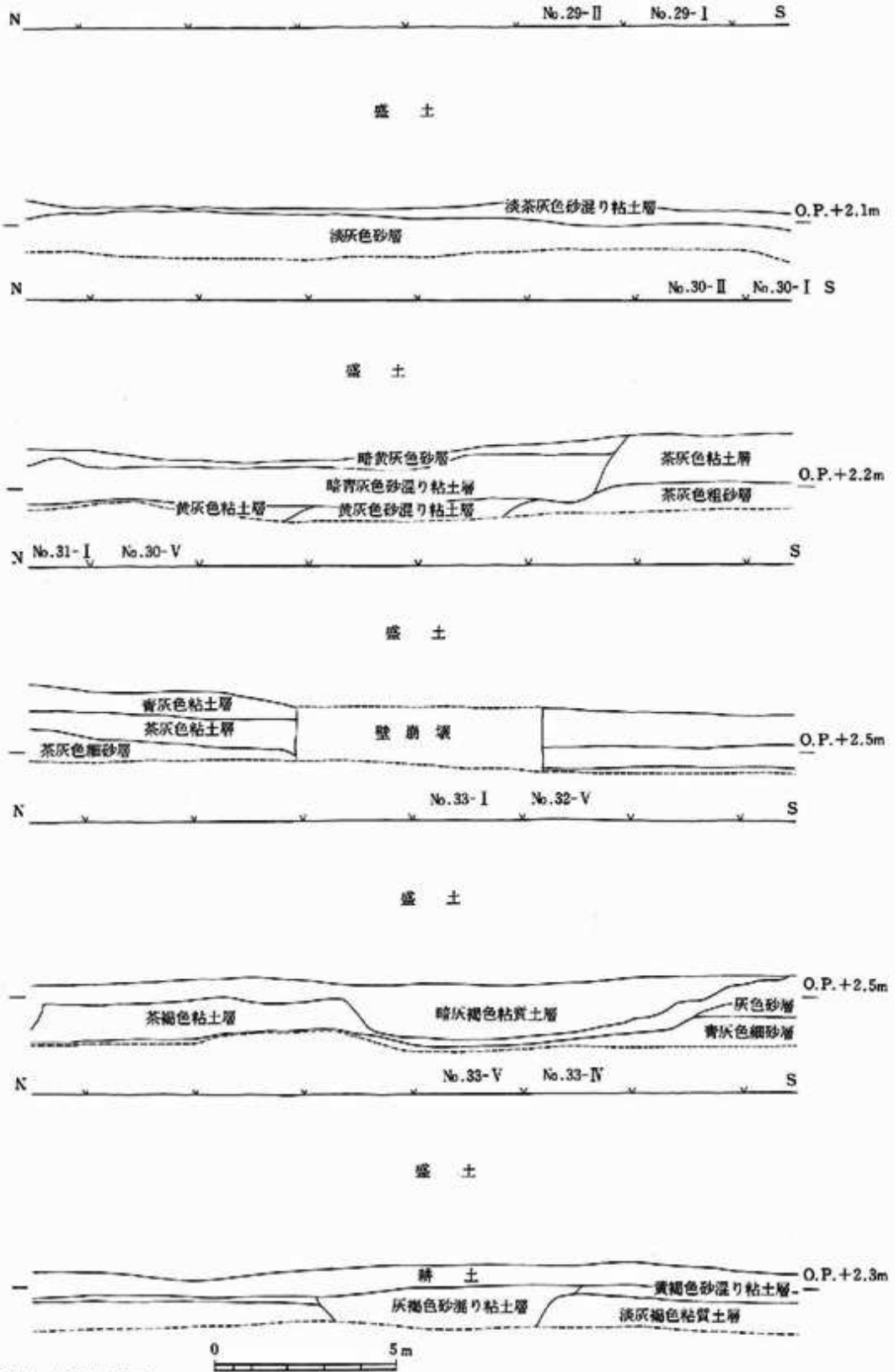
2）遺構（第31図・第32図）

今回の調査地は幅約0.8mで細長く続くトレンチである。トレンチ幅が狭いことや調査地が現道路部のため拡張することも出来ず、遺構の規模や性格など不明な点が多い。布留式と古墳時代後期の時期の遺構を検出した。布留式の時期の遺構は溝があり、古墳時代後期の遺構は溝、土坑、ピットがある。古墳時代後期の時期の遺構が大部分をしめる。遺構を検出した地区は、No28－Ⅴ～No30－Ⅰ地区、No30－Ⅴ地区、No32－Ⅳ～No33－Ⅰ地区である。前記した地区の間は削平が著しく認められ、本来、No28－Ⅴ～No33－Ⅰ地区間は全面的に遺構が広がっていたと考えられる。遺構のベース面は粘土層ないしは粘質土層であるが、地点によっては削平を受けたため、下層の砂層面で確認したものもある。以下、水道管、ガス管埋設に伴う調査地の順に説明する。遺構番号は連続して付した。

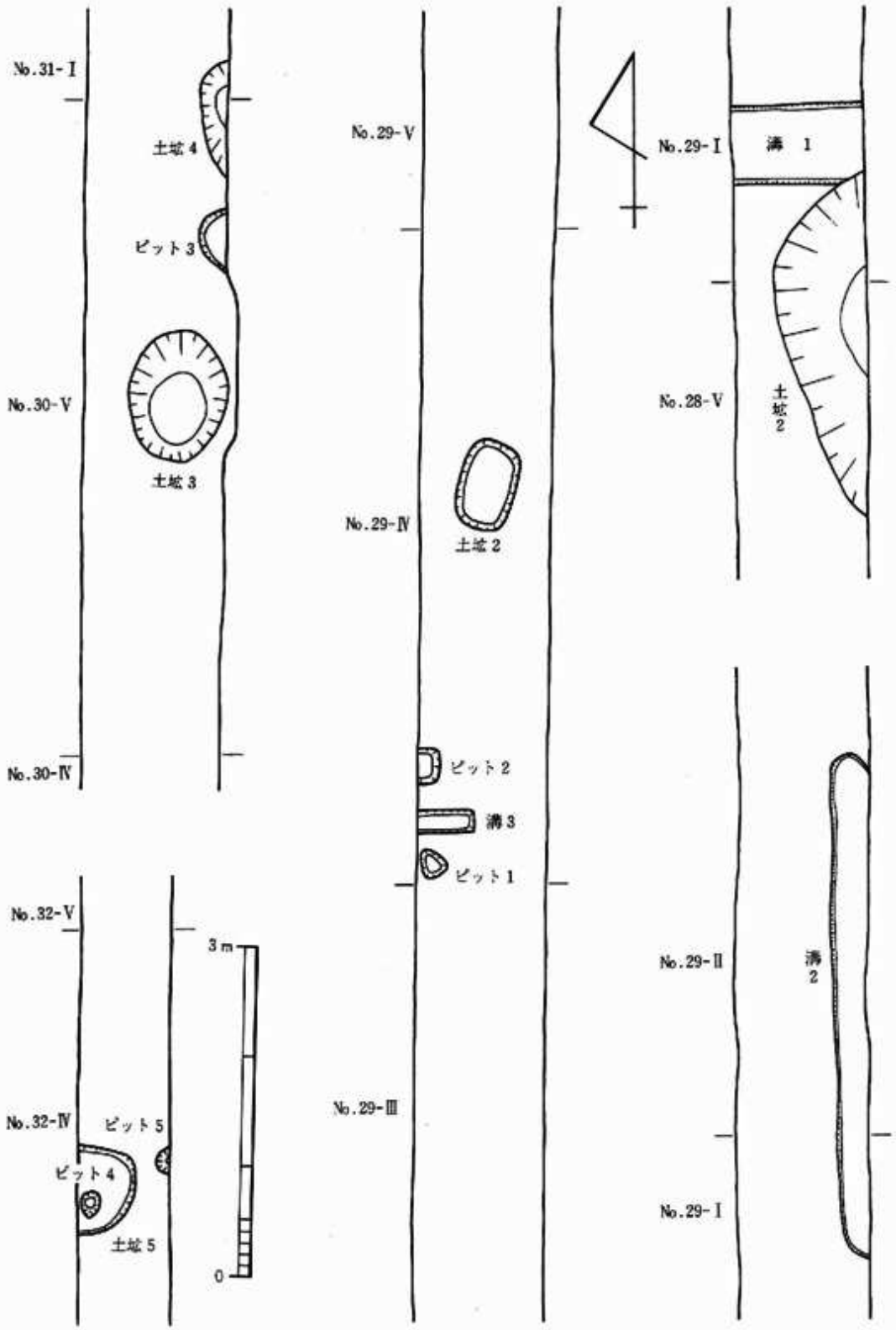
溝1　溝1はNo29－1地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅75cm、深さ10cmを測る。土坑1によって北肩を切られる。溝内より布留式の土器が出土した。出土した土器は（54・55）である。溝は布留式の時期である。

溝2　溝2はNo29－Ⅰ～No29－Ⅱ地区で検出した。南北方向に伸びる溝で長さ4.6m、幅30cm以上、深さ7cmを測る。溝の時期は古墳時代後期である。

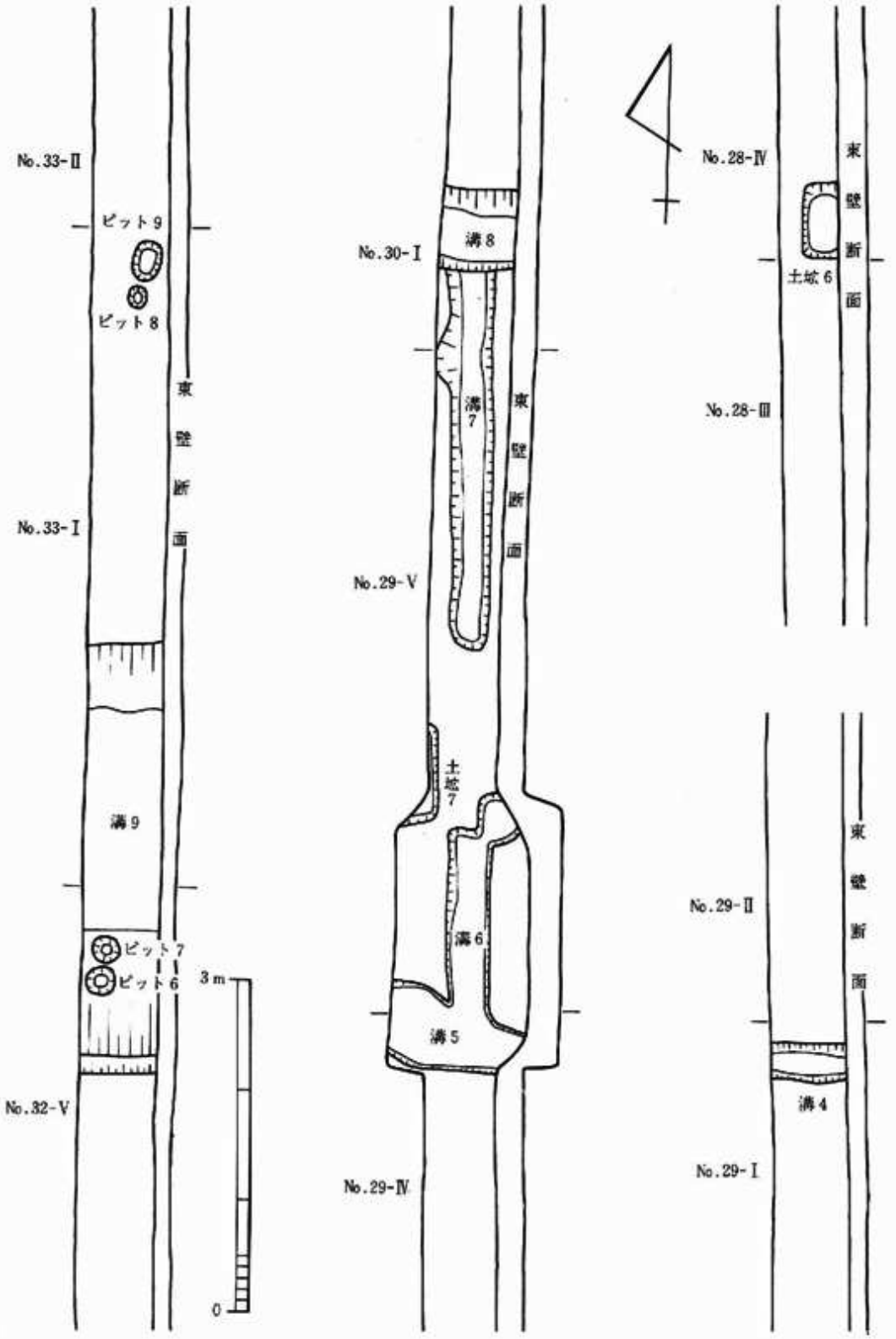
溝3　溝3はNo29－Ⅳ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅20cm、深さ5cmを測る。溝


N
No.29-Ⅱ
No.29-Ⅰ
S
盛　土
淡茶灰色砂混り粘土層
O.P.+2.1m
淡灰色砂層
N
No.30-Ⅱ
No.30-Ⅰ
S
盛　土
暗黄灰色砂層
茶灰色粘土層
O.P.+2.2m
暗青灰色砂混り粘土層
茶灰色粗砂層
黄灰色粘土層
黄灰色砂混り粘土層
N
No.31-Ⅰ
No.30-Ⅴ
S
盛　土
青灰色粘土層
茶灰色粘土層
茶灰色細砂層
壁崩壊
O.P.+2.5m
No.33-Ⅰ
No.32-Ⅴ
N
S
盛　土
O.P.+2.5m
茶褐色粘土層
暗灰褐色粘質土層
灰色砂層
青灰色細砂層
No.33-Ⅴ
No.33-Ⅳ
N
S
盛　土
O.P.+2.3m
耕　土
黄褐色砂混り粘土層
灰褐色砂混り粘土層
淡灰褐色粘質土層
0
5m

第30図　断面実測図



第31図　遺構平面実測図



第32図　遺構平面実測図

の時期は古墳時代後期である。

溝4　溝4はNo29—Ⅰ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅35cm、深さ10cmを測る。溝の時期は古墳時代後期である。

溝5　溝5はNo29—Ⅳ～No29—Ⅴ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅70cm、深さ7cmを測る。溝幅は東にいくにしたがって狭くなる。溝の時期は古墳時代後期である。

溝6　溝6はNo29—Ⅴ地区で検出した。南北方向に伸びる溝で幅40cm、深さ7cmを測る。溝5との切り合いは不明。溝の時期は古墳時代後期である。

溝7　溝7はNo29—Ⅴ～No30—1地区で検出した。南北方向に伸びる溝で長さ3.4m、幅50cm、深さ15cmを測る。溝の北側部分を溝8によって切られる。溝の時期は古墳時代後期である。

溝8　溝8はNo30—Ⅰ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅70cm、深さ15cmを測る。溝の時期は古墳時代後期である。

溝9　溝9はNo32—Ⅴ～No33—Ⅰ地区で検出した。東西方向に伸びる溝で幅3.9m、深さ35cmを測る。溝の南肩は二段で落ちる。溝の時期は古墳時代後期である。

土坑1　土坑1はNo28—Ⅴ～No29—Ⅰ地区で検出した。遺構の東側は調査地外にある。平面形は楕円形を呈し、長径3.9m、残存短径90cm、深さ95cmを測る。遺構内より須恵器、土師器が出土した。出土した土器は（84、85、87～89、139）がある。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑2　土坑2はNo29—Ⅳ地区で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺75cm、短辺50cm、深さ6cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑3　土坑3はNo30—Ⅴ地区で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径1.2m、短径1m、深さ25cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑4　土坑4はNo30—Ⅴ～No31—Ⅰ地区で検出した。遺構の東側は調査地外にある。平面形は楕円形を呈し、残存長径1m、深さ25cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑5　土坑5はNo32—Ⅳ地区で検出した。遺構の西側は調査地外にある。平面形は円形を呈し、径80cm、深さ10cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑6　土坑6はNo28—Ⅳ地区で検出した。遺構の東側は断面内にある。平面形は隅丸方形を呈し、長辺70cm、短辺30cm以上、深さ75cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

土坑7　土坑7はNo29—Ⅴ地区で検出した。遺構の西側は調査地外にある。平面形は隅丸方形を呈し、一辺70cm、深さ15cmを測る。土坑の時期は古墳時代後期である。

ピット　調査地内で計9のピットを検出した。ピット1、2はNo29—Ⅳ地区、ピット3はNo30—Ⅴ地区、ピット4、5はNo32—Ⅳ地区、ピット6、7はNo32—Ⅴ地区、ピット8、9はNo33—Ⅰ地区で検出した。ピットの平面形はピット2が方形、ピット9が楕円形、他が円形を呈する。ピット1は径30cm、深さ4cm、ピット2は一辺30cm、深さ7cm、ピット3は径50cm、深さ10cm、ピット4は径25cm、深さ10cm、ピット5は径20cm、深さ20cm、ピット6は径25cm、深さ10cm、ピット7は径20cm、深さ10cm、ピット8は径20cm、深さ5cm、ピット9は長径35cm、短径30cm、深さ10cmを測る。ピットの時期は古墳時代後期である。

3）出土遺物

今回の調査では庄内式、布留式、古墳時代後期、歴史時代の遺物が出土した。

庄内式の土器（第33図・第34図）

庄内式の土器は甕、壺、高杯、器台、鉢、台付鉢、製塩土器がある。甕の出土量が他の器種に比して多い。甕は形態や調整法によってA～Cタイプに分類した。壺も甕と同様の特徴からA～Dタイプに分類した。以下、各器種ごとに説明を記す。

甕A（82～101）はAタイプの甕である。胴部は球形を呈し、口縁部はくの字状に外反する。口縁端部は上方へ拡張し、受口を呈する。胴部外面は左下がりや平行の細いタタキを施した後、部分的なハケメ調整するものが大部分である。中には全面をハケメ調整し、タタキを消す(10)もある。胴部内面はヘラケズリ調整し、口縁部と胴部の境に明瞭な稜を残す。色調は茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石、雲母を含む。生駒西麓産である。

甕B（102～105）はBタイプの甕である。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部が尖がりぎみに終る。胴部外面は細いタタキを施し、内面はヘラケズリ調整する。

甕C（106～109）はCタイプの甕である。球形の胴部より口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつものと尖がりぎみに終るものがある。胴部外面は粗いタタキを施し、内面はハケメの後、ナデ調整する。胴部内面はヘラケズリ調整しないのでAタイプやBタイプの甕に比して器壁が厚い。

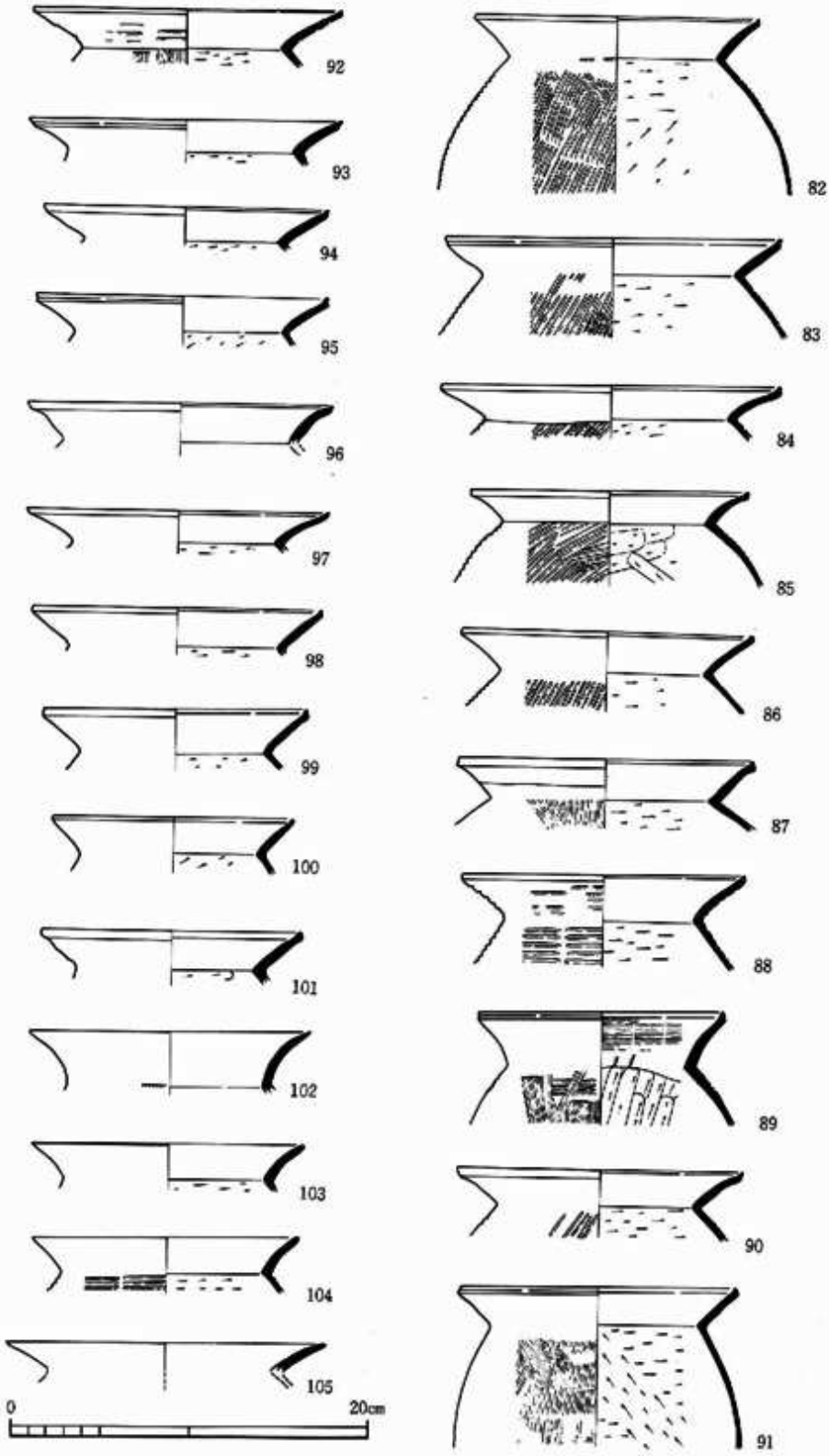
壺A（110）・（111）はAタイプの壺である。口縁部は外方へ大きく広がり、口縁端部は丸く終る。（110）は口縁部外面をヘラミガキ調整し、内面をハケメの後ナデ調整する。（111）は内外面ともヨコナデ調整する。

壺B（112）・（113）はBタイプの壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。（112）は口縁部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。（113）は口縁端部に2条の擬凹線を施した後、円形浮文を貼りつける。円形浮文には竹管文を施し、二個一対で等間隔に配置する。

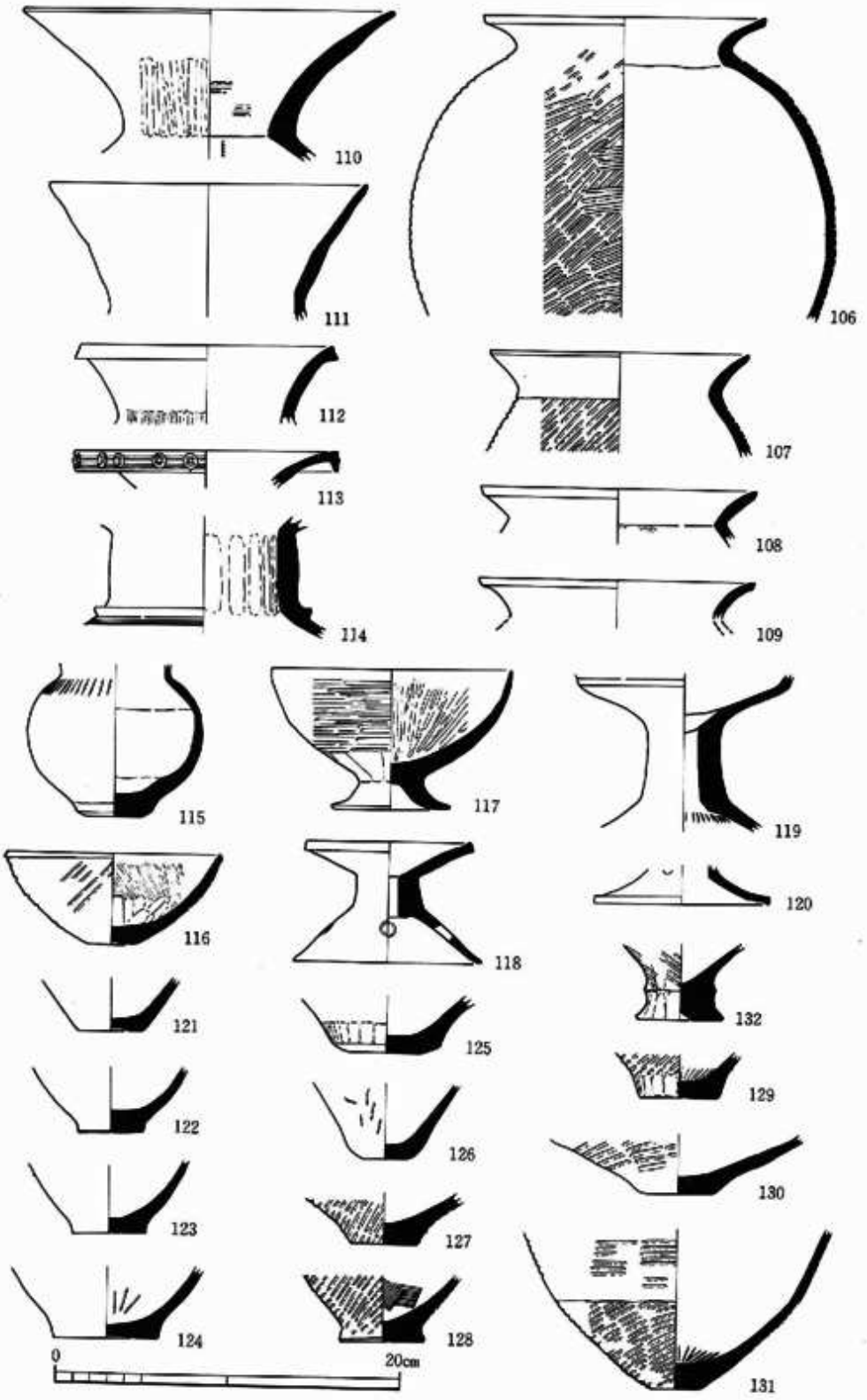
壺C（114）はCタイプの壺である。口縁部を欠損するが二重口縁である。頸部と胴部の境に断面形が三角形の凸帯を貼りつけ、その下に櫛描直線文を施す。直線文の原体数は5本以上である。頸部内外面はナデ調整する。

壺D（115）はDタイプの壺である。小型の壺で、口縁部は欠損する。底部は不安定な平底であり、胴部は球形にちかい。胴部上半にはヘラ描による長さ2cmの縦線を施し文様とする。胴部外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はナデ調整する。

鉢（116）は鉢である。底部は丸底にちかい平底で、わずかにくぼむ。胴部は外方へ広がり、口縁端部は面をもつ。器高5.5cm、口縁部径12.8cm、底部径2.8cmを測る。胴部外面はタタキを施した後、ナデ調整する。内面は上半部をハケメ調整、下半部をハケメの後ナデ調整する。



第33図　庄内式土器実測図



第34図　庄内式土器実測図

台付鉢（117）は台付鉢である。脚台部は低く、大きくくぼむ。杯部は椀状を呈する。口縁部は内弯ぎみに終り、口縁端部は丸い。器高８cm、口縁部径14cm、脚部径6.9cmを測る。杯部内外面はヘラミガキ調整、脚部内外面はナデ調整する。色調は乳白色を呈する。非河内産である。

器台（118）は器台である。柱状部はやや下方へ広がり、脚部が八の字形を呈する。杯部も大きく外方へ広がり、口縁端部が面をもつ。柱状部は中空である。脚部には小円孔を４孔穿つ。器高6.9cm、口縁部径9.8cm、脚部径11cmを測る。風化が著しいので調整法は不明である。

高杯（119）、（120）は高杯である。（119）は口縁部と杯部を欠損する。杯部は稜を有し、口縁部は外反すると考えられる。杯部と脚部は円板充填する。杯部内外面は風化が著しいので調整法は不明である。脚部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメの後ナデ調整する。（120）は裾部である。小円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。

底部（121）～（131）は底部である。底部は平底の（122）、（123）や丸底にちかい平底（125）、（126）、（131）などがある。外面の調整はナデ調整で終る（121）～（126）、タタキを残す（127）～（131）などがある。

製塩土器（132）は製塩土器の底部である。底部はわずかにくぼむ。胴部外面はタタキを施し、内面はナデ調整する。

布留式の土器（第35図）

布留式の土器は壺、甕、高杯、杯、器台がある。甕は形態や調整法によってＡ～Ｃタイプに分類した。以下、各器種ごとに説明を記す。

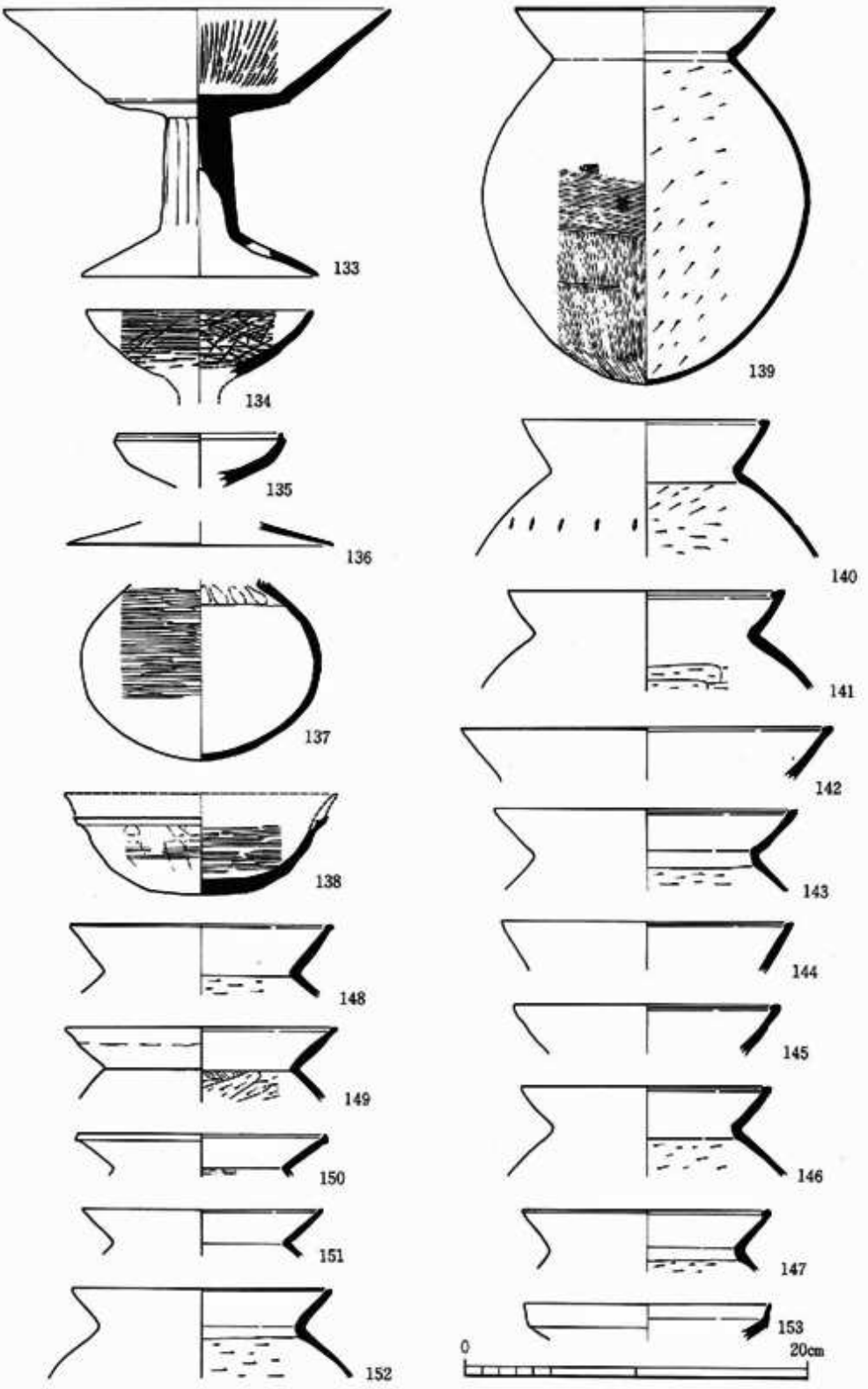
高杯（133）、（134）、（136）は高杯である。（133）は柱状部が下方へいくにしたがって広がり、裾部は大きくひらく。杯部は下半で稜を有し、口縁部が大きく外方へのびる。口縁端部は丸く終る。裾部には小孔を３孔穿つ。器高15.6cm、口縁部径22.3cm、脚部径13.8cmを測る。杯部内面には放射状の暗文を施す。（134）は浅い椀状を呈する杯部である。内外面は密なヘラミガキ調整する。（136）は裾部である。

器台（135）は器台である。浅い皿状を呈する杯部で、口縁端部がつまみあげぎみに終る。内外面はナデ調整する。

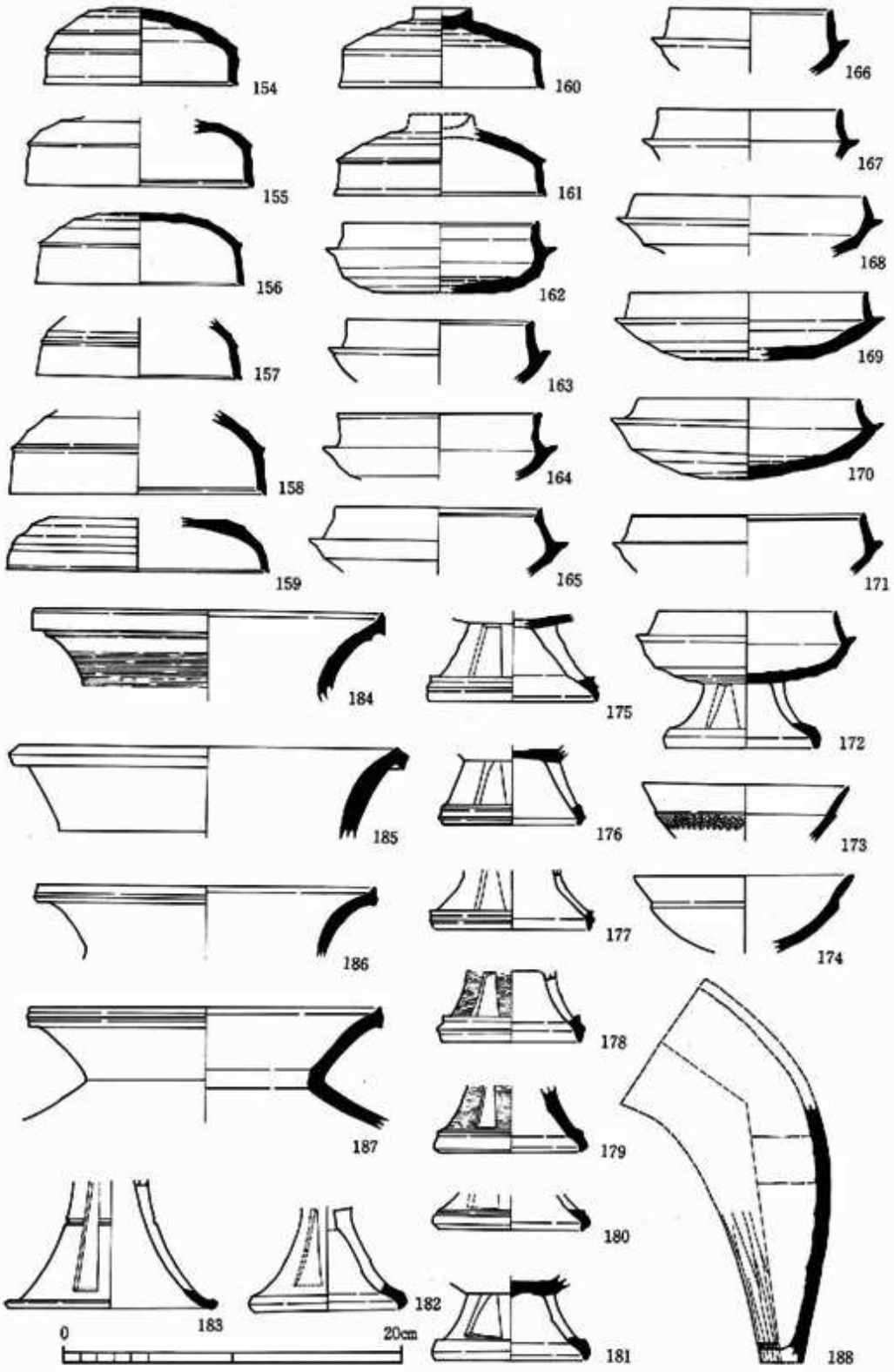
壺（137）は壺である。口縁部を欠損するが、底部は丸底を呈し、胴部は扁球形である。胴部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。

杯（138）は杯である。口縁部を欠損するが二段に外反すると考えられる。底部は丸底を呈し、杯部は浅い。口縁部と体部の境に稜を有す。杯部内外面はヘラミガキ調整する。

甕Ａ（139）～（151）はＡタイプの甕である。（139）は底部が丸底で、胴部がやや縦長の球形を呈する。口縁部は内弯ぎみに外反し、口縁端部が面をもって内側に肥厚する。口縁端部の形態は大部分のものが（139）と同様であるが、丸く肥厚する（148）、（149）や上端に拡張する（150）もある。（139）は胴部外面の上半をナデ調整、下半をハケメ調整し、胴部内面はヘラケズリ調整する。口縁端部が面をもつて内側へ肥厚するものは、ヘラケズリ調整による稜が頸部よりやや下に位置する。他は口縁部と胴部の境にある。また、胴部外面にハケ状工具による圧痕文を



第35図　布留式土器実測図


154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
184
185
186
187
175
176
177
178
179
180
181
182
183
172
173
174
188
0
20cm

第36図　須恵器実測図

施す（140）がある。

甕B（152）はBタイプの甕である。胴部の形態はAタイプと同様であるが、口縁端部が肥厚せずに終る。胴部内外面の調整法もAタイプと同様である。

甕C（153）はCタイプの甕である。口縁部は外反した後、上方へ拡張し、いわゆる受口状を呈する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面はヨコナデ調整する。

古墳時代後期の土器は須恵器と土師器がある。

須恵器（第36図）

須恵器は蓋、杯、高杯、甕、角杯がある。蓋はA～Cタイプ、杯はA、Bタイプ、高杯はA、Bタイプに分類した。以下、各器種ごとに説明を記す。

蓋A（154）～（158）はAタイプの蓋である。天井部は丸味をもち、口縁部が外方へ広がる。口縁端部は面をもち、中央部がわずかにくぼむ。口縁部と天井部をわける稜は甘い。天井部はヘラケズリ調整し、内面はヨコナデ調整する。

蓋B（159）はBタイプの蓋である。器高が低く、天井部は平らである。口縁端部は面をもつ。天井部と口縁部をわける稜が不明瞭となり、凹線状を呈す。天井部はヘラケズリ調整し、内面はヨコナデ調整する。

蓋C（160）・（161）はCタイプの蓋である。形態や調整法はAタイプと同様であるが、天井部中央につまみを付ける。（161）のつまみは中央部が大きくくぼむ。

杯A（162）～（165）はAタイプの杯である。底部は丸みをもち、口縁部の立ち上がりは、内傾した後ゆるく外反する。口縁端部は面をもち、中央部がわずかにくぼむ。受部は外上方へのびる。底部下半はヘラケズリ調整、口縁部及び体部上半はヨコナデ調整する。内面はヨコナデ調整する。

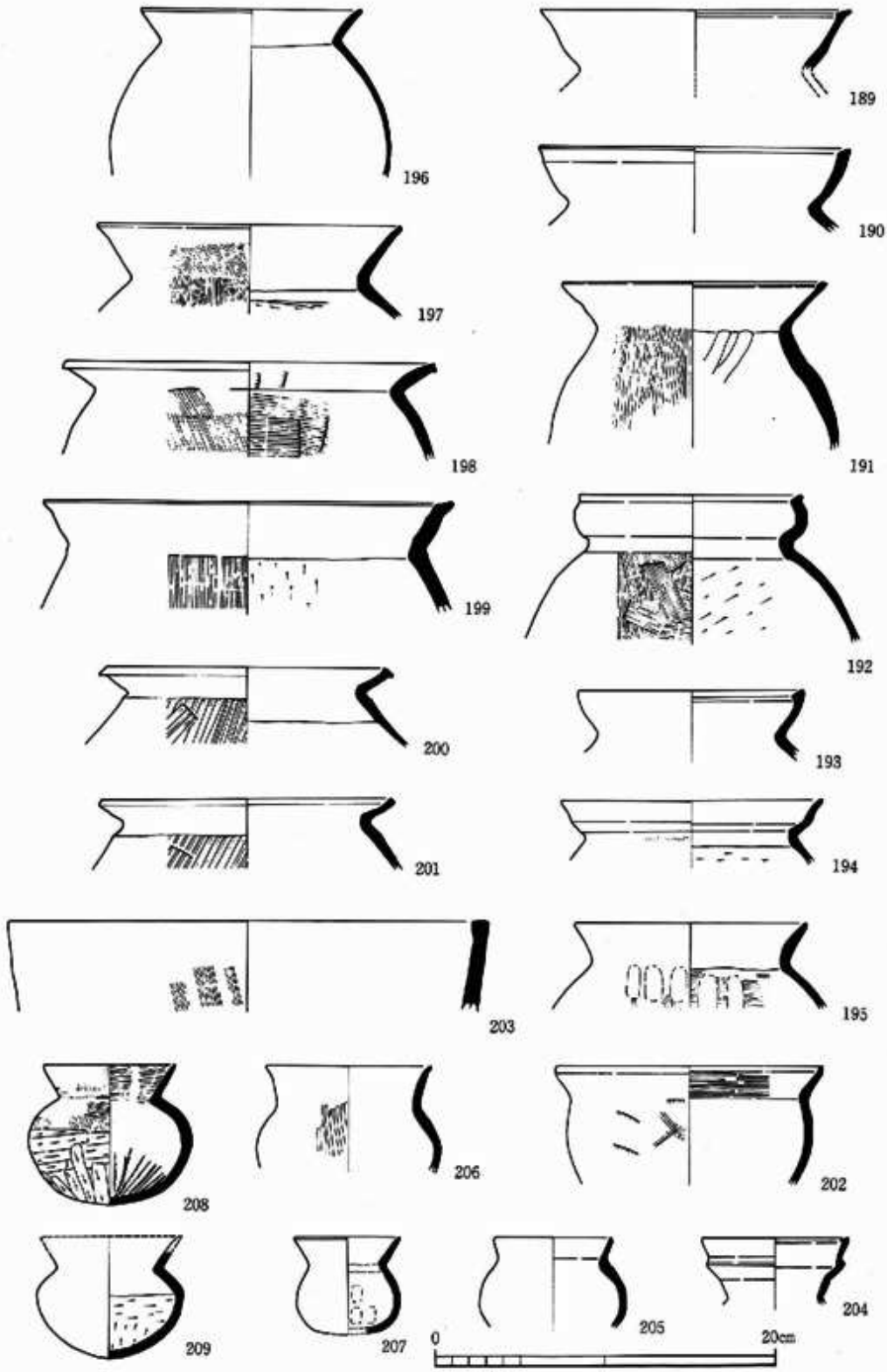
杯B（166）～（171）はBタイプの杯である。Aタイプの杯よりさらに体部が浅くなり、大形化する。口縁部の立ち上がりは短かく外反し、口縁端部が丸く終る。調整法はAタイプと同様である。

高杯A（172）はAタイプの高杯である。有蓋高杯で、杯部の形態は杯Bタイプと同様である。脚部は短脚で、三ヶ所に三角形を呈する透しを施す。杯部外面の下半はヘラケズリ調整し、他はヨコナデ調整ですする。

高杯B（173）・（174）はBタイプの高杯である。杯部が浅い椀状を呈し、口縁部と体部の境に稜を有する無蓋高杯である。（173）は体部外面に原体数4本の櫛描波状文を施す。杯部内外面はヨコナデ調整する。

高杯脚部（175）～（183）は高杯脚部である。（175）～（182）は短脚一段透しの高杯である。いづれも三ヶ所に三角形を呈する透しを施す。内外面はヨコナデ調整するものが大部分をしめるが、（178）、（179）のように外面をかき目調整するものもある。（183）は長脚一段透しの高杯である。脚部外面の中央に凹線を一条めぐらす。

甕（184）～（187）は甕である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部にはわずかに凸帯が残る。


196
189
197
190
198
191
199
192
200
193
201
194
203
195
208
206
202
209
207
205
204
0
20cm

第37図　土師器実測図

胴部外面は格子のタタキを施した後ナデ調整し、内面もナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整するものが大部分であるが、(184) は外面にカキ目を施す。

角杯 (188)は角杯である。口縁部と底部の一部を欠損する。底部よりゆるく弯曲しながら口縁部にいくにしたがい広がる。底部外面にはヘラ描による文様状のものを施す。文様状のものは幅4㎜で横線を2本めぐらした後、横線間を4～5㎜間隔で区画する。体部外面は縦方向の粗いヘラケズリ調整し、内面はナデ調整する。また、内面にはしぼり痕と粘土紐の接合痕が顕著に認められる。外面には自然釉が残る。

土師器 (第37図、第38図、第39図)

土師器は甕、甑、鉢、小型丸底壺、高杯、がある。甕はA～Fタイプ、小型丸底壺はA、Bタイプ、高杯はA、Bタイプに分類した。以下、各器種ごとに説明を記す。

甕A (189)～(191) はAタイプの甕である。胴部の張りは少なく、口縁部は内弯した後わずかに外反する。口縁端部は内側に面をもって肥厚する。胴部外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。

甕B (192)、(193)はBタイプの甕である。胴部の張りが少なく、口縁部は強く内側へ弯曲する。口縁端部は内傾して面をもつ。(192) は胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリ調整する。 (193) は胴部内外面をナデ調整する。 (192) は生駒西麓産である。

甕C (194)はCタイプの甕である。口縁部は二段に外反する。胴部外面はハケメの後ナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。

甕D (195)～(197) はDタイプの甕である。胴部は球形を呈し、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。 (195) は胴部内外面をハケメの後ナデ調整する。 (197) は胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリ調整する。

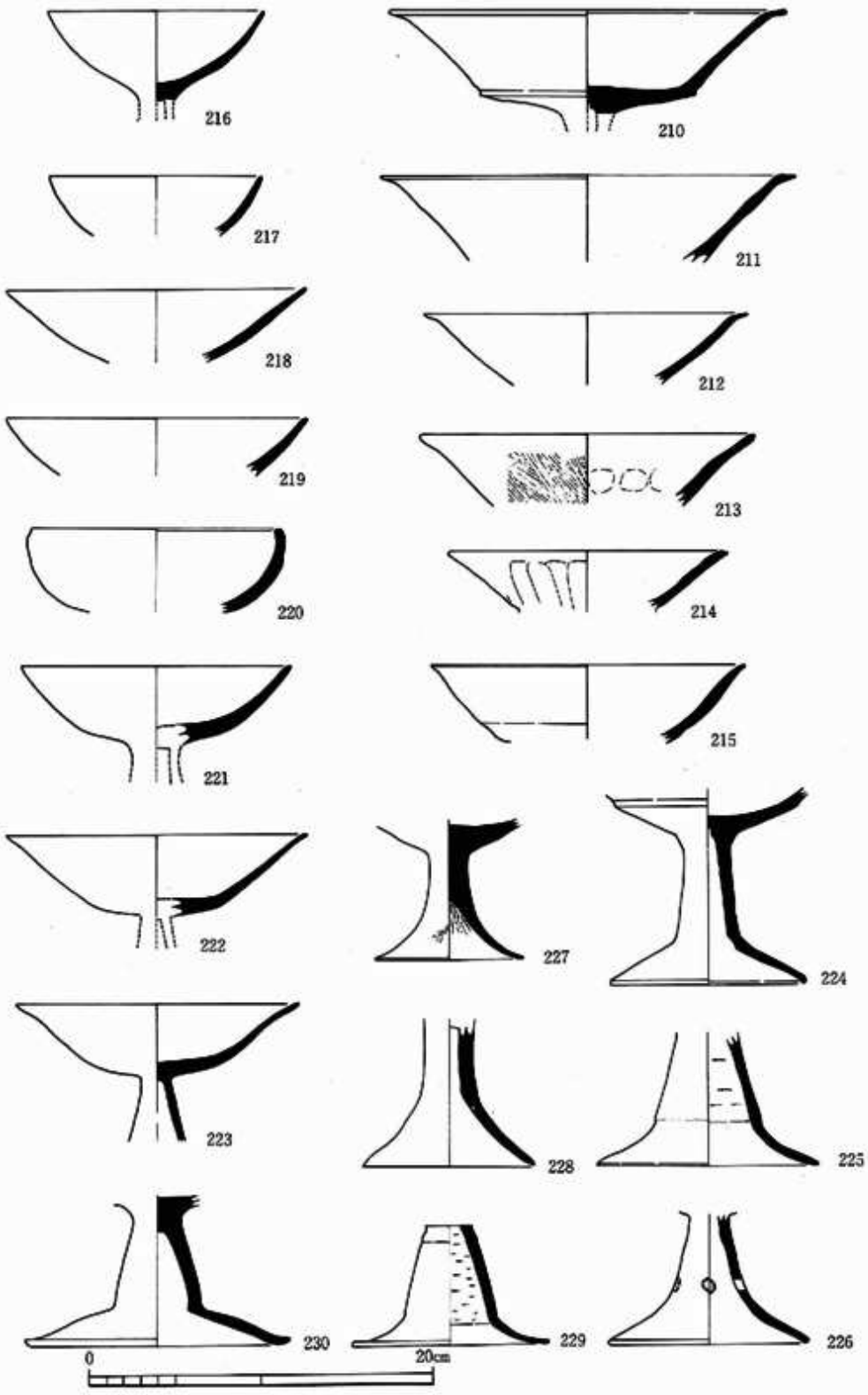
甕E (198)、(199)はEタイプの甕である。張りの少ない胴部より、口縁部が強く外反する。口縁端部はやや下方へ肥厚する。 (198) は胴部内外面をハケメ調整する。 (199) 胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリ調整する。 (199) は生駒西麓産の胎土である。

甕F (200)、(201)はFタイプの甕である。胴部は大きく張り、口縁部が内弯ぎみに外反する。口縁端部はやや下方へ肥厚する。いわゆる、S字状口縁の最終末に比定できるものである。胴部外面は粗いハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。 (200)の内面には、わずかに接合痕が残る。

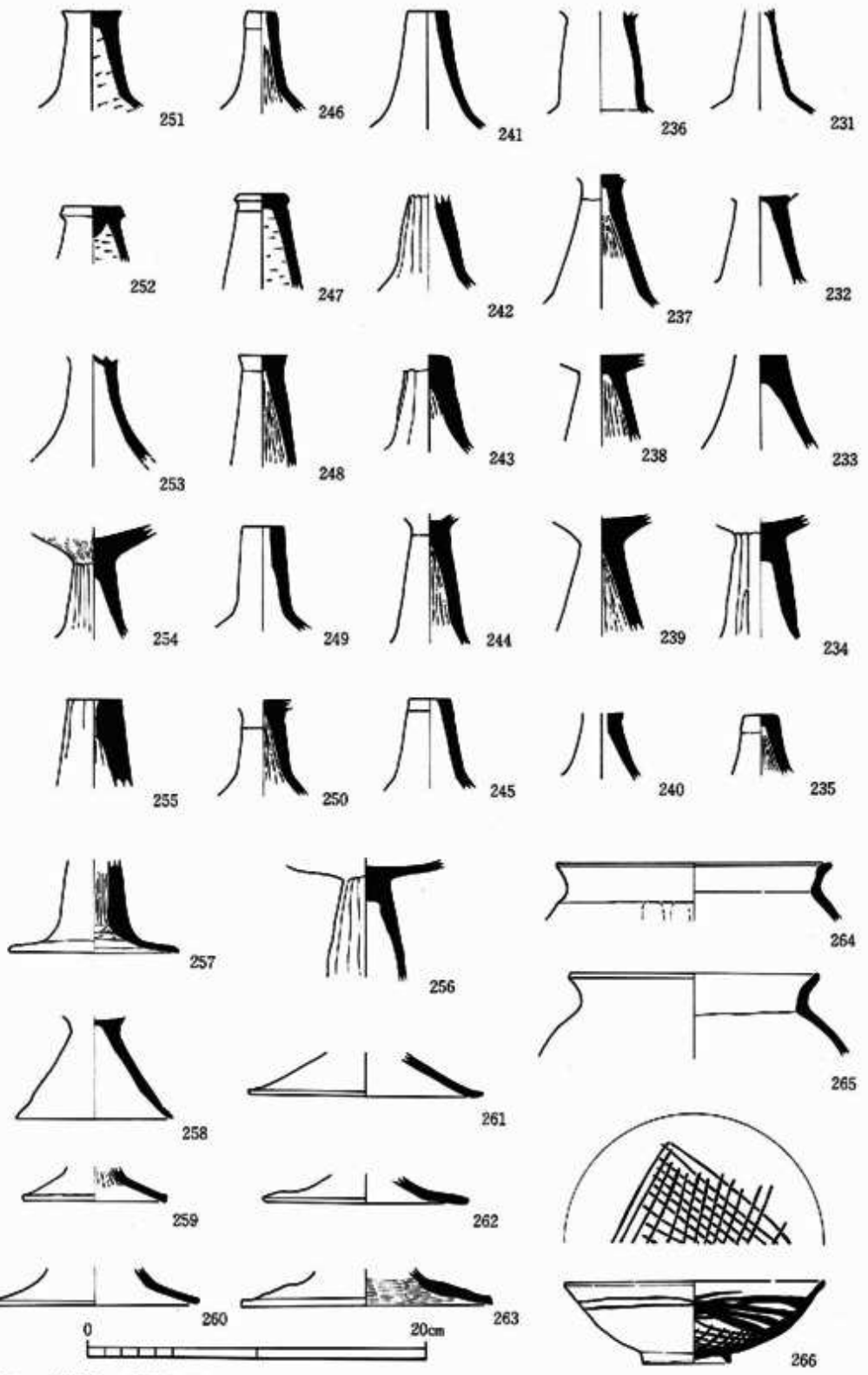
甑 (203)は甑である。胴部は直立ぎみに伸び、口縁端部は面をもつ。胴部外面はハケメ調整内面はナデ調整する。胴部外面は二次焼成を受け、色調が赤褐色を呈する。

鉢 (202)は鉢である。胴部の張りはゆるく、口縁部が外反する。口縁端部は巻き込むように内側へ肥厚する。胴部外面はハケメの後ナデ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヘラミガキ調整する。

小型丸底壺A (204)はAタイプの小型丸底壺である。口縁部は二段に外反する。口縁端部は面をもって内傾する。


216
210
217
211
218
212
219
213
220
214
221
215
222
227
224
223
228
225
230
229
226
0
20cm

第38図　土師器実測図



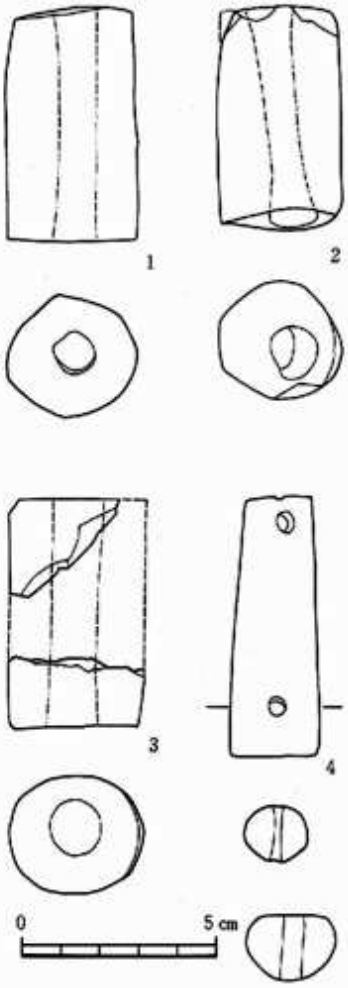
第39図　土師器・瓦器実測図

小型丸底壺B（205）～（209）はBタイプの小型丸底壺である。扁球形の胴部より口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。（205）～（207）は胴部内外面をナデ調整する。（208）は胴部外面をハケメの後、下半をヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面は横方向のハケメ調整する。（209）は胴部下半内面をヘラケズリ調整する。

高杯A（210）～（215）はAタイプの高杯である。杯部下半に稜を有し、大きく外方へ広がる。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く終る。風化が著しいので調整法の不明なものが多いが、（213）は外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。

高杯B（216）～（223）はBタイプの高杯である。杯部下半には稜が無く、椀状を呈する。口縁端部は丸く終るものが大部分であるが、（220）のように内傾して面をもつものもある。風化が著しいので調整法は不明である。

高杯脚部（224）～（263）は高杯の脚部である。柱状部は下へいくにしたがい広くなり、裾部が大きく開く。裾端部は上方へ拡張する（230）や丸く終る（229）などがある。（252）は杯部と脚部の接合に円板充塡を施す。内外面の調整法は風化が著しいので不明なものが多いが、脚部内外面はナデ調整するものと、内面をヘラケズリ調整するものがある。また、裾部内面をハケメ調整するものもある。（230）、（158）、（261）は生駒西麓産である。



第40図　土錘実測図

歴史時代の土器（第39図）

歴史時代の土器は平安時代の甕と鎌倉時代の瓦器椀がある。出土量は少ない。以下、各器種ごとに記す。

甕（264）、（265）は甕である。胴部の張りは大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終る。胴部内外面はナデ調整する。口縁部は強いヨコナデ調整を施し、そのため、胴部との境に稜が残る。

瓦器椀（266）は瓦器椀である。体部は比較的浅く、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終る。底部は断面三角形の高台を有する。口縁部径14.4cm、器高4.8cm、底部径5.2cmを測る。内面は見込みに斜格子の暗文を施した後、ヘラミガキを加えて暗文を施す。外面は指オサエの後、口縁部付近にヘラミガキを加える。

土製品（第40図）

土製品は土錘が4点ある。共伴遺物は古墳時代後期の須恵器と土師器である。1～3は柱状を呈するもので、中央に孔を貫通させている。（1）は長さ6cm、径3.4cm、孔径1cm、重さ83g、

(2)は一部欠損するが長さ5.8cm、径3.2cm、孔径1.2cm、重さ62g、(3)は径3.4cm、孔径1.4cmを測る。(4)は一端がやや細くなるが柱状を呈する。長辺の両端に小孔を一個ずつ穿つ。また、一端に幅3～4mmに溝状の切り込みを入れる。長さ6.6cm、径2.3cm、孔径6mm、重さ36gである。

Ⅳ．まとめ

1．瓜生堂遺跡

今回の調査地点は、瓜生堂遺跡の中央部北半を南北に縦断するかたちで実施した。調査は幅1～1.2m、深さ約2.3mの管埋設予定地といった限定された範囲のものであったため、検出した遺構の性格は明らかにしえなかったが、調査によって判明したことを列記してまとめとしたい。

1．歴史時代の遺構面としては2面検出した。上層のものは第2層褐色土上面で、溝・ピットを検出した。遺構の時期は遺物があまり出土しなかったため明らかにしえないが、第2層には須恵器・土師器に混じって瓦器片が含まれていたことから、少なくとも鎌倉時代から室町時代にかけてのものと推定される。この遺構面は今回の調査地区の1—Ⅱから2—V地区、6—Ⅳから7—Ⅱ地区で検出した。下層のものは第3層灰褐色粘質土～淡茶褐色砂質土上面で、溝・ピットを検出した。遺構の時期は奈良時代から平安時代初めにかけてのものと思われる。いずれも建物の規模等明確にはしえないが、今回の調査でみる限りは集落規模はそれほど大きくはならないように思える。過去の調査において中央環状線を東西に横断するかたちで調査されていて、歴史時代の遺構が検出されているが、あまり広範囲には広がらないようである。[注⑥]

2．古墳時代前期から奈良時代にかけての遺物が割合多く出土した。出土した地点は、古墳前期のものが1、9地区、後期のものが1～3、7地区、奈良時代のものが1、2、6～8地区である。ほとんどが包含層からの出土で遺構は検出されていない。しかし、遺物は完形品に近いものが多く、周辺部の調査によって集落のあり方等について判明するものと思われる。

3．弥生時代中期の遺構としては溝・ピット等を検出した。ピットは規則性がみられず、性格等は不明である。溝についても合計4本検出したが、性格は今回の調査結果からだけでは断言できない。

4．弥生時代中期の遺物としては壺・細頸壺・無頸壺・鉢・把手付鉢・高杯・甕・水差形土器などがあるが、その多くは遺構面を覆っていた暗灰色砂質・青灰色粘土の包含層中から検出したものである。この包含層の遺物は畿内第Ⅲ様式中段階から第Ⅳ様式にかけてのものと思われる。

2．西岩田遺跡

今回の調査であきらかになった点を簡単にまとめておきたい。

1．西岩田遺跡は瓜生堂調査会、大阪文化財センター、当文化財協会によって、数回の調査が

実施されている。その結果、遺跡の範囲及び時期も明確になりつつある。庄内期～布留式期にかけての遺構は大阪中央環状線より西側に中心があると考えられる。また、古墳時代後期の遺構は、大阪中央環状線を中心に広がる。遺跡は大阪中央環状線より東に伸びないと考えられる。今後の調査によってさらに当遺跡の時期や性格があきらかになることを期待したい。

2．出土遺物の中に庄内期の製塩土器(132) が1点ある。近年、畿内内陸部における製塩土器の研究が進みつつあるが、弥生後期から庄内期にかけての出土例は、まだ非常に少ない。当遺跡では昭和53年の調査の際にも同時期のものが数点出土している。今回のものも含めて、同時期の製塩土器研究の上で貴重な資料である。

3．今回の調査では古墳時代後期の須恵器、土師器がまとまって出土した。須恵器は陶邑編年のTK 23～TK 47並行期のものが多い。また、土師器も同時期のものと考えられる。この時期の土師器の中に生駒西麓産の胎土を有する土器が数点あった。器種は甕(192･199)高杯(230・257･261)甑(203)などがある。当地域の土器製作の変遷を知る上で貴重な資料である。

4．出土遺物の中に角杯(188)が1点ある。陶邑編年のTK 23～TK 47並行期の須恵器と共伴した。角杯の出土例は、岐阜県陽徳寺古墳、福井県獅子塚古墳、同興道寺窯跡、石川県天神山遺跡、同中村畑遺跡が知られている。おおむね北陸地方を中心に分布し、その共伴時期も6世紀前半と考えられている。今回、当遺跡より出土した角杯もほぼ同時期である。近畿地方では出土例がなく、今後、角杯の分布範囲を考える上で貴重な資料である。

5．出土遺物の中にS字状口縁土器(200・201)が2点ある。S字状口縁土器は口縁部の形態や調整技法に特徴があり、他の土器と識別が容易である。弥生～古墳時代にかけて東海地方を中心に分布する。畿内にも搬入されており、奈良県纒向、平城京下層、布留遺跡、大阪府石津、鬼塚、若江遺跡などで確認されている。これらの共伴遺物の時期は庄内期～布留式期の例が多い。今回、当遺跡より出土したS字状口縁土器は陶邑編年のTK 23～TK 47並行期である。同時期のものは奈良県平城京に例がある。他地域との関連を知る上で貴重な資料である。

注

① 藤井直正・荻田昭次他『瓜生堂遺跡』(河内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査グループ1966年) 2～8頁

② 荻田昭次・藤井直正他『瓜生堂遺跡』(中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年) 2～6頁
荻田昭次「瓜生堂遺跡」(『河内古代遺跡の研究』 1970年) 33～45頁

③ 中西靖人他『瓜生堂遺跡』Ⅱ (瓜生堂遺跡調査会 1973年)

④ 荻田昭次・北野保他『西岩田遺跡』(中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年)

⑤ 勝田邦夫「瓜生堂遺跡出土の土馬」(『調査会ニュース』No.9 1977年) 17～19頁

⑥ 前掲注3

瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

ここに瓜生堂・若江遺跡調査概報として報告する発掘調査は、全て、市下水管渠築造工事に先立って調査を実施したもので、昭和56～58年度に、瓜生堂遺跡と東南に隣接する若江遺跡内で実施した計６件の内の５件の調査概要を報告するものである。

瓜生堂遺跡内での調査は第41図のとおりで、昭和56年度には下水５工区、下水11工区管渠築造工事に伴う調査を実施し、昭和57年度には下水324 工区、昭和58年度には下水113工区管渠築造工事に伴う調査の計４件の調査を実施した。

昭和56年度の下水５工区の工事は、中央環状線のすぐ東側（若江北町１丁目）を東西に走る市道約250 m 区間に亘って築造されるものであったが、工法は開削工法ではなく、押込工法であったため、両端及び中間に設けられる押込・人孔部計６ヶ所、わずか89.0㎡の調査範囲であるが、協議の結果、当該部分の発掘調査を実施することとなり、昭和56年８月10日～11月17日までの間調査を実施した。

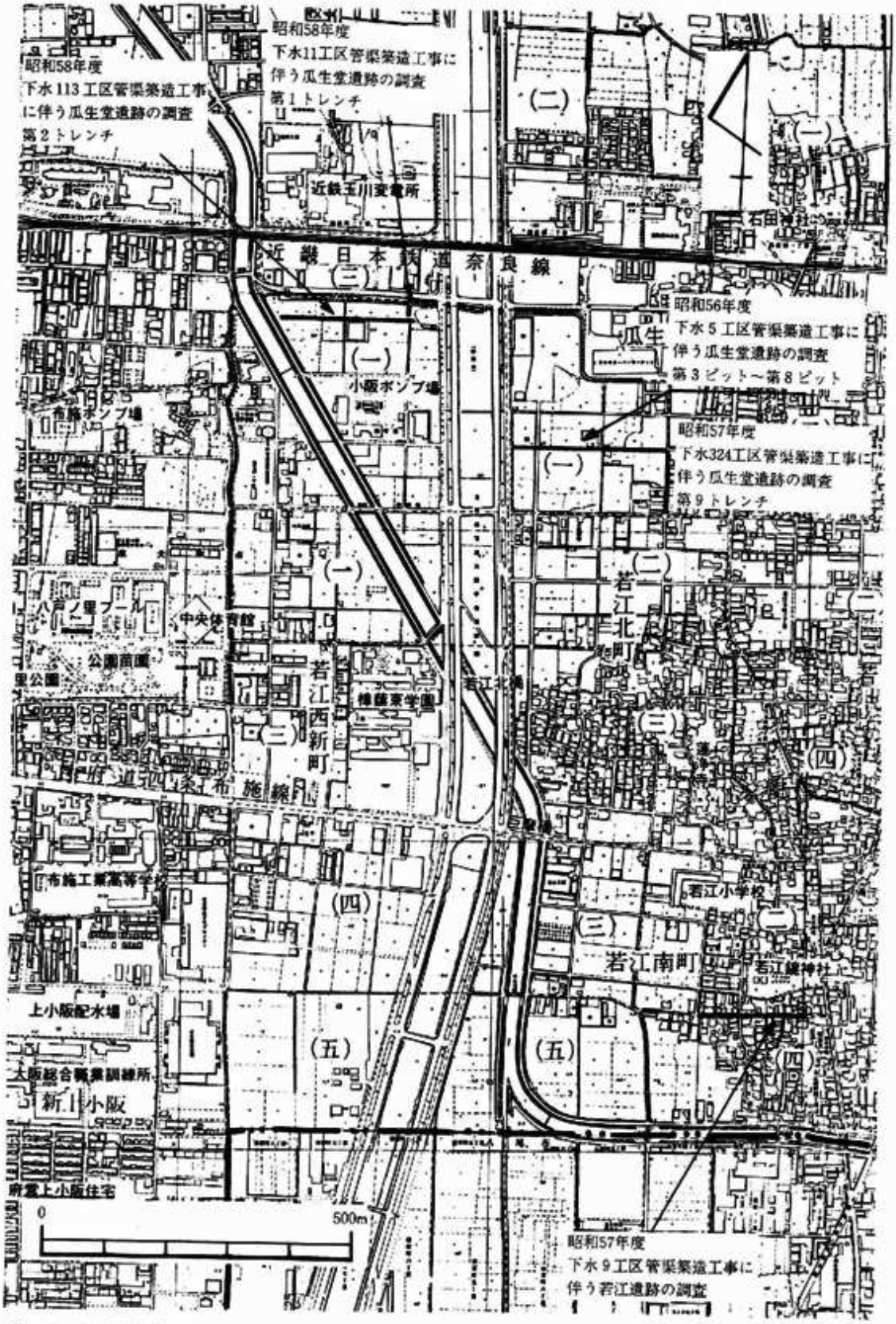
また下水11工区は、中央環状線のすぐ西側、瓜生堂遺跡も北端に近い若江西新町１丁目の南北市道約30m の区間に下水管渠を開削により築造するもので、協議をした結果、全区間（45㎡）について事前の発掘調査を行うこととなり、昭和56年10月17日～11月７日までの間調査を実施した。

昭和57年度には前年５工区に接続する下水324 工区の築造工事が計画され、瓜生堂遺跡東縁部の状況確認のため、５工区東端人孔に接続する南北市道約105 m の区間、面積約120 ㎡の開削部分の発掘調査を、昭和57年11月15日～58年１月13日までの間実施した。

昭和58年度に実施した下水113 工区管渠築造工事に伴う調査は、瓜生堂遺跡の西北端近く、第二寝屋川東側から昭和56年度の下水11工区南端近くに接続する東西市道約190 m にわたって開削で築造されるものであった。下水管の埋設は弥生時代の層に達せず、古墳時代以降の上層に達する程度のものであったため、協議の結果、開削部上層を対象とし、立会を混える程度の調査にとどまった。調査は昭和58年５月９日～６月11日までの間実施した。

一方、若江北遺跡に接する若江遺跡西辺部～山賀遺跡東端にかけた区域(若江北町３丁目～同南町３丁目)では、これまで17工区・20工区（昭和49年度）・21工区（昭和53年度）・18工区(昭和55年）管渠築造工事に伴う発掘調査を実施しており、これらについては既に『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集—1980』で報告している。

今回報告する下水第９工区は、若江鏡神社の南側、若江南町２丁目と４丁目の境界となっている東西市道約160 m の区間にわたって押込工法で建設されるもので、中間人孔部４ヶ所、計約40㎡の部分について昭和57年10月18日～11月17日までの間に実施した。



第41図　調査地点位置図

Ⅱ　位置と環境

東大阪市は大阪平野の中央部に位置し、東は生駒山地を背している。東部はこの生駒山地からの河川により運ばれた土砂の堆積で形成された複合扇状地となっている。西部は旧大和川―玉串川・恩智川・楠根川・長瀬川など―の堆積作用で沖積平野を形成している。約3000年前まで上町台地を残す大阪平野の大部分は海であり、生駒山麓近くまで海水が入り込んで、いわゆる河内湾を形成していた。その後土砂の堆積などで淡水化し河内潟となり、湿地帯へと変化していった。東部は千手寺山・草香山・山畑遺跡などで旧石器が出土しており、日下・鬼塚・縄手・馬場川などの縄文時代からの遺跡が点在し、古くからかなり開かれていた地域である。それに対し、西部は弥生時代以降の遺跡が多く、瓜生堂・若江の両遺跡もその中に位置している。弥生時代前期には山賀・高井田・瓜生堂遺跡で集落が営まれるようになり、中期中頃には大きな集落が形成されるとともに、新たに若江北遺跡などでも生活が開始している。しかし後期には集落がかなり縮小化し、分散して瓜生堂・山賀・若江・若江北・上小阪などで営まれた。古墳時代前期もこの状態が続き、西岩田・小若江などでも集落が営まれていった。中期から後期への大きな変化は気候や旧大和川の氾濫などの自然現象に負うところが多く、西部地域一帯に２～３ｍの砂・粘土の層が厚く堆積している。それ以後、自然現象は安定し、各地域で多くの集落が今日まで存続している。

瓜生堂遺跡は若江西新町・瓜生堂１丁目・若江北町１丁目に広がる弥生時代から歴史時代にわたる複合遺跡である。弥生時代前期より集落が営まれるようになり、中期中頃にはピークに達している。住居跡をはじめ方形周溝墓―木棺、壺棺・甕棺などの複数埋葬―と土坑墓が多く検出されており、多量の土器、木製品などの遺物も出土している。その後、旧大和川水系の氾濫などにより多量の土砂が運ばれ、住居などは埋没したと考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落は営み続けられるが小規模であり、分散化するようになった。古墳時代後期からの遺構は現地表から約１ｍ前後の間に見られ、掘立柱建物群、井戸などが検出されている。遺物も土器、埴輪、貨銭、木製品が多く出土している。

若江遺跡は若江本町、若江北町、若江南町一帯に広がる弥生時代から歴史時代にかけての複合遺跡である。この地は河内国若江郡の郡衙や、平安時代の『尊意贈僧正伝』に記されている若江寺があったと推定されている。また室町時代には畠山氏の守護代遊佐氏によって築かれた若江城が存在し、政治的にも大きな役割を果していた。昭和47年以来27次にわたる調査が実施されており、下層では弥生時代中期、後期の遺物包含層が検出されている。遺構としては井戸、溝、土坑など平安時代以降のものが多く、とくに若江城を中心とした中世遺構がかなり明確になってきている。

このように瓜生堂、若江遺跡の存する地域は弥生時代以降今日まで、人々が生活を営み続けており、歴史的にもかなり重要な地であることを示している。

1．新家遺跡　2．菱江寺遺跡　3．意岐部遺跡　4．西岩田遺跡　5．岩田遺跡
6．瓜生堂遺跡　7．巨摩廃寺遺跡　8．若江北遺跡　9．若江遺跡　10．山賀遺跡
11．上小阪遺跡　12．小若江遺跡　13．弥刀遺跡

第42図　遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

1．瓜生堂遺跡

1）第1トレンチ

発掘調査を実施した地点は、第43図の通り、瓜生堂遺跡も北端に近く遺跡中央を縦断する中央環状線のすぐ西側の南北市道部で、若江西新町1丁目18番地と16番地にはさまれた道路部分にあたる。

調査は下水管埋設のために、南北25m、巾1.6mの範囲に打設された鋼矢板土留内を対象としたが、調査区内は極めて狭く、調査作業は難行した。調査地は、南側水田面より約1.5m程盛土の上宅地化されている（道路面でOP約4.6m）。このため、旧水田面まで機械掘削を行い、以後人力による各層の調査を行った。しかし、鋼矢板の長さ等土留上の制約から、調査最終面まで調査ができず、予想通り方形周溝墓の一部を検出することにとどまったことは残念である。

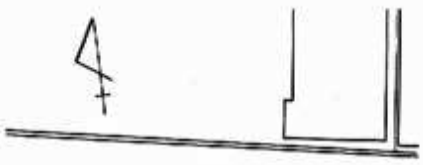
層　序

調査によって判明した調査地の基本的層序は、上部盛土をのぞいて次の通りである。

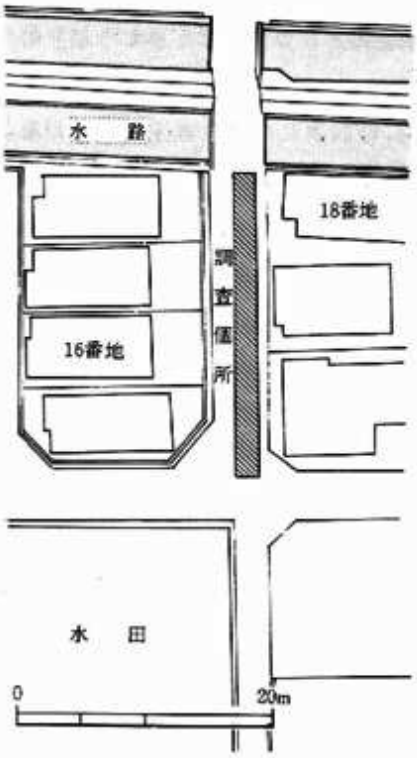
第1層……旧耕土
第2層……黄灰色土
第3層……暗黄灰色土
第4層……暗灰褐色粘質土
第5層……茶褐色～黄褐色～灰色粗砂層
第6層……灰褐色粘土
第7層……灰色中砂層
第8層……灰褐色粘土
第9層……暗灰色粘土層
第10層……黒色有機質粘土
第11層……黒色粘質中砂層
第12層……暗青灰色中砂層 ┐
第13層……青灰色中砂層 ├ 方形周溝墓、盛土
第14層……暗青灰色粘質中砂層 ┘
第15層……青灰色粘質細砂層　地山（中期Ⅱ）
第16層……黒色砂質粘土　（中期Ⅰ）

調査地周辺の旧地表である旧耕土面は、OP約3mを計る。耕土中～第3層にかけて、各々比較的小片であるが、土師器片・須恵器片を含む包含層となっていて、各々瓦器片を含んでいる所から中世以降整地等に伴うものとみられ、何ら遺構は検出できなかった。

第4層，暗灰褐色粘質土には、瓦器片の混入はなく出土した須恵器・土師器片から、6世紀



若江西新町1丁目



第43図　第1トレンチ調査地点位置図

以降～奈良時代にかけた頃の遺物包含層となっている。この第4層上面においては、調査区中央で東西に続くとみられる巾80cm、高さ20～30cmの畦状の遺構を検出した。畦状の高まりは、同層より暗色の土師器小片を含む土層を盛っているもので、時期は中世以降のものと考えるにとどまる。

下部の第5層～第10層までの間は、全く遺物を含んでいない。この内第10層、黒色粘土層はアシの茎部を多量に含む粘質の強い粘土層で、調査区中央部で、上部に堆積した暗灰色粘土層～同細砂層が5cm程堆積した時点で行われたとみられる野焼状の植物炭化層を約1mの範囲に検出したことが注意される。この他、第10層は、下部の地形の影響を受けて波状に堆積しており、周辺の弥生時代集落を沼沢化させた特徴的な層となっている。

この第10層を除去した結果、第11層、黒色粘質中砂層が第10層同様、5～10cmの厚みで、調査区中央部及び南端部で起伏を見せ、この層を除去した結果、南端部の高まりの部分第12層の上面において甕棺を検出した他、起伏間の凹みの底部に壺・甕・他の中期弥生土器を検出し、南側の起伏は方形周溝墓であることを確認した。北側の中央高まり部の下部の層は、特に人工的盛土を施した形跡はなく自然の起伏又は、南側方形周溝墓の溝の掘込(周溝)あるいは、盛土用の採土の結果による起伏と考えられた。

検出した方形周溝墓及び遺物の説明は後に記すとして、当時のベースとなる面は第15層青灰色粘質細砂層で、遺物は含んでいない。中央部の高まり部でOP 1.45m、方形周溝墓下部でOP 1.1mを計る。調査区北半では、ベース面で全く遺物、遺溝とも検出できなかった。

このベースの下部には、厚さ約10cm程の第16層、黒色砂質粘土層がつづき、一時期古い中期土器片を含む包含層となっているが（第47図）今回の調査では既に記した通り、下部の確認にとどまった。

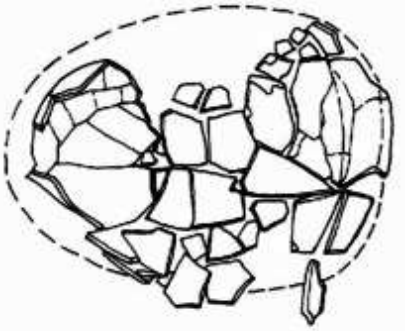
遺　構

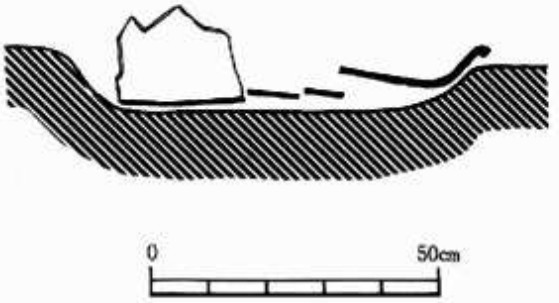
方形周溝墓　（第46図）

第11層でみられた南北起伏の内、南側の起伏は方形周溝墓の一部であることを確認した。検出した状況から、方形周溝墓のマウンドはそのほとんどが南側調査区外へ続いていて、その規

模や性格は十分に把握できないが、北側の周溝部とマウンド部の傾斜方向からある程度その方向性が推測でき、その一辺を南西～北東へ向けていることがわかる。検出した方形周溝墓のマウンドは、周溝底面よりわずか55cmを測るにすぎないが、下部より第14層、暗青灰色粘質中砂層・第13層、青灰色中砂層・第12層、暗青灰色中砂層をもって盛土されていて、墓全体のマウンドでは北西辺に近い所にあたる。調査区南端マウンド上で検出した甕棺は、側半を欠いており、さらにマウンド上に約3cmの厚さで覆う第11層黒色粘質中砂層は、北側起伏部では薄い所からやや遅れた時期の盛土層ともみられる。北側に位置する周溝は特に北縁でそのラインがはっきりしないが、溝巾約2～2.5mあり北側起伏へゆるやかに続いていて、溝の底部からは壺・甕・高杯片が出土した。

マウンド上の甕棺は鉢の蓋をかぶせた状態で、頭を西に若干斜め横位に埋められていたとみられる。内部からは人骨・副葬品等は検出されなかった。その墓壙は明確でなく、東西75cm、南北45cm程度と考えられる。



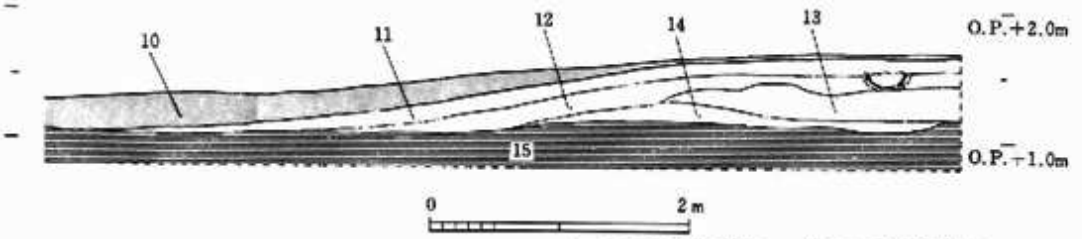


第44図　甕棺出土状況実測図

出土遺物

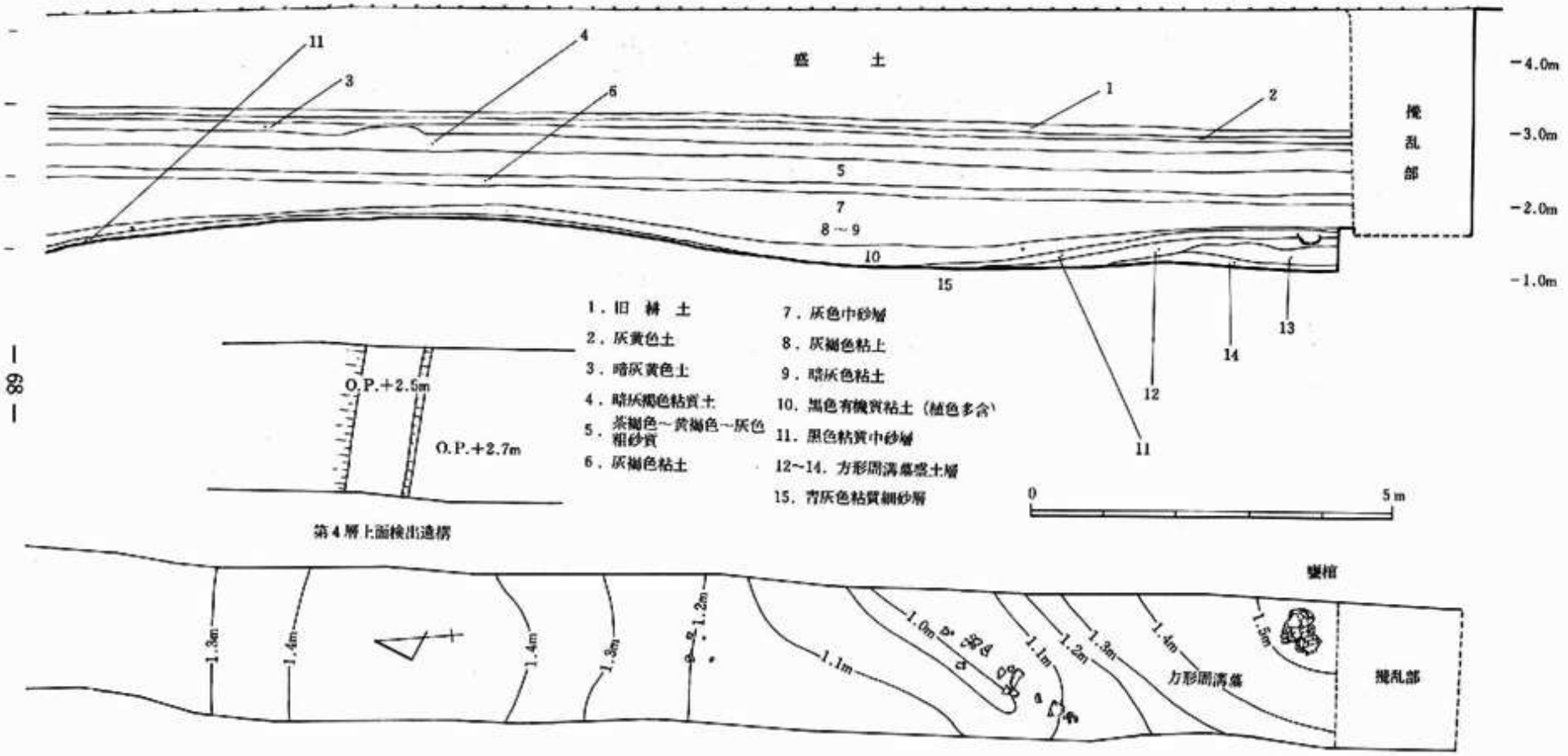
甕棺（第48図）

蓋の鉢1)は底部を欠いているが、口径37.2cm、胴径42cm、高さ約24cmを測る。口縁部は短く、外反屈曲させているが、端面には文様を施していない。腰部はゆるやかにカーブし、特に稜を示さない。外面上半は波状文・直線文を2段に施文し、底部にかけた下半上



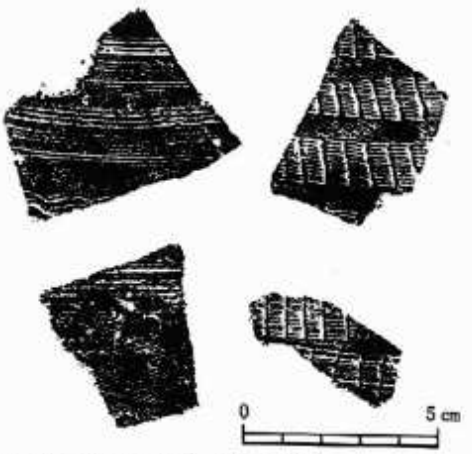
第45図　方形周溝墓断面実測図

部⅓は横位、下部⅔は縦位のヘラ磨きで器面調整している。器内面上半は短い間隔で横位ヘラ磨き、下半は内面を5分割にヘラ磨きを施している。色調は淡乳褐色で、外面底部近くに横17cm、縦10cm大の黒斑がある。河内以外の土器。



第46図　平面実測図・断面実測図

甕(2)は、口径32.8cm、胴径37cm、高さ50.2cm、底径9.4cmを測り、口縁部はくの字形に外反させ、端部は下方へ肥厚させている。器外面は上下2段にやや弧状の縦位ヘラ磨きを施し、底部近くは同手法を重ねている。器内面の頸部付近は横位のヘラ磨きを施し、下部は½を残し縦位ハケ目(巾2.5cm)調整した上、間隔をあけて横位のヘラ磨きを施している。甕棺等によく見られる穿孔は見られない。色調は、乳褐色～淡茶褐色を呈し、河内の土器と考えられる。胴部中央に横13cm、縦20cm大の黒斑がある。



第47図　第16層出土弥生土器拓影

周溝内の土器(第49図)

北側周溝内底部より出土した弥生土器は、壺・甕・高杯・鉢などの若干の破片がある。以下個々に説明を記す。

壺(3)は、口縁部、胴下部以下は欠いているが、胴径38.5cm、頸径16.5cm、復原高約54cmと考えられる壺で、胴部からつづく頸部下端ははっきりした段をもち、この部分に指頭圧痕をもつ貼り付け凸帯をつけている。頸部及び胴部外面は縦位のハケ目原体の圧痕、頸部上半内面は横位ハケ目、胴部は斜位にヘラ磨きで調整されている。色調は乳灰色～乳黄色、胴部中央に黒斑を有する。

壺の底部として、(13)は内外ともハケ目調整して、(12)は外面を荒くヘラ削りしている。これらは全て河内以外の土器である。

甕、すべて破片である。(4)は、胴部がゆるやかにふくらみ、口縁部を短くくの字形に外反させ、端部がわずかに上方へ立ち上がる。口径16cm、胴径20cm、復原高約23cmを測る。内外面とも剝離し、調整は不明。乳白色。

(8)は、(2)に近いが、口縁端部を上下両方へわずかに肥厚させて凹線を施している。口径18.8cm、河内の土器。

(6)は、口径41cm、くの字形の口縁端部をもち、口縁内側に凹線的手法を施している。乳褐色。

(7)は、口縁端部をわずかに外反させ、下部を肥厚させて、端面に波状単線文と刺突を施す、口径18.8cm、河内の土器。

(9)は、くの字形の口縁端面を上へわずかつまみあげ凹線を付けている。口径14.8cm。

(15)は、(2)に色調等近いものであるが、同形の甕底部とみられる。(2)、(4)、(12)は河内外のもの。

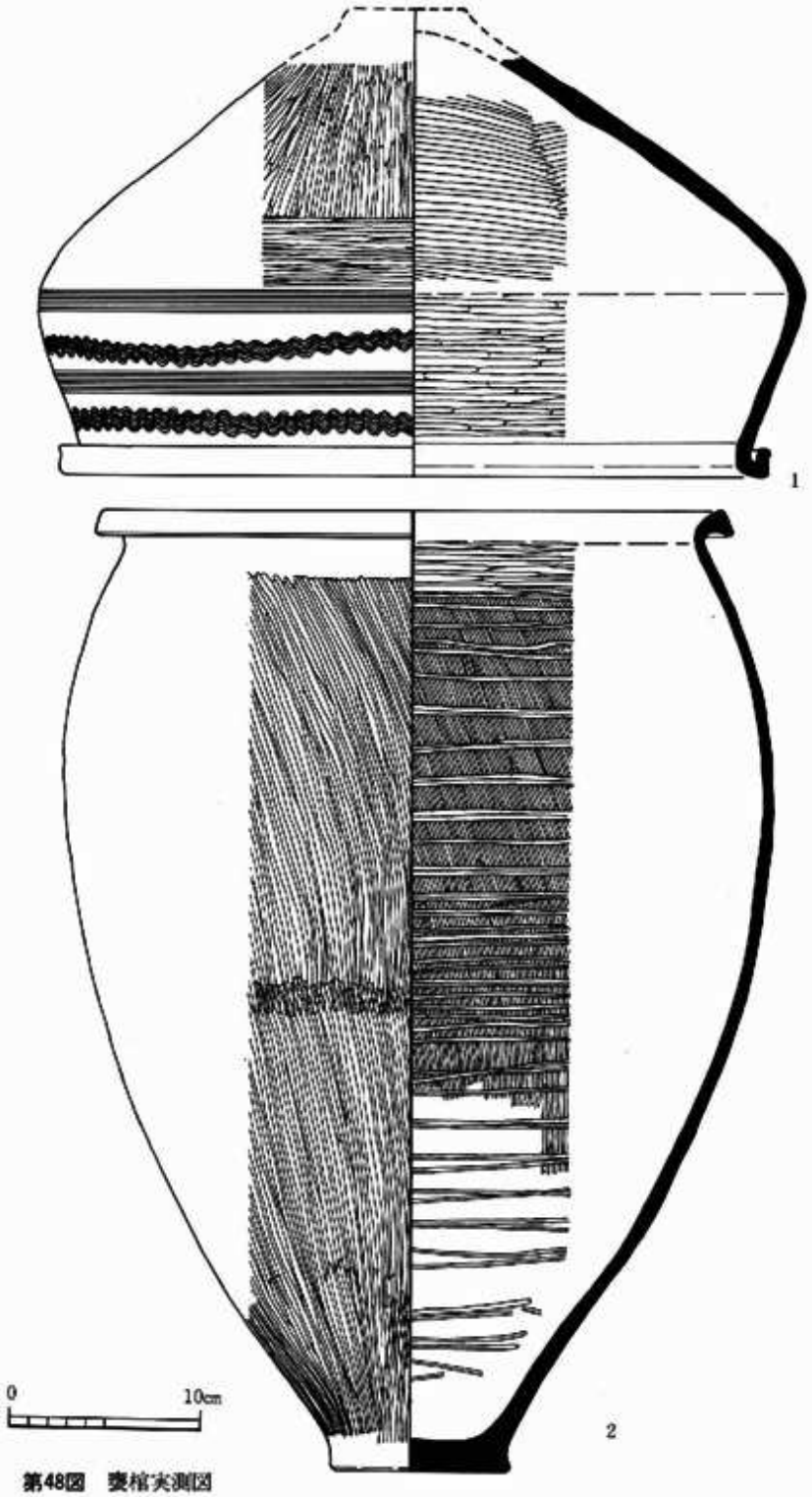
高杯(5)は、高杯の脚部で、下端に4条の凹線を施し、上には2段に円形の透穴をもち、縦位のヘラ磨きを行っている。底径14.8cm、他地方の土器。

(14)は、口縁端部を内側に若干肥厚させ、外面下部には凹線を施し、以下ヘラ磨きを施している。口径27.2cm。

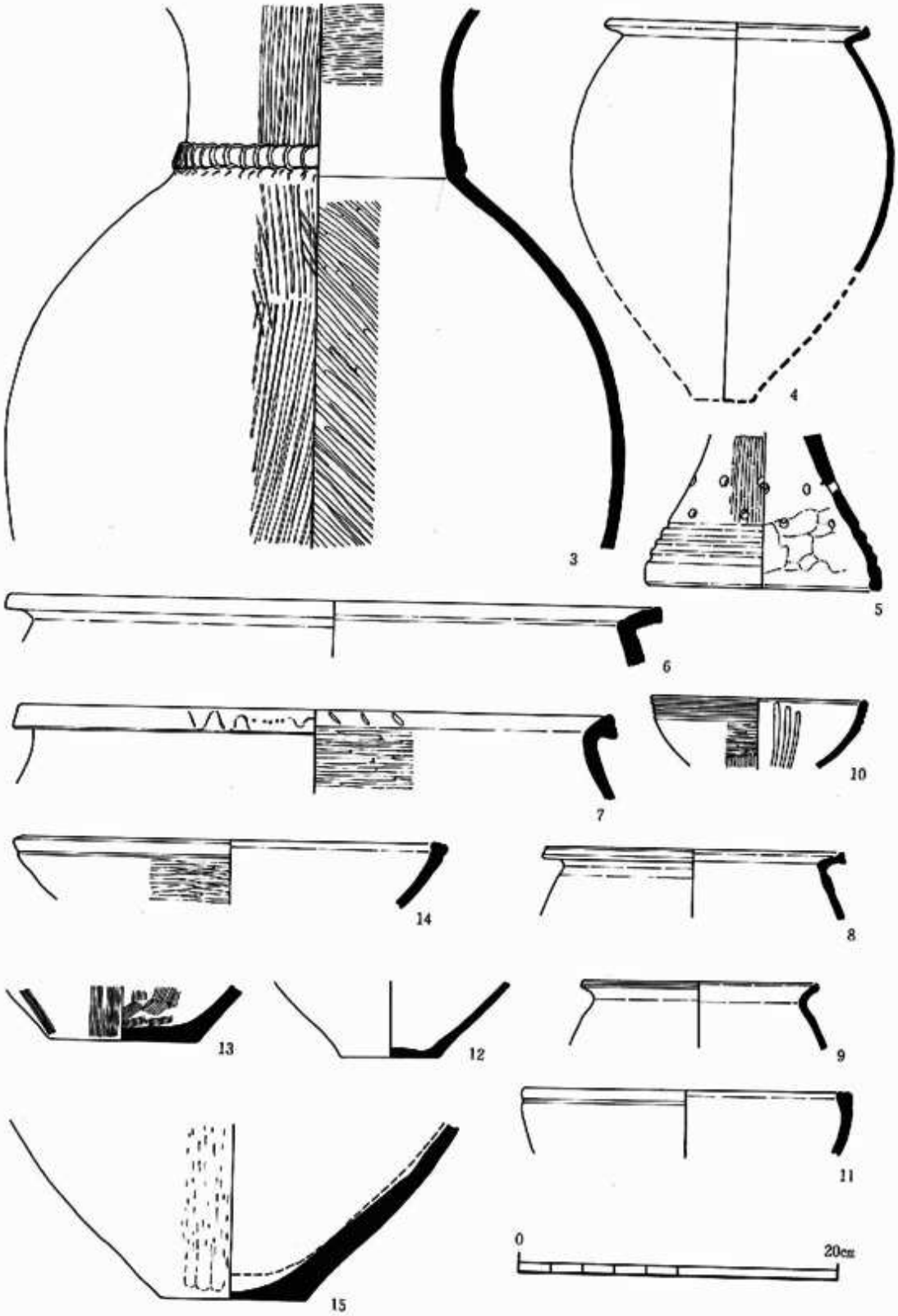
鉢(10)は口径13.6cmを測り、椀形の鉢で、口縁外面上部に4条の凹線を施し、下部は横～縦へ

ラ磨きを施している。

(11)は、口径20.7cmを測り、口縁端を内側へ肥厚させ、外面上部に凹線を１条施している。



第48図　甕棺実測図



第49図　周溝内底部出土土器実測図

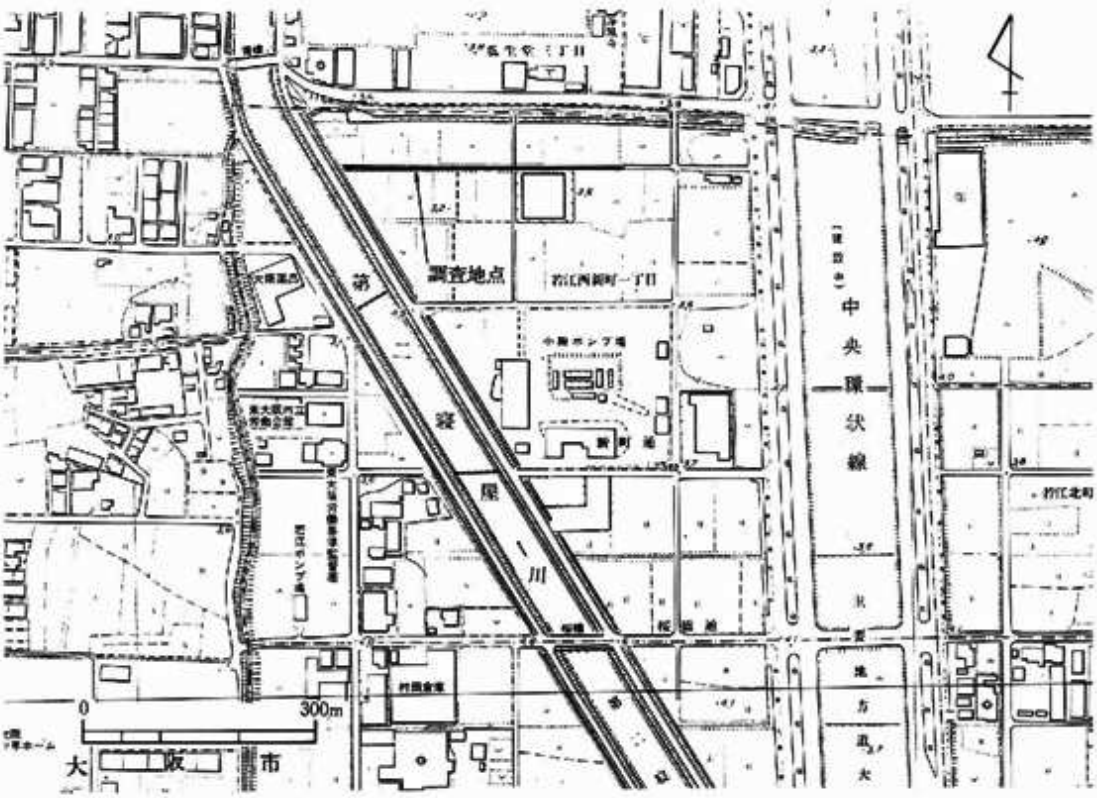
2）第２トレンチ

調査を実施したのは、第二寝屋川東岸近くから昭和56年度実施の下水11工区南端近くに接続する東西市道部約190m、若江西新町１丁目３番地～16番地先の区間である(第50図)。調査は、工事のため簡易矢板巾約１ｍと限定されていたため、十分な調査を行えず、約５ｍ間を１スパンとして、工事に並行する形で進めた。また、下水管埋設は全区間、弥生期の層には達せず、上層、古墳時代以降の状況確認にとどまった。周辺地は宅地化し、道路間でOP4.2～3.9mを測り、旧耕土面(OP3.15m)から約１ｍ盛土されている。耕土下に続く第２層青黄色粘質土までの約1.3m を機械掘削し、遺構遺物の確認をした。

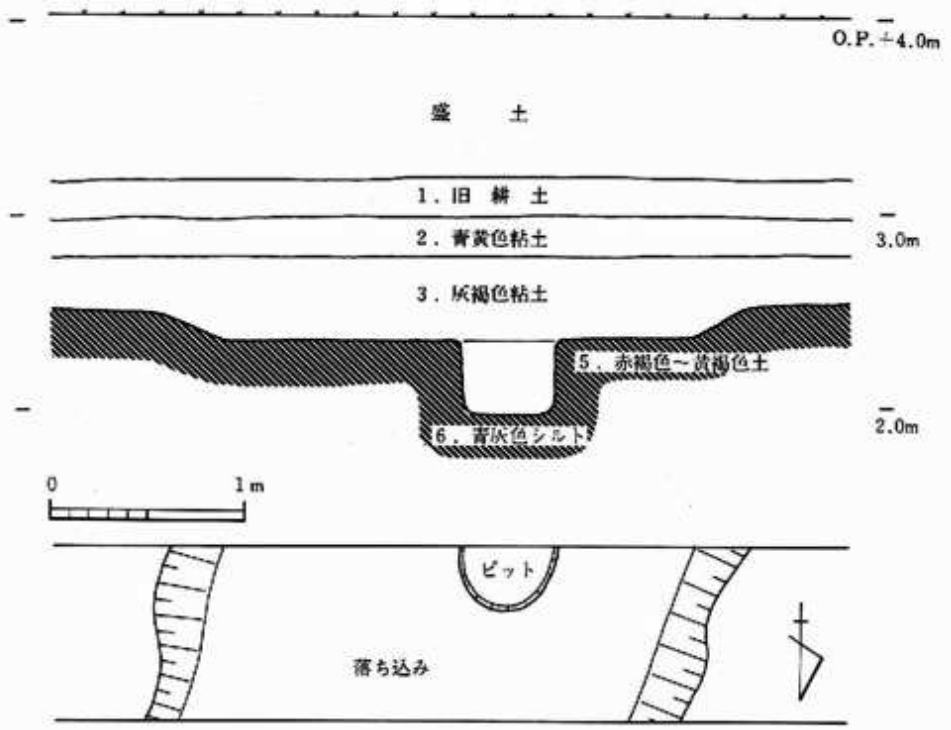
調査区西半では、第２層の下部は、厚さ30～40cmの第３層灰褐色粘土となっており、全体として遺物は少なく、若干の須恵器片を検出したにとどまった。

第３層の下面は、場所によって同一層ではなく、調査区西端より東へ約20m の所から、約15ｍの区間は、第５層の鉄分で固化した黄褐色～赤褐色の土の水平面をつくっており、上面は、第３層が特に黒褐色化していて、当該部の東端近くで、巾３ｍ、深さ15cmの落込みが存在し、中央底部、径50cm、深さ40cmの円形ピット１を検出した。内部の埋土は、上部約８cmが黒褐色、以下が上部に炭の混じる暗灰色粘土となっていたが、内部からは遺物は検出できなかった。

一方、他のブロックは、第３層の下に、灰色～灰褐色の砂層(第４層)となっているが、全く遺物を含んでいなかった。



第50図　第２トレンチ調査地点位置図



第51図　井戸状遺構実測図

唯一、検出した落込み内の円形ピット（第51図）は、性格は不明であるが、周辺で出土した若干の須恵器片などから、奈良時代以降の井戸状遺構と考える程度である。当該遺構の存在した赤褐色土をベースとするブロックは、同一面で、砂層をベースとする、東西両ブロックにはさまれる形で、若干高くなっていて、以後行われた周辺の削平等によって、削り残された区域ともみられる。

一方、他のブロックは、第3層の下に、灰色～灰褐色の砂層（第4層）となっているが、全く遺物を含んでいなかった。

調査区東半は、下水管埋設工事の都合上、大半が立合程度の調査となったため詳細は不明である。全体としては西半に比して砂の堆積が多くなる。第3層以下がみられなくなり、上部シルト、下部粗粒砂と、下層に行くにしたがって粗い堆積物となる。砂層中には摩滅の激しい古墳時代から中世の遺物が含まれる。遺構は確認できなかった。

この砂層は西端より東120m付近で、第3層に変わる。そして約20mの幅で再び砂層の堆積となる。第3層中には中世期の土器片が含まれていた。第5層は東半では確認できなかった。

これらの堆積状況は、第3層、第5層面から小規模な自然流路が多くあったことを推定せしめ、流路が埋まった段階で、両層の上面に、足跡、浅い皿状の落ち込み、溝状遺構等を検出した。遺構内に遺物が少なく年代については不明な点が多いが、西半の井戸状遺構を上限として、それ以降のものであろう。

3）第３ピット

昭和56年度に発掘調査を実施した第３ピット～第８ピットは、東大阪市瓜生堂５丁目地内にあり、中央環状線から東へ伸びる幅約５ｍの道路下である。当該地は瓜生堂遺跡の東限を画する地域である為、調査は各時期の遺物包含層、遺構の検出及び遺跡の東限を決定するデータを得るのを主目的に実施した。調査面積は、第３ピット17㎡、第４ピット９㎡、第５ピット18㎡、第６ピット９㎡、第７ピット18㎡、第８ピット18㎡で、合計89㎡である。いずれのピットも盛土約1.2～1.5ｍを機械掘削し、以下約４ｍまで人力掘削による調査を実施した。

層序（第53図）

第１層　盛土　　道路建設時の盛土及び耕土。

第２層　青灰色シルト質粘土　　床土。古代から近代の遺物少量出土。

第３層　茶灰褐色シルト質粘土　　奈良時代から鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器等の遺物が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅰ）

第４層　茶灰色粘土　　奈良時代から平安時代の遺構面。溝を検出。（遺構面Ⅰ）無遺物。

第５層　黄青灰色粘土　　若干シルト質。無遺物。

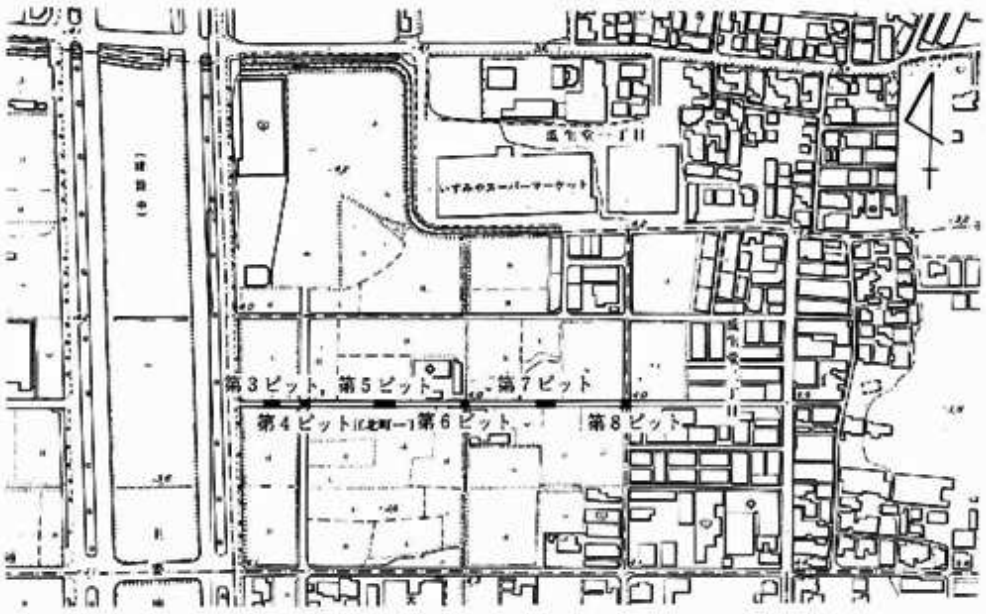
第６層　暗茶灰色シルト　　細砂を少量含む。無遺物。

第７層　暗茶灰色粘土　　シルト質強い。植物遺体、炭を多く含む。無遺物。

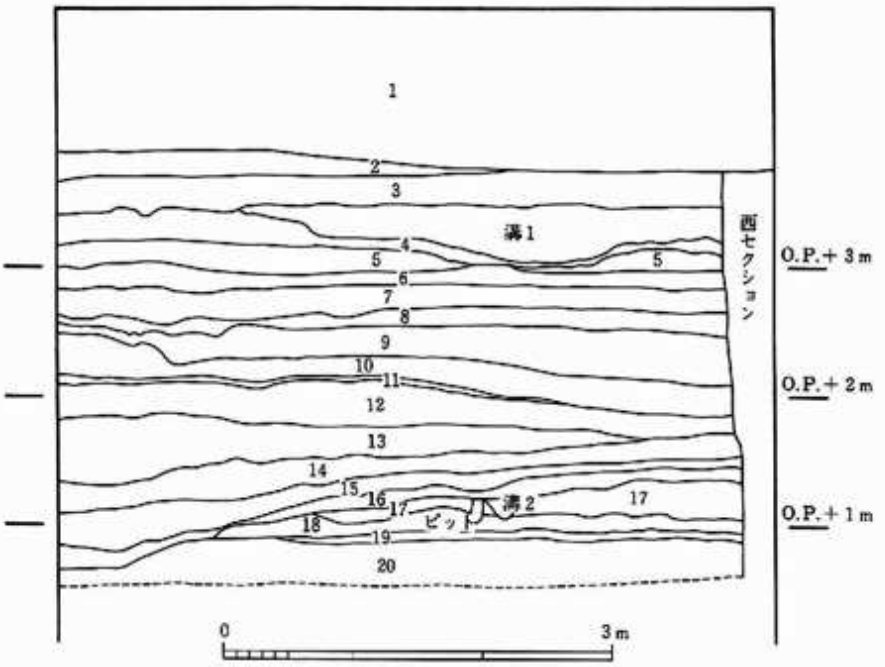
第８層　暗茶灰色細砂　　粗砂及び暗茶灰色粘土をブロック状に多く含む。古墳時代の遺物を若干含む遺物包含層。

第９層　暗灰色シルト質粘土　　黄灰色粘土をブロック状に若干含む。無遺物。

第10層　暗灰色粘土　　若干シルト質。無遺物。



第52図　第３ピット～第８ピット調査地点位置図



第53図　第3ピット南壁断面実測図

第11層　灰色細砂　　ピットの東半に存在。無遺物。

第12層　暗茶褐色粘土　　木片、植物遺体、炭化物を多く含む。無遺物。

第13層　灰青色シルト　　下半は粘性が強い。無遺物。

第14層　暗茶灰色粘土　　上半はシルト質が強い。無遺物。

第15層　黒灰色粘土　　木片。植物遺体を多く含む。無遺物。

第16層　暗灰色シルト　　弥生時代中期の土器、木器、石器が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅳ）細砂を多く含む。ピット中央部より東側に大きく傾斜する。

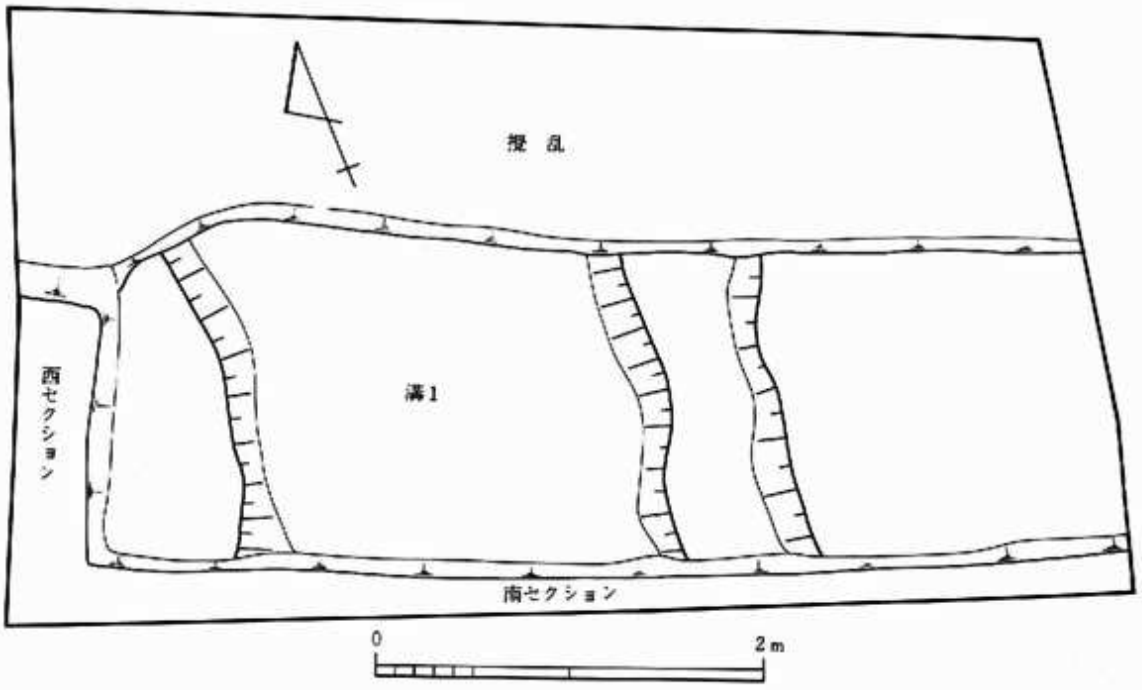
第17層　青灰色シルト　　弥生時代中期の遺構面。溝、ピット検出。（遺構面Ⅲ）無遺物。

第18層　黄灰色粗砂　　無遺物。

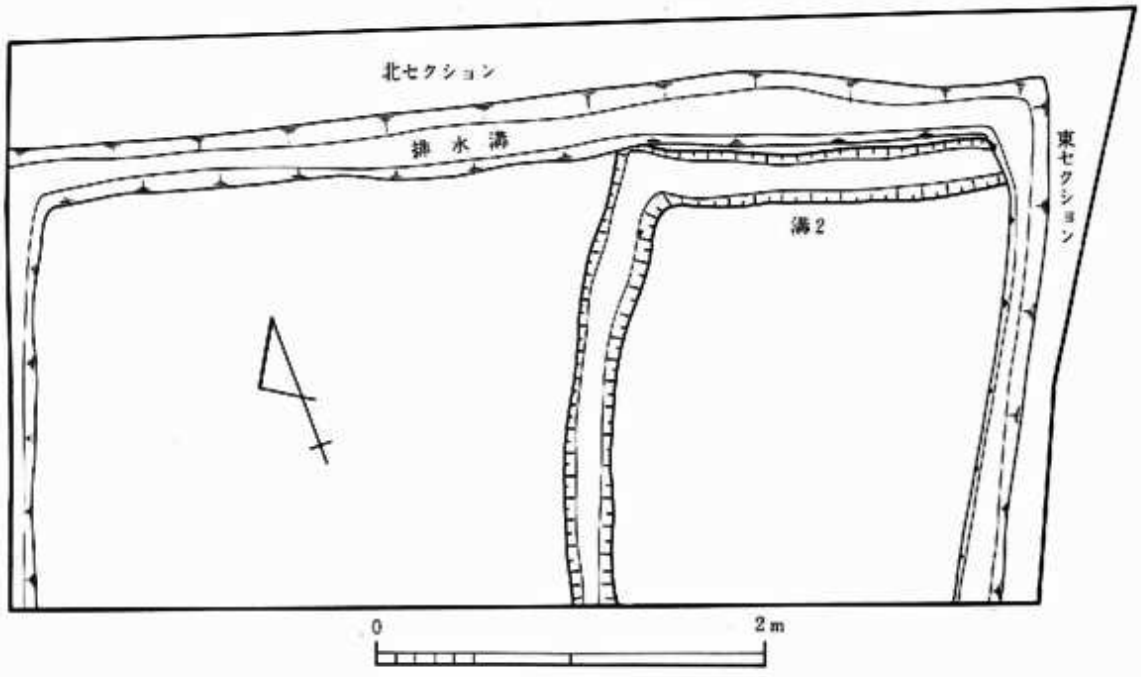
第19層　茶灰色シルト　　若干粘性有り。無遺物。

第20層　茶灰色粘土　　上半はシルト質が強い。無遺物。

当該地における層位は以上の通りである。この中で遺物含層は第3層が奈良時代、平安時代、鎌倉時代の遺物を検出した包含層（遺物包含層Ⅰ）で、第16層が弥生時代中期の遺物を検出した包含層（遺物包含層Ⅳ）である。さらに第8層でごく少量の古墳時代の遺物を検出したが、すべて細片であり摩滅が著しい為、2次堆積であると考えられる。遺構面は第4層で奈良時代から平安時代の遺構を検出し、第17層で弥生時代中期の遺構を検出した。その他の層位は、すべて無遺物層であり、人為的な痕跡は認められなかった。ただ第9層は、層自体が若干乱れており、層中に粘土ブロックが混じることから見れば、あるいは人為的な手が加えられた層の可能性が認められるが、その性格までは解明することが出来ない。



第54図　第３ピット遺構平面実測図



第55図　第３ピット遺構平面実測図

遺構（第54図・第55図）

遺構は、第４層上面（遺構面Ⅰ）より溝１条、第17層上面（遺構面Ⅱ）より溝１条を検出した。その他平面では確認できなかったが、遺構面Ⅲより小ピット１個を断面で検出している。

溝１　検出幅3.4ｍ、深さ29cm、検出長1.62mを測る２段掘りの溝である。断面は皿状を呈し、南北方向に伸びている。埋土は暗茶褐色シルト質粘土で、多くの茶褐色粘土がブロック状に混入している。出土遺物は、土師器皿、杯、甕、坩、把手、須恵器杯身、杯蓋、甕である。遺物から見れば溝の廃絶は、時期幅は多少認めうるものの概ね平安時代前半９世紀代であろう。

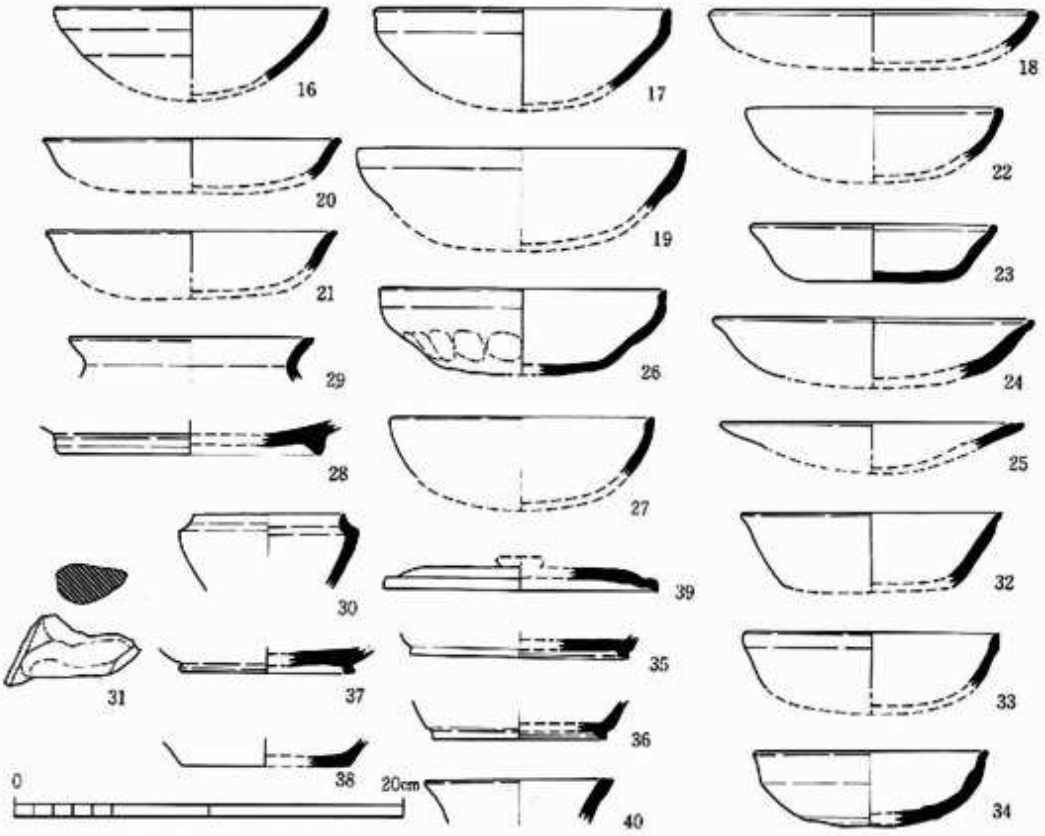
溝２　遺構面Ⅱより検出した、幅31cm、深さ15cm、検出長４ｍを測り、断面椀状を呈している。東西方向からピット中央部でほぼ直角に曲がり南北方向に走っている。堆積土は黒灰色シルトで、遺物は出土しなかった。溝の埋没した時期は、第16層の遺物が弥生時代中期であることから、少くとも弥生時代中期を下限に設定できよう。

出土遺物（第56図　第57図　第58図）

遺物は、溝１、第２層、第３層（遺物包含層Ⅰ）第８層、第16層（遺物包含層Ⅳ）より出土した。この中で第２層、第８層の出土遺物は、細片が多く摩滅が著しい為、図化は不可能である。

溝１（第56図）

土師器杯、椀、甕、坩、把手、須恵器杯、蓋、平瓶がある。(16)～(27)は土師器杯である。(16)は内弯する体部を持ち、口縁端部は若干つまみ上げ気味に丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は長石、雲母等を含み、乳赤褐色を呈する。口径14cm。(17)は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部を逆「く」の字状に屈曲させ、端部を外上方につまみ上げて丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は長石を少量含み、乳赤褐色を呈する。口径15cm。(18)は、体部が内弯して立ち上がり。口縁端部を内上方につまみ出して尖らせている。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は精良で若干長石等を含む。色調は乳赤色を呈する。口径16.2cm。(19)は、体部が上半で若干外方へ屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げて尖り気味におさめている。調整は内外面ともヨコナデ。胎土は長石等を多く含み、赤褐色を呈する。口径10.8cm。(20)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を外上方へつまみ出して丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデである。胎土は雲母、くさり礫を含み、乳灰褐色を呈する。口径15.1cm、(21)は、口縁部がやや外反し端部は丸くおさめている。端部内側に沈線状の凹を持っている。調整は内外面ともヨコナデである。胎土は長石等を若干含み赤褐色を呈している。口径14.7cm。(22)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させている。調整は内外ともヨコナデである。胎土はくさり礫を含み、乳赤褐色を呈している。口径12.8cm。(23)は、体部がやや外反しながら立ち上がり、口縁端部を内側につまみ込んで丸くおさめている。内外とも調整は丁寧なヨコナデである。胎土は長石を含み、乳灰褐色を呈している。口径12.3cm、器高2.9cmを測る。(24)は、体部が若干内弯し、上位でやや外反して立ち上がっている。口縁端部は上方につまみ上げ丸くおさめている。胎土は長石、くさり礫を含み、乳赤褐色を呈



第56図　第3ピット溝1出土遺物実測図

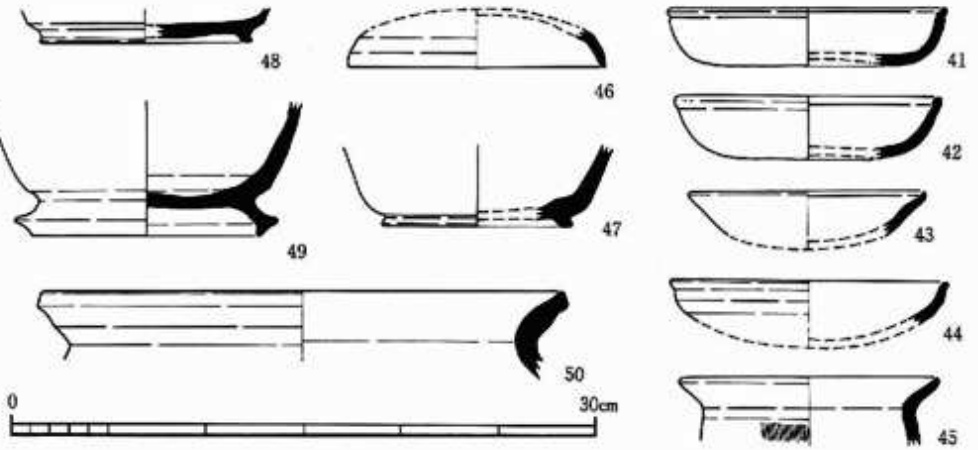
している。口径16.1cm。(25)は、器高が低く皿状を呈している。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部内側に凹みを作り出して丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデである。胎土は長石等が多く、乳赤褐色を呈している。口径15.3cm。(26)は、体部が中位でやや屈曲し、上位で上方に立ち上がっている。口縁端部は内側を肥厚させて丸くおさめている。体部外面下半は指頭圧痕の後ナデ。その他はあらいヨコナデである。胎土は長石等を多く含み、乳灰褐色を呈している。口径14.7cm、器高2.2cmを測る。(27)は、体部がやや内弯して立ち上がり、口縁端部は内側へ肥厚させ尖り気味につまみ上げている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は石英、長石等を含み、赤褐色を呈している。口径13.4cm。

皿(28)は、底部のみで、高台は低く断面三角形を呈している。高台は貼り付けである。胎土は長石等を含み、赤褐色を呈している。高台径16.8cm。

甕(29)は、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部は面を持ち尖らせている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は長石等を多く含み、乳灰褐色を呈している。口径12cm。

坩(30)は、体部が直線的に立ち上がり、肩部が内側に鋭く屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げて尖らせている。調整は内外面とも丁寧なヨコナデである。胎土は長石を含み、乳赤褐色を呈している。口径7.7cm。

把手(31)は、いわゆる角形把手である。手づくねで作っており断面隅丸三角形状を呈している。胎土は、角閃石、雲母等を含み生駒西麓産である。赤褐色を呈する。



第57図　第３ピット第３層出土遺物実測図

(32)～(37)は須恵器杯身である。(32)は、体部が直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部外面を若干凹ませ丸くおさめている。調査は内外面とも丁寧なヨコナデである。胎土は精良で、灰白色を呈する。口径13.2cm。(33)は、体部がやや内弯しながら立ち上がり、口縁端部直下を若干肥厚させ、丸くおさめている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は長石を少し含み、灰青色を呈する。口径12.9cm。(34)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を外方へつまみ出して丸くおさめている。底部はヘラ切り、体部外面はヘラ削りの後ヨコナデ。内面、口縁部はヨコナデ調整である。胎土は長石を若干含み、青灰色を呈する。口径11.9cm、器高3.7cm。(35)、(36)、(37)は、底部のみである。高台はすべて貼り付けである。調整は内外面ともヨコナデである。胎土はいずれも精良で、淡青灰色を呈している。径は(35)が11.1cm、(36)が8.9cmである。(37)は、底部のみで、杯身と思われる。底部外面はヘラ切りである。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は精良で、灰色を呈する。底部径8.3cm。

(39)は、杯蓋である。宝珠つまみが付くと思われる。天井部は平坦で、口縁端部はやや外方につまみ出し丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデである。胎土は精良で、灰青色を呈する。口径14cm。

(40)は、平瓶と思われる。口縁部がやや外反し、端部は面を持つ。内面に自然釉が付着している。胎土は長石を若干含み、灰青色を呈している。口径9.5cm。

第３層（第57図）

土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、壺、瓦器甕がある。(41)～(44)は土師器杯である。(41)は、体部がやや内弯して立ち上がり、口縁端部をつまみ上げて丸くおさめ、内外面に明瞭な段を作り出している。調整は内外面ともヨコナデである。胎土はくさり礫を含み、淡赤褐色を呈している。口径14.1cm、器高3cm。(42)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は精良で、淡赤褐色を呈する。口径13.4cm、器高3.2cm。(43)は、皿に近い形態を示している。体部は若干外反して立ち上がり、口縁端部を上方につまみ上げて尖らせている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は雲母等を含み、淡赤褐色を呈する。口径11.9cm。(44)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を外上方につ

まみ出し丸くおさめている。胎土は長石を含み、赤褐色を呈する。口径4.1cm。

甕(45)は、頸部が「く」の字状に屈曲し、肩部に段を有する。口縁端部はつまみ上げて尖らせている。体部外面はハケメ、内面はヘラ削りを施している。口縁部はヨコナデである。胎土は雲母を含み、淡赤褐色を呈する。口径13cm。

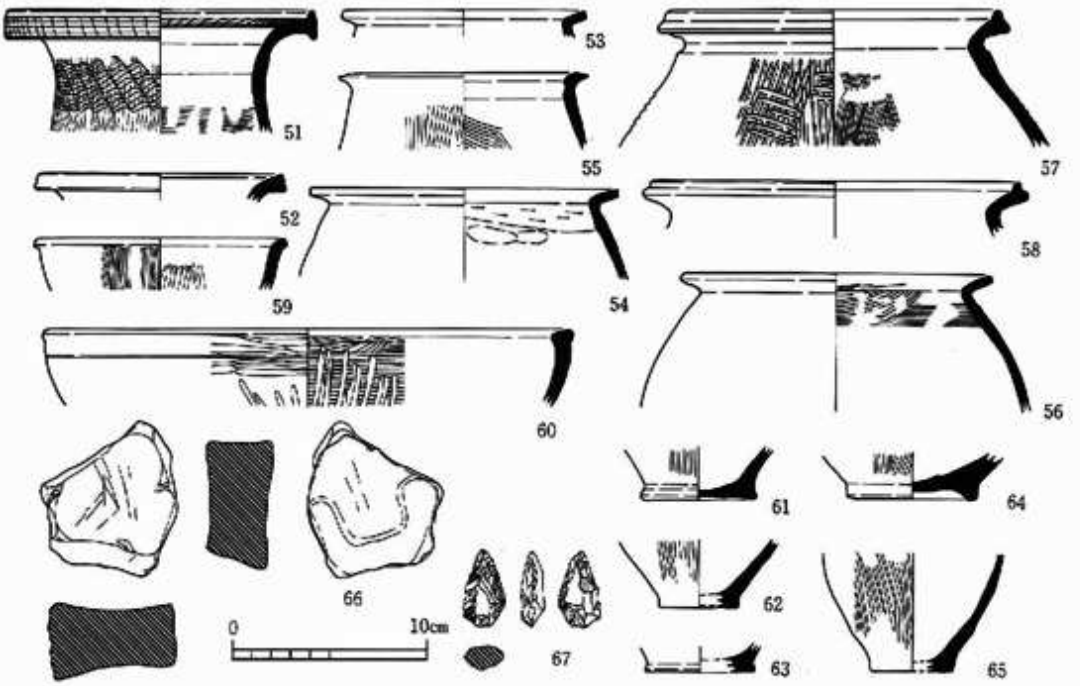
(46)～(49)は須恵器である。(46)は杯蓋である。天井部から逆「く」の字状に屈曲し、口縁端部を尖らせている。天井部と口縁部上半外面はヘラ削りの後ヨコナデ、内面はヨコナデである。胎土は長石を含み、青灰色を呈している。口径13.1cm。(47)は杯身である。高台は断面方形を呈し、貼り付けている。内外面ともヨコナデである。胎土は長石を若干含み、青灰色を呈している。高台径9.6cm。(48)も杯身である。高台は低く断面方形を呈し、貼り付けである。底部外面はヘラ削り、体部内外面はヨコナデである。胎土は精良で、青灰色を呈する。高台径10.8cm。(49)は、壺底部と考えられる。高台は大きく外下方へ張り出し、端部は上下に拡張している。体部は直線的に立ち上がっている。内外面ともヨコナデである。内底面に自然釉が付着している。胎土は精良で、灰青色を呈している。高台径11.5cm。

(50)は、瓦器甕である。頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部を上下につまみ出して面を作り出している。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は長石等を多く含み、暗灰色を呈している。口径26.6cm。

第16層 (第58図)

弥生土器壺、甕、鉢、砥石、石錐がある。(51)、(52)は壺である。(51)は、頸部から口縁部がラッパ状に大きく開き、口縁端部を上下に拡張している。頸部外面はあらいハケメの後、簾状文を施し、内面は横方向のハケメの後ヨコナデ調整である。口縁部内外面は簾状文を施した後にヨコナデで仕上げている。胎土は角閃石、長石等を含み、淡茶褐色を呈する。口径15.7cm生駒西麓産。(52)は、口縁部がラッパ状に開くタイプである。口縁端部は若干ひろがっており面を持っている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は角閃石を少量含み、茶褐色を呈している。口径12.4cm。生駒西麓産。

(53)～(58)は甕である。(53)は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部に面を持っている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は角閃石、長石等を含み、暗茶褐色を呈する。口径12.3cm。生駒西麓産。(54)は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部に面を持っているタイプである。頸部内面はヘラ削りをおこない、下半を指頭で押さえている。体部、口縁部内外面はヨコナデである。胎土は角閃石、雲母を含み暗茶褐色を呈している。口径15.8cm。生駒西麓産。(55)は、たまご形を呈する体部を持ち、口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を丸くおさめ内面に凹みを作り出している。体部内面上半はハケメ、下半はヘラ状工具によるナデ、外面下半はナデ、上半及び口縁部はヨコナデである。胎土は角閃石、雲母を含み、暗茶褐色を呈する。口径15.6cm。生駒西麓産。(56)は、体部があまり張らず立ち上がり、口縁部の外反は短かく、端部を尖らせている。体部内外面はあらいハケメを施し、口縁部はヨコナデ調整である。胎土は角閃石、雲母を多く含み、暗茶褐色を呈している。口径11.6cm。生駒西麓産。(57)は、体部の張りが大きく、



第58図　第３ピット第16層出土遺物実測図

口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上下に大きく拡張している。体部外面は縦方向の叩きの後部分的に横方の叩きを施し、内面はハケメ調整である。頸部はヨコナデによる稜を作り出している。口縁部は丁寧なヨコナデである。胎土は角閃石、長石を含み、赤褐色を呈している。口径16.9cm。生駒西麓産。(58)は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上下に拡張している。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は雲母等を含み、茶褐色を呈している。口径18.9cm。非河内産。

(59)、(60)は鉢である。(59)は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部を若干外反させている。端部は面を持っている。体部はヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデである。胎土は雲母等を含み茶灰色を呈している。口径12.5cm。非河内産。(60)は、口径26.8cmを測る大形の鉢である。体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を外方へ若干つまみ出している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケメの後に部分的にヘラミガキを施している。口縁部はヨコナデである。胎土は長石、雲母を若干含み、灰茶褐色を呈している。非河内産。

(61)～(65)はいずれも甕底部である。上げ底のもの(61)、(64)、平底のもの(62、63、65)がある。いずれも体部外面はハケメ調整である。胎土は(61)が角閃石、長石を含み、暗茶褐色を呈する。径4.6cm(62)は長石等を含み、暗茶褐色を呈する。径3.9cm。(63)は長石等を含み、暗茶褐色を呈する。径5.4cm。(64)は長石、くさり礫を含み、淡茶灰色を呈する。径6.7cm。(65)が角閃石を含み、黒褐灰色を呈する。径4.1cm。生駒西麓産。

(66)は砥石である。砂岩製で、仕上砥であろう。２面使用しており、かなり凹んでいる。幅6.4cm。厚み３cmを測る。

(67)は石鏃である。凸基無茎式で小形である。材質はサヌカイトで作りは粗雑である。長さ

3.8cm、幅2cm、厚み1.2cmである。

以上のように出土遺物を概観してきたが、次に溝1、第3層、第16層出土の土器の年代観を検討する。溝1出土土器は、土師器に外傾化が大きいe手法による所が見られること、高台付皿が平城京SD650A[①]から出土していることからすれば、上限を9世紀前半に設定できよう。口縁部端部を上方につまみ上げ、比較的大形の杯は、9世紀後半以後に出現する器形である。須恵器(34)のように椀状を呈する器形を持つ古い要素の杯も存在するが、概ね9世紀代に位置付けられよう。

第3層出土土器は、年代幅が大きく概ね9世紀代～14世紀代の間である。土師器杯は、外傾化が著しいe法によるものが主体を占める。甕も9世紀代に、普遍的なものである。瓦器甕は、その出現時期は明確ではないが、高槻市上牧遺跡[②]等の知見によれば14世紀代に属すると思われる。

第16層出土土器は、概ね弥生時代中期中葉に属するものである。この中で(57)、(58)の甕は、口縁端部を上下に拡大し、体部も比較的張るのが特徴で、Ⅲ様式の中でも新しい要素で、Ⅳ様式へとつながるものである。その他の甕は、体部がたまご形を呈し、口縁部が「く」の字状に屈曲し端部に面を作るのを特徴とするのが、これらは典形的なⅢ様式の特徴である。(56)の甕は、体部があまり張らず、口縁端部未調整であるため、古い要素を備えている。

4．第4ピット

層序（第59図）

第1層　盛土　　道路建設時の盛土及び耕土・床土を含む。

第2層　茶灰褐色シルト質粘土　　奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅰ）

第3層　黄褐灰色シルト質粘土　　奈良時代から平安時代の土師器・須恵器等の遺物が出土する遺物包含層（遺物包含層Ⅱ）

第4層　茶灰色粘土　　奈良時代から平安時代の遺構面。(遺構面Ⅰ）下半はシルト質が強い。無遺物。

第5層　茶灰褐色シルト　　下半は細砂中心。無遺物。

第6層　茶褐色粗砂　　上半は中粒砂～細粒砂である。無遺物。

第7層　灰褐色細砂　　下半はシルト質が強い。無遺物。

第8層　暗茶灰色粘土　　若干シルト質。無遺物。

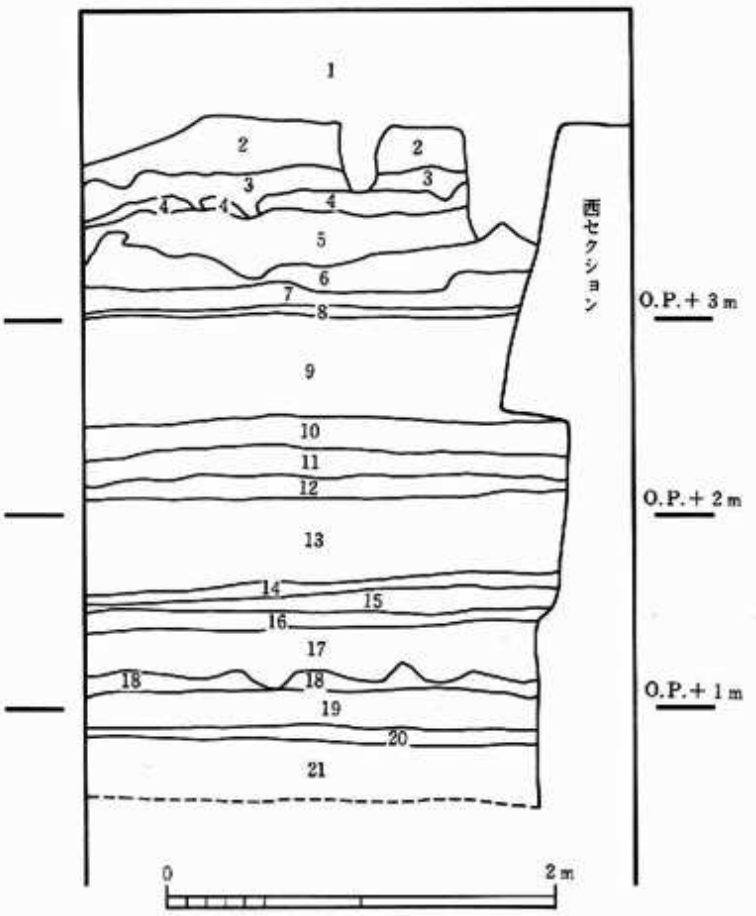
第9層　灰色粗砂　　中粒砂～細粒砂ラミナ状に入る。無遺物。

第10層　茶褐灰色シルト　　灰色細砂との互層。無遺物。

第11層　灰青色粘土　　黄色粘土をブロック状に含む。無遺物。

第12層　灰褐色粘土　　シルト質が強い。黄色粘土をブロック状に少量含む。無遺物。

第13層　暗灰褐色シルト質粘土　　植物遺体・炭を多く含む。無遺物。



第59図　第4ピット南壁断面図実測図

第14層　暗黒灰色粘土　　上半は若干シルト質である。炭化物を多く含む。無遺物。

第15層　灰色粘土　　無遺物。

第16層　黒褐灰色シルト　　弥生時代中期の土器・木器・石器が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅳ）粗粒砂多く混る。

第17層　暗茶灰色粗砂　　弥生時代中期の遺物包含層。（遺物包含層Ⅴ）シルト質が強い。

第18層　青灰色シルト　　弥生時代中期の遺構面。溝・土坑・ピットを検出。（遺構面Ⅱ）無遺物。

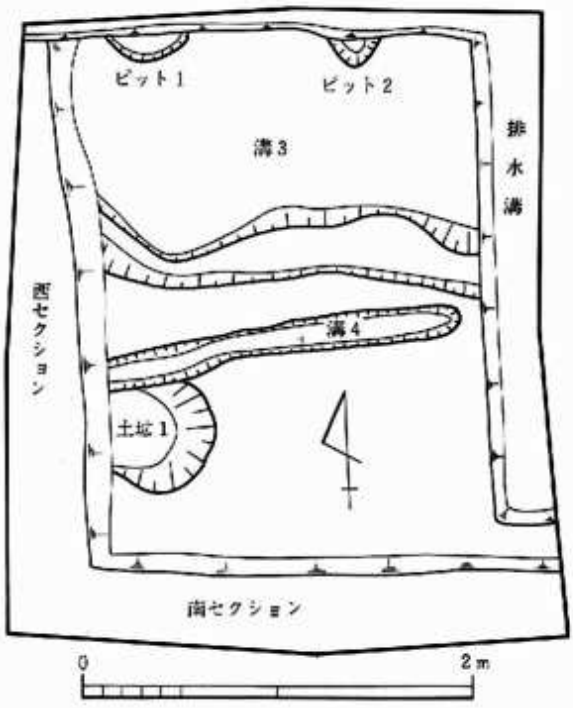
第19層　灰白色粗砂　　無遺物。

第20層　青灰色シルト　　若干粘性がある。無遺物。

第21層　茶灰色粘土　　上半はシルト質である。無遺物。

当該地における層序は上記の通りである。遺物包含層は4層検出している。第2層は奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土する包含層（遺物包含層Ⅰ）で、第3層は奈良時代・平安時代の遺

物が出土する包含層（遺物包含層Ⅱ）である。第16層（遺物包含層Ⅳ）・第17層（遺物包含層Ⅴ）とも弥生時代中期の遺物が出土する包含層であるが、時期的な幅はあまり認められない。遺構面は第４層と第18層の２層検出している。第４層は奈良時代から平安時代の遺構面で（遺構面Ⅰ）、第18層は弥生時代中期の遺構面（遺構面Ⅱ）である。その他の層はすべて無遺物層であるが、第11層・第12層に若干の層の乱れ、ブロック土を認めており、あるいは人為的な手が加わっている可能性が高いと言える。



遺　構（第60図）

遺構は、第18層上面（遺構面Ⅱ）で２条、土坑１基、ピット２個を検出した。遺構面Ⅰは層を検出したが、遺構は確認できなかった。

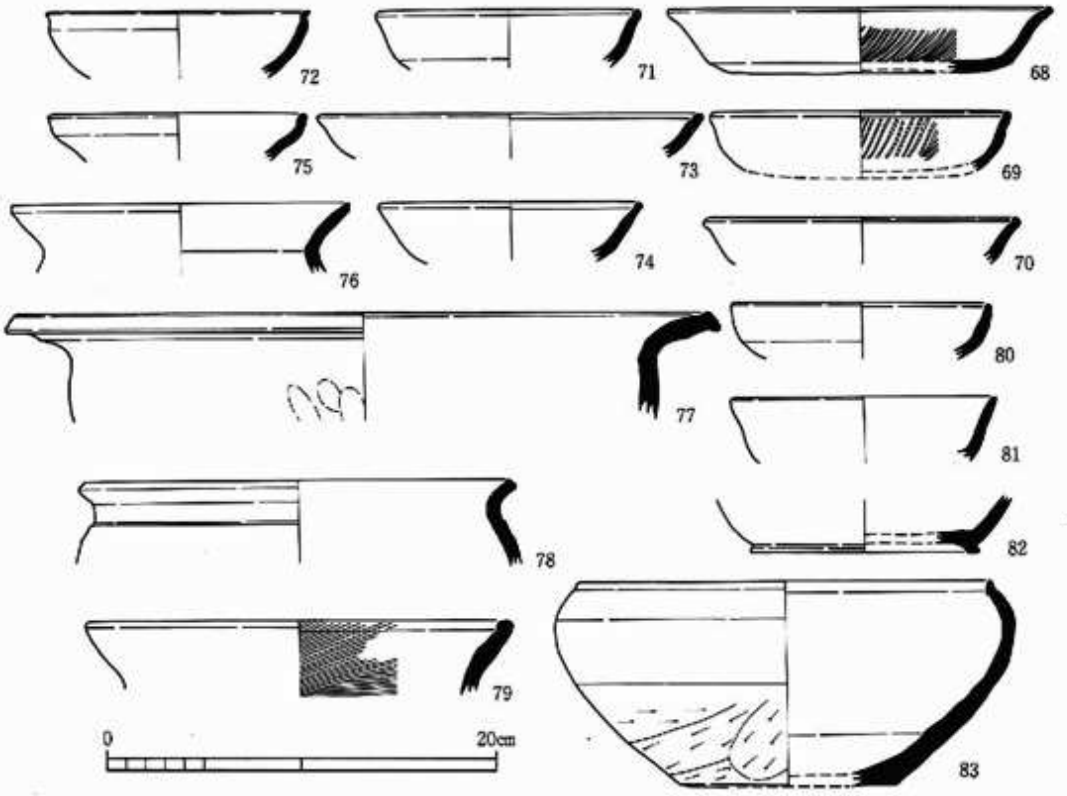
溝３　検出幅１ｍ30cm、深さ25cm、検出長２ｍ40cmを測る。溝の南肩のみ検出し、北肩は調査区外である。２段掘りを行なっており断面皿状を呈している。若干だ行するが東西方向に走っている。堆積土は暗茶灰色シルトで、遺物は弥生土器甕・壺が少量出土した、溝の埋没時期は遺物から見れば弥生時代中期中葉であると考えられる。

溝４　幅20cm、深さ17cm、検出長１ｍ80cmを測り、断面深い皿状を呈する小溝である。やや南に振りながら東西方向に走っている。堆積土は、暗灰褐色粗砂質シルトで、遺物は、弥生土器が少量出土した。溝の埋没時期は、遺物が細片である為、不明確であるが、弥生時代中期であろう。

土坑１　検出幅60cm、深さ30cmを測る楕円形を呈すると思われる土坑である。断面は椀状である。

溝４に切られており本来の形状は不明確である。埋土は暗茶灰色シルトで、遺物は出土しなかった。時期は、溝４との切り合い関係から下限を弥生時代中期に求めることができよう。しなかった時期は、溝４との切り合い関係から下限を弥生時代中期に求めることができよう。

ピット１・ピット２　いずれも溝３によって上部を削り取られている。ピット１は径42cm、深さ20cm、ピット２は径28cm、深さ９cmを測り、ほぼ円形を呈している。断面は椀状である。埋土は暗青灰褐色シルトで、遺物は出土しなかった。時期は、溝３との切り合い関係から見て弥



第61図　第4ピット第2層出土遺物実測図

生時代中期であると思われる。

出土遺物（第61図・第62図）

遺物は、第2層、第3層、第16層、第17層、溝3、溝4より出土した。この中で、第3層・溝4出土遺物は細片が多く図化本可能であった。

第2層（第61図）

土師器杯、甕、須恵器杯、鉢がある。(68)～(75)は土師器杯である。(68)は、体部が内弯して立ち上がり上半で若干外反し、口縁端部は内側に肥厚する。底部はヘラ削りをおこない、体部外面下半はナデ、上半はヨコナデ、内面は暗文を施している。胎土は長石を含み、乳赤褐色を呈する。口径19.4cm、器高3.3cmを測る。(69)は、体部が若干内弯し、口縁端部を内側で肥厚させている。体部外面下半はナデ、上半はヨコナデ、内面は暗文を施している。胎土は長石・雲母を含み、乳赤褐色を呈する。口径14.9cm、(70)は、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は長石をわずかに含み、乳赤褐色を呈する。口径15.7cm。(71)は、体部がやや内弯しながら立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させている。体部外面上半、内面はヨコナデ、体部下半はナデ調整である。胎土は精良で、乳赤褐色を呈する。口径13.1cm。(73)は、口径19.2cmを測る大形の皿である。体部はやや内弯しながら立ち上がり、口縁端部を若干内側に肥厚させている。体部上半、内面はヨコナデ、下半は

ナデ調整である。胎土は長石、雲母を含み、乳赤褐色を呈する。(72)は、体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部を内傾させ、端部を外上方につまみ上げ尖らせている。体部上半、口縁部はヨコナデ、体部下半はナデ調整である。胎土は精良で、乳赤褐色を呈する。口径13.3cm。(74)は、体部がやや直線的に立ち上がり、口縁部端部を内側に肥厚させている。体部外面上半はヨコナデ、下半はナデ、内面、口縁部はヨコナデ調整である。胎土は精良で、赤褐色を呈する。口径13cm。(75)は、体部下半が直線的に立ち上がり、上半が上方に屈曲している。口縁端部はやや角張っている。体部外面上半、内面、口縁部はヨコナデ、下半はナデ調整である。胎土は精良で、乳赤褐色を呈する。口径12.8cm。

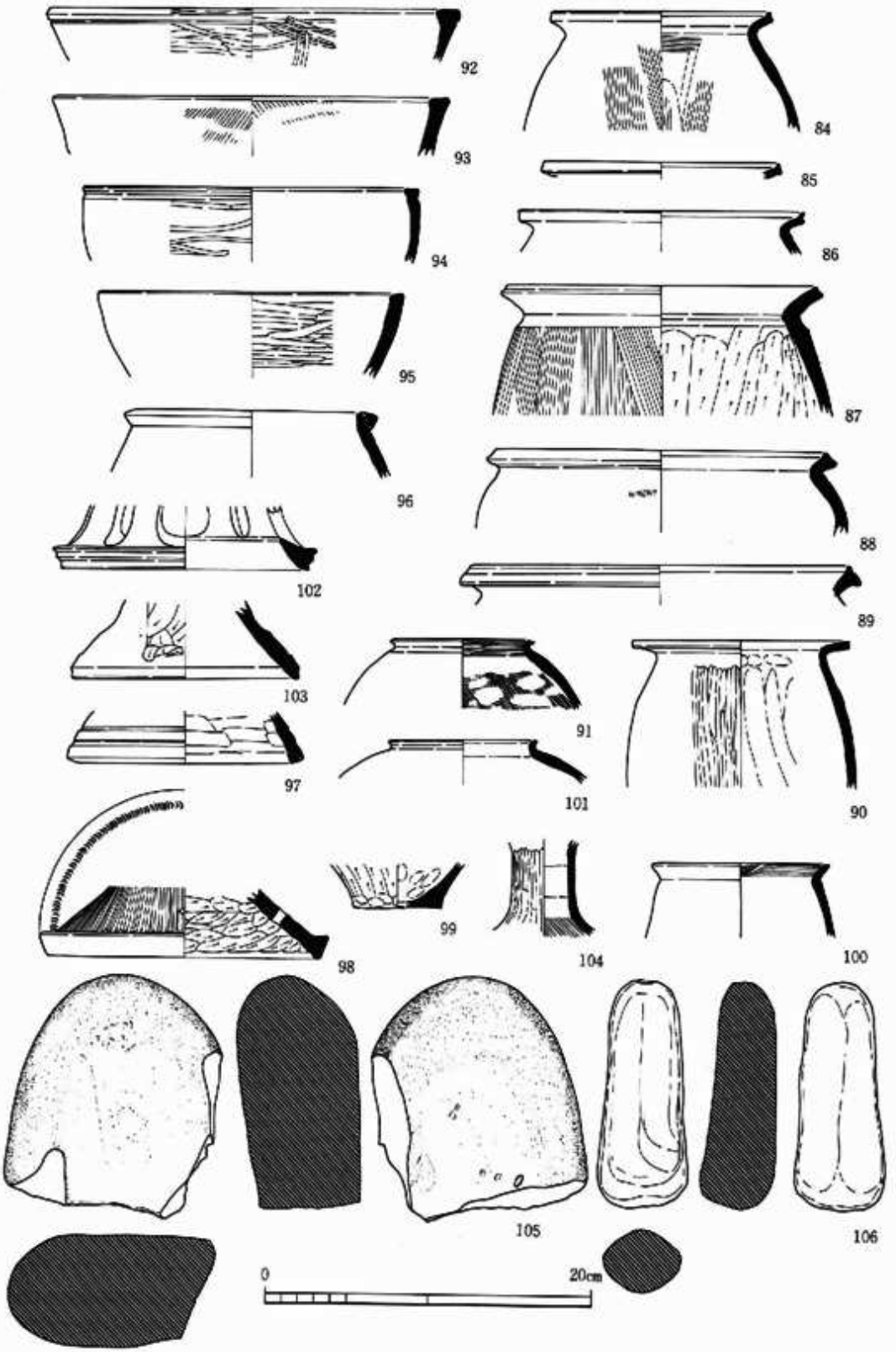
(76)～(79)は甕である。(76)は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部をつまみ上げて尖らせている。口縁部はヨコナデ調整である。胎土は長石、雲母を含み、乳灰褐色を呈する。口径17.1cm、(77)は、体部があまり張らず、口縁部がラッパ状に大きく開いている。端部は下方に若干つまみ出して面を作っている。口縁部、体部上位はヨコナデ、体部下位は外面が指頭圧痕の後ナデ、内面はナデ調整である。胎土は長石、雲母を含み、乳灰褐色を呈している。口径35.4cm (78)は、口縁部がゆるく「く」の字状に外反し、端部は若干上方につまみ出し凹んでいる。頸部にヨコナデによる稜を有する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラ削りの後ナデ、内面はナデ調整である。胎土は長石、雲母等を含み、乳灰褐色を呈する。口径21.5cm、(79)は、口縁部がゆるやかに外反し、端部を内側に肥厚させている。口縁部内面はハケメ調整、外面はヨコナデ調整である。胎土は長石等を多く含み、赤褐灰色を呈する。口径21.2cm。

(80)～(82)は須恵器杯身である。(80)は、体部が内弯しながら立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味に丸しおさめている。体部内面、外面上半はヨコナデ、下半はヘラ削りの後ヨコナデ調整である。胎土は精良で、灰白色を呈する。口径12.9cm。(81)は、体部が直線的に開いて立ち上がり口縁端部を丸くおさめている。内外面とヨコナデ調整である。胎土は精良で、青灰色を呈する。口径13.3cm。(82)は、底部のみで、高台は開いており、断面方形を呈する。貼り付けである。内外面とヨコナデ調整である。胎土は長石を若干含み、灰白色を呈する。口径11.5cm。

(83)は鉢である。いわゆる鉄鉢である。体部は、下半がやや直線的に開いて立ち上がり、上位で内弯し、口縁端部を上方につまみ上げて尖らせている。内面に面を作り出している。体部上半、口縁部は丁寧なヨコナデ、外面下半は不定方のヘラ削り、内面下半はナデ調整である。胎土はくさり礫、砂粒を含み、灰白色を呈する。口径20.9cm、器高10.4cmを測る。

溝3 (第62図)

弥生土器甕がある。(84)は、体部がたまご形を呈し、口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方につまみ上げている。体部はハケメの後ナデ、口縁部はヨコナデ調整である。胎土は角閃石、長石を含み、灰褐色を呈する。口径13.2cm。生駒西麓産。(85)は、口縁部を上下に拡張している。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は角閃石、雲母を含み、茶褐色を呈する。口径14.1cm。生駒西麓産。(86)は、口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部は上外方につまみ上げ



第62図　第4ピット溝3・第16層・第17層出土遺物実測図

凹ませている。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は雲母等を含み、乳茶褐色を呈する。口径17.1cm。非河内産。

第16層（第62図）

弥生土器甕、無頸壺、鉢、台付鉢脚部、高杯脚部がある。(87)～(90)は甕である。(87)は、あまり体部が張らず、口縁部は「く」の字状に外反し、端部は面を作っている。肩部にヨコナデによる稜を有する。体部外面はハケメ、内面はヘラ削りを施し、口縁部はヨコナデである。胎土は長石、くさり礫を含み、乳灰褐色を呈する。口径18.8cm。非可内産。(88)は、肩部が張り、口縁部の外反は短く、端部は上下に拡張している。体部外面はハケメの後ナデ、内面はナデ調整、口縁部は丁寧なヨコナデである。胎土は雲母、くさり礫を含み、黄灰色を呈する。口径19.7cm。非河内産。(89)は、口縁部が「く」の字状に外反し、端部を上下に大きく拡張している。胎土は長石、雲母を含み、乳灰褐色を呈する。口径22.7cm。非河内産。(90)は、体部の張りは小さく、口縁部をほぼ水平方向に屈曲させ、端部は面を作り出している。体部外面はヘラミガキ、内面は指頭で強くナデ上げている。口縁部はヨコナデである。胎土は角閃石、雲母を含み、茶褐色を呈する。口径12.8cm。生駒西麓産。

(91)、(96)は無頸壺である。(91)は、肩が張る体部から口縁部を若干外反させ、端部をやや下方につまみ出し尖らせている。体部外面の調整は磨滅の為不明、内面は細かいハケメを施し、頸部にヘラミガキを施している。胎土は角閃石、くさり礫を含み、灰褐色を呈する。口径7.9cm。生駒西麓産。(96)は、体部が内傾して立ち上がり、口縁部は断面三角形の突帯をはり付けている。口縁部内外面はヨコナデ、体部は丁寧なナデである。胎土は雲母、くさり礫を含み、乳黄灰色を呈している。口径13.9cm。非河内産。

(92)～(95)は鉢である。(94)以外はいずれも体部が外方へ立ち上がり、口縁部を肥厚させている。(92)は口縁直下に1条の沈線を施している。(94)は体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を内側につまみ出している。調整はいずれもヘラミガキで、(93)は粗いハケメを施している。(92)が角閃石、雲母を含み、灰褐色を呈し、(93)、(94)、(95)はいずれもくさり礫、石英を含み黄褐色を呈している。口径は(92)が24.5cm、(93)が23.7cm、(94)が20cm、(95)が18.2cmである。(92)は生駒西麓産、(93)、(94)、(95)は非河内産である。

(97)は台付鉢脚部である。裾がラッパ状にひろがり、端部を下方に若干つまみ出している。外面は粗いヘラミガキを行い、沈線を2条施している。内面はヘラ削りである。胎土は角閃石、くさり礫、雲母を含み灰褐色を呈する。口径13cm。生駒西麓産。

(98)は高杯脚部である。裾が大きくラッパ状に開き、端部は上下に大きく拡張している。外面は丁寧なヘラミガキを施し、端部付近に半截竹管のキザミを施している。内面は粗いヘラ削りである。円穿を4ヶ所穿っている。胎土は角閃石、長石、雲母を含み、茶褐色を呈する。底径6.2cm。生駒西麓産。

(99)は甕底部である。平底である。外面はヘラ削りの後、最下段を指頭で押さえている。内面はナデの後、指頭圧痕を行っている。胎土は長石、雲母を含み、灰褐色を呈する。底径5.5

cm。非河内産。

第17層（第62図）

弥生土器甕、無頸壺、台付鉢脚部、高杯脚部、砥石、石製敦打具がある。(100)は甕である。体部はあまり張らずたまご形を呈すると思われる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめている。体部は粗いナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面は細いハケメを施している。胎土はくさり礫、長石等を含み赤褐色を呈する。口径10.5cm。非河内産。

(101)は無頸壺である。大きく肩の張る体部に短かく直立する頸部を有し、口縁部は外上方に若干つまみ出して端部を尖らせている。体部外面は粗いヘラミガキ、内面はナデ、頸部、口縁部はヨコナデである。胎土は長石等を含み赤褐色を呈する。口径8.9cm。非河内産。

(102)、(103)は台付鉢脚部である。(102)は裾部がラッパ状に開き、端部を上方に若干つまみ出している。裾部は楕円形の透しを4ヶ所穿っている。端部は2条の凹線状の凹みを作り出している。裾部は丁寧なナデ、端部はヨコナデである。胎土はくさり礫、雲母等を含み茶灰色を呈している。口径15.1cm。非河内産。(103)は裾部がラッパ状にひろがり、端部を下方につまみ出し若干凹ませている。外面は粗いヘラ削り、内面は粗いヨコナデ調整で、概して作りが粗雑である。胎土はくさり礫、雲母等を含み、灰褐色を呈している。口径13.7cm。非河内産。

(104)は高杯脚部である。柱状部のみで、外面の調整はヘラミガキ、内面はハケメの後ナデである。胎土は角閃石、雲母等を含み茶褐色を呈している。生駒西麓産。

(105)は砥石である。現存最大幅13cm、厚み7cmを測り、たまご形に近い形態を呈している。両方の平担面は、きわめて滑らかで使用頻度が高いことがうかがえる。砂岩製。

(106)は石製敦打具と思われる。長さ15cm、幅5cm、厚み4cmを測り、下ぶくれの隅丸長方形を呈し、断面は菱形である。幅の広い方が磨滅が著しい。従って打点は幅の広い方であると考えられる。砂岩製。

以上のように、第2層、第16層、第17層、溝3の出土遺物を見て来たが、それぞれの出土層位、遺構の時期を検討すると、第2層出土遺物は、概ね8世紀～9世紀代に属すると考えられる。特に(68)はa手法による杯で、8世紀前半に属するものである。(70)、(71)、(74)はe手法によるもので内面のミガキはない。9世紀に属する。須恵器も高台を持ち、体部が直線的に立ち上がる、杯(80)、(81)があり、9世紀代のものであろう。

溝3出土遺物は、いずれも甕であるが、肩が比較的張ること、口縁部を上外方につまみ上げ、強いヨコナデを施していることなどからすれば中期中葉(Ⅲ様式)でも新しいところに位置付けられよう。

第16層、第17層出土遺物は、概ね中期中葉(Ⅲ様式)に属する。第16層出土遺物の方が(87)、(88)、(89)に代表されるように口縁端部のつまみ上げが顕著で、新しい傾向が見い出せる。従って、第16層、第17層は、弥生時代中期中葉(Ⅲ様式)の単純な遺物包含層であると言えよう。

5）第5ピット

層序（第63図）

第1層　盛土　　道路建設時の盛土及び耕土。床土含む。

第2層　茶灰褐色シルト質粘土　　奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅰ）

第3層　黄褐灰色シルト　　奈良時代から平安時代の遺構面。（遺構面Ⅰ）

第4層　黄灰青色シルト　　褐色粘土のラミナ有り。無遺物。

第5層　暗青灰色シルト　　暗褐色粘土のラミナ有り。下半は粘性強い。無遺物。

第6層　暗青灰色粘土　　若干シルト質である。無遺物。

第7層　灰色粗砂　　シルト質強い。無遺物。

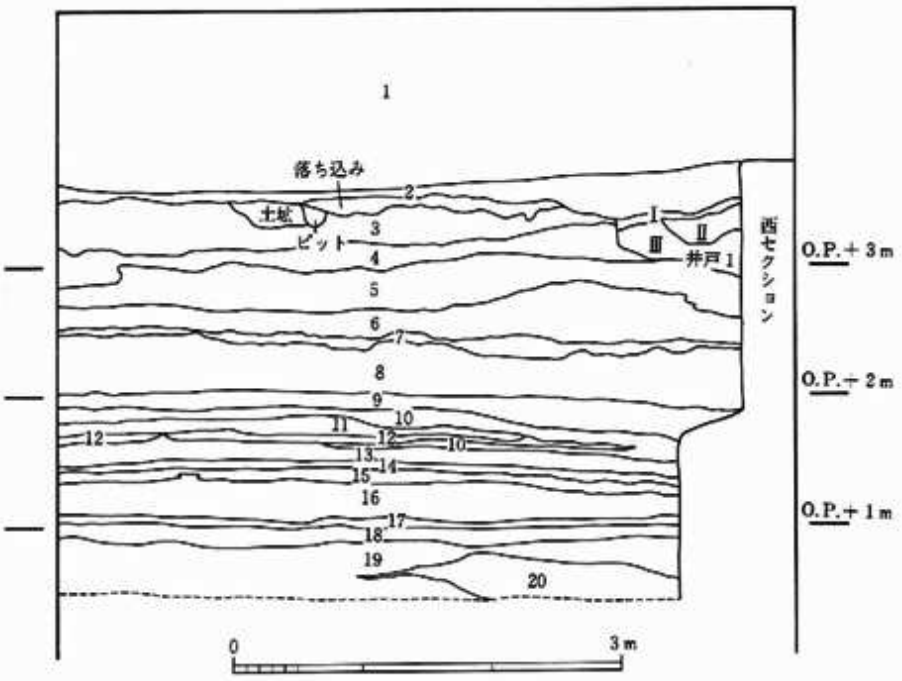
第8層　暗青灰色粘土　　シルト質強い。炭化物若干含む。無遺物。

第9層　青茶灰色シルト　　極細砂のラミナ有り。無遺物。

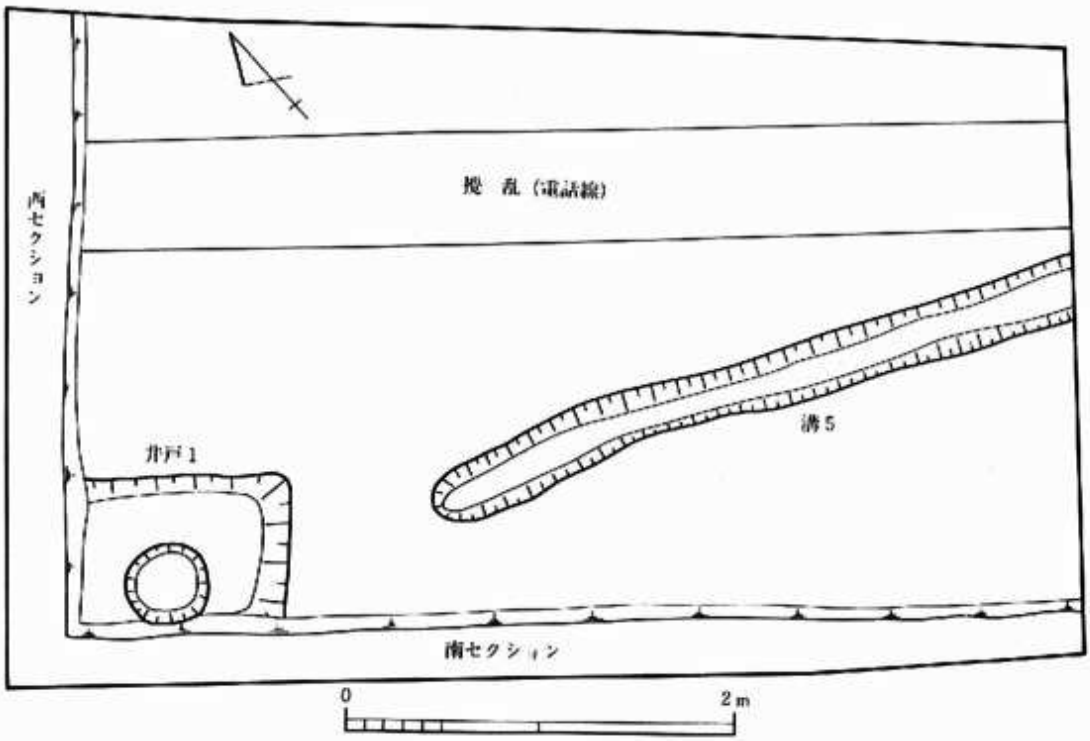
第10層　茶褐色シルト質粘土　　間層として第11・12層が存在する。無遺物。

第11層　黄灰色粗砂　　無遺物。

第12層　茶灰色シルト　　極細砂のラミナ有り。無遺物。



第63図　第5ピット南壁断面実測図



第64図 第5ピット遺構平面実測図

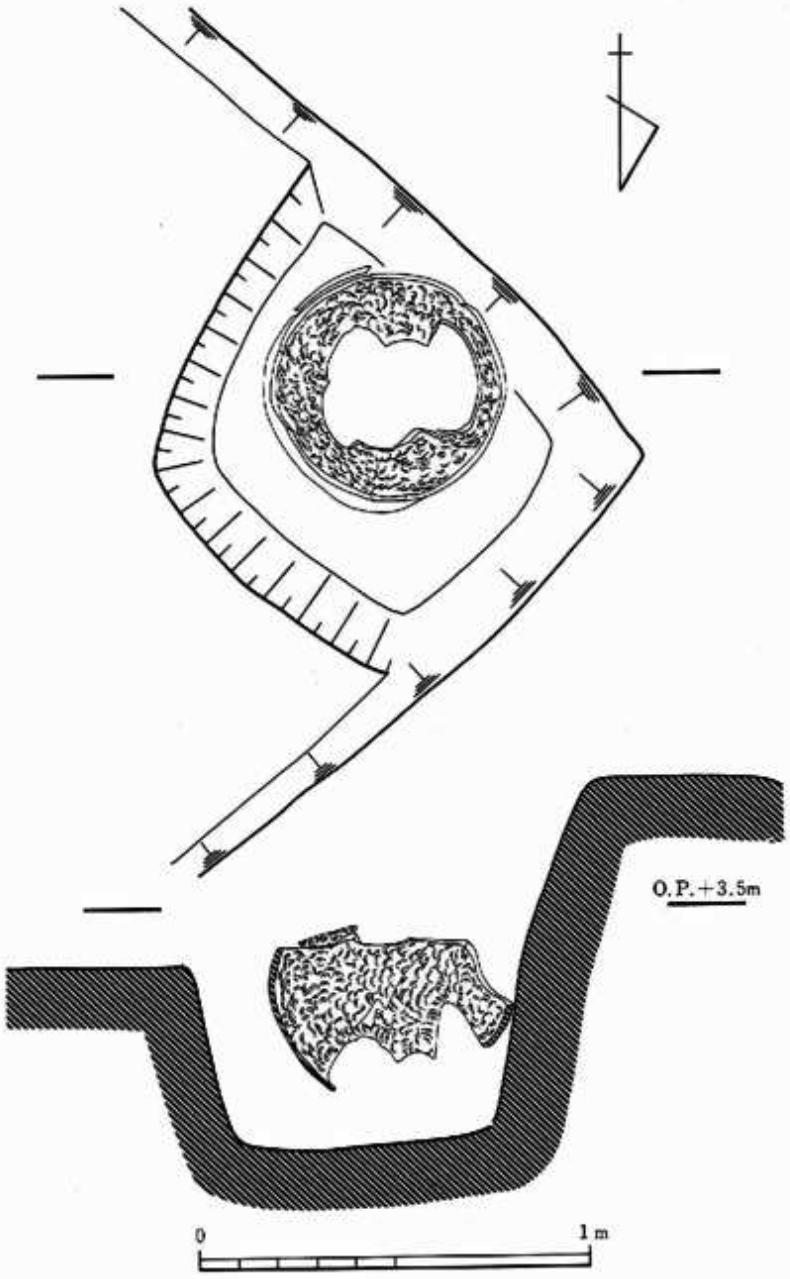
第13層　暗褐色粘土　　上半はシルト質である。無遺物。
第14層　黒褐色粘土　　遺物包含層Ⅳと同一層であるが、遺物は出土していない。
第15層　暗灰色粘土　　遺構面Ⅱと同一層。無遺物。
第16層　黄灰色粗砂　　灰色シルトのラミナ有り。無遺物。
第17層　茶褐色粘土　　植物遺体多く含む。無遺物。
第18層　黒褐灰色シルト質粘土　　植物遺体・炭化物若干含む。無遺物。
第19層　青灰色シルト質粘土　　下半は粘性が強い。無遺物。
第20層　灰白色粗砂　　第19層の間層として存在する。無遺物。

当該地における層序の中で、遺物包含層は第2層(遺物包含層Ⅰ)のみである。遺構面も第3層(遺構面Ⅰ)で確認した以外検出できなかった。第14層と第15層は、それぞれ第3・第4ピットで検出した弥生時代中期の遺物包含層Ⅳ・遺構面Ⅱと同一層であるが、遺物・遺構とも検出できなかった。その他の層位は、すべて無遺物層であり考古遺物は検出できなかった。

遺構（第64図・第65図）

当該地で検出した遺構は、第3層上面(遺構面Ⅰ)で、井戸1基・溝1条である。落ち込み1は、断面で確認している。遺構面Ⅱは上記した様に遺構は検出できなかった。

井戸1　検出幅1m20cmを測る方形の掘方を持つ井戸である。2段掘りを行なっており、深さは1m10cmである。井側は、須恵器の大甕を口縁部・底部をそれぞれ打ち欠いて転用している。井側の掘方は、径40cmを測る円形である。遺物は、土師器杯・甕・羽釜・須恵器杯・蓋・木製品・植物遺体等を多く検出した。これらの遺物は、井側の最下層にまとまって投棄された様な状況で出土しており、比較的一括性が高いと言える。井戸の構築及び廃絶年代は、構築年代が井側の須恵器大甕より見て8世紀前半、廃絶年代が、土師器杯・須恵器杯等より見て8世紀中葉であると考えられる。



第65図　第5ピット井戸1平面断面実測図

溝5　幅32cm、深さ20cm、検出長約4m50cmを測り、断面皿状を呈する小溝である。やや南に振りながら東西方向に走り、トレンチ中央部で終結している。埋土は、暗茶褐色シルト質砂層で、遺物は、土師器・須恵器が細片で少量出土している。時期は、遺物が細片である為不明であるが、層位関係からすると平安時代前半であろう。

出土遺物（第66図・第67図）

当該ピットからは、第2層、井戸1、溝5、落ち込み1より遺物が出土している。溝5出土遺物は細片が多く図化はできなかった。

井戸1（第66図）

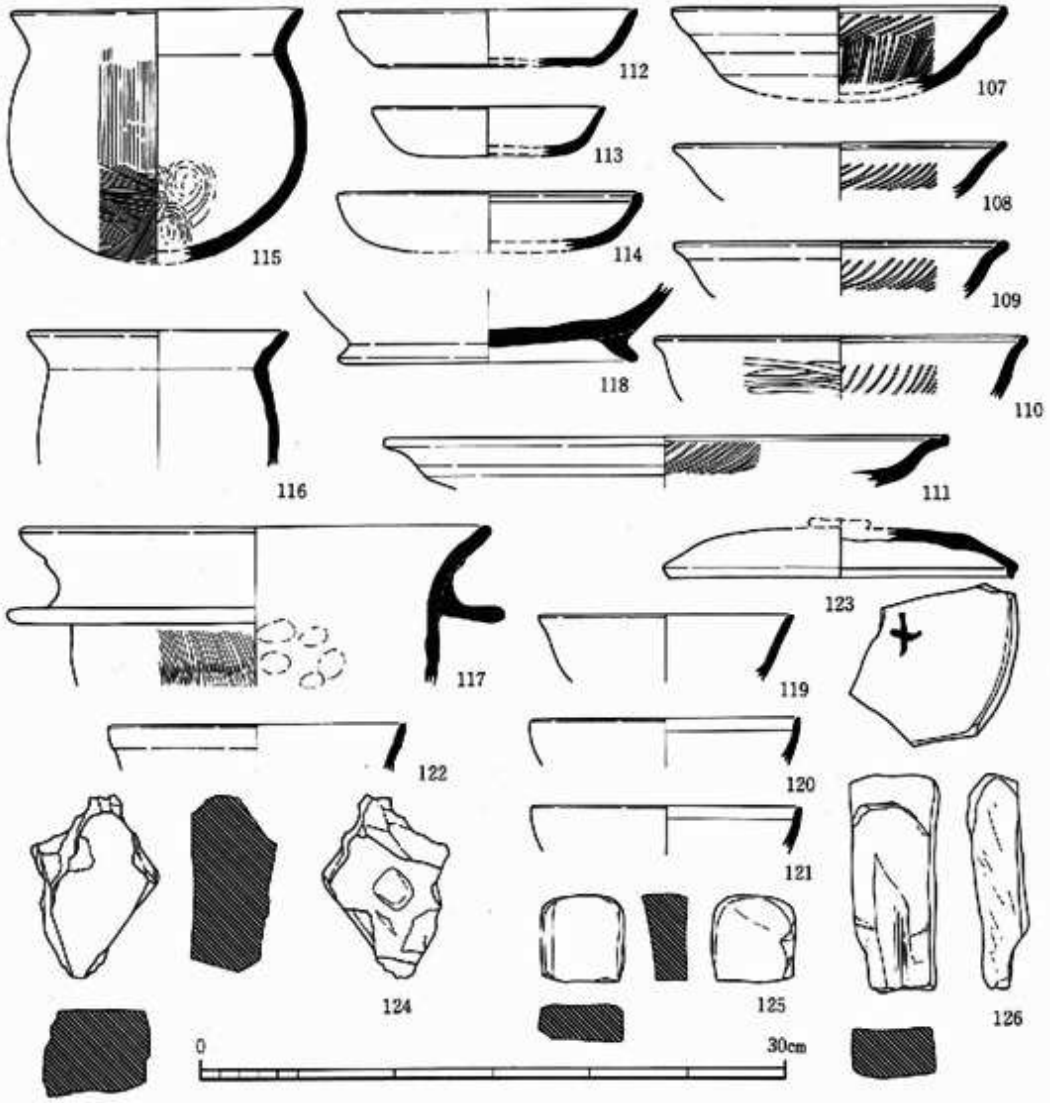
土師器杯、甕、羽釜、壺、須恵器杯身、杯蓋、砥石がある。(107)～(114)は土師器杯である。(107)～(110)は、いずれも体部が外上方に立ち上がり、上半で若干外反し、口縁端部を内側に肥厚させている。(110)以外は、体部外面をヨコナデ、内面に放射状の暗文を施している。(110)は体部外面にあらいヘラミガキを施している。胎土はいずれも長石等を若干含むが精良で乳茶灰色を呈している。口径は(107)が17.1cm、(108)が16.9cm、(109)が16.9cm、(110)が19cmである。(111)は大形の杯で、盤と呼んだ方がより的確であろう。体部は下半が内湾しながら立ち上がり、上半で外反し、口縁端部を内上方に肥厚させている。体部外面下半はヘラ削りの後ナデ、上半はヨコナデ、内面は放射状の暗文を施している。胎土は精良で乳黄灰色を呈する。口径28.7cm。(112)・(113)は、体部が若干内弯しながら直線的に立ち上がり、口縁部を丸くおさめるものである。体部内外面はヨコナデ、内面見込みはナデを施している。胎土はいずれも長石・くさり礫を含み、茶灰色を呈している。口径・器高は(112)が15.3cm・2.8cm、(113)が11.8cm・2.5cmである。(114)は体部が内弯して立ち上がり、口縁端部を内側へ肥厚させている。体部内外面はヨコナデ、底部はナデである。胎土は長石・雲母を含み茶灰色を呈する。口径15.6cm、器高3cm。

(115)、(116)は甕である。(115)は、楕円形を呈する体部を持ち、口縁部は弱い「く」の字に外反し、端部を丸くおさめている。底部は丸底である。体部外面上半は縦方向のあらいハケメ、下半は不定方向の細かいハケメを施している。内面下半は青海波状の当板の痕跡を認めるものの全体的には丁寧なナデを施している。口縁部はヨコナデである。頸部外面に煤の付着を認める。胎土は長石・雲母を多く含み、淡黄灰色を呈する。口径15cm、器高13cm。(116)は、肩の張らない体部から口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を丸くおさめている。体部外面は磨滅が著しい為不明であるが一部あらいハケメが認められる。内面はナデである。口縁部はヨコナデである。胎土は長石を多く含み、茶灰色を呈している。口径13.2cm。

(117)は羽釜である。体部は欠損して全形を知り得ないが、砲弾形を呈すると思われる。口縁部はラッパ状に大きく開いて立ち上がり、端部は丸くおさめている。鍔はほぼ水平に取り付け比較的大形である。体部外面はあらいハケメ、内面は指頭圧痕の後ナデである。口縁部、鍔部はヨコナデである。全体的に煤の付着を多く認める。胎土は長石・雲母・くさり礫を多く含み暗灰褐色を呈する。口径24cm。

(118)は壺の底部と思われる。高台は高く外下方へ張り出している。はり付け高台である。高台部、体部外面はヨコナデ、底部はあらいナデである。胎土は長石・雲母を含み、暗灰褐色を呈する。底径15cm。

(119)～(122)は須恵器杯身である。いずれも体部が外上方に直線的に立ち上がっているが、(119)・(122)はやや外反気味、(120)・(121)はやや内弯気味である。端部はいずれも丸くおさ

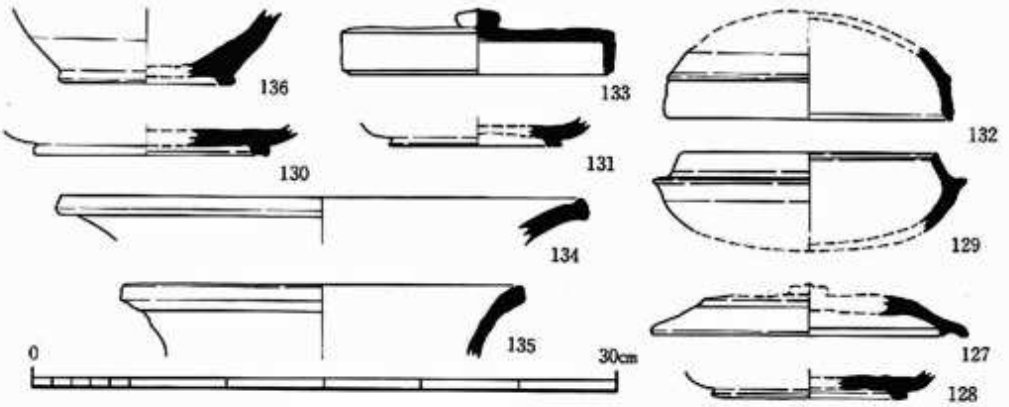


第66図　第５ピット井戸１出土遺物実測図

めている。調整は体部内外面とも丁寧なヨコナデである。胎土はいずれも若干の長石を含むが精良で、青灰色～灰色を呈する。口径は(119)12.9cm、(120)13.7cm、(121)13.9cm、(122)15.2cmである。

(123)は杯蓋である。天井部はやや平坦で中位より下方に向い、口縁部は直角につまみ出している。つまみが付くと思われる。天井部外面はヘラ削り後ヨコナデ、内面はヨコナデの後一部仕上げナデを施している。天井部内面ほぼ中央に「＋」の墨書が認められる。胎土は精良で、濃灰色を呈する。口径17.9cm。

(124)～(126)は砥石である。(124)は、残存幅6.3cm、厚味４cmを測るが、欠損が著しい。２面使用していると思われるが、あまり平滑ではない。粗砥とも考えられる。花崗岩製。(125)は、幅4.5cm、厚味２cmを測る。４面とも使用しており、いずれの使用面も非常に平滑である。仕上げ砥と考えられる。砂岩製。(126)は、幅4.3cm、厚味2.5cmを測る。４面とも使用していると思わ



第67図　第５ピット落ち込み１・第２層出土遺物実測図

れるが、短面は一部分のみの使用である。長面はよく使用されており非常に平滑である。仕上げ砥であろう。砂岩製。

落ち込み１（第67図）

須恵器杯蓋、杯身がある。(127)は杯蓋である。天井部はやや平坦で、口縁部には返りが付いており端部は丸い。天井部外面ヘラ削り、内面はナデ、口縁部はヨコナデである。胎土は長石等の砂粒を多く含み淡灰色を呈している。口経16cm。(128)は杯身である。底部であるが、高台は低く外へ若干張り出しており断面台形を呈する。はり付け高台である。内外面ともヨコナデである。胎土は長石を若干含み、青灰色を呈する。高台径9.9cm。

第２層（第67図）

須恵器杯身、杯蓋、甕、壺がある。(129)～(131)は杯身である。(129)は椀状の体部に口縁部はやや内傾して立ち上がり端部を若干尖り気味におさめている。受部はやや外上方につまみ出している。体部外面はヘラ削りの後ヨコナデ、口縁部はヨコナデである。胎土は精良で青灰色を呈している。口径 13cm。(130) は大型の杯身で、高台はほぼ直角に取り付け断面逆台形を呈している。はり付け高台である。高台部、体部はヨコナデ、底部はナデである。胎土は長石などの砂粒を含み灰色を呈している。高台径11.9cm。(131)は、高台が外方に張り出して取り付け、断面逆台形を呈している。はり付け高台である。高台部、体部ともヨコナデである。胎土は精良で青灰色を呈する。高台径8.7cm。

(132)、(133)は杯蓋である。(132)は、天井部が椀状に丸く、口縁部はやや外下に張り出しており、端部は丸くおさめている。天井部の稜はあまい。内外面ともヨコナデである。胎土は精良で青灰色を呈する。口径14.5cm。(133)は、天井部が平坦で、口縁部は、天井部から直角に下がっており端部はやや尖らせている。宝珠形のつまみをはり付けている。天井部外面はヘラ削りの後ヨコナデ、内面はナデである。口縁部はヨコナデである。胎土は精良で灰色を呈する。口径13.1cm、器高3.3cm。

(134)、(135)は甕である。いずれも口縁部が、ラッパ状に開いて立ち上がっている。端部は、(134)が上方につまみ出している。(135)は、外側に巻き込むように肥厚させている。調整は、

いずれもヨコナデである。胎土は、精良で灰色を呈する。口径は(134)が26.7cm、(135)が20.3cmである。

(136)は壺底部である。高台は、やや外下方に張り出し断面方形を呈している。はり付け高台である。体部は、直線的に外上方に立ち上がる。器壁は厚い。高台部、体部外面は、ヨコナデ、内面は、強いヨコナデである。胎土は、長石などの砂粒を多く含み灰色を呈する。高台径8.7cm。

以上のように井戸1、落ち込み1、第2層出土遺物を概観してきた。井戸1出土遺物は、出土状況が、前記したように一括性が高いものである。土師器杯は、いずれも口縁部の外傾化が著しく、内面に暗文を施すものと、口縁部は外傾するが、若干内弯して立ち上がりe手法で仕上げるものとの2つのタイプがある。これらの杯は、平城京V群の土器の特徴を備えていると言えよう。土師器甕は、(115)のように内面に青海波状の当て板の痕跡が存在するものがあるが、これは須恵器の製作技法をまねたものとして特異な土器である。

(117)の羽釜は、口縁部の外反度は比較的弱く、鍔の付く位置が口縁部により近い点を考慮すれば、東大阪市皿池遺跡[3]、長岡京SD0731[4]、船橋遺跡[5]などで出土している羽釜と若干の差異は認めうるものの、よく類似している。概ね8世紀中葉である。これは、土師器杯とほぼ同一時期である。従って井戸1の廃絶年代は8世紀中葉を下限としていると言えよう。

落ち込み1出土の須恵器は、蓋は、返り・宝珠つまみがあることからすれば7世紀代までさかのぼる資料である。身は、高台が付いていることからすれば8～9世紀の所産であると言えよう。

第2層出土土器は、年代幅が大きく概ね6世紀前半～8世紀代のものである。特に(129)・(132)の杯身、杯蓋は、杯身の口縁部の立ち上がりの内傾度が著しい特徴からすれば6世紀前半代まで上がる資料である。(133)は、天井部が箱形で、宝珠つまみが付く特徴を持っている。これは、陶巴Ⅳ期第1段階[6]から出現する器形である。

6）第6ピット

層序（第68図）

第1層　盛土　　道路建設時の盛土及び、耕土・床土を含む。

第2層　茶灰褐色シルト質粘土　　奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土する遺物包含層。（遺物包含層Ⅰ）

第3層　灰青色シルト　　奈良時代・平安時代の遺構面。（遺構面Ⅰ）第3ピット～第5ピットで検出した遺構面Ⅰと若干の差違は認めうるものの層質はほぼ同一である。古墳時代前期の土器微量、流れ込みで含む。

第4層　黄褐色粘土　　若干シルト質。無遺物。

第5層　淡黄灰褐色粘土　　下半はシルト質が強い。無遺物。

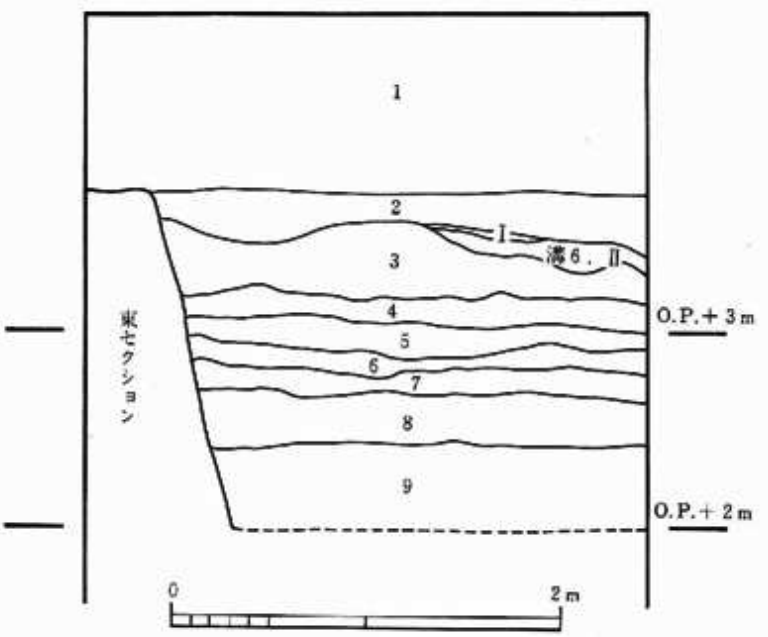
第6層　黄灰褐色シルト　　下半は細砂中心。無遺物。

第7層　暗青灰色細砂　　上半はシルト質が強い。無遺物。

第8層　暗灰褐色シルト　　暗灰色細砂のラミナ有り。下半は細砂中心。無遺物。

第9層　灰白色細砂　　自然流路。層厚は2m以上である。無遺物。

当該地における層序の中で、遺物包含層は第2層（遺物包含層Ⅰ）のみである。その他の層はすべて無遺物層であり、考古遺物は含まれていない。唯、第3層に庄内式土器が微量出土しているが2次堆積である。また、第3層（遺物面Ⅰ）は、奈良時代から平安時代の遺構面を形成して



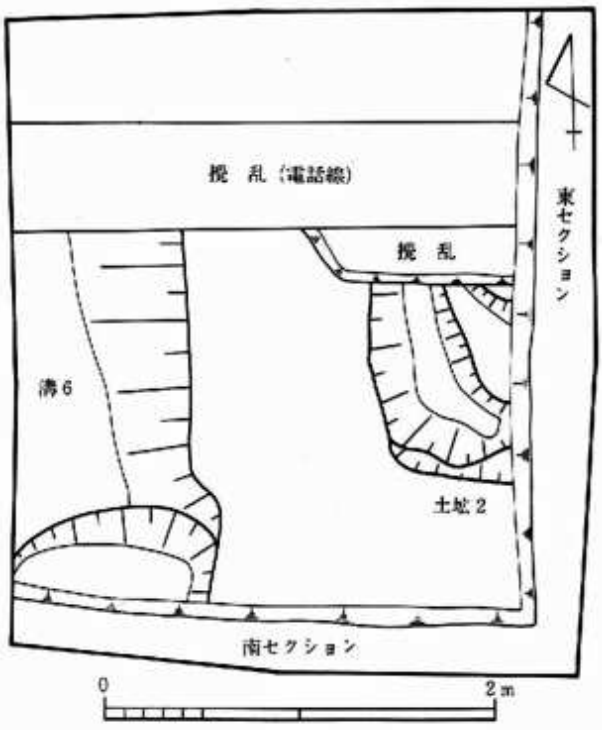
第68図　第6ピット南壁断面実測図

おり、溝・土坑等を検出した。第9層は、自然流路を形成しており、層厚が2m以上存在する。調査中は湧水が激しく第9層以下を確認することができなかった。

遺構（第69図）

検出した遺構は、遺構面Ⅰで溝1条・土坑1基である。いずれも削平が著しく残存状況は良好ではなかった。

溝6　検出幅1m 6cm、深さ20cmを測り、断面皿状を呈する溝である。東肩のみ検出し、全体の幅は明らかにし得ないが、約2mの幅になると思われる。溝の南は1段約15cm下がっており、溜り状を呈している。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐色シルト質粘土で、下層は暗茶褐色細砂である。遺物は須恵器・土師器が細片で少量出土した。溝の時期は、遺物が細片である為明確ではないが、他ピットとの層序関係で見ると下限を平安時代後半に設定できる。



第69図　第6ピット遺構平面実測図

土坑2　検出幅1m、深さ30cmを測る、不定形な土坑である。断面は浅い椀状を呈している。北・南側とも2段に堀り込んでいる。埋土は暗茶褐色粘土質シルトで、遺物は、須恵器・土師器が細片で少量出土した。時期は、溝6同様明確ではないが、やはり平安時代後半のものであろう。

出土遺物（第72図・第73図）

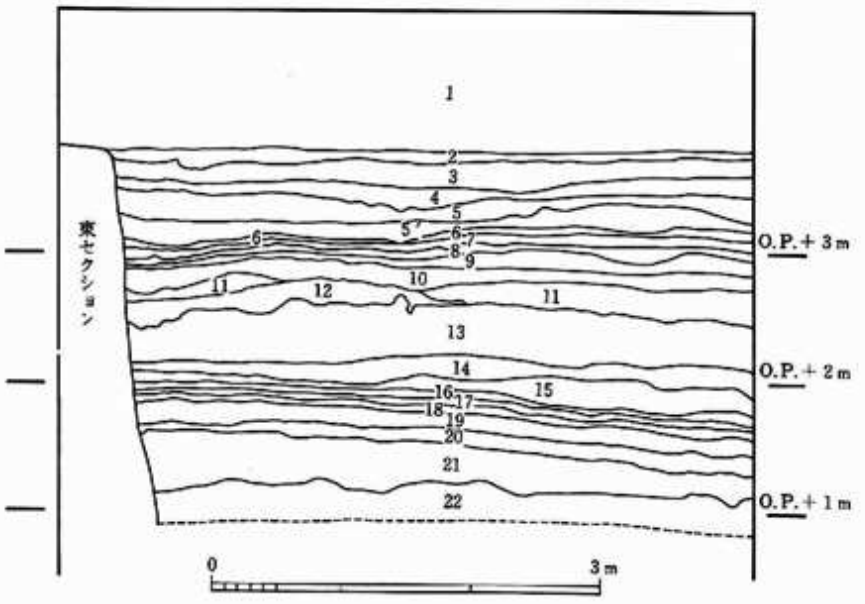
遺物は、第2層、第3層、溝6、土坑2で土師器、須恵器をそれぞれ細片で少量検出した。第3層、土坑4出土遺物以外は、すべて細片であるため図化できなかった。

土坑2（第72図）

土師器甕(138)である。肩があまり張らず、頸部から口縁部にかけては、「く」の字状に外反し、端部は面を作り出している。体部はナデ、口縁部はヨコナデである。胎土は、長石、くさり礫などを含み、赤褐色を呈している。口径15.1cm。

第3層（第73図）

土師器壺、甕がある。(143)は壺である。平底気味の底部に、体部は球形に近いたまご形を呈している。頸部から口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめている。体部外面は、あらいヘラミガキ、内面は、あらいナデ、頸部、口縁部は、ヨコナデを施している。胎土は、



第70図　第7ピット南壁断面実測図

長石、雲母を少量含み、赤黄褐色を呈している。口径15.5cm、器高28.8cm。

(141)、(142)は、甕である。いずれも口縁部が「く」の字状に外反しており、端部は(141)が、外上方につまみ出し、(142)は、面を持っている。内面はハケメの後ヨコナデ、外面は、ヨコナデである。胎土は、いずれも角閃石、雲母を多量に含み、暗茶褐色を呈している。生駒西麓産。口径は、(141)が19.3cm、(142)が17.9cmである。

上記のように当該ピットの出土土器は、少量であるため、主体となる時期決定は困難である。(138)の甕は、平安時代に通有のもので、詳細な時期は不明であるが概ね9～10世紀代と思われる。(141)～(143)の土器は、庄内期のもので、特に(141)、(142)は、典形的な庄内甕である。

7）第7ピット

層序（第70図）

第1層　盛土　　道路建設時の盛土及び耕土を含む。

第2層　暗青灰色シルト質粘土　　床土。中世から近世の遺物を若干含む。

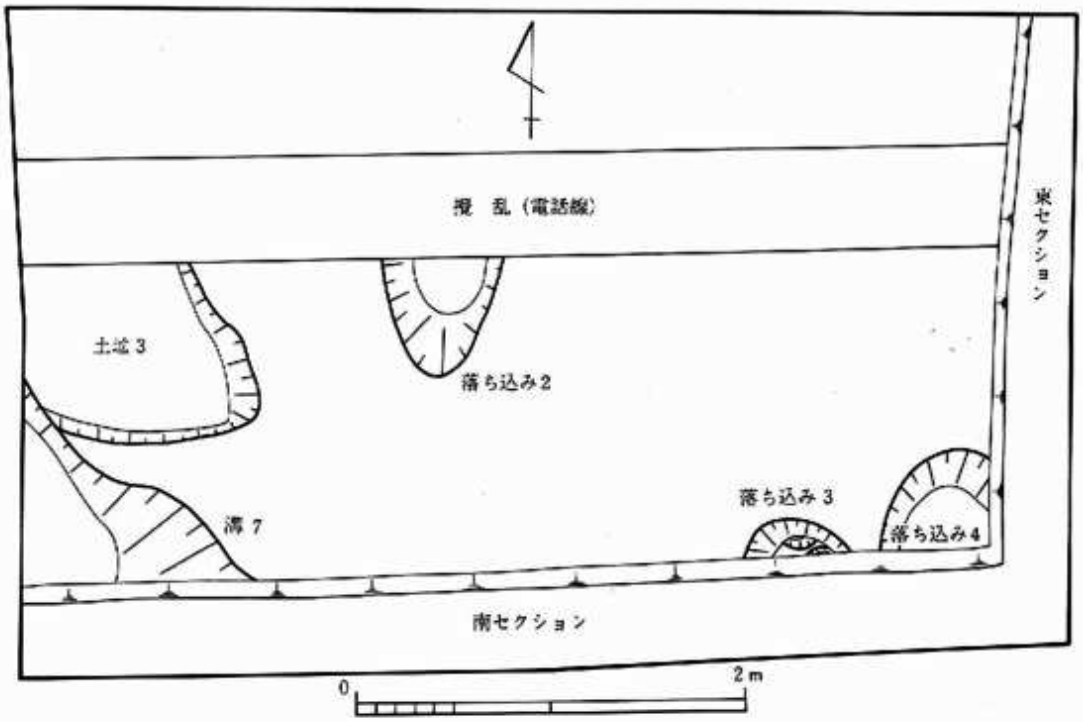
第3層　暗茶褐色シルト質粘土　　奈良時代から鎌倉時代の遺物を含む遺物包含層。(遺物包含層Ⅰ)　シルト質が強い。

第4層　茶褐色シルト　　奈良時代から平安時代の遺物を含む遺物包含層。(遺物包含層Ⅱ)　粘性が強い。

第5層　茶灰色シルト　　奈良時代から平安時代の遺構面。(遺構面Ⅰ)鉄分を多く含む。若干粘性有り。無遺物。

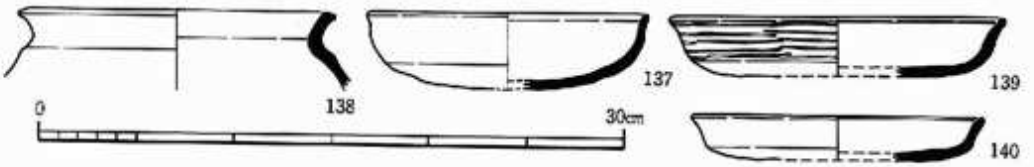
第5'層　茶灰褐色シルト　　上層よりも粘性が強い。無遺物。

第6層　茶灰色粘土　　鉄分を多く含む。若干シルト質。無遺物。



第71図　第７ピット遺構平面実測図

第７層　暗茶灰色粘土　　古墳時代前期の遺物を含む遺物包含層。（遺物包含層Ⅲ）
第８層　茶灰青色粘土　　下半はシルト質が強い。無遺物。
第９層　青灰色シルト　　鉄分を多く含む。若干粘性有り。無遺物。
第10層　茶灰色粘土　　上半は若干シルト質。無遺物。
第11層　暗灰色粘土　　炭化物を若干含む。無遺物。
第12層　暗灰色シルト　　ピット東半のみに検出。無遺物。
第13層　灰青色シルト　　木片・炭化物を若干含む。暗灰色粘土をレンズ状に含む。上半は粘性強し。無遺物。
第14層　暗灰色シルト　　黒褐色粘土をブロック状に含む。無遺物。
第15層　灰褐色砂　　上半は粗砂、下半は細砂～シルト。無遺物。
第16層　淡黒褐色粘土　　炭化物を若干含む。無遺物。
第17層　青灰色シルト　　粘性が強い。無遺物。
第18層　暗灰色粘土　　無遺物。
第19層　黒褐色粘土　　植物遺体・炭化物を多く含む。無遺物
第20層　黒褐色シルト　　遺物包含層Ⅳと同一層と思われるが、遺物は出土しなかった。
第21層　青灰色シルト　　遺構面Ⅲと同一層と思われるが、遺構は検出できなかった。下半は細砂。無遺物。
第22層　灰色細砂。　下半は細砂～粗砂。無遺物。



第72図　第6ピット土坑2・第7ピット溝7出土遺物実測図

当該地で検出した遺物包含層は3層である。第3層は、奈良時代から鎌倉時代までの遺物が出土する。(遺物包含層Ⅰ)第4層は、奈良時代から平安時代の遺物が出土する。(遺物包含層Ⅱ)第7層は、当該地のみ存在する古墳時代前期の遺物包含層である。(遺物包含層Ⅲ)出土する遺物は、すべて庄内式土器である。出土量はさほど多くないが、遺物を見る限り庄内期の単一包含層である。遺構面は、第5層(遺構面Ⅰ)のみで、他の層は検出していない。その他の層はすべて無遺物層で、考古遺物は出土しなかった。

遺構（第71図）

遺構は第5層上面(遺構面Ⅰ)で、溝1条・土坑1基・落ち込み3個を検出した。これらの遺構は、削平が著しく残存状態は良好ではない。

溝7　東肩のみ検出した。検出幅74cm、深さ1m20cmを測り、断面椀状を呈する溝である。全体の幅は約2m以上になると思われる。堆積土は、暗褐色粘土質シルトで、遺物は、土師器・須恵器が多く出土した。土器から見る限り、溝の時期は平安時代前半であろう。

土坑3　検出幅1m43cm、深さ30cmを測り、ほぼ方形を呈する。断面は浅い椀状である。溝7によって西側の一部を切られている。埋土は茶褐色粘土質シルトである。遺物は土師器が細片で出土した。時期は遺物から決定できないが、溝8との切り合い関係より下限を平安時代前半に置くことができよう。

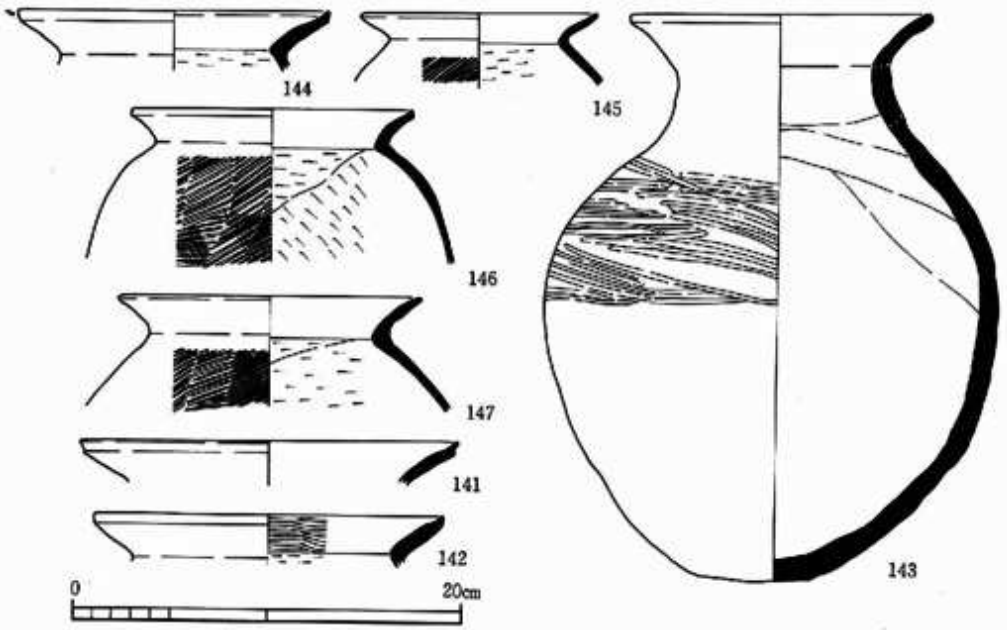
落ち込み2・3・4　いずれも円形あるいはたまご形を呈している。落ち込み1は最大幅62cm、深さ7cm、落ち込み2が最大幅56cm、深さ5cm、落ち込み3が最大幅56cm、深さ4cmを測る。埋土はいずれも暗褐色砂質シルトで、遺物は出土しなかった。時期は、遺物が出土していない為明確ではないが、層位関係から平安時代であろう。

出土遺物（第72図・第73図）

当該ピットからは、第3層、第4層、第7層、溝7、土坑3より少量の土師器、須恵器が出土した。土器は、細片が多く図化可能なものはごく少量である。

溝7(第72図)

いずれも土師器杯である。(137)は、体部が内弯して立ち上がり、口縁部は若干外反し、端部は丸くおさめている。体部、口縁部はヨコナデである。胎土は、長石、くさり礫を含み、明赤褐色を呈している。口径は14.2cm。器高4cm。(139)は、体部が若干内弯して立ち上がり、口縁部は外反して、端部を丸く肥厚させている。口縁部内面に沈線を一条施している。体部外面は、横方向のヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデである。胎土は長石、雲母を含み、黄赤褐色を呈している。口径16.7cm、器高3cm。(140)は、体部から口縁部にかけて若外反しながら立ち上



第73図　第6ピット第3層・第7ピット第7層出土遺物実測図

がり、端部を丸くおさめている。口縁部内面に浅い沈線を一条施している。体部外面、口縁部ともヨコナデ調整である。胎土は、長石粒を多く含み、明赤褐色を呈している。口径14.6cm、器高2.2cm。

第7層(第73図)

いずれも土師器甕である。口縁部は、「く」の字状に外反し、端部をつまみ上るもの(144)(145)(146)と、丸くおさめるもの(147)がある。体部は、全体的に肩が張るものが多いが、(146)のようにあまり張らないものもある。体部外面は、細いタタキの後あらいハケメを施し、内面はヘラ削りである。いずれもヘラ削りによる頸部に鋭い稜を有している。口縁部はヨコナデである。胎土は、角閃石、雲母を多く含み、茶褐色を呈している。すべて生駒西麓産である。口径は、(144)が15.8cm、(145)が11.8cm、(146)が14.3cm、(147)が15.3cmである。

以上のように当該ピット出土の土器は、細片で少量であるが、第7層出土土器は、比較的時期的なまとまりがある。いずれも庄内式甕の特徴を備えている。庄内式土器の中でもやや新相であろう。溝7の土器は、(139)・(140)のように奈良時代のものが存在するが、(137)のように9～10世紀代のものが多い。

8）第８ピット

層序（第74図）

第１層　盛土　　道路建設時の盛土及び耕土・床土を含む。

第２層　暗青灰色粘土　　中世から近世の遺物を少量含む。

第３層　灰青色シルト質砂　　奈良時代から平安時代の遺物を少量含む。遺物包含層Ⅰの続層と思われる。

第４層　灰青色砂　　シルト質が強い。無遺物。

第５層　茶褐色シルト質粘土。　下半は粘性強し。無遺物。

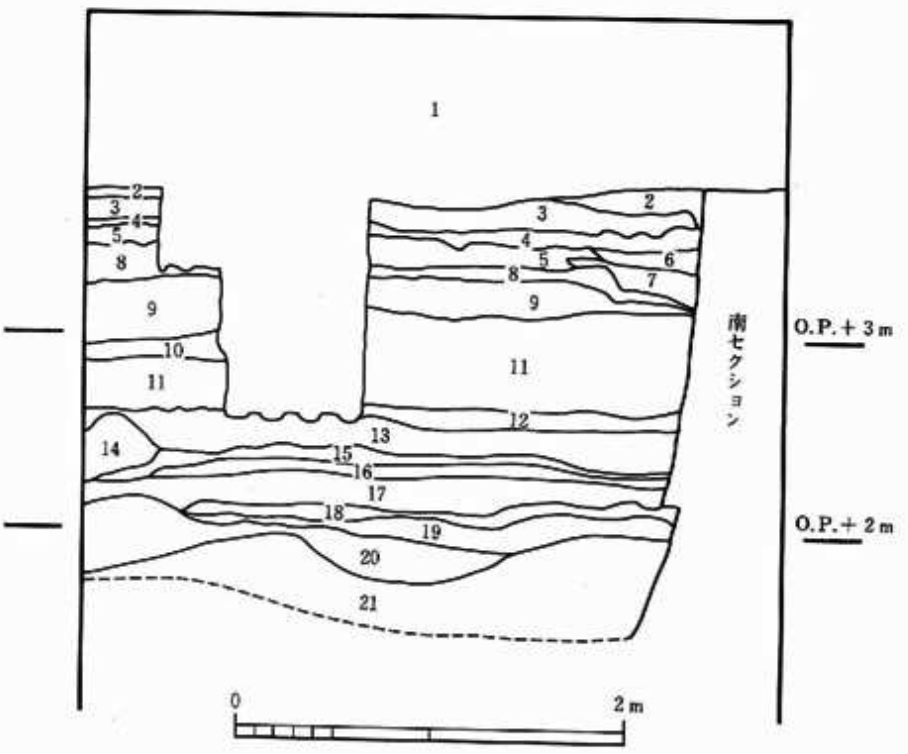
第６層　灰色細砂　　自然流路。無遺物。

第７層　暗灰色砂　　自然流路。無遺物。

第８層　茶褐色粘土　　無遺物。

第９層　灰青色シルト　　上半は粘性強し。無遺物。

第10層　暗灰色シルト質粘土　　ピット中央部で消滅する。無遺物。



第74図　第８ピット東壁断面実測図

第11層　灰青色シルト質砂　　下半はシルト。無遺物。

第12層　暗褐色シルト　　若干粘性有り。無遺物。

第13層　暗灰色粘土　　植物遺体・炭化物若干含む。無遺物。

第14層　灰青色シルト　　部分的に検出。無遺物。

第15層　灰色砂　　細砂～中粒砂主体。無遺物。

第16層　暗灰色粘土　　若干シルト質。無遺物。

第17層　暗灰青色シルト　　下半は粘性強い。無遺物。

第18層　暗灰色粘土　　植物遺体多く含む。無遺物。

第19層　暗灰褐色シルト質砂　　上半はシルト質強し。無遺物。

第20層　暗灰色細砂　　上半はシルト質強し。無遺物。

第21層　灰白色粗砂　　下方に行くほど砂礫主体。無遺物。

当該地における遺物包含層は、第3層のみである。しかしながら遺物の出土量は非常に少なく、細片が多い。その他の層はすべて無遺物層である。さらに遺構面も検出しておらず、従って遺構はない。

9）第9トレンチ

調査地点は若江北町1丁目地内の南北に走る道路であり、下水道埋設の管路と4人孔部、約124㎡について発掘調査を実施した。管部は幅1.2m、人孔部は幅約2mで全長102mの細長い地域である。調査は管埋設などの工事と平行して行なったため1管路・1人孔部を1区間とした。盛土約1mを機械掘削して、以下1.5mを人力掘削によって調査した。

層序（第76図）

調査地が南北に長いため、南と北で層に大きな相違があり、第1区と第4区の東西東西方面を記載する。

第1区基本層序

第1層　盛土

第2層　暗青灰色粘質土(旧耕土)　　磁器・陶器・土師器の小片を含む。

第3層　青灰色土　　土師器・陶器の小片を含む。

第4層　茶灰色粘質土　　土師器・黒色土器・須恵器・埴輪を含む。

第5層　暗青灰色粘土質シルト

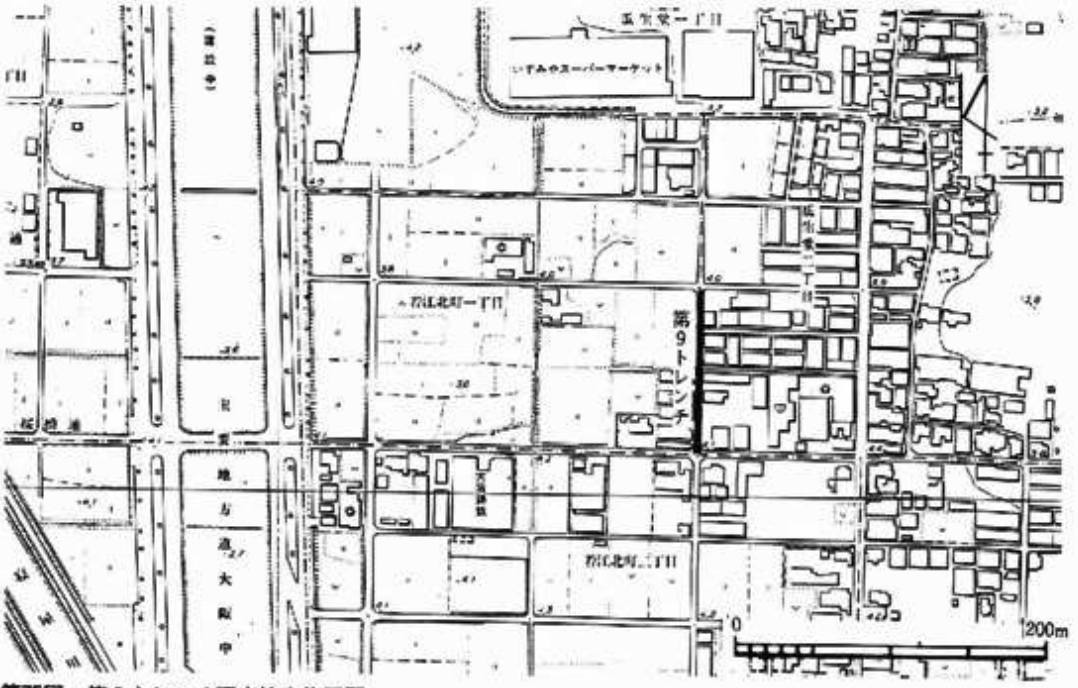
第6層　暗灰色粘土　　土師器小片を含む。

第7層　黄褐色細粒砂

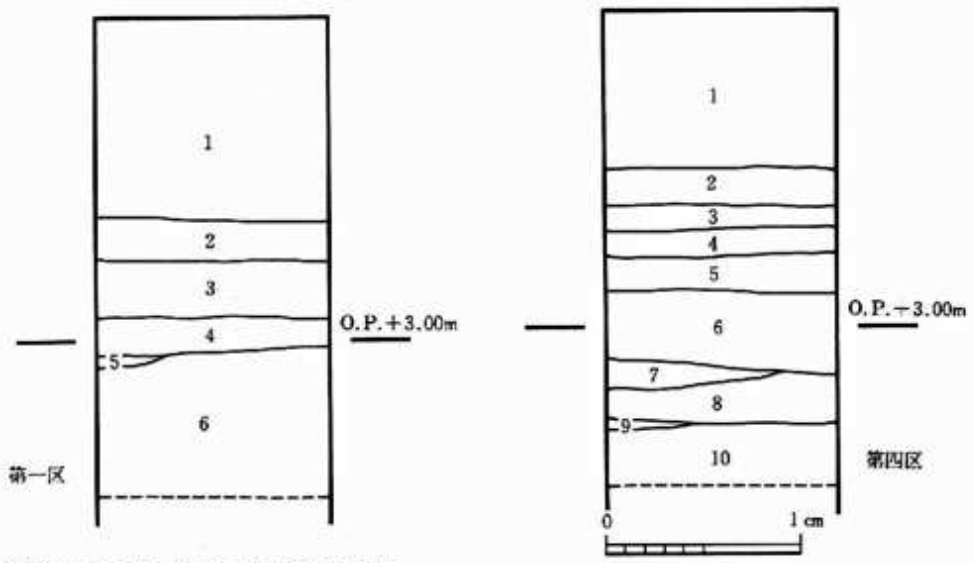
第8層　緑灰色シルト　　土師器小片を含む。

第9層　暗青灰色シルト

第10層　暗灰色粘土



第75図　第9トレンチ調査地点位置図



第76図　第1区・第4区東西断面実測図

第4区基本層序

第1層　盛土

第2層　暗青灰色粘質土(旧耕土)　　磁器・陶器・土師器の小片を含む。

第3層　青灰色土　　陶器・土師器・の小片を多く含む。

第4層　暗褐色粘質土　　陶器・土師器・瓦器の小片を含む。

第5層　茶灰色粘質土

第6層　暗灰色中・粗粒砂

遺構（第77図・第78図・第79図・第80図・第81図・第82図・第83図）

第1区・第1遺構　　第4層上面において溝9、土坑4・5を検出した。

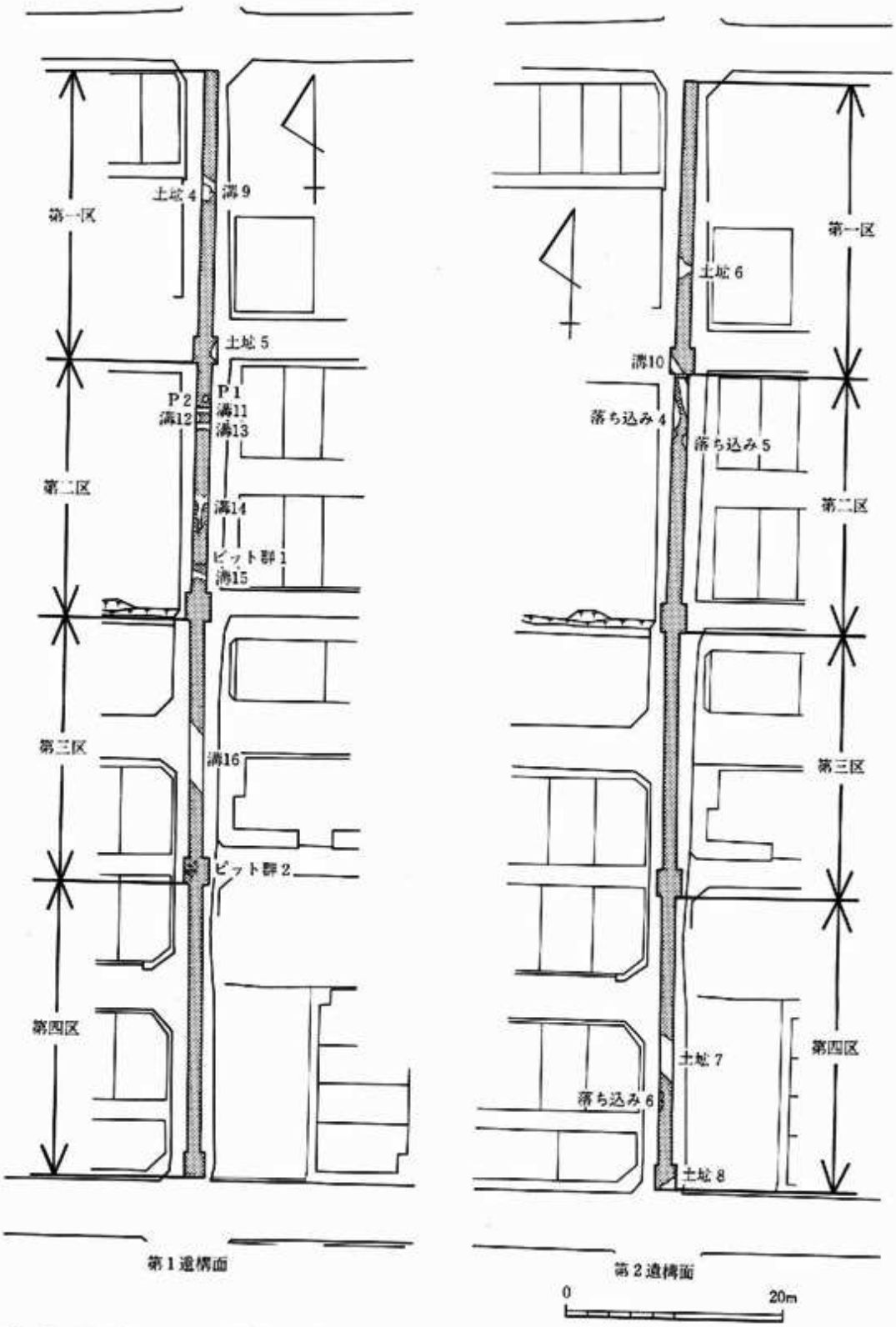
土坑4は隅丸の長方形の土坑で、南北1.5m、東西は調査範囲内で0.8m、深さ25cmを測る。溝溝9は土坑4により1部切られている。幅1.1m、深さ40～42cmで、北西方向に若干底くなっている。土坑4・溝9ともに遺物はまったく出土せず、性格、時期は不明である。

土坑5は第1人孔部の東側で検出され、南北2m、東西は調査範囲内で0.8m、深さ25cmの楕円形の土坑である。土坑内には炭を含む黒褐色土が入っており、多量の瓦器椀、瓦器皿、土師器椀、土師器皿などを検出した。遺物はすべて壊れていた。瓦器椀・皿と土師器椀・小皿の型式とも13世紀初頭ごろのものと考えられる。

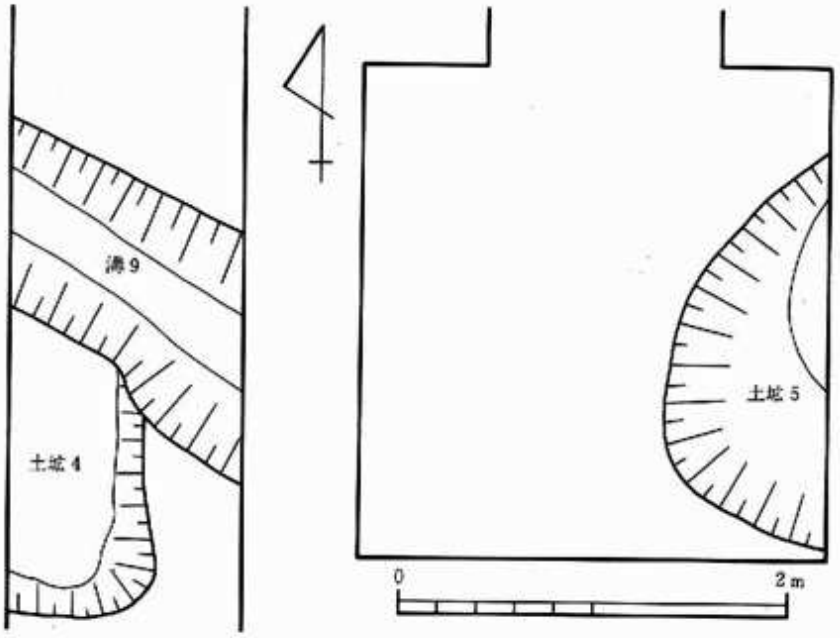
第2区・第1遺構　　ピット1・2、溝10・11・12・13・14およびピット群を検出した。

ピット1は径50cm、深さ10cmの円形であり、磁器片、土師器小片を検出した。ピット2は径25cm、深さ5cmで西半分は調査区域外であり、遺物は出土しなかった。

溝10・溝12は東西に平行して延びており、溝11は両溝を繋くように南北に検出された。溝10は幅55cm、深さ13～17cmで若干西へ深くなっている。溝12は巾60cm、深さ22cmであり、南肩は2段になっていた。溝11は南北95cm、深さ5cmで浅い溝である。溝は切り合い関係から古い順



第77図　第1遺構面・第2遺構面検出遺構位置図



第78図　第1区第1遺構面平面実測図

に溝10・溝11・溝12となるか、各溝内からは磁器片、土師器の小片が出土しており、ほとんど時間差はなく近世以降のものである。

溝14は幅15～50cm、深さ10cmと南北に延びるもので、北端で大きく広がっている。北側はゆるやかに傾斜しているため北肩は検出できなかった。遺物は磁器、瓦、土師器の小片が出土している。ピット群1は径20cm前後、深さ10.5cmの小ピットがほぼ東西に40cm間隔で検出した。

溝15は幅45～80cm、深さ20cmで東西に延びている。北肩東側には径15cm、深さ7cmの小ピットを検出した。溝内からは瓦、土師器、陶器の小片が出土した。

第1・2区　第2遺構　　第6層上面において土坑6・溝10・落ち込み1・2を検出した。

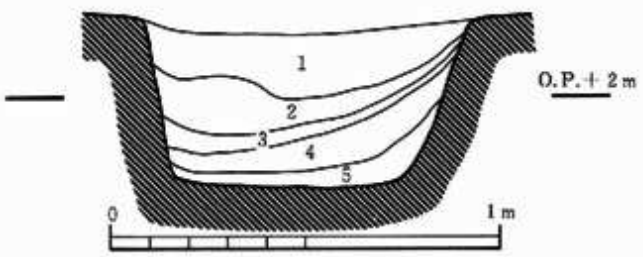
土坑6は南北185cmで東西は調査範囲外に広がるため不明、深さ14cmである。土坑東側は狭くなり、径50cmの円形の落ち込みがあった。遺物はまったく出土せず、性格、時期は不明である。

溝10は北北西から北西方向に延び、幅85cm、深さ44cmを測る。堆積は2期に分けられ、層は5層に分層できる。溝内からは遺物はまったく出土しておらず、時期は不明である。

落ち込み1・2はそれぞれ西・東にゆるやかに約10cm下っているが、性格は不明である。

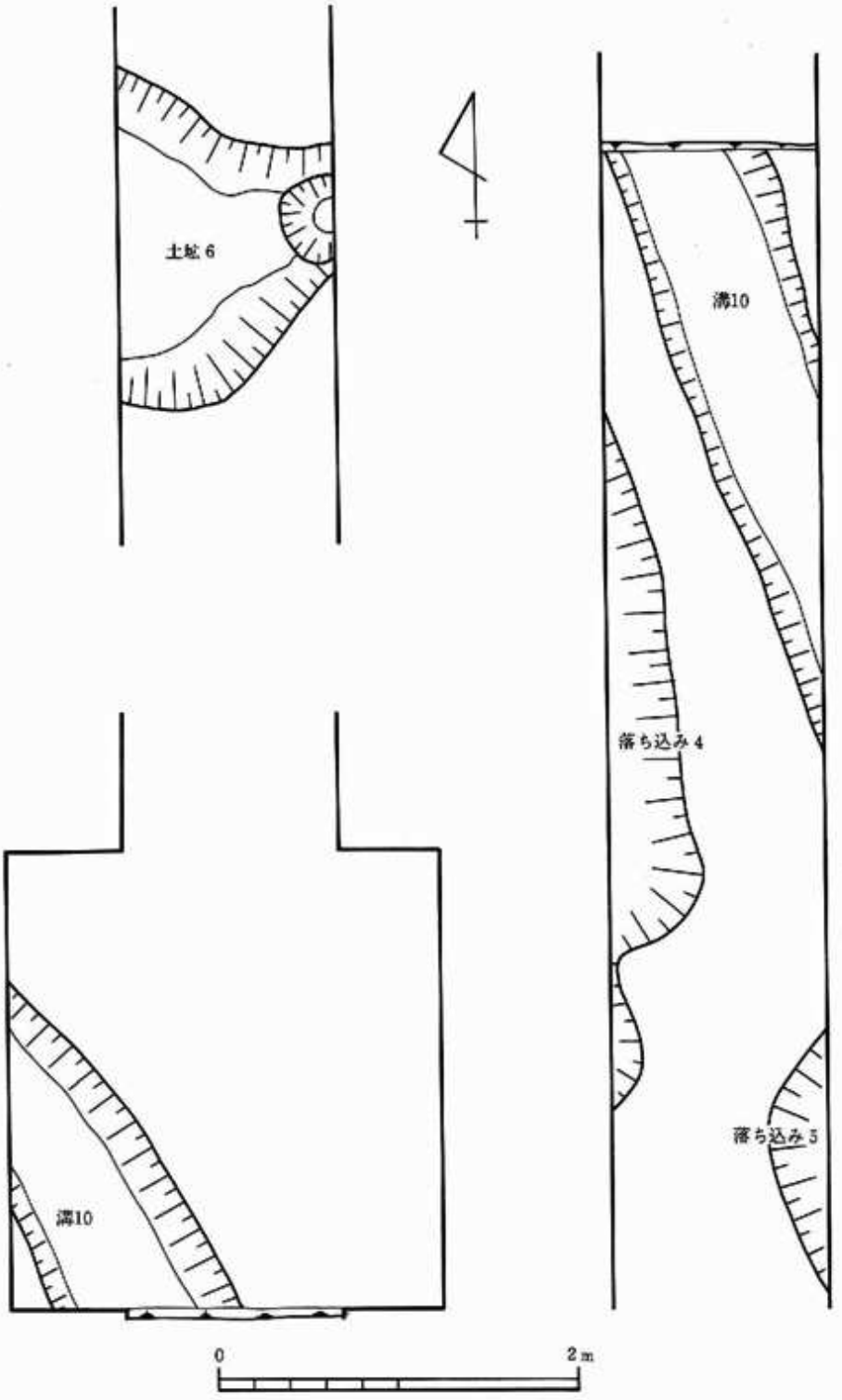
第3区においても第4層上面で溝15、ピット群2を検出したが近代以降のものである。

第4区　第2遺構　　第5層上面において土坑7・8、落ち込み

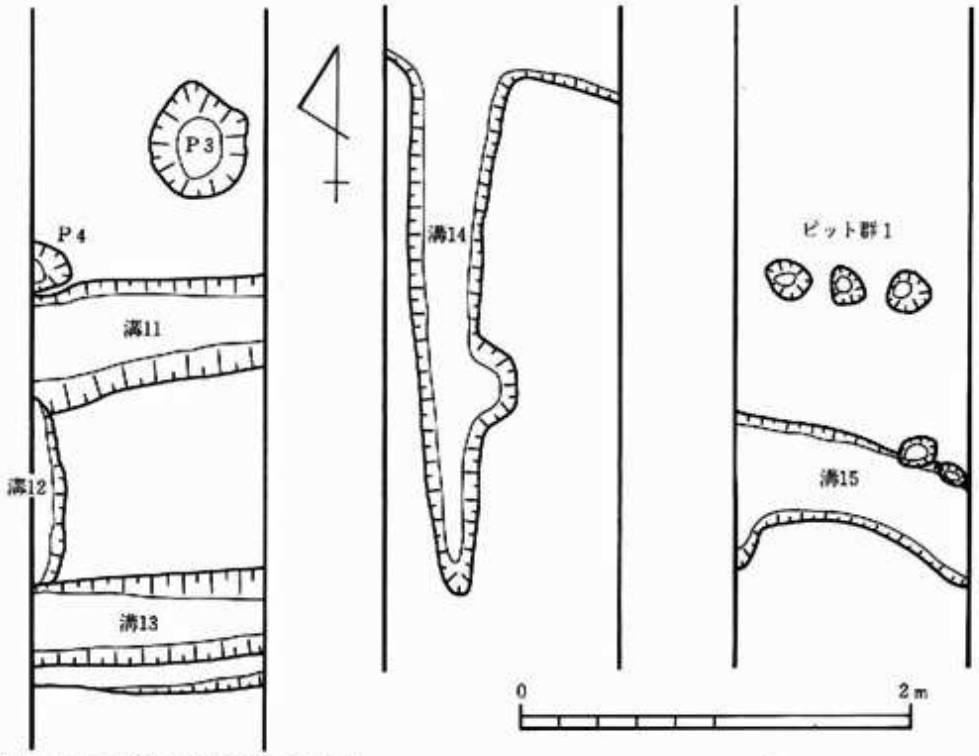


1．暗灰色粘質シルト　2．灰白色中粒砂　3．暗灰色砂質粘土
4．黄灰色中粒砂　5．暗灰色シルト質粘土

第79図　溝9断面実測図



第80図　第1，2区・第2遺構面平面実測図



第81図　第２区第１遺構面平面実測図

３を検出した。

土坑７は南北3.3m、東西は調査区域外に広がり不明、深さは50cmであった。土坑内からは炭とともに焼土塊も入っていたが、土器などの遺物はまったく出土しなかった。落ち込み３は西側にゆるやかに落ちていた。

土坑８は調査地域南東隅で検出したため大きさは不明である。深さは45cmで４層に分けることができる。遺物は土器片５点を検出したが、小片であるため性格、時期は不明である。

出土遺物

第３層（第84図）

瓦質土器(148)　火鉢口縁片と考えられる。口縁端部を突出させて面を作り、断面四角形を呈している。口縁部には沈線と文様を施しており、胎土は良質で暗青灰色している。

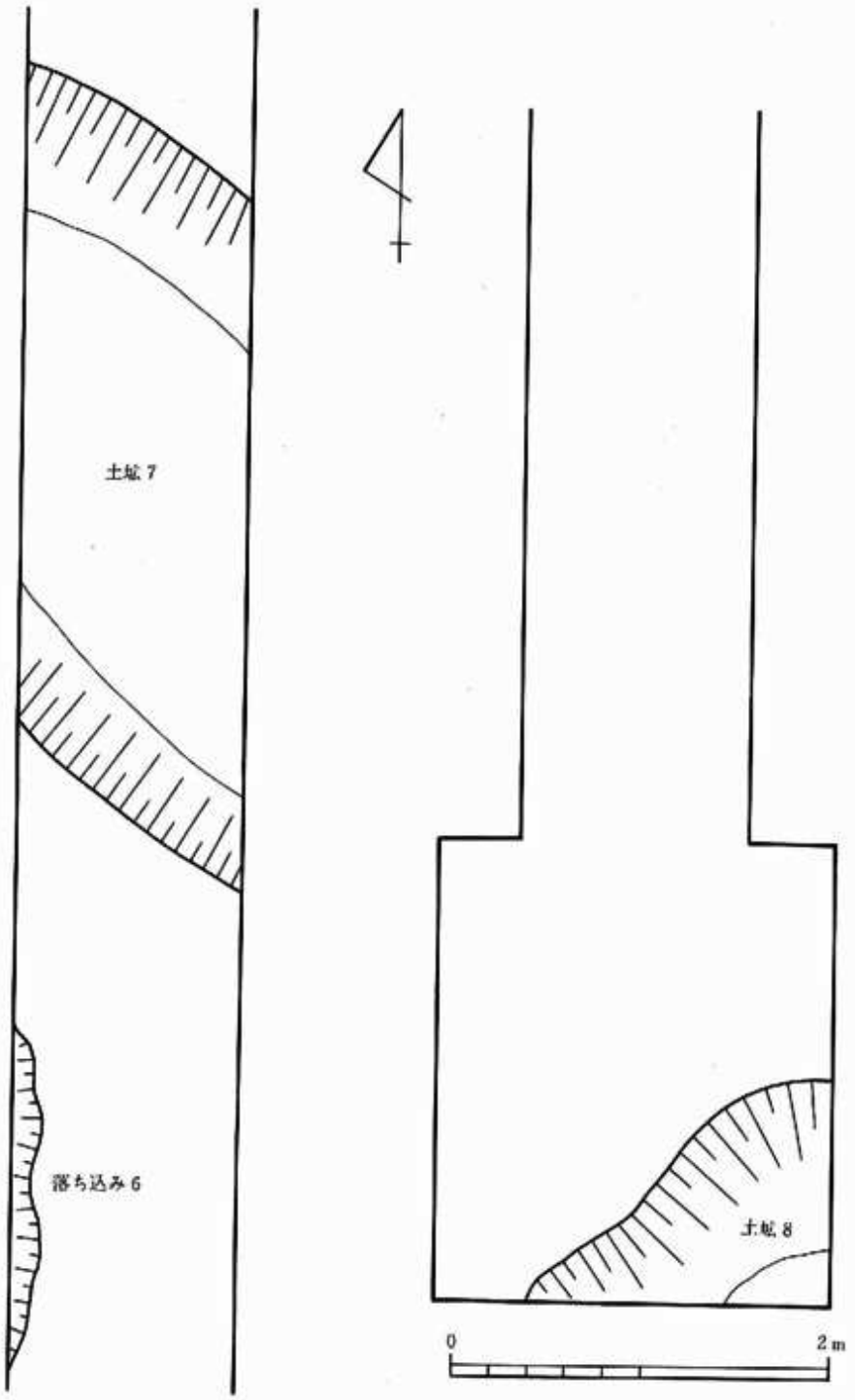
形象埴輪(149)　小片のため形態は不明。一面は面を取り四角くおさめており、底部の一部と考えられる。破片上部には横・縦に沈線による文様施している。

土師器小皿(150)　底面は広く、体部はゆっくり立ち上がり、口縁部を少し肥厚させて端部を丸くおさめている。底部外面、体部は指押えを施しており、口縁内外面はヨコナデしている。胎土は石英、長石、チャート粒砂を含み白褐色を呈する。

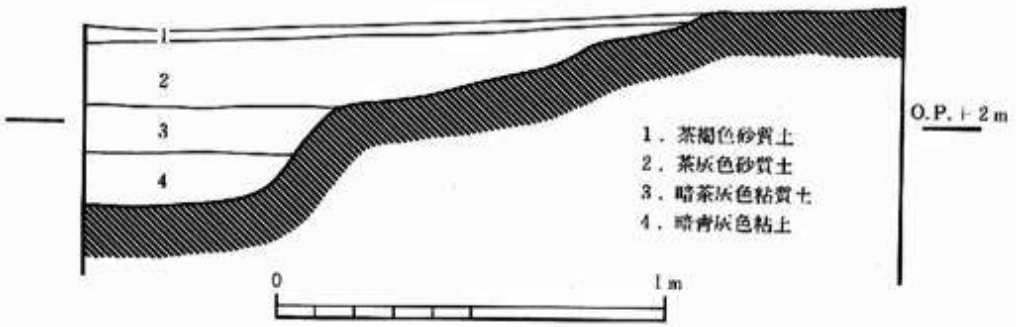
石器(151)　サヌカイトで、小さく打ちかいて刃部を作っている。横刃型剥器と考えられる。

須恵器(175)　杯身で、口径12cmを測る。口縁はやや外反ぎみに立ち、端部は内側に段を有する。受部は断面三角形を呈し、やや丸くおさめている。胎土は良質で青灰色を呈する。

土師器甕(172)　口縁片で、口径14cmを測る。口縁部は「く」の字に反外し、端部を丸くおさめている。口縁内外面ともヨコナデを施しており、体部内面はヘラ削りをおこなっている。胎土は精良で暗褐色を呈する。



第82図　第4区第2遺構面平面実測図



第83図　土坑8断面実測図

土坑5（第85図）

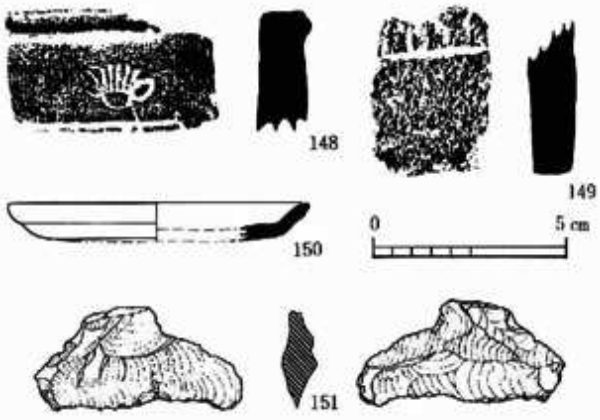
土師器小皿(152～154)　口径は7.5～8.2cm、器高は1.5cmを測る。152・154は底面が広く少し凹ませている。体部は短く立ち上がり、口縁部をやや外弯させて丸くおさめている。。153は体部をゆるやかに立ち上がらせ、口縁部を肥厚させている。底部・体部は指押え、口縁内外面はヨコナデを施している。胎土は長石・石英の粒砂を含み、152・154は白褐色、153は暗黄褐色を呈する。

土師器大皿(155・157)　口径は15cm、器高2.5～3cm。底部は広く、少し凹ませている。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部を丸くおさめている。底部・体部下半外面は指押え、内面はナデを施している。体部上半・口縁部内外面はヨコナデをしており、157はとくに強く端はやや外弯気味である。胎土は精良で石英・長石・チャート粒砂を含み、黄褐色を呈する。

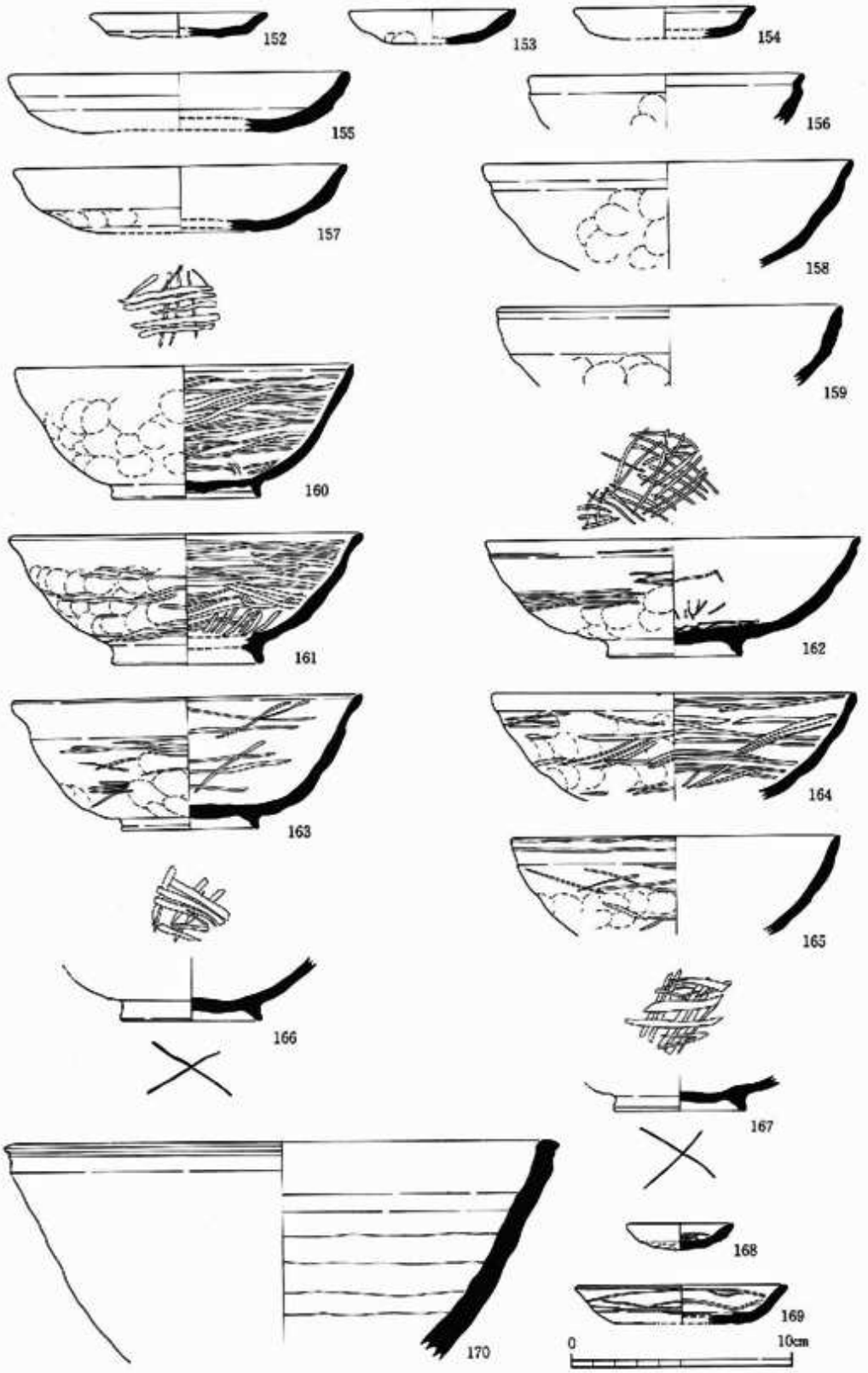
土師器椀(156・158)　口径は156が12.3cm、158は16.5cmを測り、ともに底部は破損している。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。体部外面は指押え、口縁部は強くヨコナデを施している。内面なナデており、若干ヘラミガキが見られるが、磨耗のため不鮮明である。胎土は良質で石英・長石・角閃石の粒砂を含み、白褐色を呈する。

黒色土器椀(159)　口径は15.3cmを測る。体部はゆるやかに立っており、口縁部を肥厚させて丸くおさめている。体部下半は指押え、上半及び口縁部はヨコナデを施している。胎土は精良で石英・長石・チャートの粒砂を含み、黒褐色を呈する。

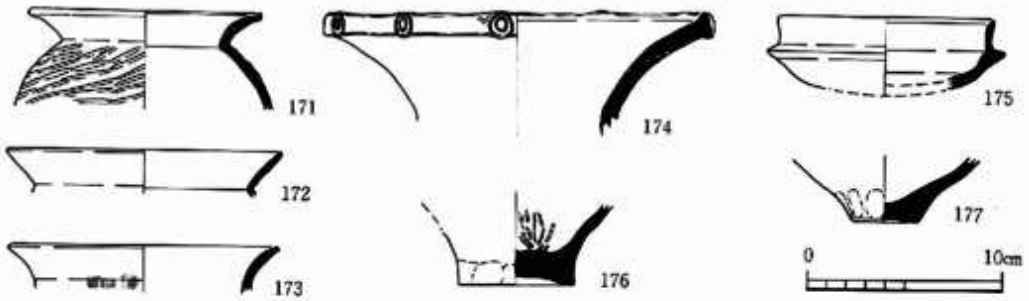
瓦器椀(160～167)　160～165は口径14.6～17cm、器高6cm、器高指数は3.8前後である。断面三角形の安定した高台をもつ底部から体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部を丸くおさめている。底部外面は高台をハリ付けた後ナデており、体部外面は指押え、口縁部はヨコナデを施している。内外面ともにヘラミガキを施し、見込みには斜格子の暗文が見られる。164・165



第84図　第3層出土遺物実測図



第85図　土壙5出土遺物実測図



第86図　出土遺物実測図

は底部を損しており、166・167は底部のみで上記のものと同形態である。166・167には底部外面に×印が施こされている。胎土は精良で長石・石英の粒砂を含み、黒褐色を呈する。

瓦器皿(168・169)　168は小皿で口径4.7cm、器高1.2cmを測る。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は肥厚している。169は中皿で口径9.4cm、器高9.4cmを測る。底面は広く少し凹ませている。体部はゆるやかに立ち、口縁部はやや外弯させて端部を丸くおさめている。ともに体部外面は指押え、口縁内外面はヨコナデを施しており、内外面にヘラミガキが見られる。

瓦質鉢(170)　口径24cmを測り、底部は不明。体部内面は横方向に平行して指押え、体部外面、口縁内外面はヨコナデを施している。口縁端部は面を作っており、端部直下に沈線が見られる。胎部は良質で石英・長石の粒砂を含み、内面灰色、外面暗青灰色を呈する。

溝3（第86図）

土師器、陶器、磁器の小片が多く出土したが、図化できたのは173だけである。

土師器甕(173)　口縁片で口径13.5cmを測る。口縁はそりぎみに外反し、端部を丸くおさめている。内外面ともヨコナデを施している。胎土は石英、長石の粒砂を含み赤褐色を呈する。

土坑4（第86図）

土師器片7点が出土。図化できるのは176だけである。

土師器底部(176)　底部は少し凹ませている。外面は指押えを施しているが、磨耗が激しく調整は不明確。胎土は石英、長石、金雲母の粒砂を含み、黄褐色を呈する。

第4層（第86図）

土師器甕(171)　口径10.7cmを測り、底部は欠損している。口縁部は「く」の字に外反し、端部をつまみあげている。口縁内外面はヨコナデしている。体部外面はタタキを施し、内面はハケ仕上げしている。胎土は石英、金雲母の粒砂を含み赤褐色を呈する。

第6層（暗灰色粘土）(第86図)

弥生土器・壺口縁(174)　口径19.3cmを測る。大きく外反して開き、端部は帯状に面を作り円形浮文をはりつけ、平行V状の沈線文様を有する。磨耗が激しく調整は不明である。

土器底部(177)　少し凹んだ底部から大きく開いて立ち上がり、外面は指押えを施している。

2．若江遺跡

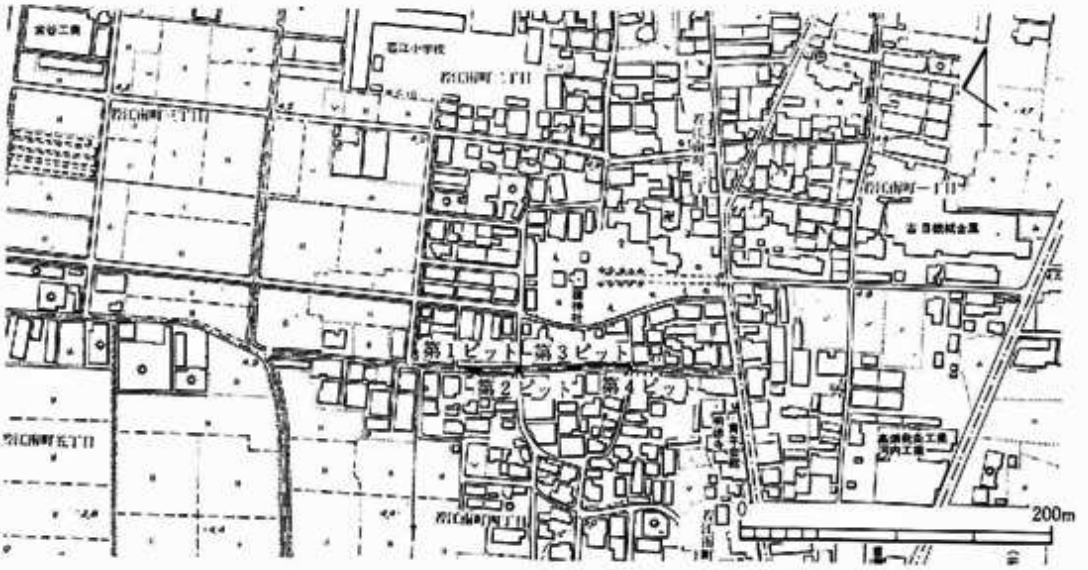
調査地は若江南２丁目～４丁目にわたる幅約2.5m の道路である。今回、下水道埋設に伴う４ピットについて調査を実施した。調査次数は、第26次である。

1）第１ピット

調査面積は東西6.8m 、南北1.8m の約12.5㎡である。現在の道路に伴う盛土および撹乱土約0.7m は機械掘削をおこない、以下約３m を人力掘削による調査を実施した。

層序（第88図）

第１層　盛土・撹乱土
第２層　灰茶色土　　陶器、磁器、瓦、土師器、埴輪を含む。
第３層　青灰色粘質土　　陶器、瓦、土師器を含む。
第４層　明黄褐色砂　　土師器を含む。
第５層　灰褐色砂
第６層　赤褐色砂
第７層　暗緑灰色シルトと暗青灰色粘土の互層。
第８層　暗黄褐色粒粒砂　　土師器を含む。
第９層　黄褐色細粒砂。
第10層　青灰色粘土
第11層　暗青灰色粘土
第12層　青灰色シルト



第87図　第１ピット～第４ピット調査地点位置図

第13層　暗灰色シルト質粘土

第14層　黒褐色粘土　　弥生時代前期・中期の土器を含む。

第Ⅰ層　暗青灰色粘質土　　溝1の埋土。瓦、陶器、磁器、土師器、木製品を含む。

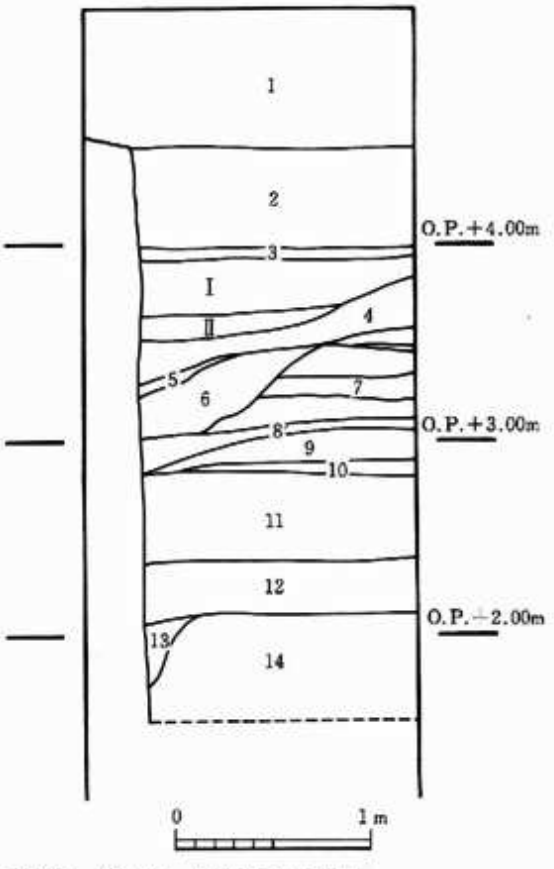
第Ⅱ層　暗灰色粘土　　溝1の堆積土。陶器、土師器を含む。

遺構（第89図）

当該ピットで検出した遺構は、東西に延びる溝1条だけである。この溝は昭和55年に約33m西で発掘調査を実施した第14ピットの溝6につながるものであり、第2ピット・第3ピットに続いている。

溝1は第7層上面において南肩を検出したが、溝の埋土である暗青灰色粘土は矢板の南側に入り込んでおり、本来の肩は検出できなかった。北肩も調査範囲外であり、まったく確認することができなかった。そのため溝の本来の幅は不明であるが、検出面では北矢板まで1.5mである。深さは0.4mを測り2層に分けることができ、南肩は東側で2段になっている。昭和55年調査の第14ピットの溝6に通じるものであるが、溝6が深さ1.1mあったのに対しかなり浅く、北肩2段目に見られた杭列のようなものはまったく検出できなかった。遺物は土師器、羽釜、陶器、磁器、瓦、木製品など多量に出土している。遺物にはかなり時間差があり、最も新しいと考えられるものから溝の埋った時期は16世紀後半ごろと思われる。

第14層黒褐色粘土には弥生時代前期～中期にかけての土器片が包まれており、上面で南北にのびる落ち込み状のものを検出したが、調査範囲の狭さ、深さの制限、湧き水によって遺構であるかどうかを確かめることはできなかった。



第88図　第1ピット東壁断面実測図

出土遺物

第2層は近代の攪乱土で古代から近代までの遺物が多量に出土しているが小片が多い。第3層からは中世から古代の遺物を検出している。溝1内には瓦、土師器、木製品など古代から中世の遺物が多量に含まれていた。第14層からは弥生時代前期から中期の土器小片を検出した。

第2層（第90図）

第2層からは陶器、磁器、瓦、瓦器、羽釜、埴輪が出土している。小片が多く図化の可能

なものは少ない。

染付(186)　椀であり、底のみで全形は不明である。高台は径3.8cmで、やや内弯ぎみに下がり端部は丸みをもち断面三角形を呈する。施釉は全体に及ぶが、内面底部周辺と畳付部には施されていない。高台外面から体部にかけて三条の直線、体部の文様—図形は不明—を青色に染付されている。色調は青白色を呈する。近世前半の伊万里と思われる。

土師器中皿(183)　口径は11.8cm、器高1.8cmを測る。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁を肥厚させて丸くおさめている。口縁内外面にはヨコナデ、体部外面は指押えによる成形の後ナデを施している。底部は少し凹ませており、内外面ともナデている。胎土は石英、長石などの粒砂を含み白褐色を呈する。

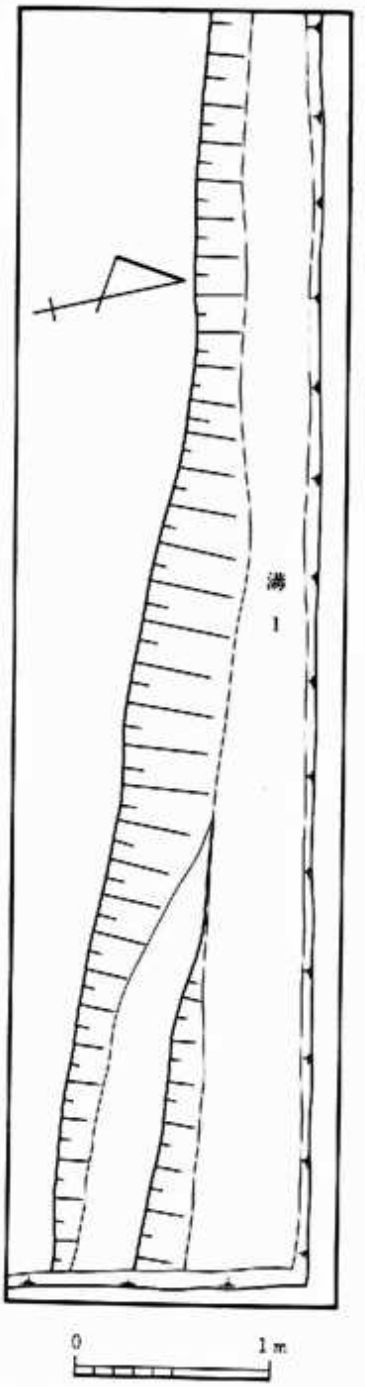
土師器大皿(185)　口径は15.6cm、器高は2.6cmを測る。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部を丸くおさめている。口縁内外面はヨコナデ、体部外面は指押えによる成形ののちナデを施している。胎土は石英、チャートの粉砂を含み、白灰色を呈する。

埴輪(188)　円筒埴輪片である。胎土は1～2mmの石英、長石、全雲母を含み、良質で明赤褐色を呈する。タガは断面台形で、稜が鮮明である。接合のあと上部をナデてのち下部をナデて仕上げている。体面調整はタテハケののちヨコハケを施しており、内面は指押えのあとナデている。

第3層（第90図・第92図）

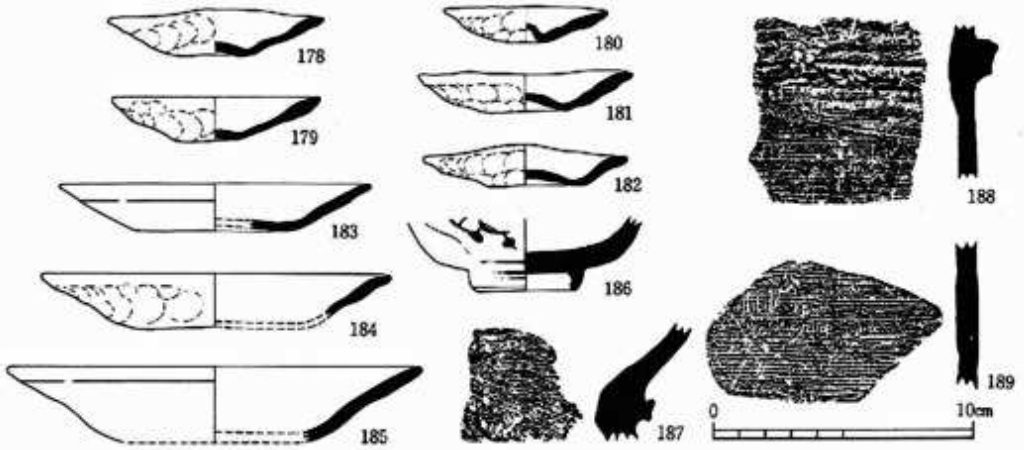
土師器、弥生土器、羽釜、擂り鉢、瓦が出土した。小片が多く図化可能なものは少ない。

土師器小皿(178～182)　178・179・181・182は口径7.6～8cm、器高1.4cm、180は口径6cm、器高1.4cmを測る。やや外弯しながら立ち上がり、口縁部は肥厚している。口縁内外面はヨコナデ、体部は指押えによる成形ののちナデを施している。底部は180が指でつき上げて深く凹ませている以外は、少し凹ませているだけである。底部外面は指押え、内面はナデている。胎土は良質で石英、長石の粒砂を含み白褐色を呈する。



第89図　第1ピット溝1平面実測図

土師器大皿(184)　口径13.3cm、器高2.1cm、器高2.6cmを測る。底部は広く、体部はやや内



第90図　第１ピット第２層・第３層出土遺物実測図

弯ぎみに立ち上がり段を有している。口縁は肥厚させて丸くおさめている。体部と底部の外面は指押えののちナデ、内面もナデを施している。口縁内外面もヨコナデ調整をしている。胎土は0.5～１㎜の石英、長石を粒砂を含み、白褐色を呈する。

摺り鉢(202)　瓦質であり、口径21.4cmを測る。口縁は断面三角形を呈し、少しつまみあげて丸くおさめている。体部内外面ともヨコナデを施し、外面は少し荒い。内面のカキ目は浅く高低差がある。胎土は１～３㎜の石英、長石粒砂を含み、青灰色を呈する。

溝１（第90図・第91図・第92図・第93図）

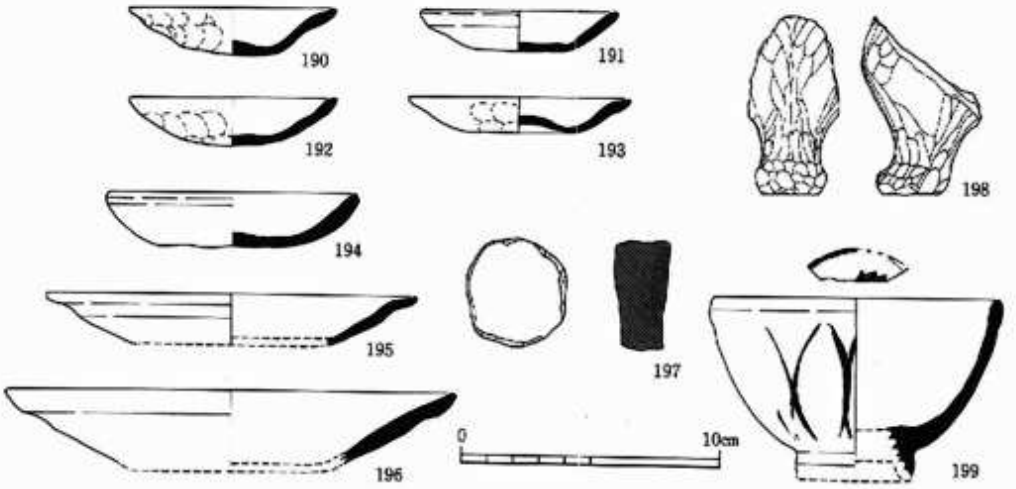
溝１からは土師器、埴輪、羽釜、瓦器、瓦、陶器、磁器、木製品とともに胡桃、種子(うり科)フナのえらぶたなども検出した。とくに瓦は平瓦、丸瓦の破片が多量に含まれており、奈良時代の瓦も多く出土した。

埴輪(187・189)　189は円筒埴輪片である胎出は１～２㎜の石英、長石、金雲母を含み、灰褐色を呈する。外面はタテハケののちヨコハケを丁寧に施している。内面はナデを調整している。187は朝顔形埴輪の頸部片で、一条のタガを有する。タガは接合のあとヨコナデを施している。外面は磨滅が激しく調整法は不明。内面はナデのあと口部にヨコハケを施している。胎土は１～1.5㎜の石英、長石、金雲母を含み灰褐色を呈する。

備前焼(201・203)　鉢の口縁部と摺り鉢の底部である。201は口径21.3cmで、体部は外反ぎみに立ち上がり、口縁はほぼ直上させて縁体をなしている。縁部は２条の凹帯をめぐらし、体部、口縁の内外ともナデを施している。胎土は0.5～２㎜の長石粒砂を含み、赤褐色を呈する。203は体部内外面とも強いヨコナデを施している。内面にはひとまとまり10条以上のカキ目が縦方向に間隔をあけて施されている。胎土は１～２㎜の粒砂を含み、暗赤褐色を呈する。

常滑焼(200)　摺り鉢口縁である。口縁は直上ぎみに縁帯をなし、縁体部にはゆるやかな凹帯を１条有する。体部内外面はヨコナデを施しており、内面には上から下へのカキ目を有する。胎土は１～４㎜の石英粒を含み、黄褐色を呈する。

瓦質土器(204)　摺り鉢底部である。体部はゆるやかに立ち上がり、ややあらくヨコナデを



第91図　第1ピット溝1出土遺物実測図

施している。胎土は0.5～4㎜の石粉を含み、暗灰色を呈する。内面カキ目は縦、斜めに浅く施している。

陶器(198)　壺の脚。獣足を表現しており、ナデケズリで丁寧に成形している。胎土は0.5～1㎜の石粒を含み、緑灰色を呈し、施釉が見られる。瀬戸焼と思われる。

青磁(199)　椀である。体部はやや強く立ち上がり、口縁は少し肥厚させて丸くおさめている。高台はほとんど欠損しているが、ゆるやかな稜を有する。体面にはやや細長い蓮弁文を有し、内底見込みにも文様が見られる。胎土は黒粒子を含む精致なもので、緑白色を呈する。龍泉窯系のものと思われる。

羽釜(205・206・207)　大小2基・3基ある。207は土師質で、口径35cmを測る。口縁はやや内傾して立ち上がり、端部は丸みをもった四角形に仕上げている。口頸部外面は段を有し、内外面ともヨコナデを施している。鍔より下は右方向へのヘラケズリが見られ、内面はナデている。口縁部はススが付着している。205・206は瓦質であり、口径が205は20.3cm、206は21cmを測る。口頸部がやや内傾して立ち上がり、外面はヨコナデで3段を有し、内面はハケを施している。体部外面はケズリをおこなっており、内面はハケのあとナデている。胎土は細粒砂が多く、黒灰色を呈している。206の体部外面にはススが多く付着している。

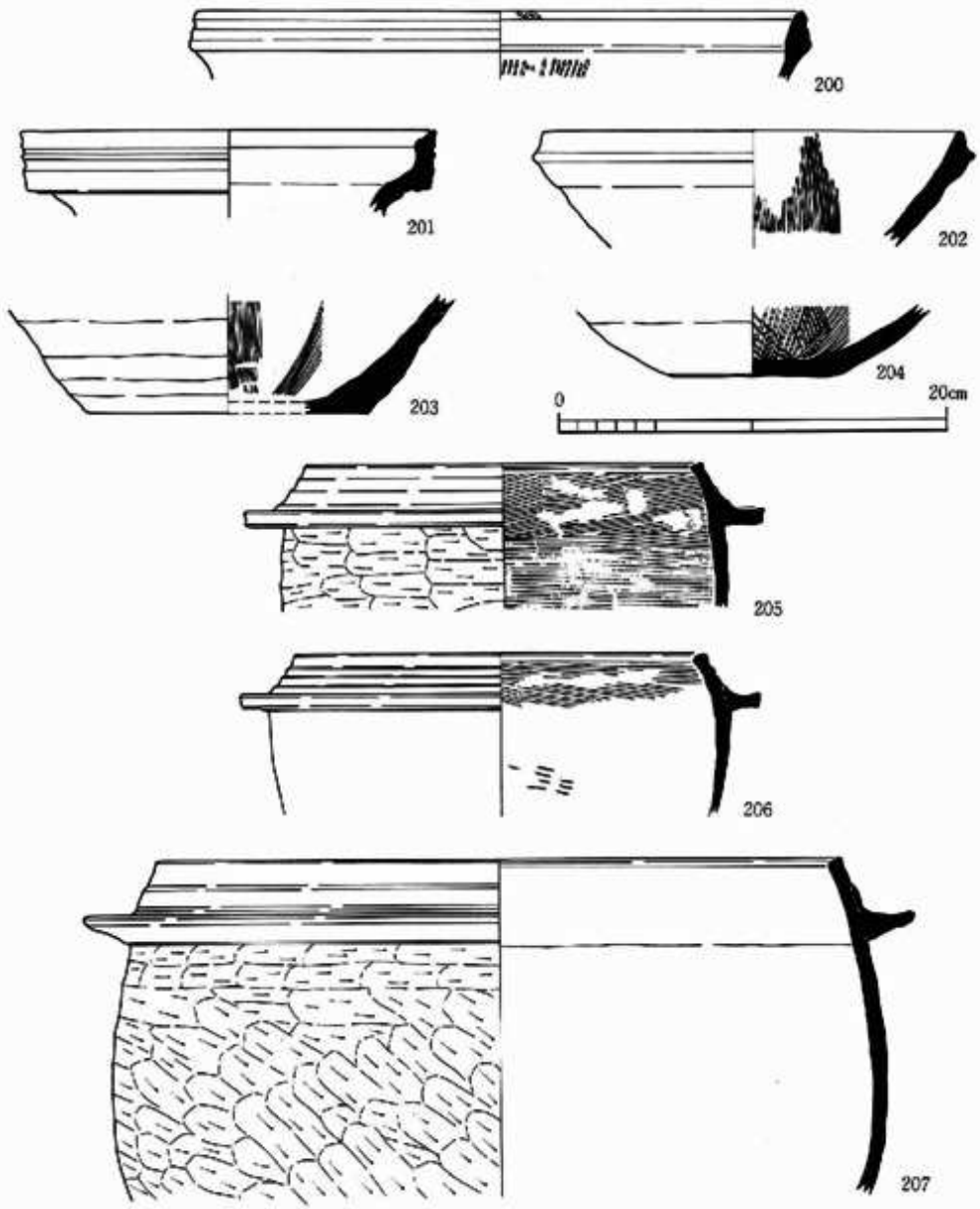
土師器小皿(190～193)　口径は7.7～7.9cm、器高は1.6～2cmを測る。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は少し肥厚ぎみである。体部外面は指押えによる成形をおこなっており、口縁部と内面はヨコナデを施している。底部外面も指押え、内面はナデている。190・191の胎土は良質で灰白色を呈する。192は石英・金雲の粒砂を含み、灰褐色を呈している。

円板状瓦製品(197)　径4.1cm、厚さ2.1～1.6cmで、平瓦を打ちかいて円形にしている。

曲物底板(210)　径13.2cm、厚さ0.5cmで柾目材を円形に加工している。半分だけである。

さじ状木製品(209)　長さ22.5cm、厚さ0.8cm、残存幅2.2cmを測る。先端は3段に、やや丸みをもって削られている。

鋤(208)　残存長74.4cm、身長17cm、幅9cm、柄長57.4cm、幅4.6～2.8cmを測る。身部はや

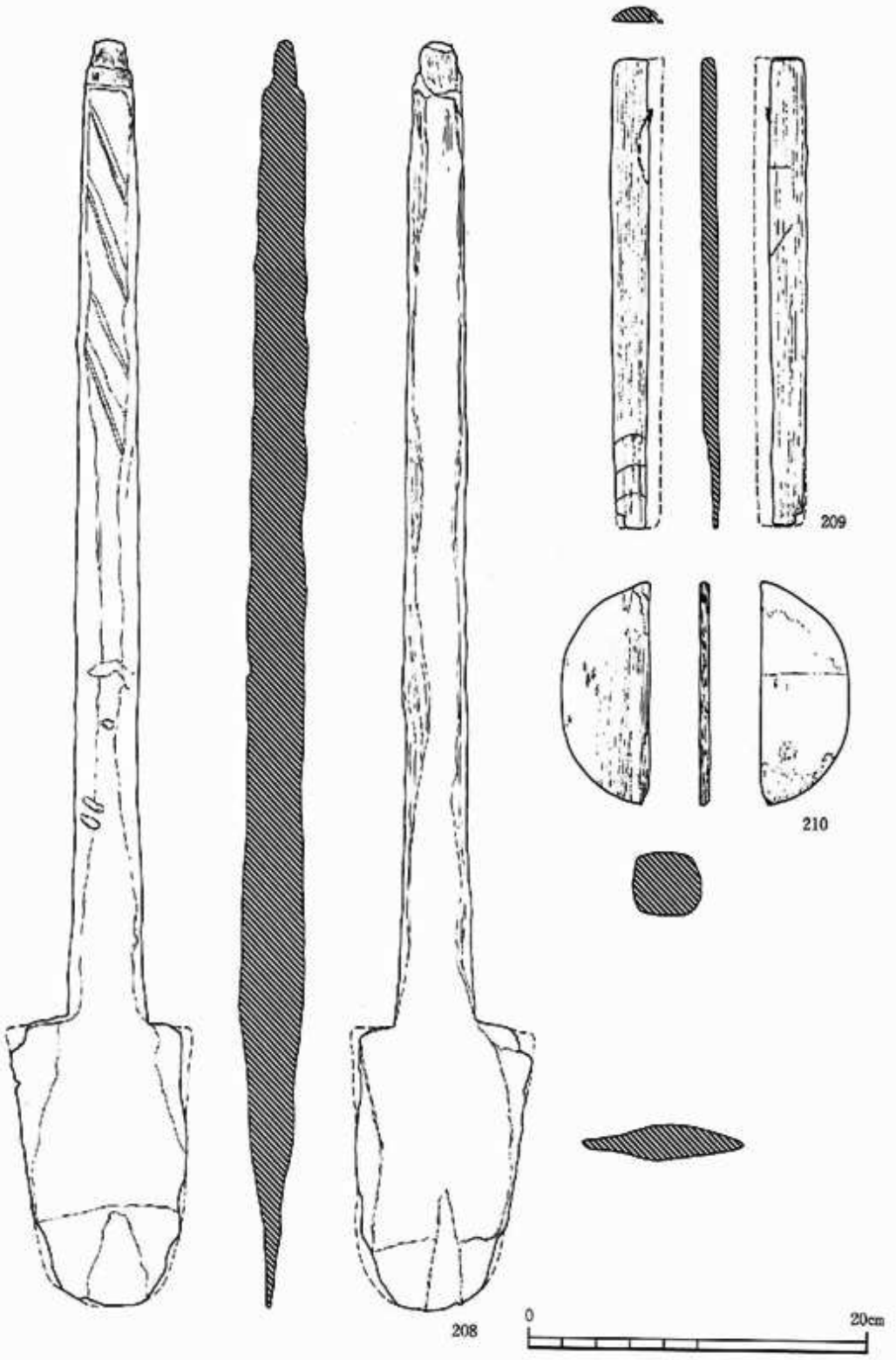


第92図　第1ピット第2層・溝1出土遺物実測図

ら下りぎみに広がり、刃部はU字形を呈し、断面三角形をなす。柄部は先端へいくほど細くなっており、断面は丸身をもった四角形をなす。加工は荒く、柄部上部には削り痕が鮮明に残っている。柄部先端はホゾ状に加工しており、ホゾ穴のある柄先が付いていたと思われる。

第14層（第94図）

弥生時代前・中期の土器片が12点だけ出土した。211・213・214はヘラ描きの沈線をもつ。は口縁部で丁寧なヘラミガキが施されている。胎土はいづれも1～3㎜石英、長石、角閃石の粒砂を含み、213は明灰褐色、211・213・214は暗黄褐色を呈する。



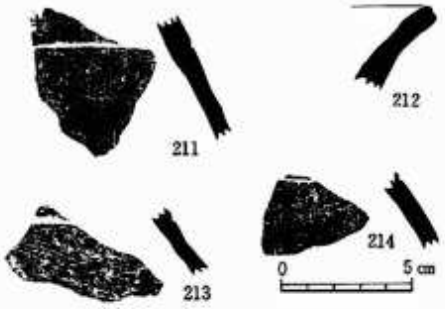
第93図　第1ピット溝1木製品実測図

2）第2ピット

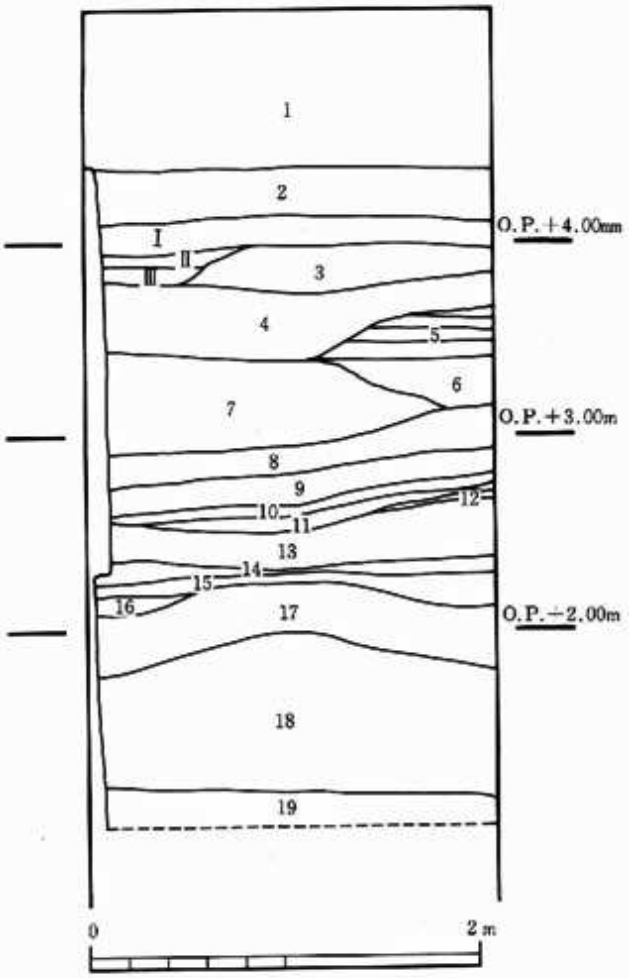
調査面積は東西2.7m、南北2.1mの約5.7㎡である。盛土および撹乱土0.8cmについては機械掘削をおこない、以下約3mは人力掘削によって調査を実施した。

層序（第95図）

第1層　盛土・撹乱土
第2層　茶黒色土　　陶器、磁器、土師器の小片を含む。
第3層　暗茶灰色土
第4層　茶褐色粗砂
第5層　青灰色シルト質粘土と黄褐色細粒砂の互層
第6層　緑褐色中粒砂
第7層　暗灰褐色砂
第8層　灰褐色粗粒砂
第9層　明灰褐色中粒砂
第10層　黒灰色砂
第11層　明灰色砂
第12層　赤褐色砂
第13層　緑灰色中粒砂
第14層　灰褐色粗粒砂
第15層　黄灰色細粒砂
第16層　青灰色粗粒砂
第17層　青黒色粘土
第18層　暗青灰色シルト質粘土
第19層　黒褐色粒土
第Ⅰ層　暗青灰色粘土　　溝1の埋土、瓦、土師器、瓦器、陶器、羽釜など多く含む。
第Ⅱ層　暗黄褐色中粒砂　　溝1の埋土。瓦を含む。
第3層　黒灰色粘土　　溝1の堆積土。瓦、土師器を含む。



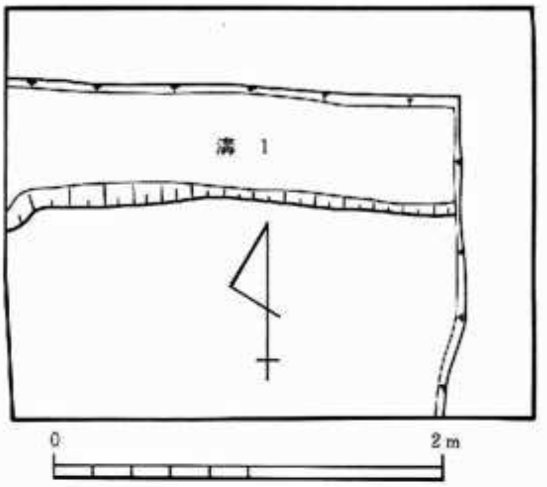
第94図　第1ピット第14層出土遺物実測図



第95図　第2ピット東壁断面実測図

遺構（第96図）

このピットで検出したのは東西にのびる溝1だけである。この溝は第1ピットの溝1につながるものである。



第96図　第2ピット溝1平面実測図

溝1は第3層上面において検出したが、溝の埋土である暗青灰色粘土が一面にあり、南北両肩は調査区域であった。第3層からの下りは南肩2段目であり、上層は砂で埋土である。下層の黒灰色粘土は堆積層である。埋土、堆積土内からは瓦、土師器、羽釜、瓦器、陶器など多量の遺物が出土した。遺物には奈良時代後半の瓦も含まれており、かなり時間差がある。最も新しい遺物から16世紀後半ごろには埋められたものと思われる。堆積土と埋土の間にはそれほど大きな時間差は見られなかった。

出土遺物

第2層（第97図）

この層からは磁器、陶器、土師器、羽釜、埴輪などが出土したが、図化できるのは羽釜と土師器だけである。

羽釜(217)　口径は22.8cmを測る。口縁はほぼまっすぐに立ち上がり、端部は4角形に仕上げている。口頸部は段を有し、内外面ともヨコナデを施しており、体部外面は粗いケズリをしている。胎土はチャート、石英、長石の粒砂を含み、灰白色を呈する。

土師器甕(218)　口径は14.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に鋭く外反している。端部はつまみあげて肥厚させ、内側に突出している。口縁部外面ともにヨコナデを施しており、胴部内面はヘラ削りをおこなっている。頸部は接合のあとヘラ押えをしている。胎土は石英、長石、金雲母を多く含み、灰褐色を呈する。

溝1（第97図）

溝内は堆積土と埋土に分けられ、瓦、土師器、羽釜など多量の遺物が出土した。とくに第Ⅰ層からは多くの瓦片を検出した。図化できたのは第Ⅱ層で出土した土師器小皿だけである。

土師器小皿(215)　口径8cm、器高1.8cmを測る。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸くおさめている。口縁内外面はヨコナデ、体部外面は指押えによる成形ののちナデを施している。胎土は石英、長石、金雲母の粒砂を含み、黄褐色を呈する。

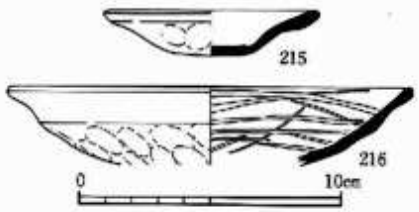
第3層（第97図）

瓦器椀(216)　口径15cmを測る。体部はかなりゆるやかに立ち上がるため器高は低い。内面の暗文は粗く、外面は指押えによる成形をしている。口縁部は強くヨコナデを施しており、端

部を丸くおさめている。胎土は石英、長石粒砂を含み、黒灰色を呈する。

第16層（第98図）

壺、甕などの小片11点を検出したが、図化できるものは甕1点だけである。



第97図　第2ピット出土遺物実測図

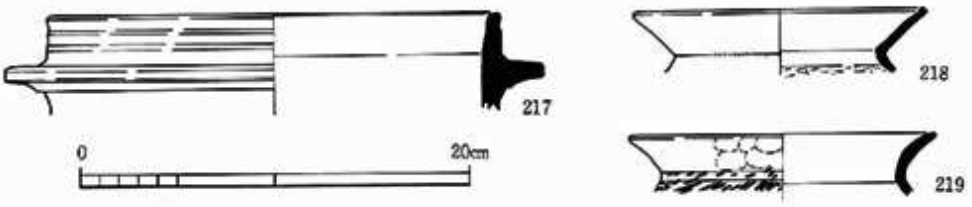
甕(219)　口縁は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめている。口縁内外面ともヨコナデを施しているが成形は粗い。体部は頸部より叩き目があり、内面はナデている。胎土は石英、長石、金雲母、角閃石の粒砂を多く含み、黄褐色を呈する。

3）第3ピット

調査面積は東西5.3m、南北1.8mの約9.5㎡である。現存の道路に伴う盛土と撹乱土約0.8mは機械掘削をおこない、以下約3mを人力掘削による調査を実施した。

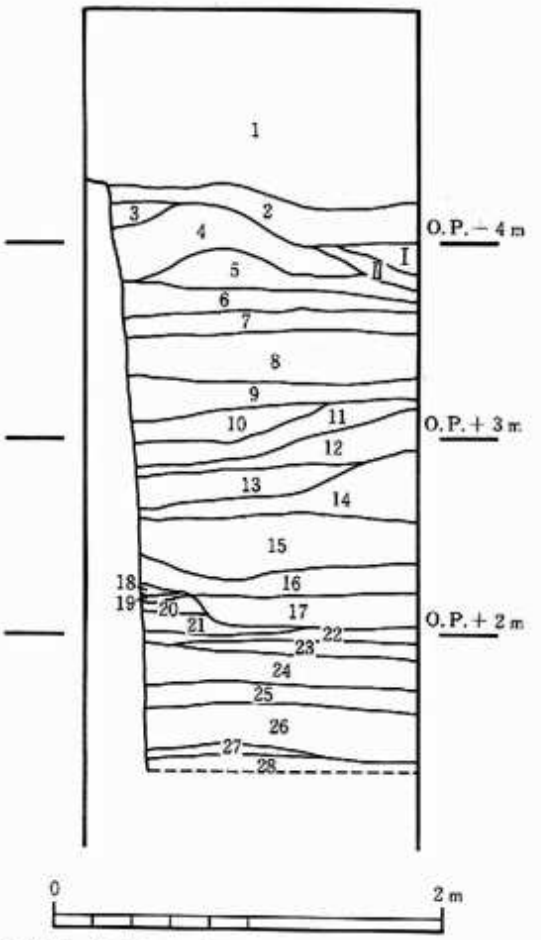
層序（第99図）

第1層　盛土・撹乱土
第2層　暗灰茶色土　　陶器、磁器、瓦、土師器、埴輪を含む。
第3層　黒茶色砂質土
第4層　暗黄褐色砂礫　　土師器を含む。
第5層　暗茶灰色土
第6層　暗灰色砂
第7層　灰褐色粗粒砂
第8層　黄灰色砂質土
第9層　暗褐色中粒砂　　第2遺構面。
第10層　灰褐色砂
第11層　暗灰色粗粒砂　　桃の種子を含む。
第12層　赤褐色中粒砂
第13層　暗灰褐色粗粒砂　　第3遺構面。
第14層　赤褐色砂礫



第98図　第2ピット出土遺物実測図

第15層　明灰色砂
第16層　暗灰褐色砂
第17層　黄褐色中粒砂
第18層　暗茶褐色砂礫
第19層　明灰褐色砂
第20層　明灰色細粒砂
第21層　灰色砂礫
第22層　明灰褐色砂礫
第23層　黄灰色中粒砂
第24層　灰色粗粒砂
第25層　黒灰色砂礫
第26層　暗青灰色シルト質粘土
　　弥生土器の小片を含む。
第27層　暗灰色粗粒砂
第28層　黒褐色粘土
第Ⅰ層　暗青灰色粘質土　　溝1の埋土。磁器、陶器、瓦、土師器、羽釜などを含む。
第Ⅱ層　青灰色粘土　　溝1の堆積土。陶器、土師器、瓦を含む。



第99図　第3ピット東壁断面実測図

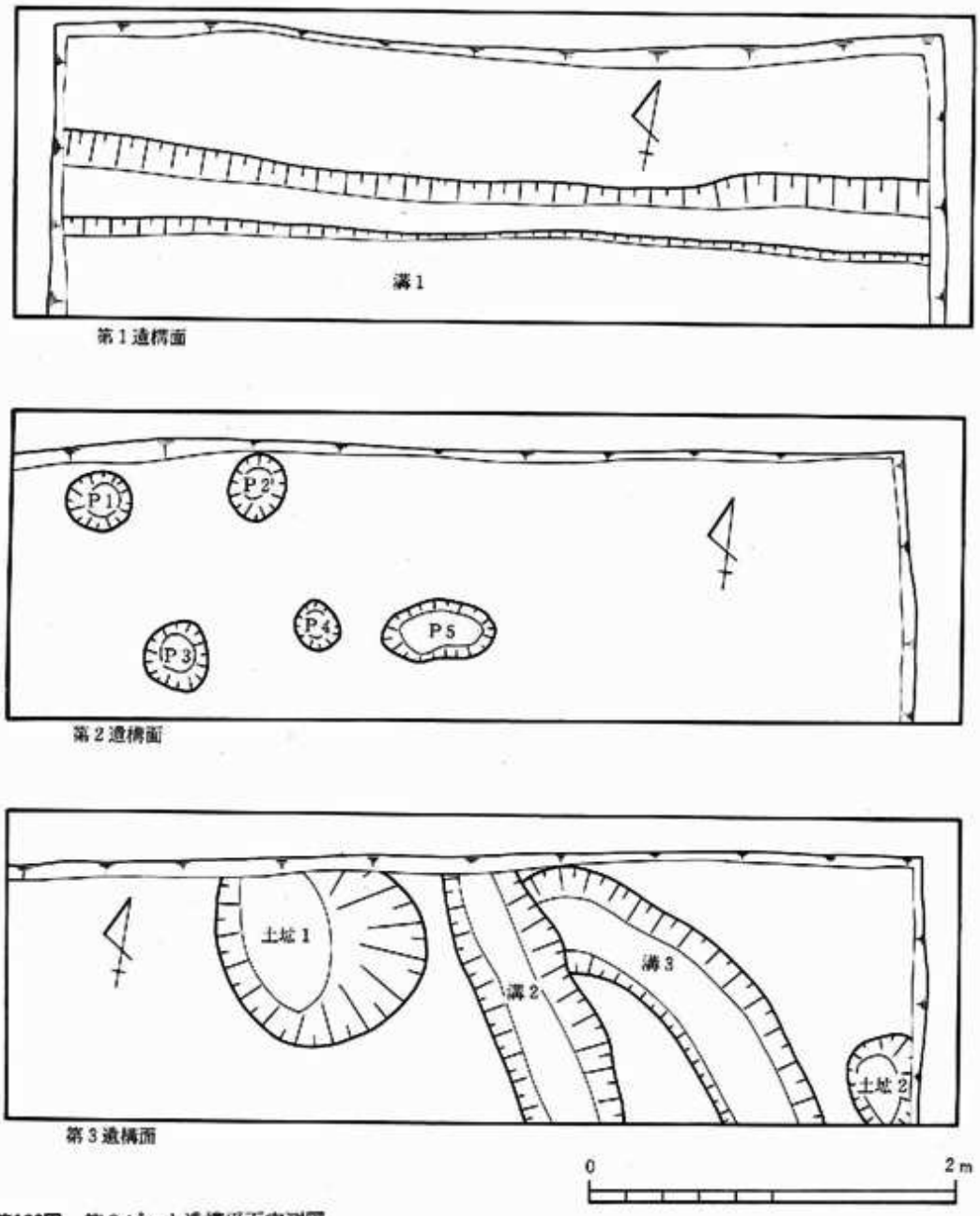
遺構（第100図）

当該ピットで検出した遺構は3面あった。第1・2ピットに続く溝1、第9層上面のピット群、第13層上面での土壙および2条の溝である。

溝1は第4層上面で北肩を検出した。上部はかなり削平されており、南肩は調査区域外である。検出面での幅1～0.75cm、深さ0.4mであり、2段になっている。溝内は2層に分かれ、上層は埋土で暗青灰色粘質土、下層は堆積土で青灰色粘土であり、ともに遺物を多く含んでいた。第1・2ピットの溝1と同様、堆積土と埋土には大きな時間差はみられない。

第2遺構は第9層上面において検出したピット群である。ピットは径25～40cmの円形（ピット1～4）と30cm×60cmの楕円形（ピット5）で、深さはそれぞれ8～10cmであった。各ピット内には遺物はまったくなく、性格、時期は不明である。ただ9層から土師器甕片(224)が出土しており、古墳時代前半ごろと考えられる。

第3遺構は第13層上面で土壙と2条の溝を検出した。溝2は幅55cm、深さ25cmで北西方向に若干下っている。溝3は幅50cm、深さ10cmで北西方向から西に曲り、溝2に流れ込んでいる。土壙1は径1.1m、深さ55cmの鉢状を呈している。土壙2は径55cm、深さ15cmの小さなものであ



第100図　第3ピット遺構平面実測図

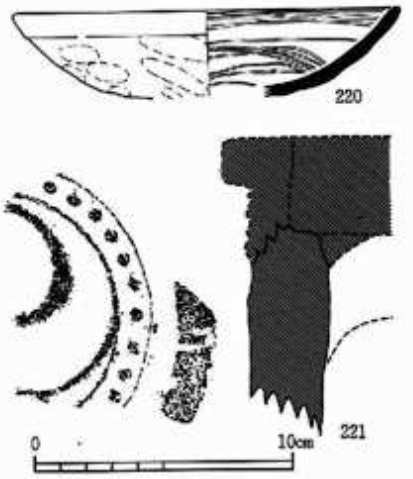
る。溝、土壙ともに遺物は含まれておらず、性格、時期は不明である。第13層から土師器甕片(222)が出土しており、古墳時代初頭のものと思われる。

出土遺物（第101図・第102図）

第2層

瓦器椀(220)　口径14.7cmを測る。体部はゆるやかに立ち、口縁端部を丸くおさめている。体部外面は指押え、口縁部はヨコナデを施している。内面は細いヘラミガキが見られる。

軒丸瓦(221)　三ッ巴文軒丸瓦である。外区には珠文を配し、一条の凸帯を有する。巴文は細長く尾を引き一条の凸帯をなしている。瓦当外周はケズリのあとナデており、裏面も不定方向にナデを施している。胎土は粒砂を含み、黒灰色を呈する。瓦当面は焼けている。



第101図　第3ピット出土遺物実測図

第4層

土師器底部(226)　胴部外面は下から上方向へのハケ目が見られる。底部は少し凹ませており、側面を指押えで成形している。内面は縦方向のハケ目が左から右方向へ施されている。胎土は石英、長石、チャートの粒砂を含み、黄褐色、暗灰褐色(一部)を呈する。底部には焼成後、主に外面より穿かれた径0.95cmの孔がある。

第9層

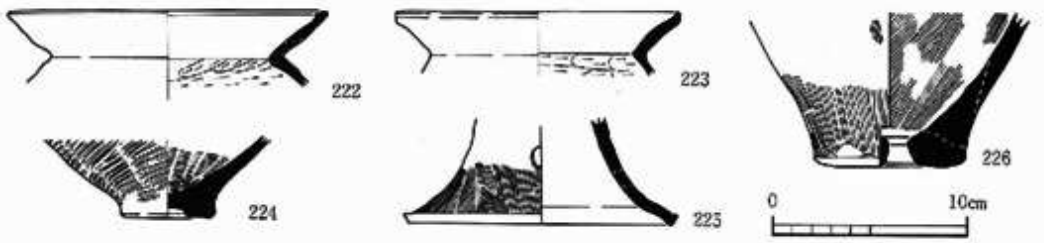
甕(223)　口径14.4cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、端部をつまみあげている。口縁内外面ともヨコナデを施しており、胴部内面はヘラ削りしている。胎土は石英、長石、角閃石の粒砂を含み、にぶい黄褐色を呈する。

第13層

甕(222・224)　222は口径16.3cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、端部をつまみ上げて肥厚させ、内側に突出している。口縁内外面はヨコナデ、体部内面はヘラ削りを施している。胎土は石英、長石の粒砂を含み、暗黄褐色を呈する。224は胴部外面に右上がりのタタキを施し、内面はハケ調整のあとナデている。底部は小さく突出し、底面を凹めている。胎土は角閃石、石英、長石を含み、明黄褐色、灰褐色(一部)を呈する。

第14層

高杯(225)　脚で、裾はやや広がり、端部は面を作っている。外面上部はヘラミガキ、下部はハケを施しており、内面は指押えしている。胎土は粒砂を含み、灰褐色を呈する。



第102図　第3ピット出土遺物実測図

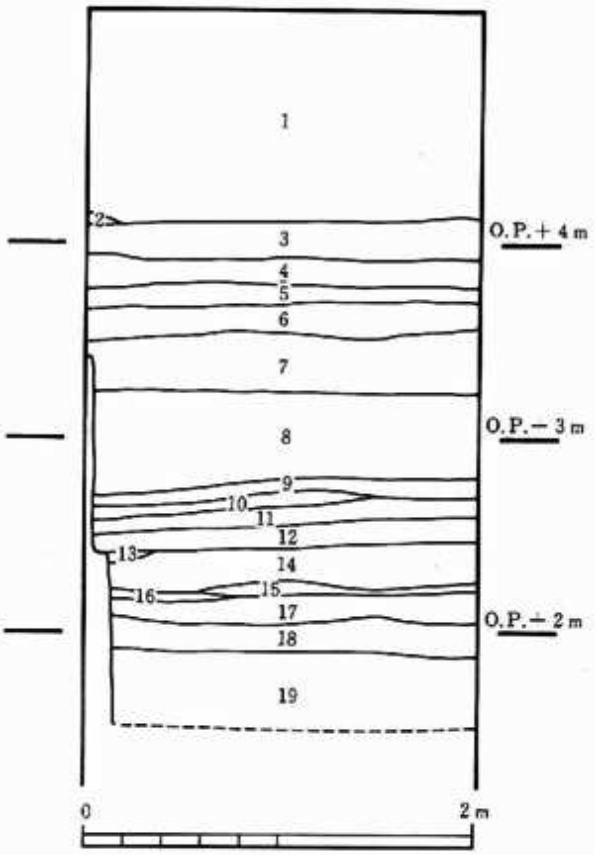
4）第4ピット

調査面積は東西2.2m、南北2mの約4.4㎡である。現在の道路に伴う盛土と撹乱土約0.9mを機械掘削し、以下28mを人力掘削による調査実施をした。

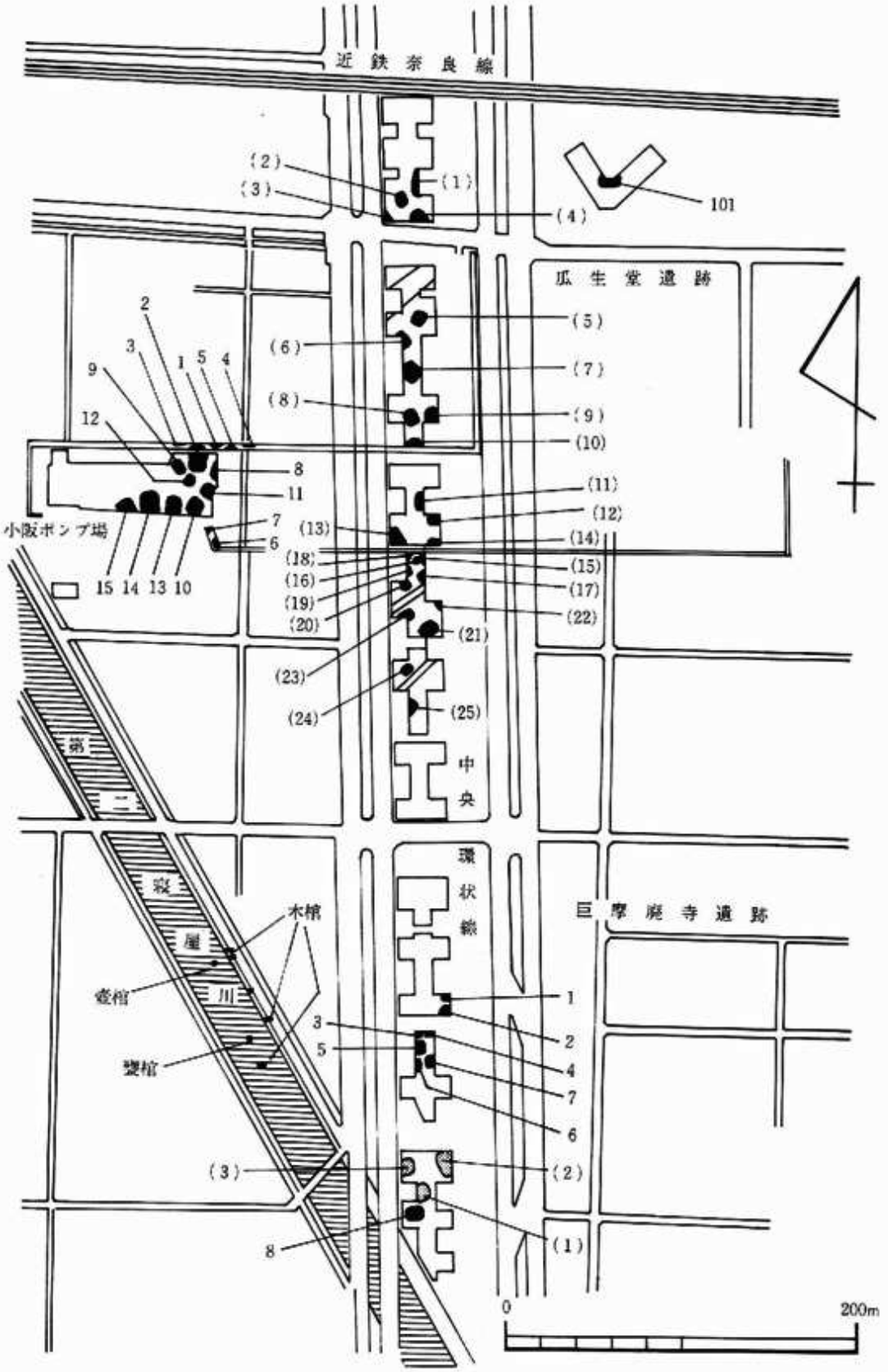
層序（第103図）

第1層　盛土、撹乱土
第2層　暗青灰色粘土　　陶器、土師器の小片を含む。
第3層　褐灰色土　　すり鉢、陶器、土師器の小片を含む。
第4層　暗灰色中粒砂
第5層　茶灰色砂　　土師器片を含む。
第6層　灰褐色シルト
第7層　緑褐色細粒砂
第8層　淡黄褐色砂
第9層　暗灰色粗粒砂
第10層　暗茶灰色砂
第11層　灰褐色中粒砂
第12層　赤褐色砂
第13層　暗灰色シルト
　　土師器片を含む。
第14層　暗灰色砂
第15層　暗褐灰色粗粒砂
第16層　暗赤褐色砂
第17層　暗青灰色砂
第18層　明青灰色粗粒砂
　　土師器片を含む。
第19層　暗青灰色砂

下層はほとんど砂層であり、遺構はまったく検出することができなかった。



第103図　第4ピット東壁断面実測図



第104図　瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡における方形周溝墓分布図

Ⅳ　まとめ

1．瓜生堂遺跡

1）第1トレンチ

今回実施した下水11工区管渠築造工事に伴う調査は、極めて狭い範囲の調査で、なおかつ工事計画との関係で、遺跡最下層までの調査が十分できなかったのは残念であるが、今回の調査によって瓜生堂遺跡北端近くの様子を調ることができた。

調査により、大半は調査区外へ続く形で、調査区南端に方形周溝墓1基の存在を確認し、甕棺1の他、周溝内に若干の弥生土器の検出を見た。

土器の形式から判断すると、弥生中期、Ⅲ様式でも新しい時期のものと判断される。方形周溝墓全体として、その規模・平面プランは把握できないが、本調査地北半の状況から判断すると、本地点以南より南側小阪ポンプ場にかけた区域、あるいは東方・中央環状線にかけた区域は、既往の調査をもとに考えると、本地点を北限の1地点として、方形周溝墓群が広がっているものと判断される。

瓜生堂～巨摩廃寺遺跡にあっては、ここ十年来、小阪ポンプ場あるいは中央環状線内に計画される近畿自動車道の建設に先立つ発掘調査が進められ、次々と遺跡の実態、とりわけ弥生時代集落を構成する居住区と、墓域葬制の実態が明らかにされてきた。これまで当該区域において、検出されている弥生時代中期～後期の方形周溝墓は、総数50数基をかぞえている。(104図)

今回の調査では十分調査出来なかったが、検出した方形周溝墓のベース面の下層にも若干古い遺物包含層があり、造墓のあり方は、小阪ポンプ場等検出の方形周溝墓のあり方と、極めて近いものであることと判断される。

2）第3ピット～第8ピット

今回の調査区は、遺跡の東限地域に当たると考えられるとの予想で、調査を実施した訳であるが、結果は、その予想通りと言えよう。計5ヶ所のピットで、遺物包含層を5層、遺構面を2面検出した。遺物包含層の中で、包含層Ⅰは、2次堆積包含層である。包含層Ⅱは、奈良時代後半～平安時代中頃の比較的安定した包含層である。包含層Ⅲは、No. 7ピットのみに存在する古墳時代前期の単純な包含層である。包含層Ⅵ・Ⅴは、弥生時代中期の安定した包含層である。いずれの包含層とも遺物は少量である。遺物の出土量からすれば、No. 3・No. 4・No. 5ピットが多く、No. 6・No. 7ピットは、ごく少量で、No. 8ピットは、ほとんど出土していない。やはり東へ行くに従って遺物の量、包含層の層厚と半減少する傾向にあり、No. 8ピットにおいては包含層自体無くなっている。遺構については、遺構面Ⅰ・ⅡともNo. 3～No. 7ピットまで存在する。遺構面Ⅰでは、No. 8ピットを除くピットで遺構を検出しているが、No. 6・No.

7ピットでは、遺構の密集度は、No. 3～No. 5ピットに比して少ない。遺構面Ⅱでは、No. 3、No. 4ピットで遺構を検出しているが、他のピットでは遺構面と同一層は存在するものの遺構は存在しない。

このように、遺物包含層、遺構、遺物から見て、当遺跡の東限地域の状況を端的に示している。古墳時代～鎌倉時代は、No. 7ピットまで遺跡は存在するが、弥生時代においては、No. 4ピットまでである。いずれにしても遺跡自体は、No. 8ピットまでは広がらないことが確実である。

遺構の中で注目すべきものは、No. 5ピットで検出した井戸1がある。須恵器大甕を口縁部、底部を打ち欠いて井側に転用している例は、あまり他に類例がなく特異な井戸である。出土遺物も一括性が高く、短時間の内に廃絶したようである。さらに墨書土器が一点出土していることからすれば、遺跡の性格を知る上でも重要であろう。奈良時代から平安時代の遺構は、前記した井戸、さらに溝、土坑などがあるが、柱穴、柵列などの直接集落に結び付く遺構は検出できなかった。検出した遺構群は、集落内での遺構であることは確実であるが、必ずしも集落の中心部の様相を呈しているのではなく、むしろ集落の端の状況に近いと言えよう。このことは、弥生時代中期の遺構群に関しても言えることである。墓域・生産地ではなく、やはり集落のはずれに当たると思われる。

遺物は、従来の調査で検出した遺物の様相とあまり変化がない。唯、井戸1出土遺物の中で、(123)の墨書土器、(115)の土師器甕、(117)の土師器羽釜は注目に値する土器である。墨書土器は、前記した様に、遺跡の性格を決定する上で貴重であり、甕は、内面に青海波文を施していることからすれば、須恵器の製作技法をそのまま応用して製作していると言えよう。すなわち、5世紀中葉以後、須恵器生産が開始された訳であるが、その段階より6世紀後半まで、韓式系土器の存在などで、土師器に須恵器の製作技法を応用した土器群がある。この甕は、須恵器の製作技法を取り入れた最も新しい土器と思われる。羽釜は、このタイプの土器の出現期のものであり、東大阪市皿池遺跡出土の羽釜目様、口縁部の外反度が大きく、鍔の付く位置がやや下方にあることから見て8世紀代のものであろう。

以上の様に、今回の調査では、いくつかの新知見が得られた。遺跡の東限地域の確認、奈良時代の集落の確認とそれに伴う墨書土器の検出、これは従来より当地域が若江郡衙推定地であることの一つの裏付けとなる資料であろう。今後、弥生時代においては、集落・墓域・生産地の確認、奈良時代においては、若江郡衙の存在地の確認などが、大きな課題となった。これらについては今後の調査を待って検討して行く必要があろう。

3）第9トレンチ

瓜生堂遺跡は弥生時代中期の代表的な遺跡として周知されている。しかしこれらの遺構は現地表下約4mであり、上層でも古墳時代～近世の重要な遺構、遺物が検出されている。

今日の調査地は瓜生堂遺跡の東端部にあたり、地表下約2.5mまでの調査であった。旧耕土下茶灰色粘質土面(第1遺構)で近世～中世の遺構、黄褐色・暗灰色砂面(第2遺構)で古代の遺

構を検出した。時期を明確にできる遺構は少なく、土坑2は明らかにできる数少ない遺構の1つである。遺物は多量の瓦器椀・皿・土師器椀・大皿・小皿・瓦質土器であり、すべて破損した状態で出土した。瓦器椀はいわゆる和泉型に存し、尾上編年[①]のⅡ－3、勝田形式分類[②]のhに相当し、13世期初頭に比定できる。土師器大皿は阿部形式分類[③]のA$_3$に相当する。土師器(瓦器)小皿は体部を開き気味に立て、口縁端部を少しだけ外反させており、A$_3$に当てることができよう。瓦器椀の年代から、A$_3$の年代は13世紀初頭ごろと比定したい。

2．若江遺跡

今回、発掘調査を実施した地点は大阪から十三峠を越えて大和に通じる十三街道にあたり、道沿に古木などが立ち、その面影を残している。現在の道路舗装に伴う盛土と攪乱で約50～60cmは現代層であり、旧街道を確認することはできなかった。第1～3ピットにおいて、16世紀後半ごろまでの溝1を検出しており、当該地が街道（道）として使用されるようになったのは近世以降と考えられる。ただ十三峠越えの道は、かなり古くから当地を通っていたと考えられ16世紀前後には溝沿にあったのかもしれない。溝1は昭和55年度の第14ピットで検出された溝6に通じるものである。溝6が深さ2.4m近くあったのに対し、溝1は60～30cmと東へ向うほど浅くなっており、第4ピットまでは伸びていない。この溝は当地周辺の中世集落における一時期の水路であり、若江西部を流れていた楠根川まで通じていたものと考えられる。

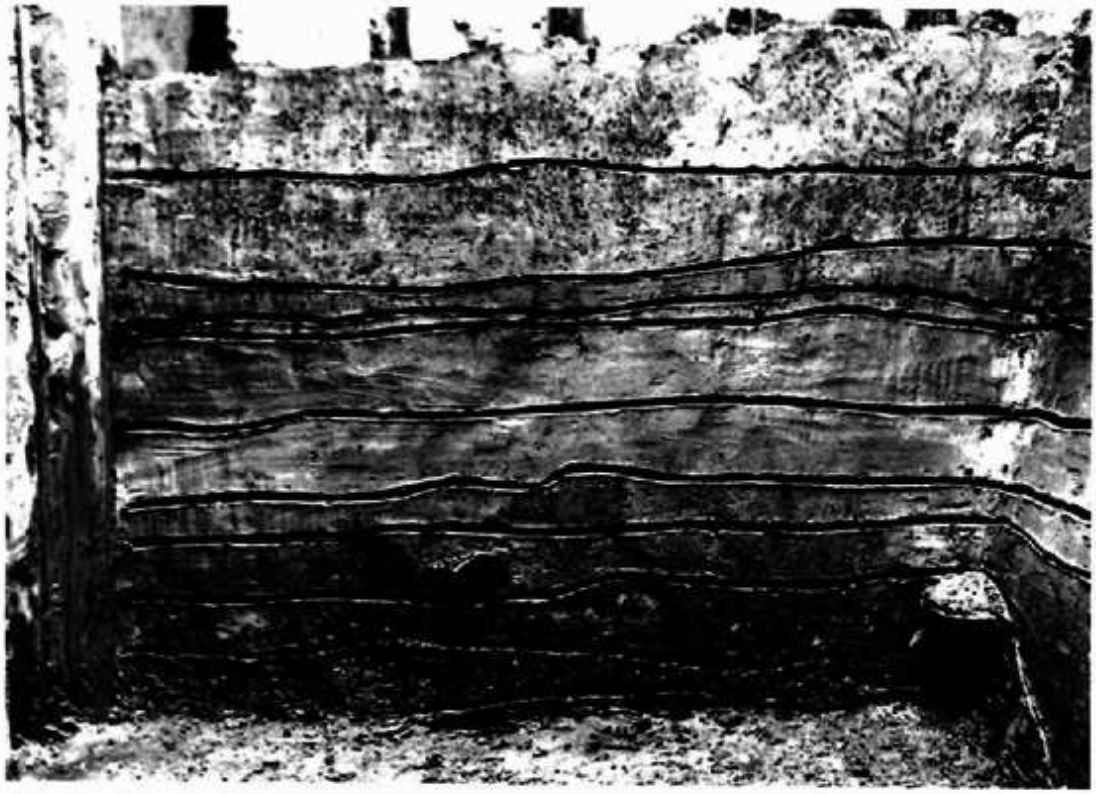
第1、3、4ピットの上層において埴輪片を検出した。若江鏡神社境内に古墳状の高まりがあり、当該地付近に埴輪を使用する古墳または古墳時代の遺構があったことは予想される。また各ピットとも、砂・シルトがかなり厚く堆積していた。堆積は弥生時代後期以降のものであるが、第3ピットで検出した第2・第3遺構と第9・第13層で出土した土師器から、第9層前後が古墳時代前半、第13層前後が古墳時代初頭の堆積と思われる。

第1～3ピットの最下には黒褐色粘土層があり、遺物は第1ピットで弥生時代前期・中期の土器片12点を検出しただけであった。弥生時代前期から形成されている山賀遺跡の東限を第1ピットあたりまでと考えることができるが、上層遺構の状態などから、当該地は若江遺跡の南端部と考えるのが妥当である。

注．① 『平城京発掘調査報告Ⅵ』（奈良国立文化財研究所）1975年
② 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書第13冊』高槻市教育委員会）1980年
③ 芋本隆裕『瓜生堂上層遺跡の皿池遺跡発掘調査報告』（東大阪市遺跡保護調査会）1979年
④ 高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』)京都府教育委員会)1979年
⑤ 原口正三・田辺昭三他『船橋Ⅰ』（平安学園考古学クラブ）1958年
⑥ 中村　浩他『陶邑Ⅲ』（大阪府教育委員会）1982年
⑦ 尾上　実「南河内の瓦器椀」（藤沢一夫先生古稀記念論集『古文化論叢』）1983年
⑧・⑨ 勝田邦夫・阿部嗣治（『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺物編』（財)東大阪市文化財協会）1983年
⑩ 勝田邦夫・阿部嗣治・上野利明　若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報（『東大阪市遺跡保護調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会）1981年

図　　版

1．第1ピット東壁断面



2．第2ピット南壁断面

11

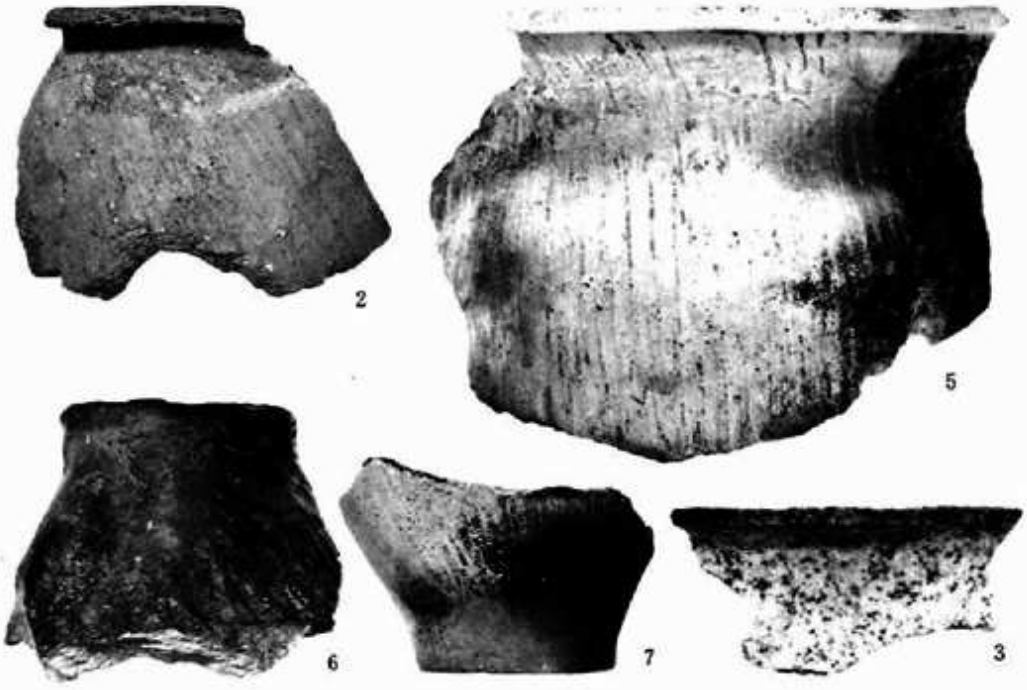
4

12

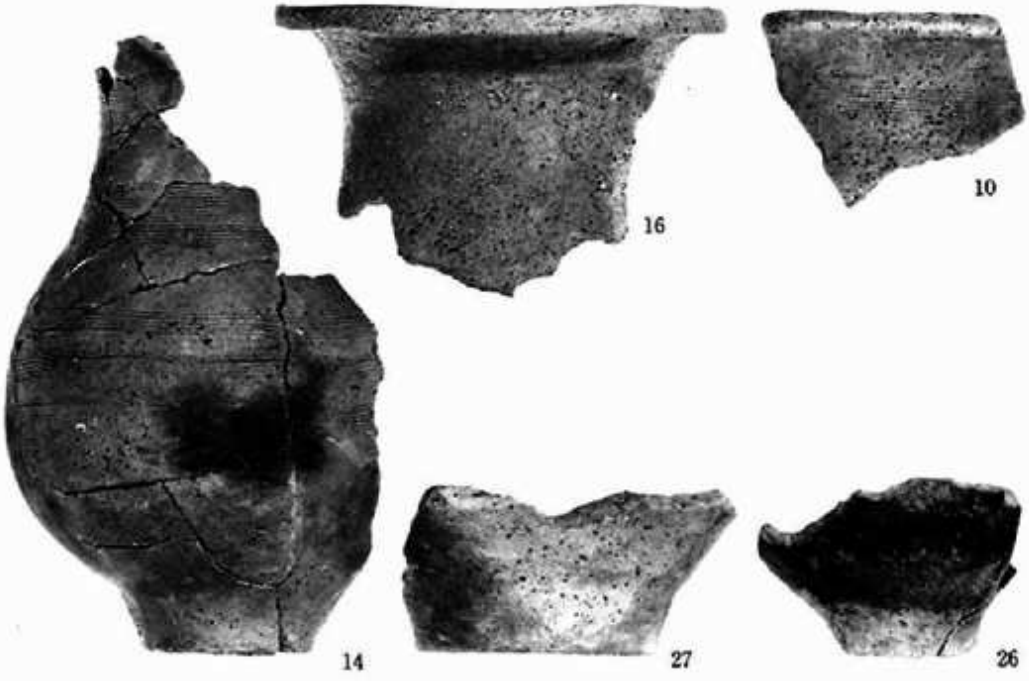
1

13

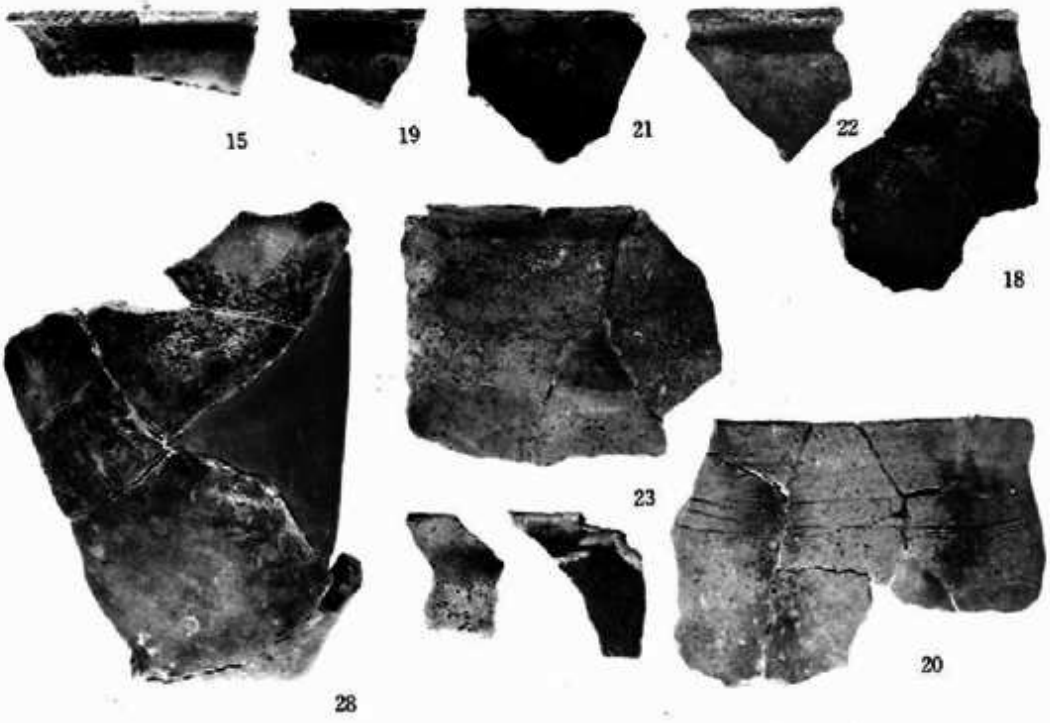
弥生土器壺・甕(1・4、第1ピット、11～13、第2ピット出土)



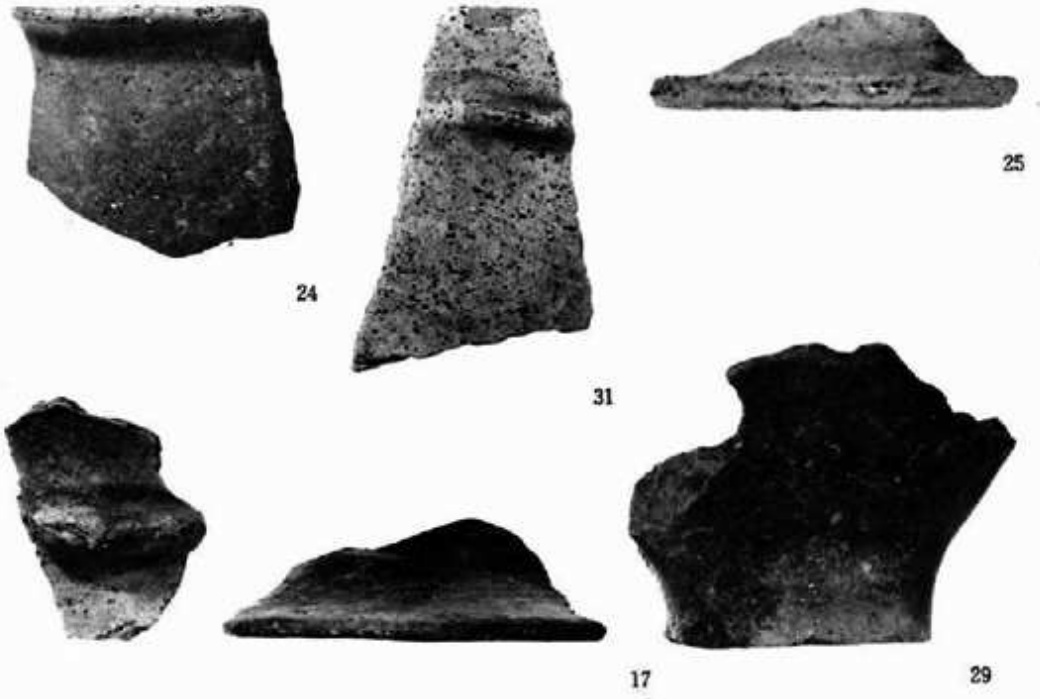
1．弥生土器甕・甕用蓋・底部(第1ピット出土)



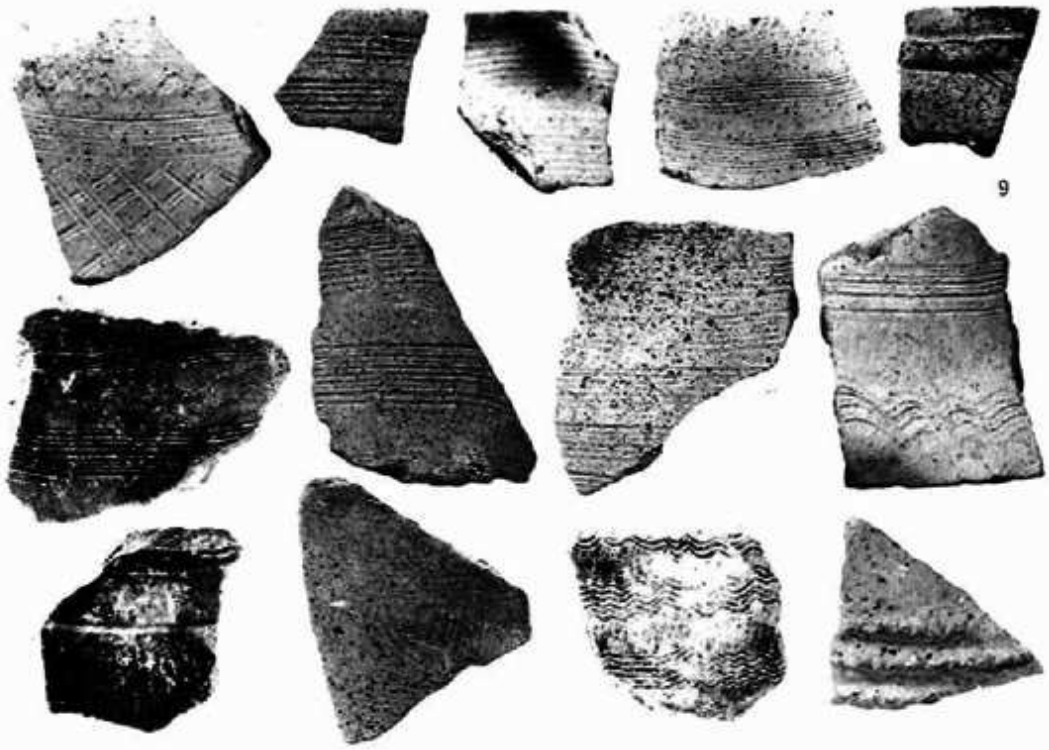
2．弥生土器壺・底部(第2ピット出土)



1．弥生土器甕・底部(第2ピット出土)



2．弥生土器鉢・蓋・底部(第2ピット出土)



1．縄文土器(9)、弥生土器(第2ピット出土)

2．石包丁、打製石剣、木製蓋(第2ピット出土)

1．調査前の状況

2．機械掘削風景

1．A溝・B溝全景

2．北壁断面

1．縄文時代遺物包含層検出状況

2．縄文時代遺物包含層検出状況

1．土師器高杯出土状況

2．土師器高杯出土状況

3．土師器甕出土状況

12

13

14

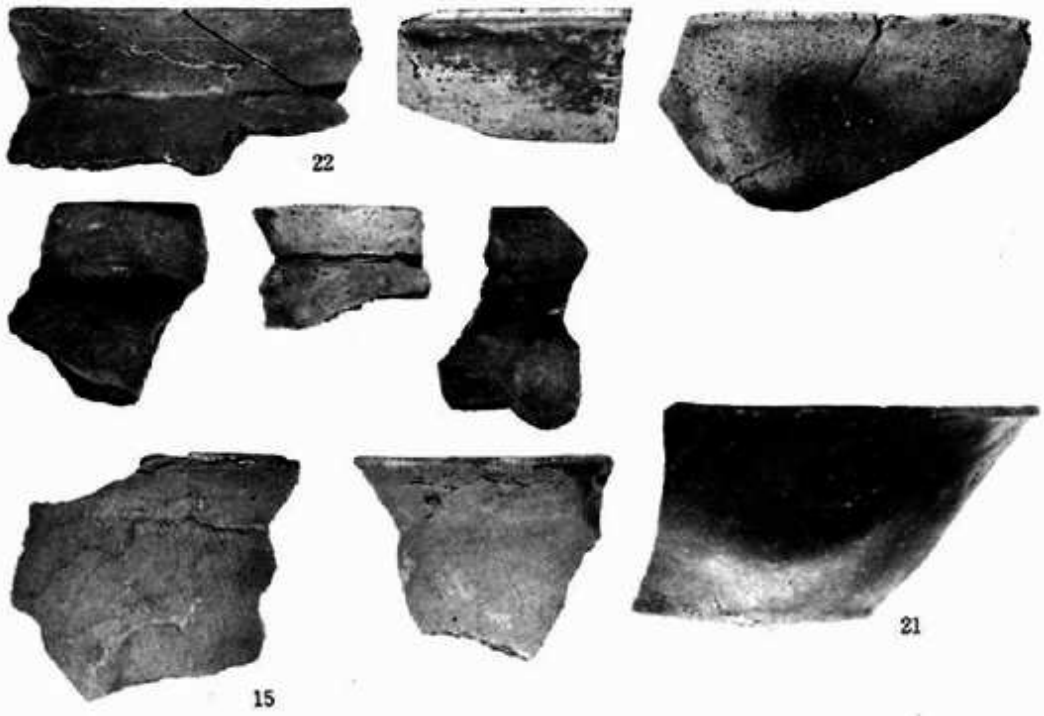
17

23

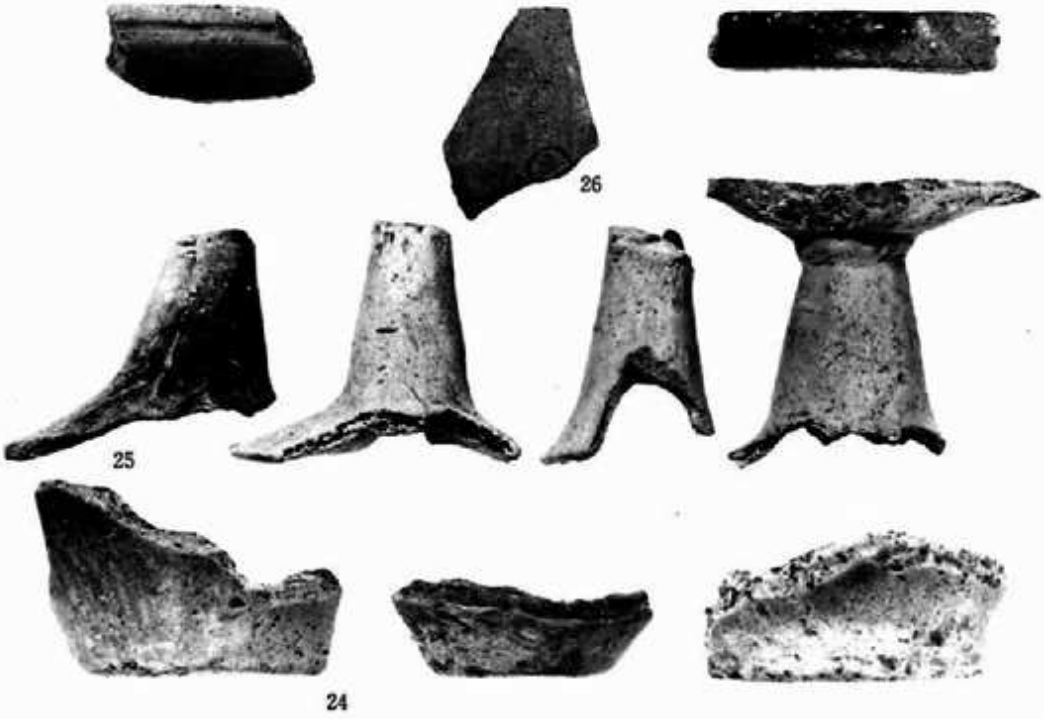
18

3

須恵器杯、土師器甕・高杯、土偶

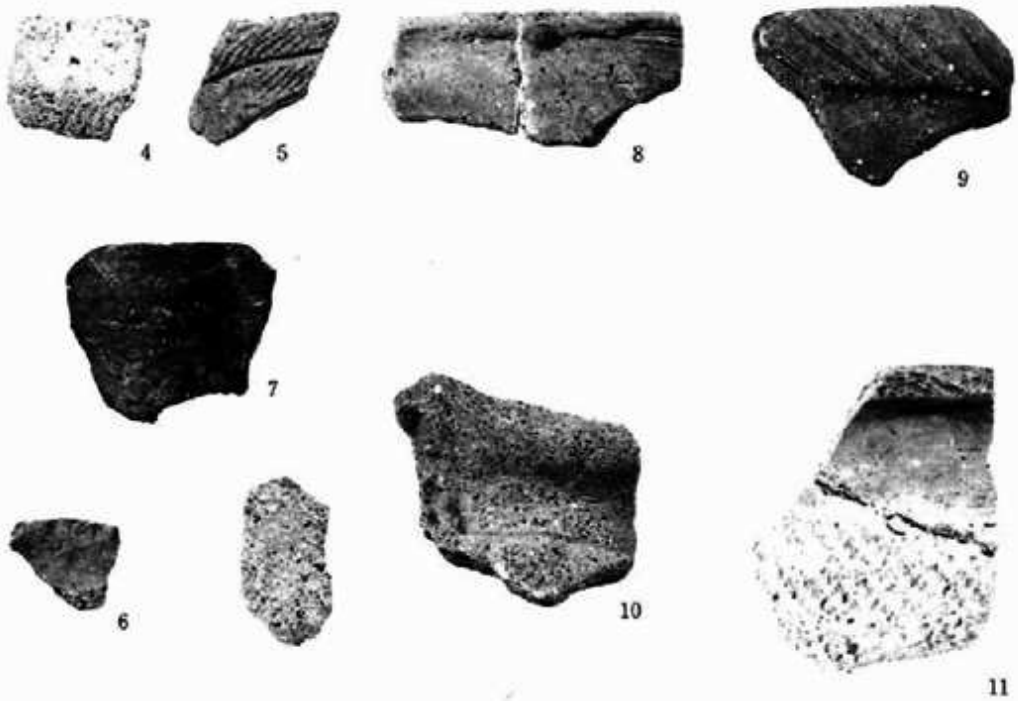


1．土師器鉢・高杯・壺

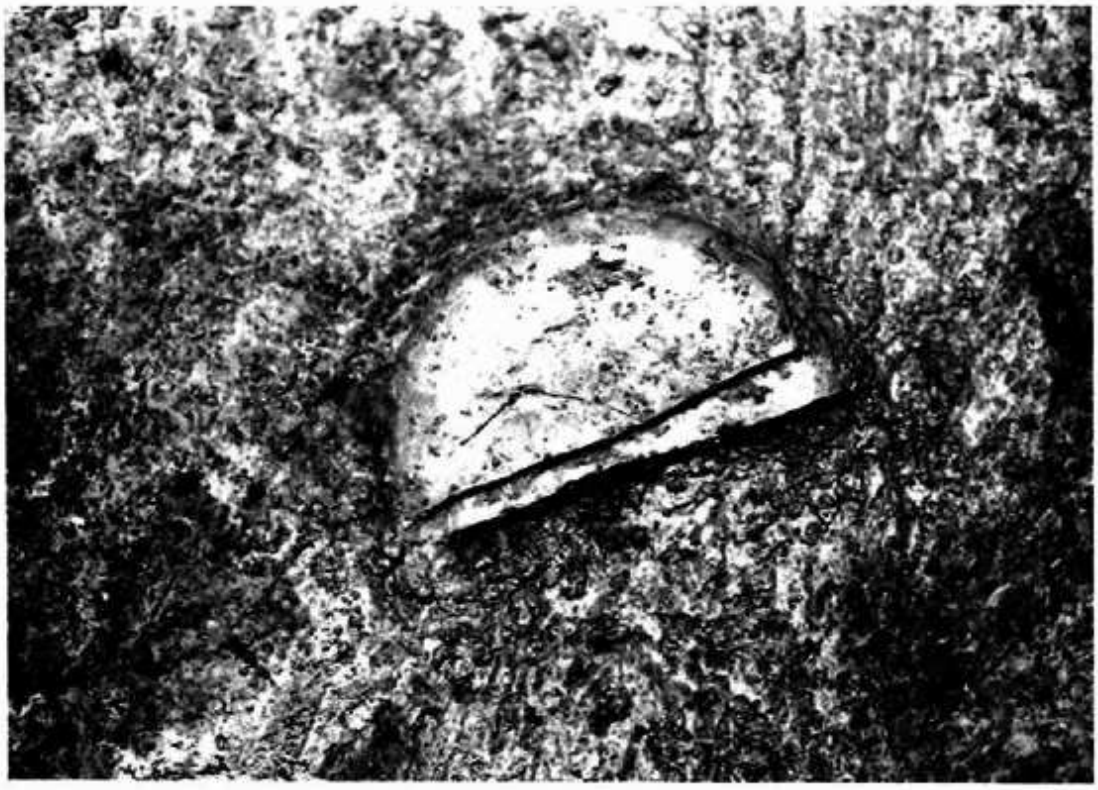


2．土師器高杯、弥生土器壺

1．須恵器杯・器台、韓式系土器



2．縄文土器浅鉢・深鉢

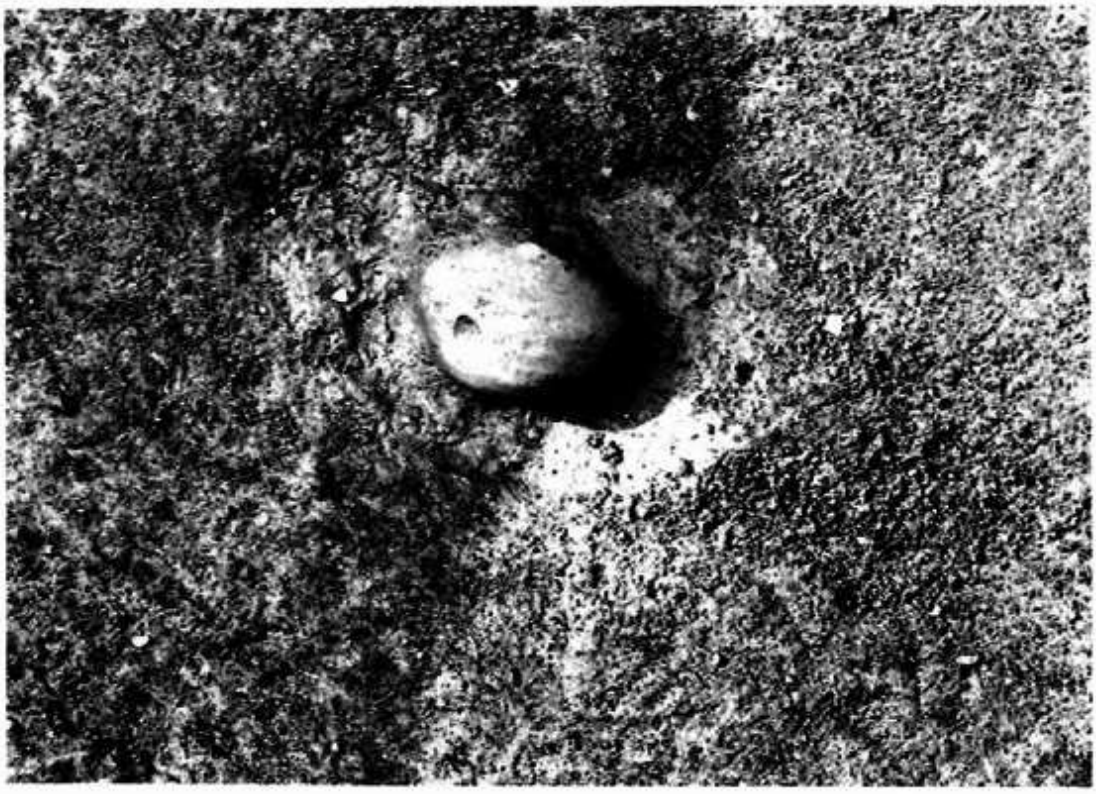


1．2－Ⅰ地区　土師器杯出土状況

2．2－Ⅰ地区　土師器、須恵器出土状況

1．2－Ⅲ地区　ピット6土師器甕出土状況

2．溝2、溝3、ピット10



1．3－Ⅲ地区　須恵器窯出土状況

2．6－Ⅴ地区～7－Ⅰ地区　溝5、ピット11

1．6－Ⅳ地区　溝4

2．7－Ⅰ地区～Ⅱ地区　溝6～溝9、ピット12～ピット23

1．7－Ⅰ地区　溝6、溝7、ピット12～ピット15

2．7－Ⅱ地区　溝8、溝9、ピット16～ピット19

1．7－Ⅲ地区　馬歯出土状況

2．8－Ⅱ地区　溝11、ピット24～ピット27

1．6－Ⅱ地区　土馬出土状況

2．6－Ⅴ地区　溝12、ピット29～ピット32

1．7－Ⅰ地区～Ⅱ地区　溝8、ピット33

2．7－Ⅲ地区　溝18、溝19、ピット39、ピット40

1．第11ピット溝、ピット

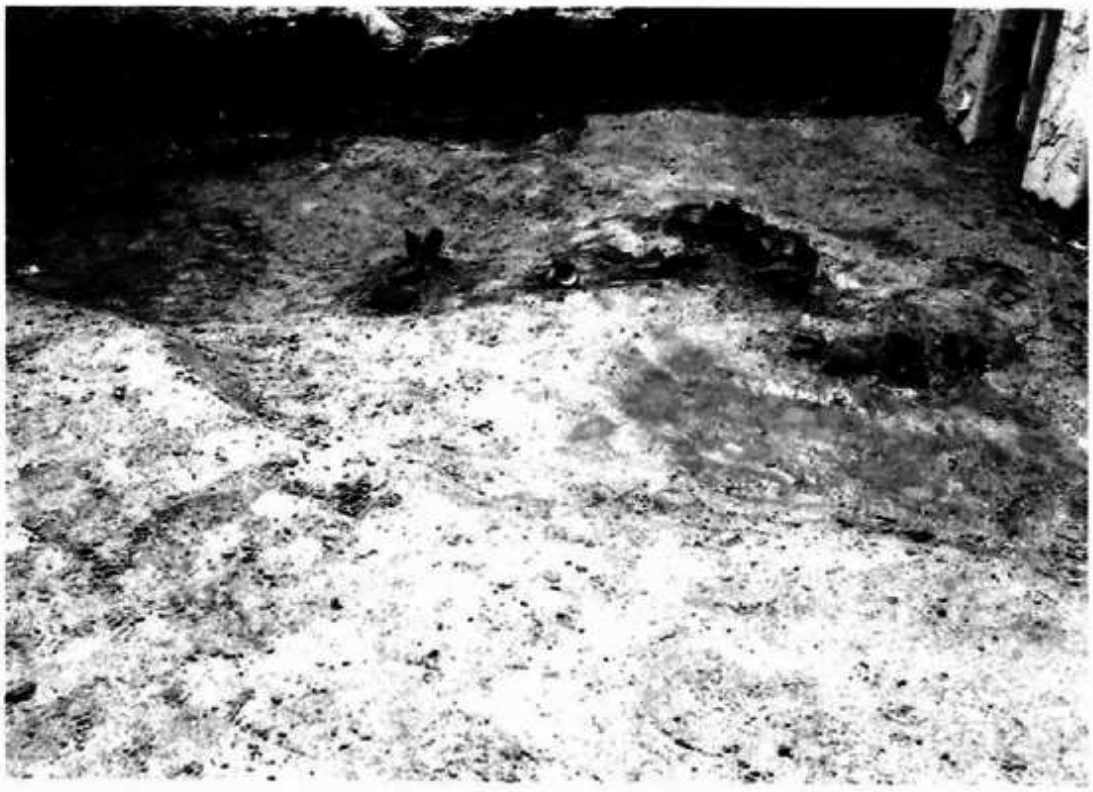
2．第11ピット溝、ピット

1．第11ピット南壁断面

2．第11ピット東壁断面

1．第12ピット下駄出土状況

2．第12ピット溝検出状況



1．第12ピット弥生土器出土状況

2．第12ピット弥生土器出土状況

1．12地区　ピット、溝

2．第12ピット南壁断面

1．D－10地区　溝17

2．I－10地区　井戸全景

1．Ⅰ－10地区　井戸

2．Ⅰ－10地区　井戸

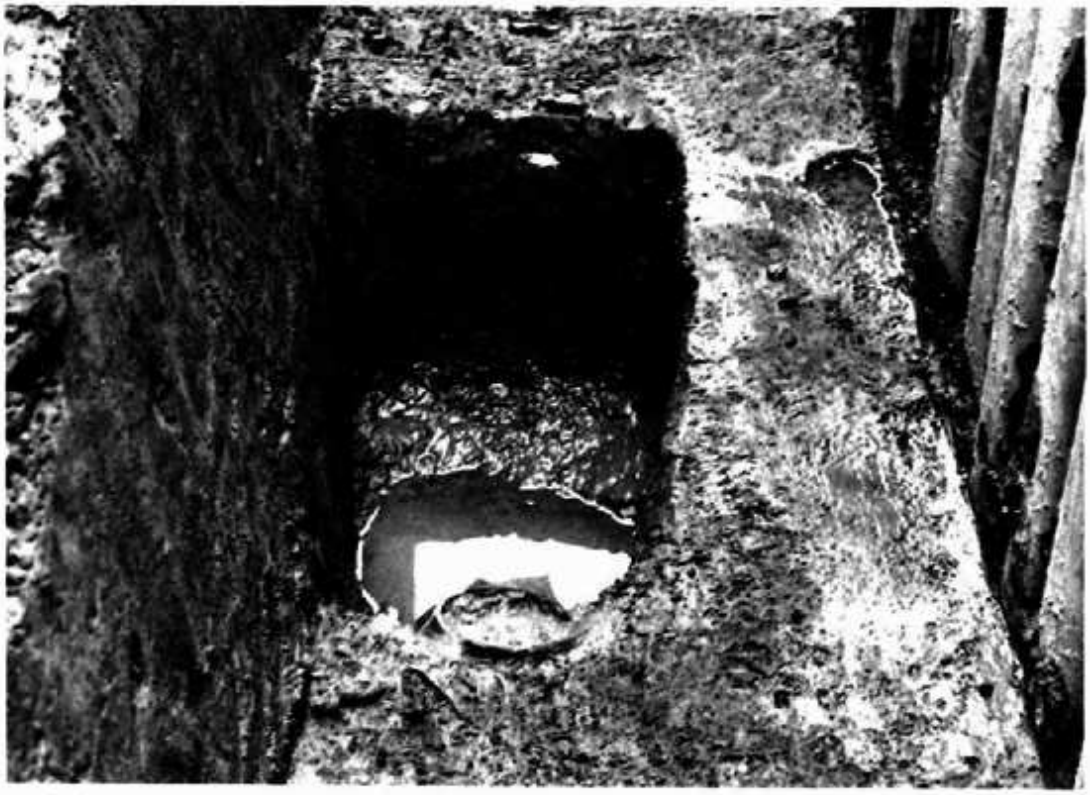
1．Ⅰ－10地区　井戸

2．J－3地区　溝19、溝20

1．溝1、土坑1

2．土坑1

1．土壙3



2．土壙6

1．溝6、溝7

2．溝6、溝7、土坑7

1．溝7、溝8

2．遺物出土状況

26

17

19

6

20

10

14

22

12

21

16

土馬、土師器杯、須恵器杯蓋・杯身・平瓶・甕（1地区～10地区）

31

69

28

68

76

弥生土器細頸壺・壺・甕（D－10地区、11地区ピット）

48

50

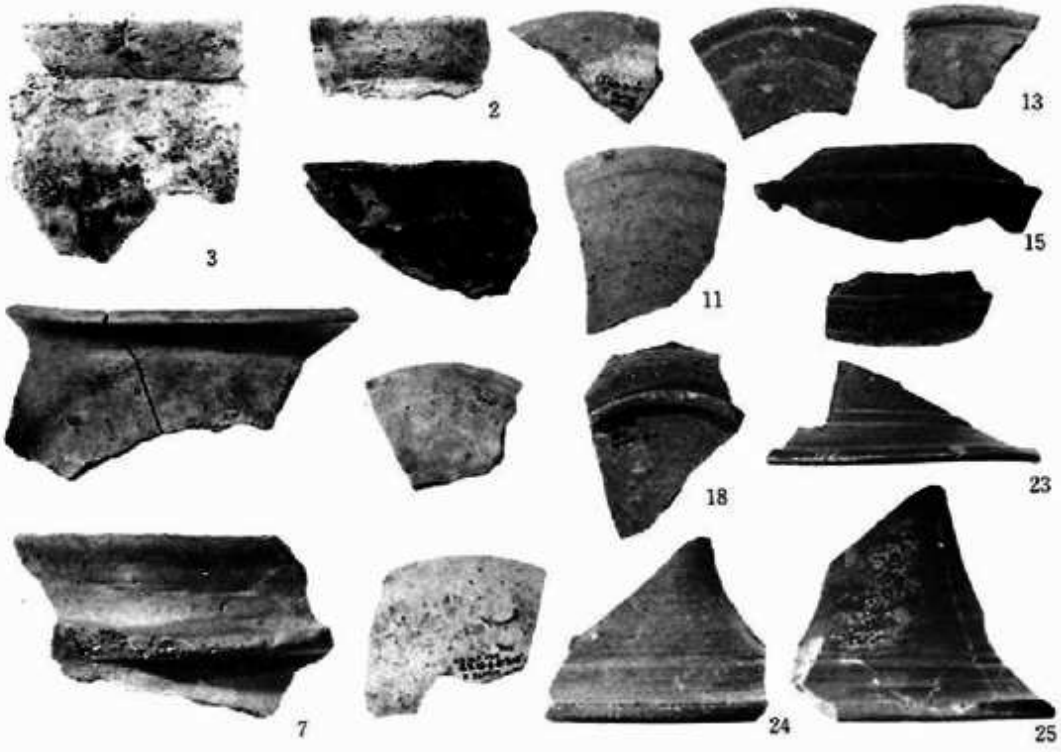
49

81

82

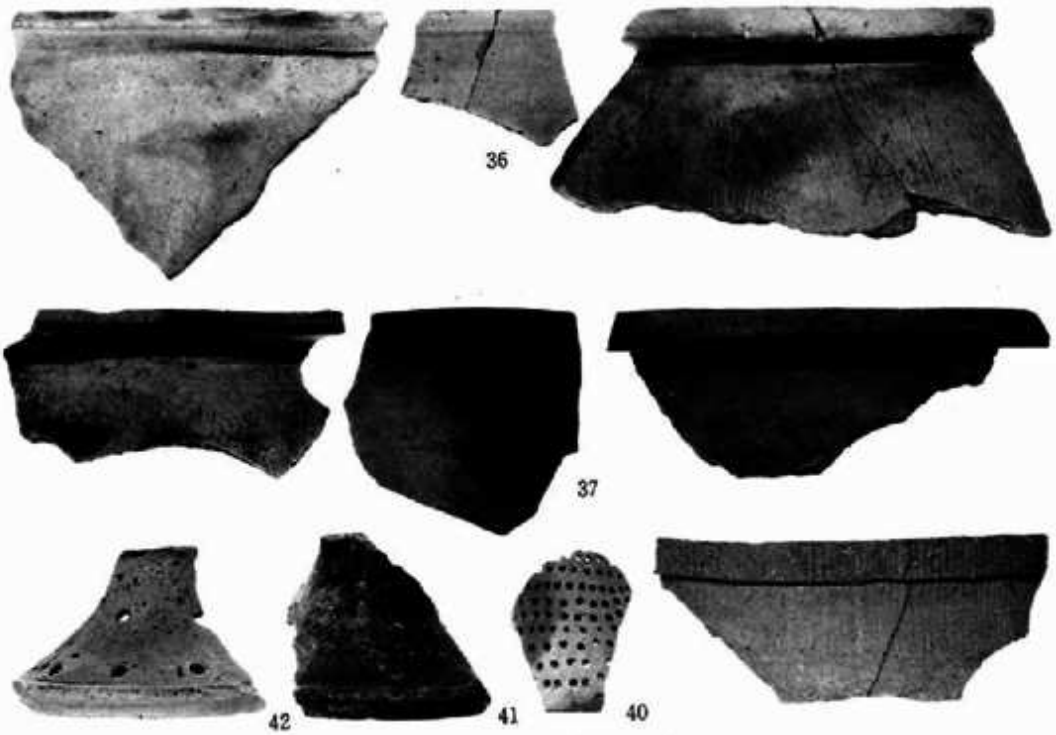
77

須恵器杯身・高杯、弥生土器水差・鉢・高杯・台付鉢(11地区、12地区ピット)

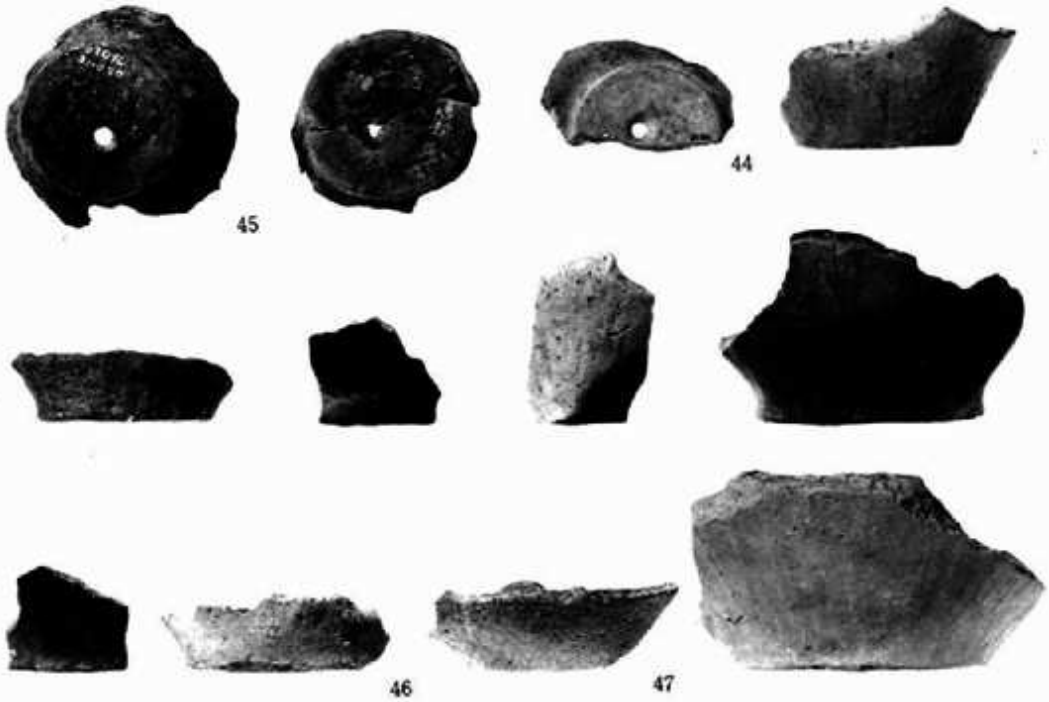


1．土師器甕・杯・羽釜、須恵器杯蓋・杯身・脚部

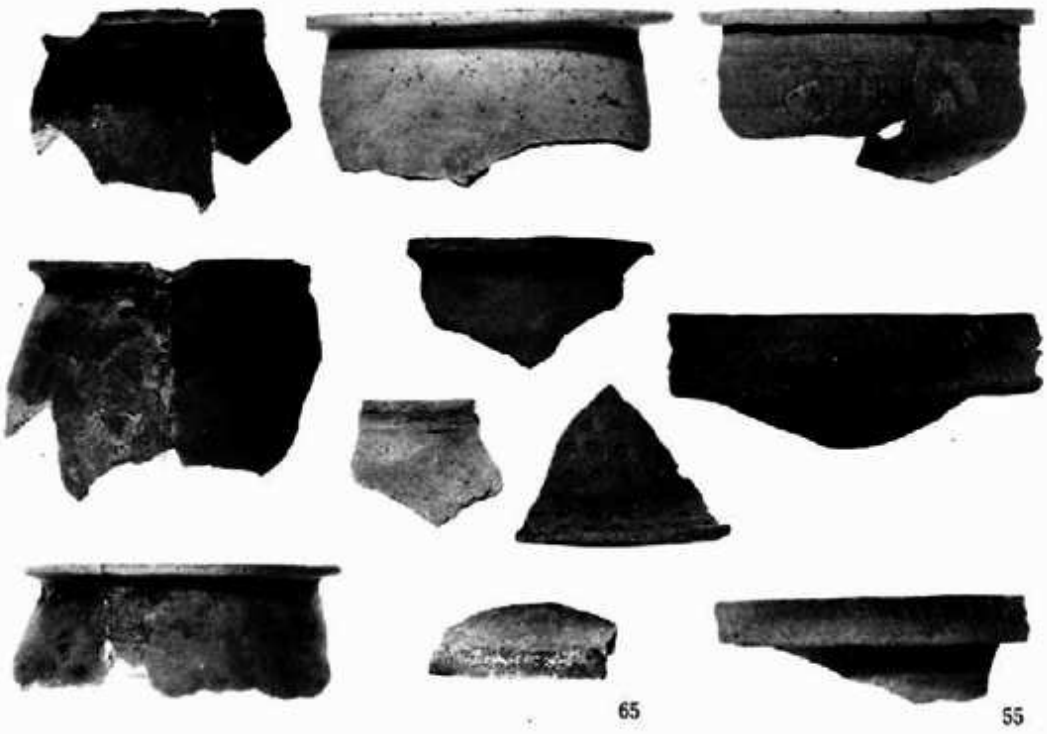
2．土師器羽釜・杯・盤・甕・脚部



1．弥生土器甕・鉢・高杯・無頸壺・脚部（D－10地区溝内）

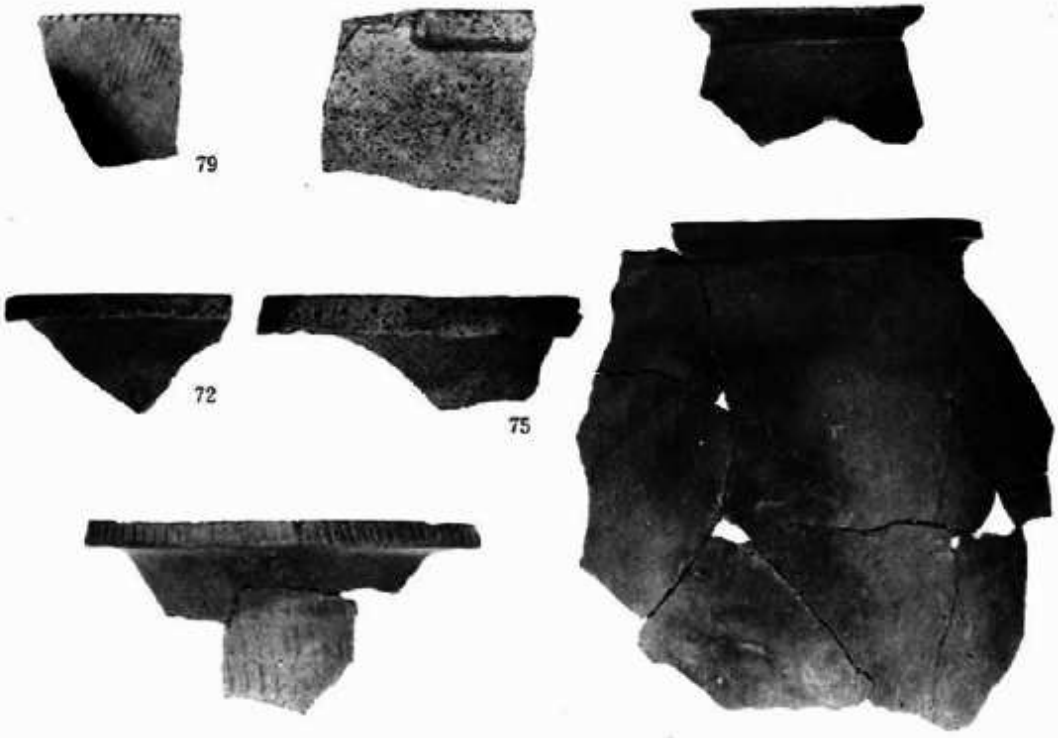


2．弥生土器底部（D－10地区溝内）



1．弥生土器甕・壺・鉢・脚部

2．弥生土器底部(11地区ピット暗青灰色砂層出土)



1．弥生土器高杯・鉢・壺・甕

2．弥生土器甕・壺・底部(12地区ピット溝内)

83

82

106

89

116

117

115

118

庄内式土器甕・台付鉢・鉢・器台・壺

190

149

196

139

205

137

207

133

庄内式土器、土師器甕・壺・高杯・小型丸底壺

210

221

223

216

209

224

208

227

土師器高杯・小型丸底壺

230

257

226

225

228

258

181

172

土師器、須恵器高杯

160

154

162

158

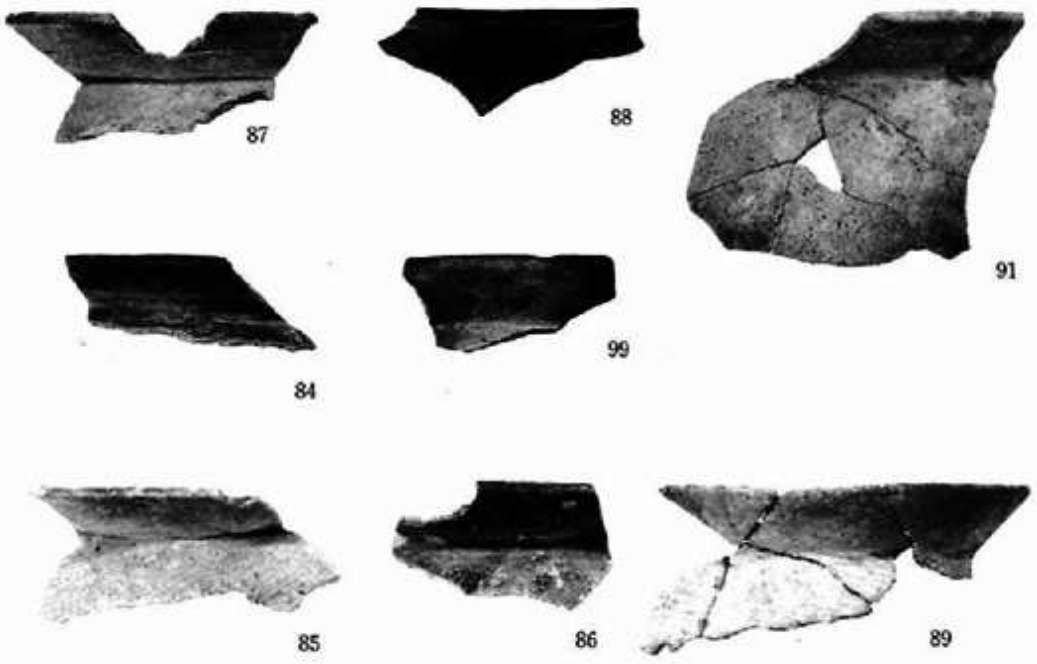
169

188

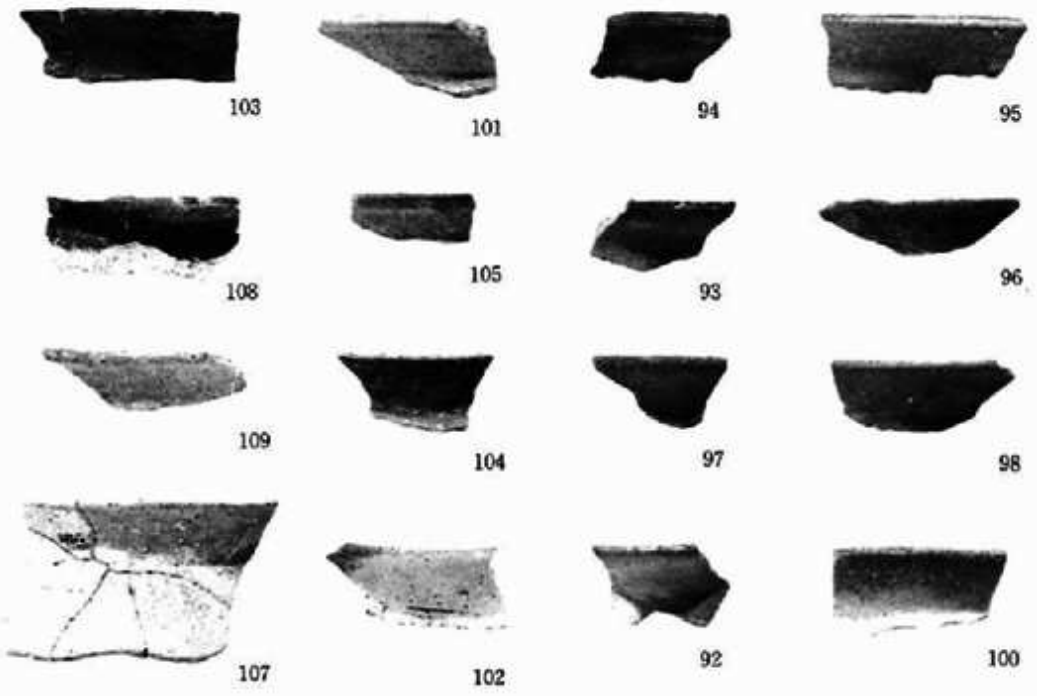
170

266

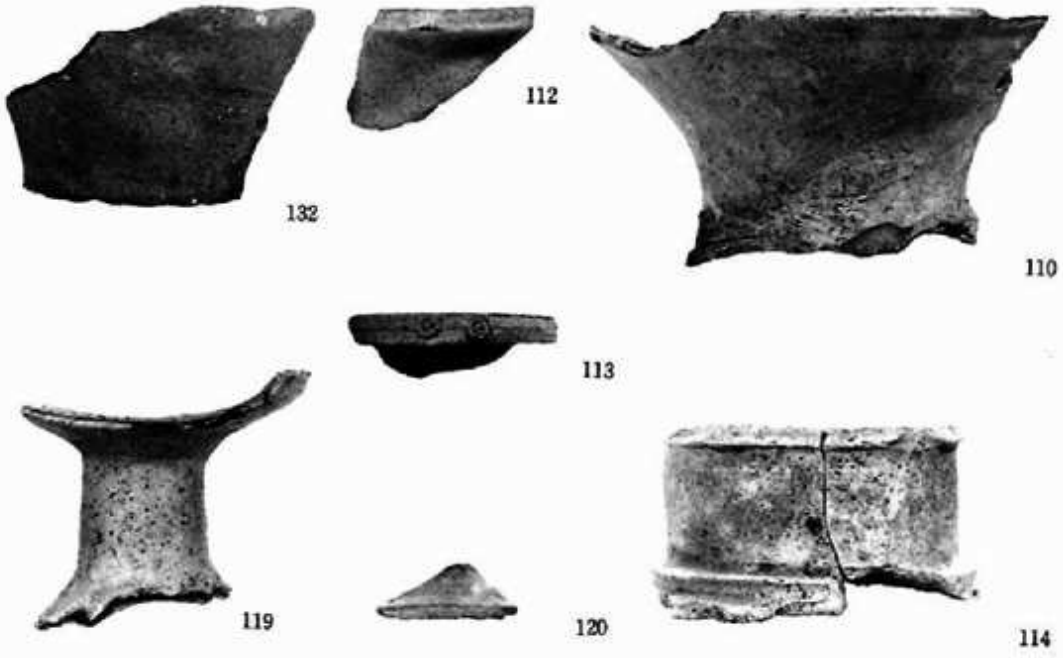
須恵器、瓦器蓋・杯・角杯・椀



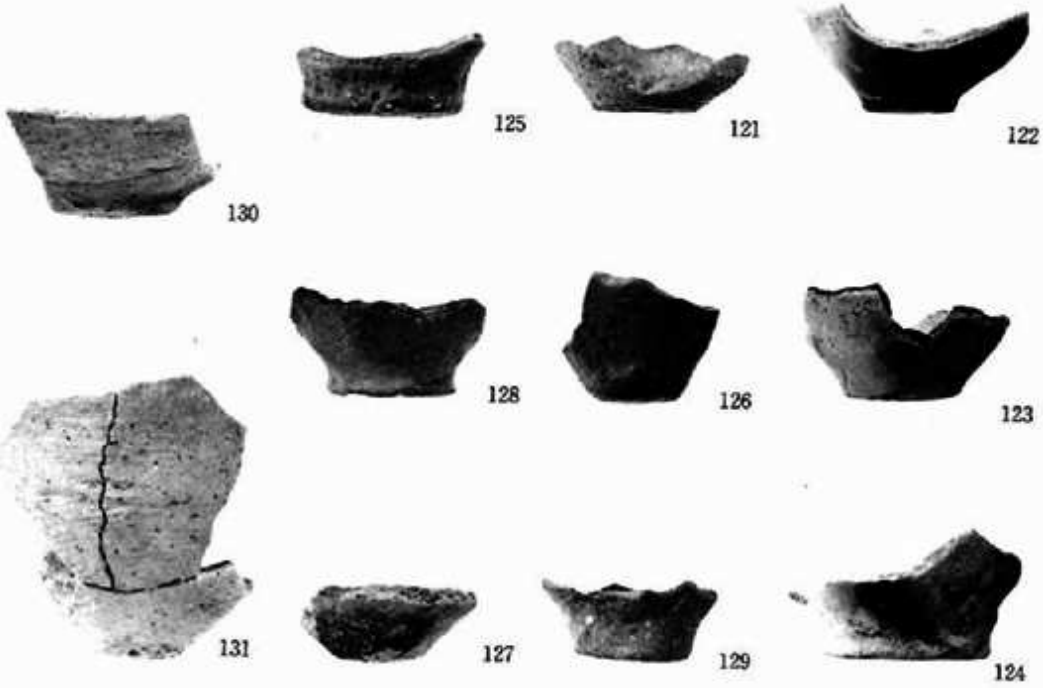
1．庄内式土器甕



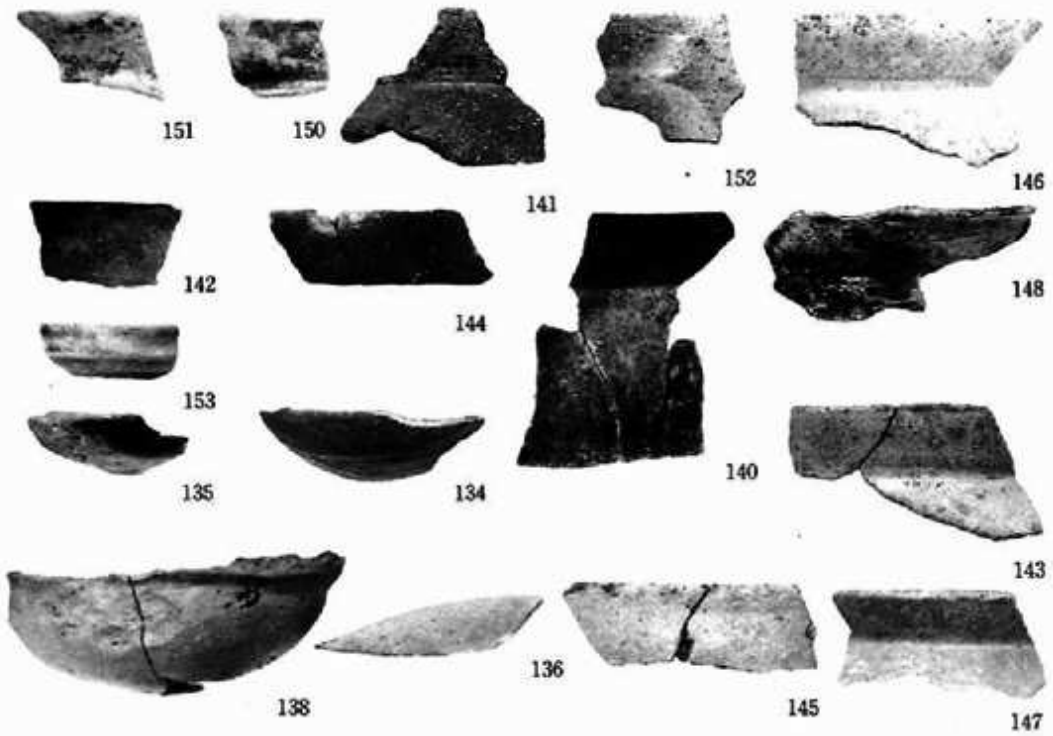
2．庄内式土器甕



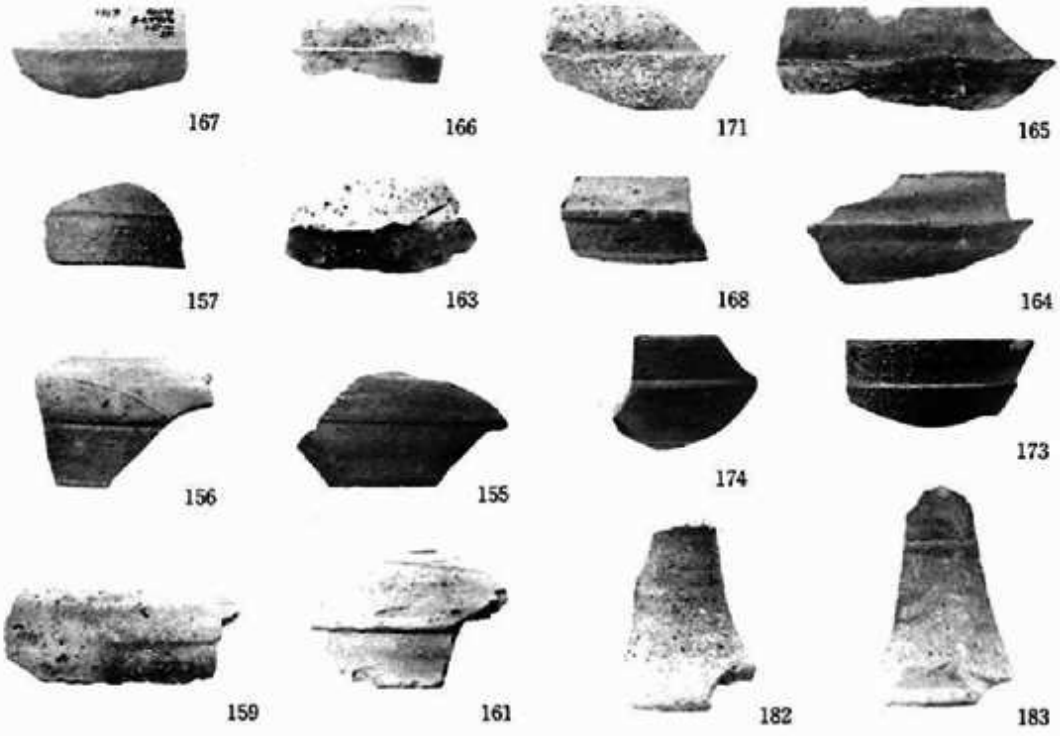
1．庄内式土器壺・高杯



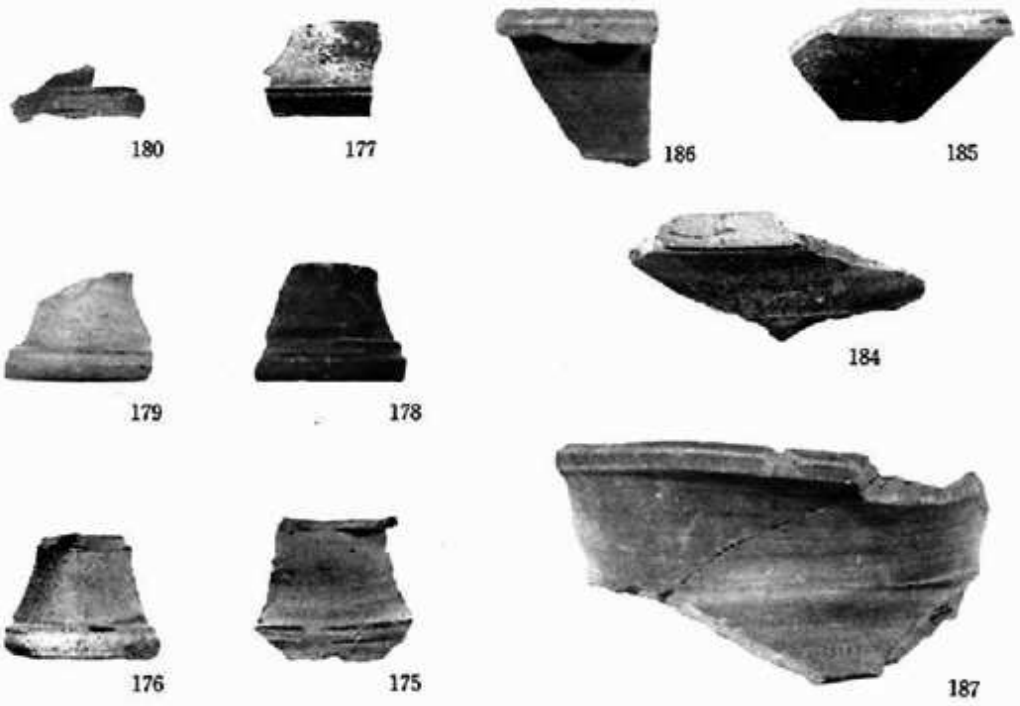
2．庄内式土器底部



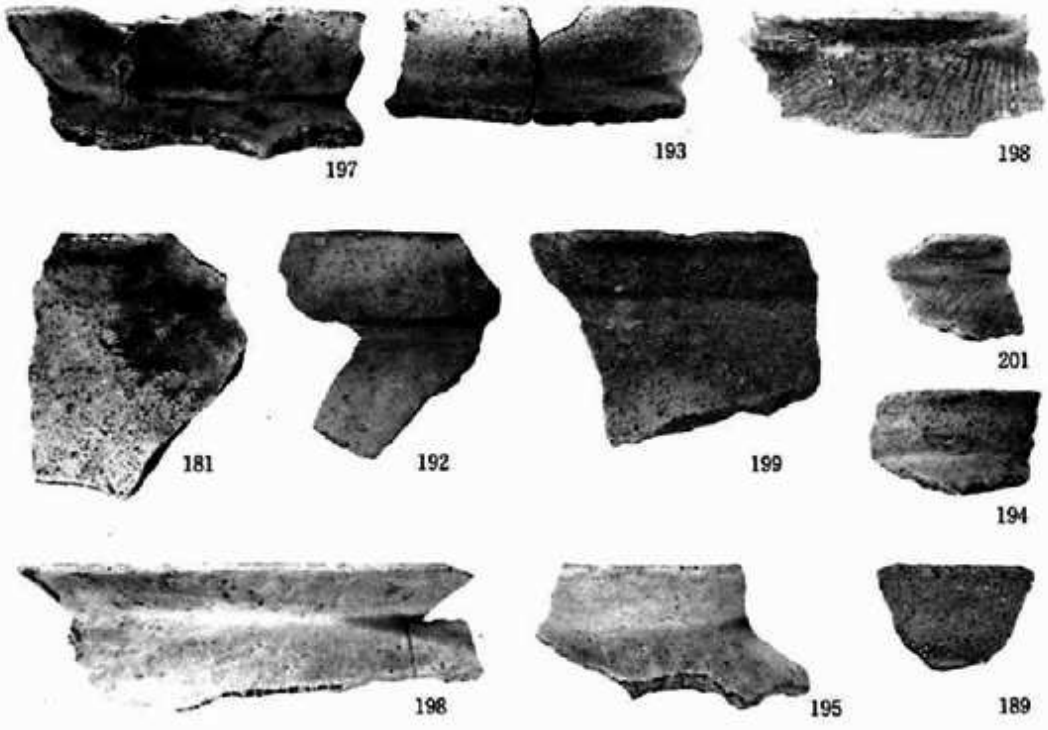
1．布留式土器甕・高杯・杯・器台



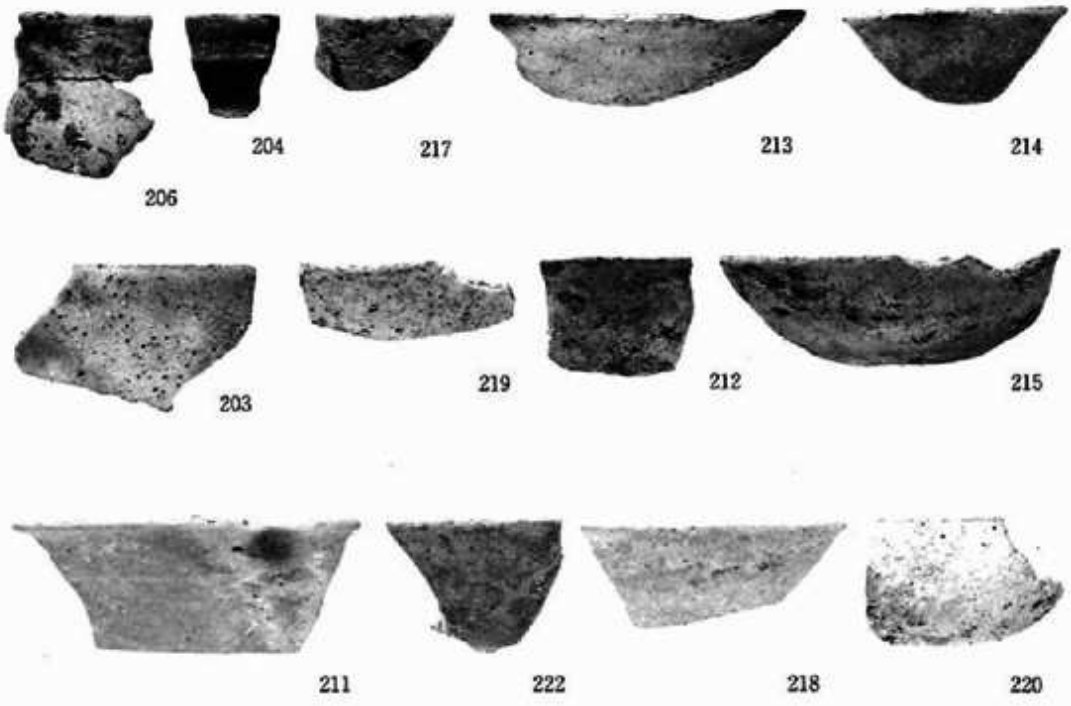
2．須恵器杯・蓋・高杯



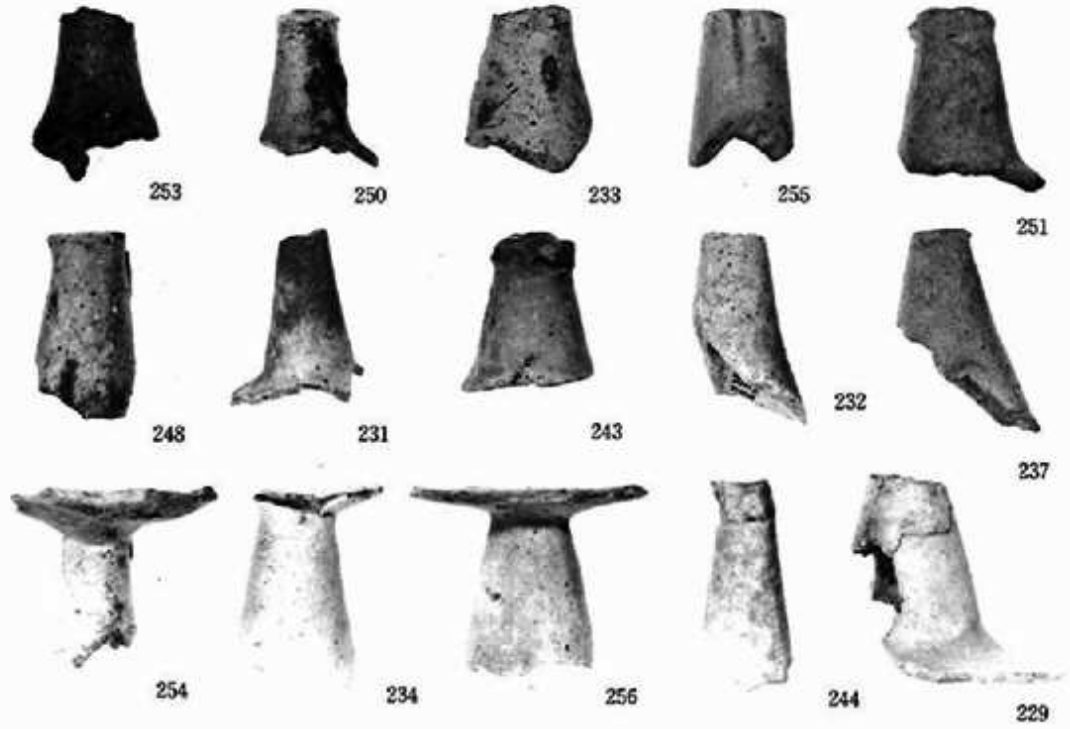
1．須恵器高杯・甕



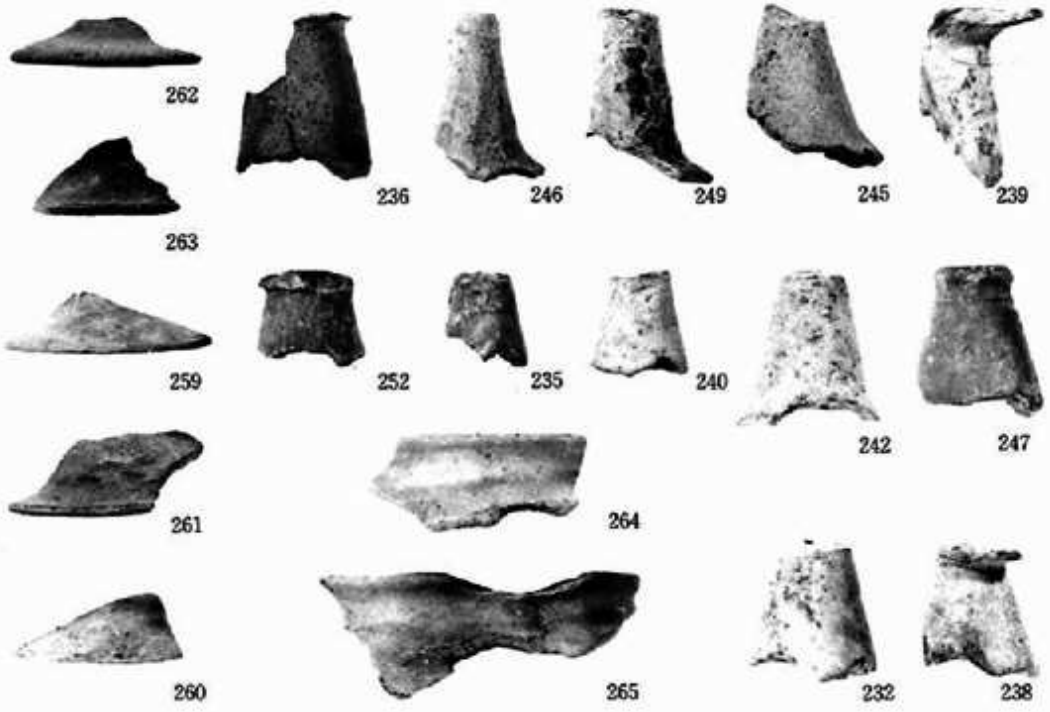
2．土師器甕



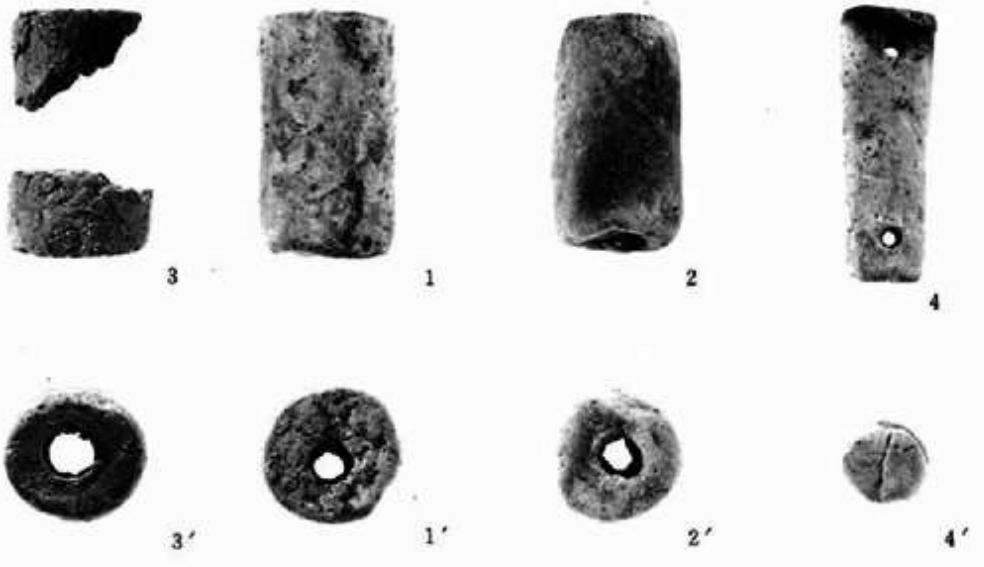
1．土師器小型丸底壺・高杯



2．土師器高杯


262
263
236
246
249
245
239
259
252
235
240
242
247
261
264
260
265
232
238

1．土師器高杯・甕


3
1
2
4
3′
1′
2′
4′

2．土錘

1．調査状況(南より)

2．方形周溝墓検出状況(南より)

3．周溝部とマウンド(北より)

1．甕棺出土状況

2．周溝部弥生土器出土状況

1．調査状況

2．井戸状遺構

1．第3ピット溝1

2．第3ピット溝2

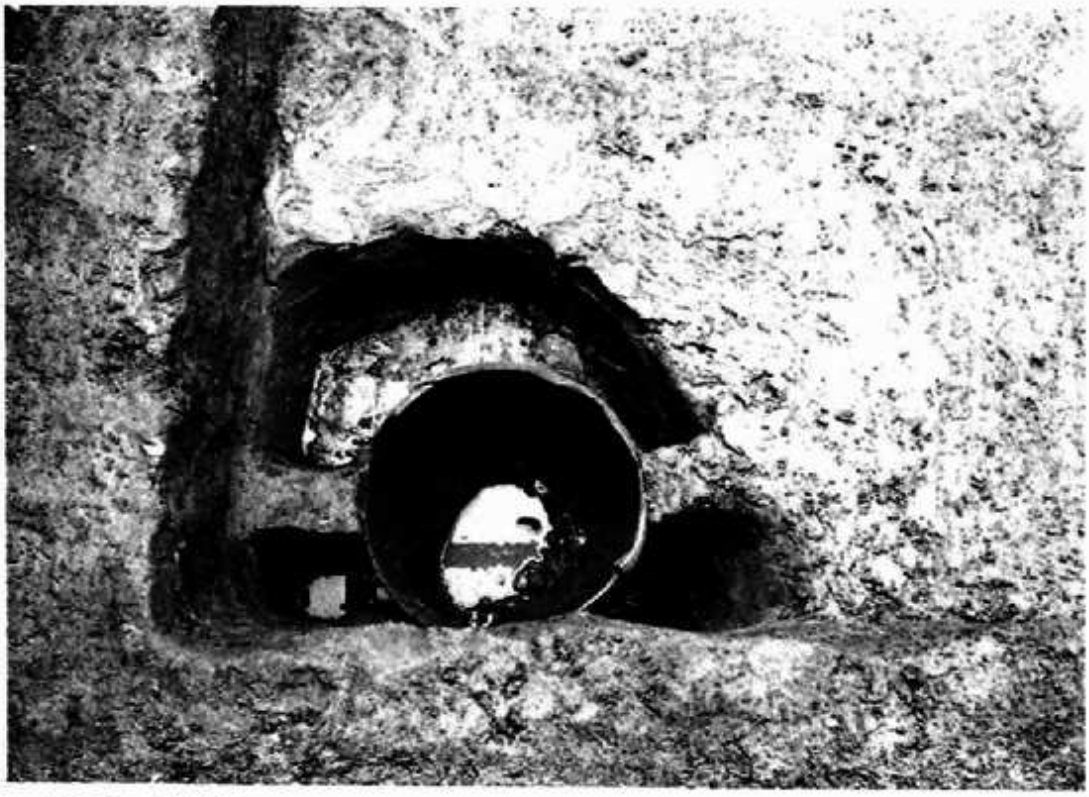
1．第3ピット土師器甕出土状況

2．第3ピット南壁断面

1．第4ピット溝3、溝4、土坑1、ピット1、ピット2

2．第4ピット南壁断面

1．第5ピット井戸1、溝5



2．第5ピット井戸1

1．第5ピット井戸1遺物出土状況

2．第5ピット井戸1断面

1．第5ピット井戸1完掘状況

2．第5ピット南壁断面

1．第6ピット溝6、土坑2

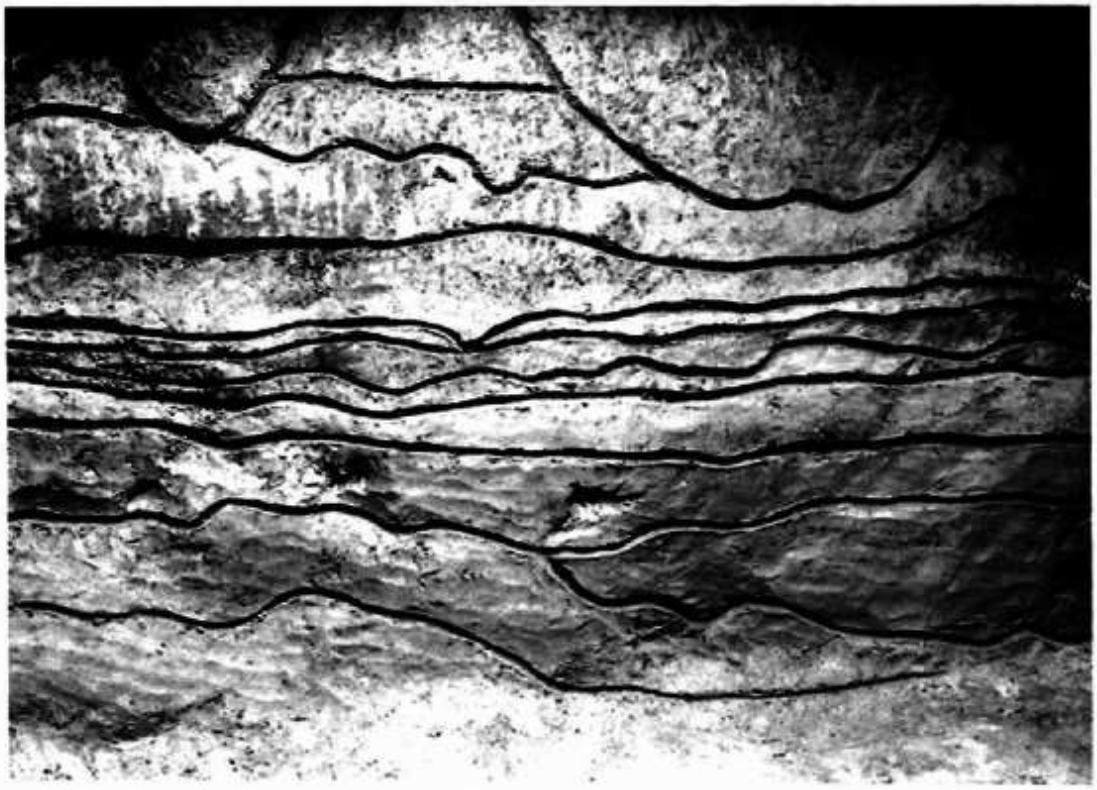
2．第6ピット南壁断面

1．第7ピット溝8、土坑3、落ち込み1、落ち込み2、落ち込み3

2．第7ピット溝8、土坑3

1．第7ピット土師器壺出土状況

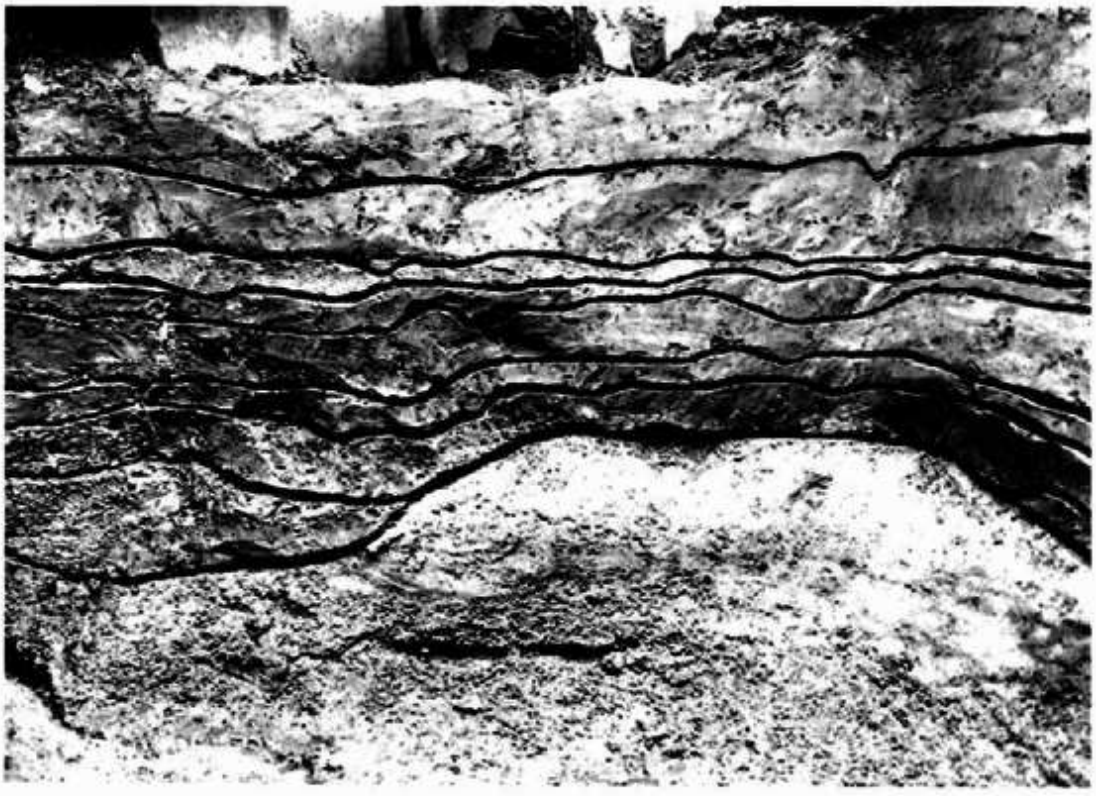
2．第7ピット庄内式土器壺・甕出土状況



1．第7ピット東壁断面

2．第7ピット東壁断面

1．第8ピット南壁断面



2．第8ピット南壁断面

1．溝1、土坑1

2．土坑2

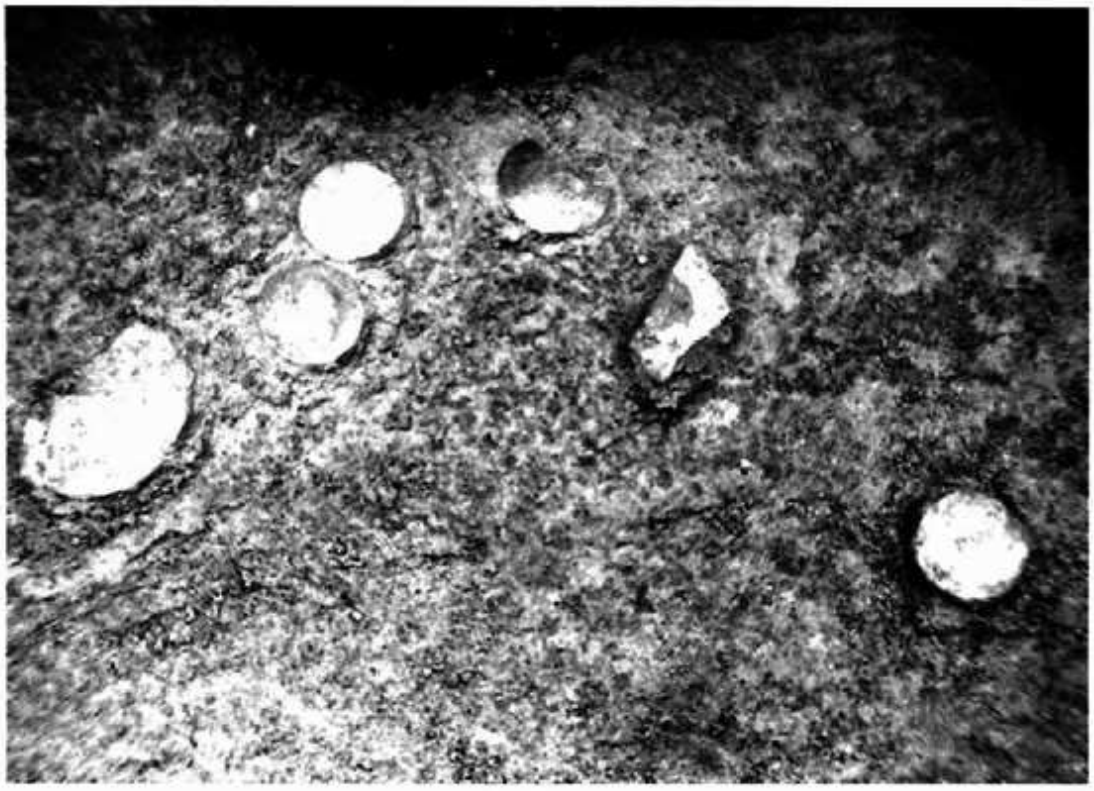
1．溝2（第1区）

2．溝2（第2区）

1．溝6

2．土坑5

1．調査前の状況



2．第1ピット第3内遺物出土状況

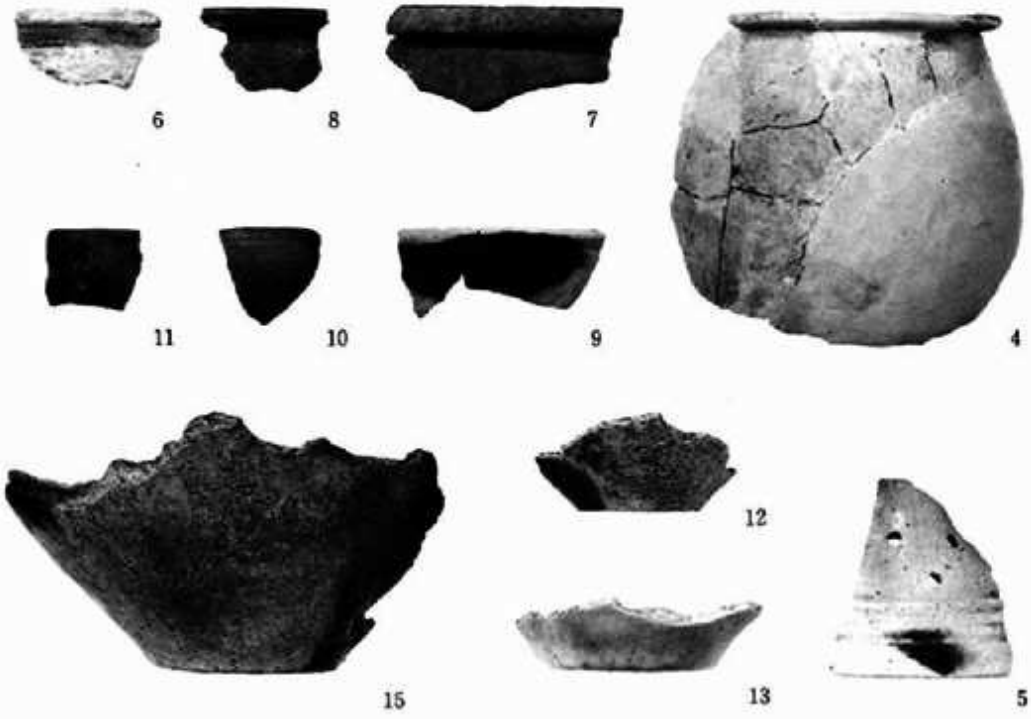
1．第1ピット溝1

2．第2ピット溝1

1．第3ピット第2遺構

2．第3ピット第3遺構

1．弥生土器甕棺（1・2）、弥生土器壺（周溝内出土）（3）



2．弥生土器（周溝内出土）

68

132

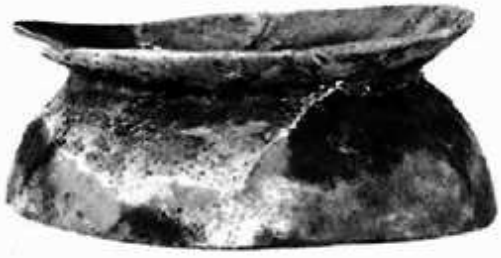
25

133

41

83

137

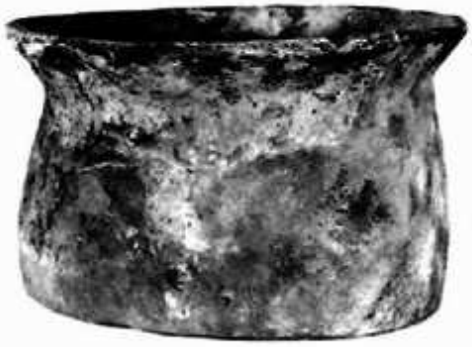


147

土師器杯・甕(第3ピット溝1・第3層、第4ピット第2層、第7ピット溝8・第7層)
須恵器蓋・鉢(第4ピット第2層、第5ピット第2層)

117

112



116

115

123

土師器杯・甕・羽釜、須恵器杯・甕(第5ピット井戸1)

51

143

90

146

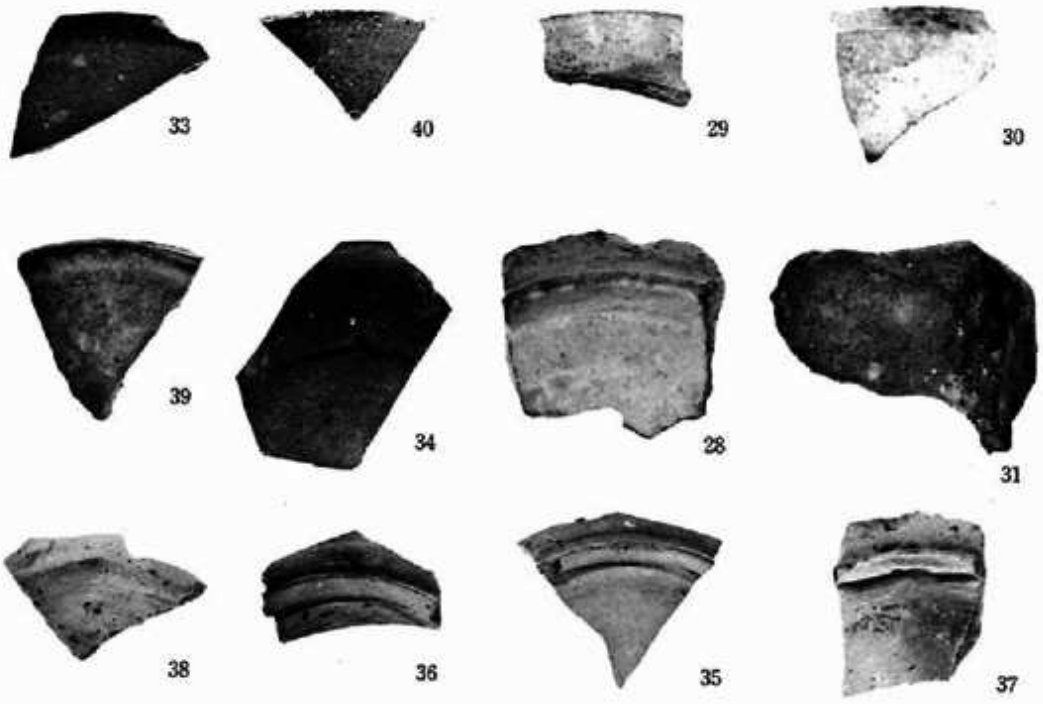
55

144

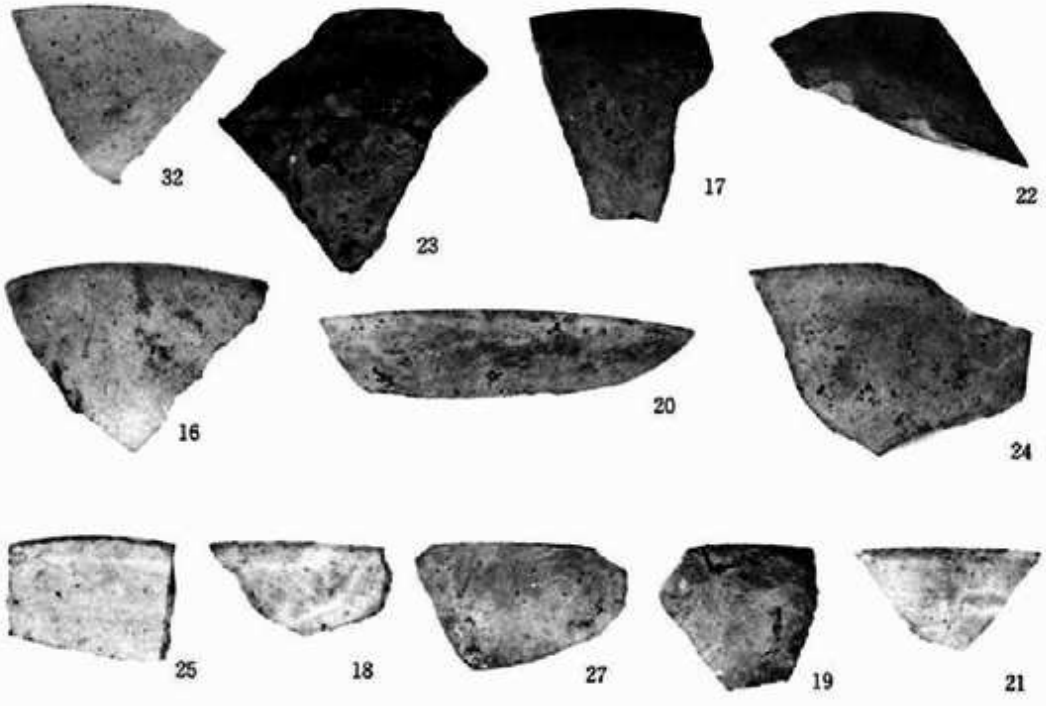
87

145

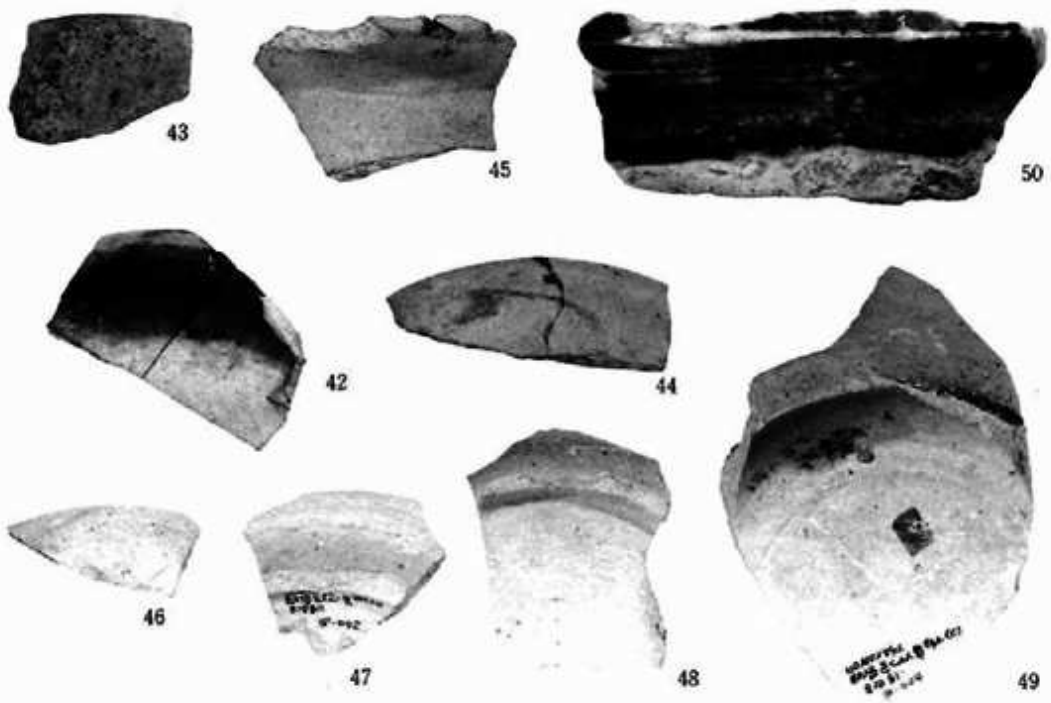
弥生土器壺・甕(第３ピット第16層、第４ピット第16層)、土師器壺・甕(第６ピット第３層、第７ピット第７層)



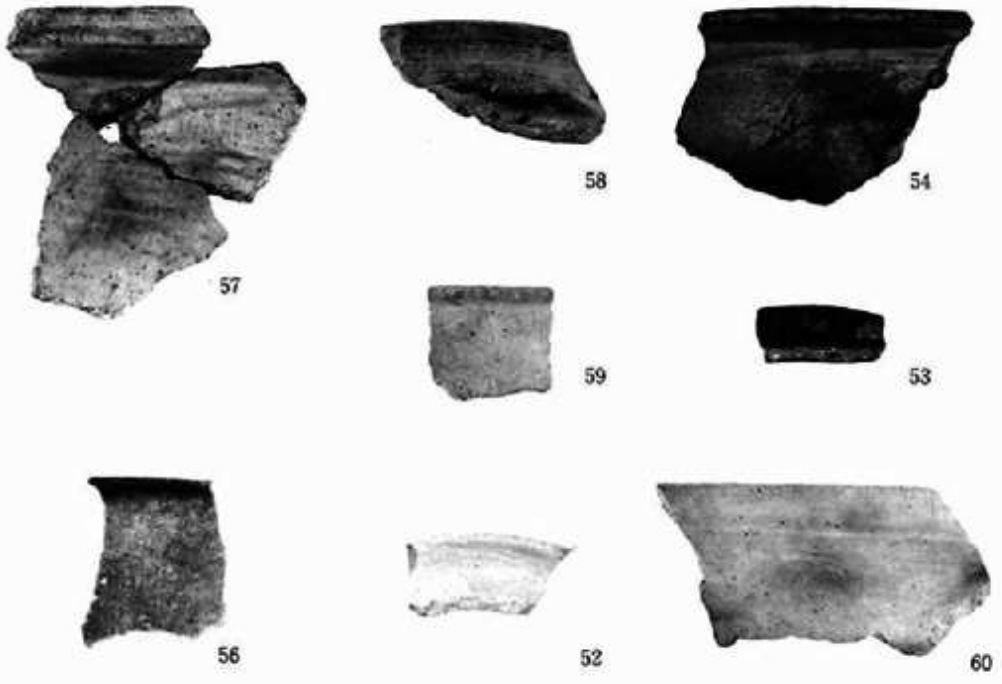
1．土師器杯・坩・甕・把手、須恵器杯・蓋・壺(第3ピット溝1)



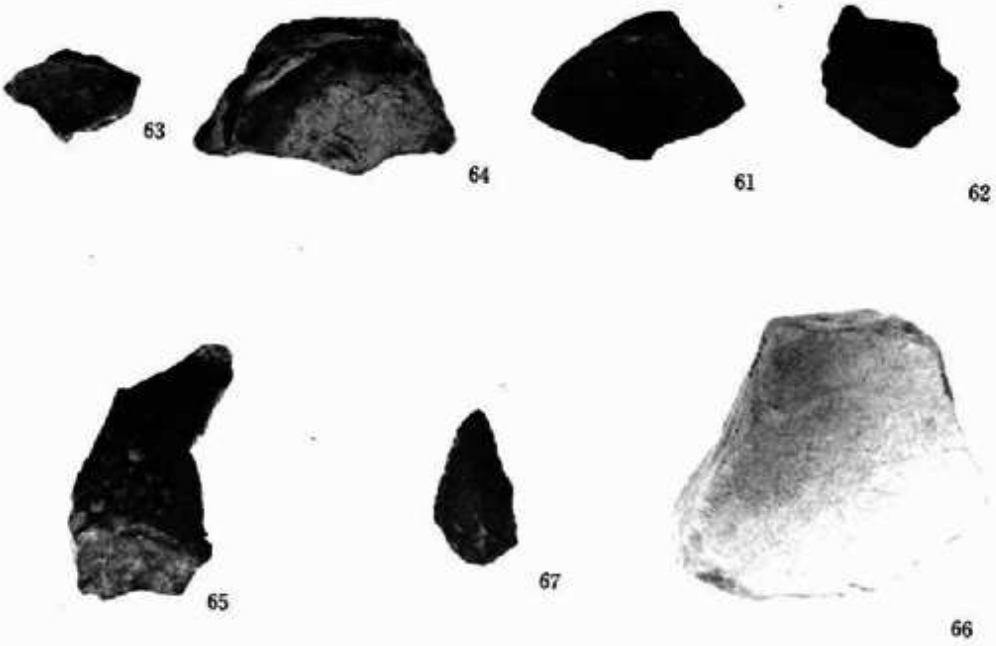
2．土師器杯、須恵器杯(第3ピット溝1)



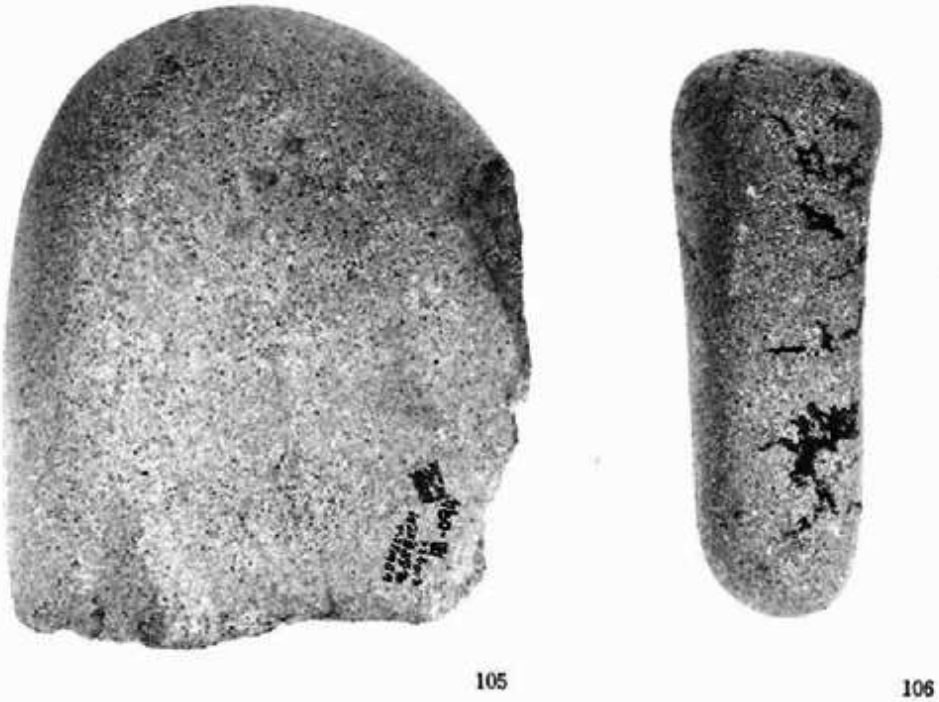
1．土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・壺底部・氏器甕(第3ピット第3層)



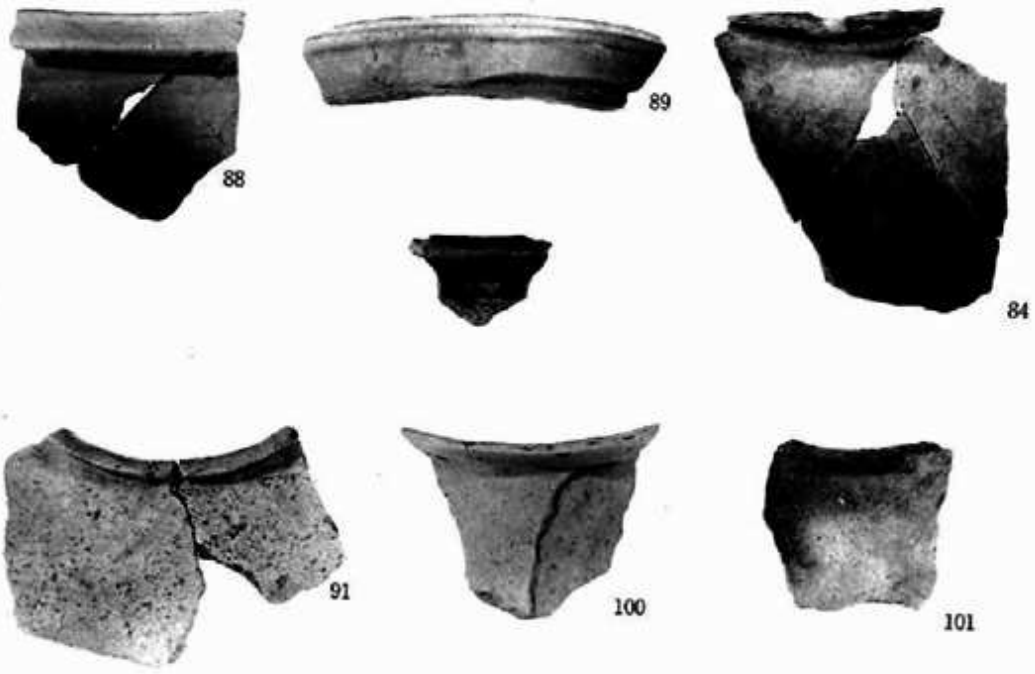
2．弥生土器壺・甕・鉢(第3ピット第16層)



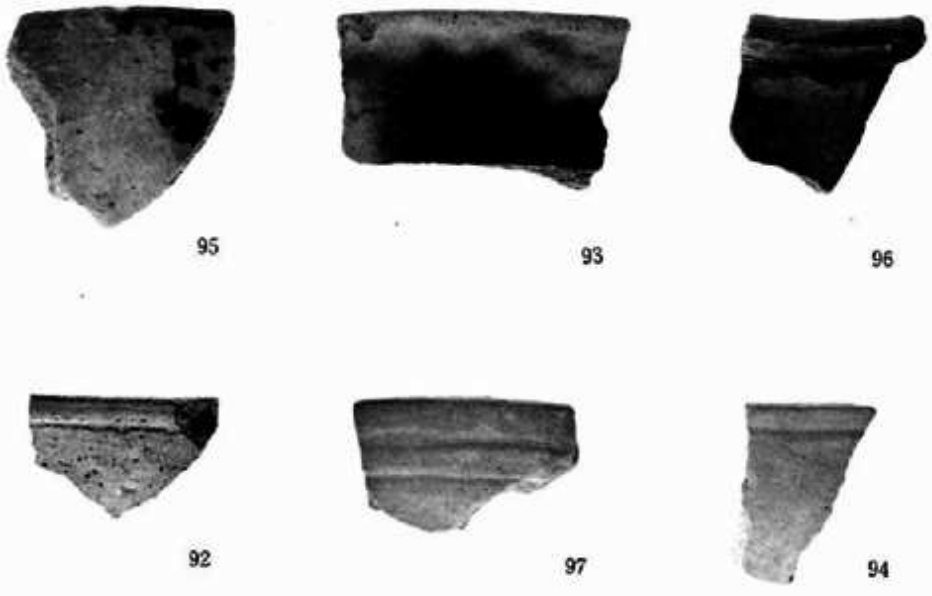
1．弥生土器底部・石鏃・砥石(第3ピット第16層)



2．すり石・すり棒状石製品(第4ピット第16層)



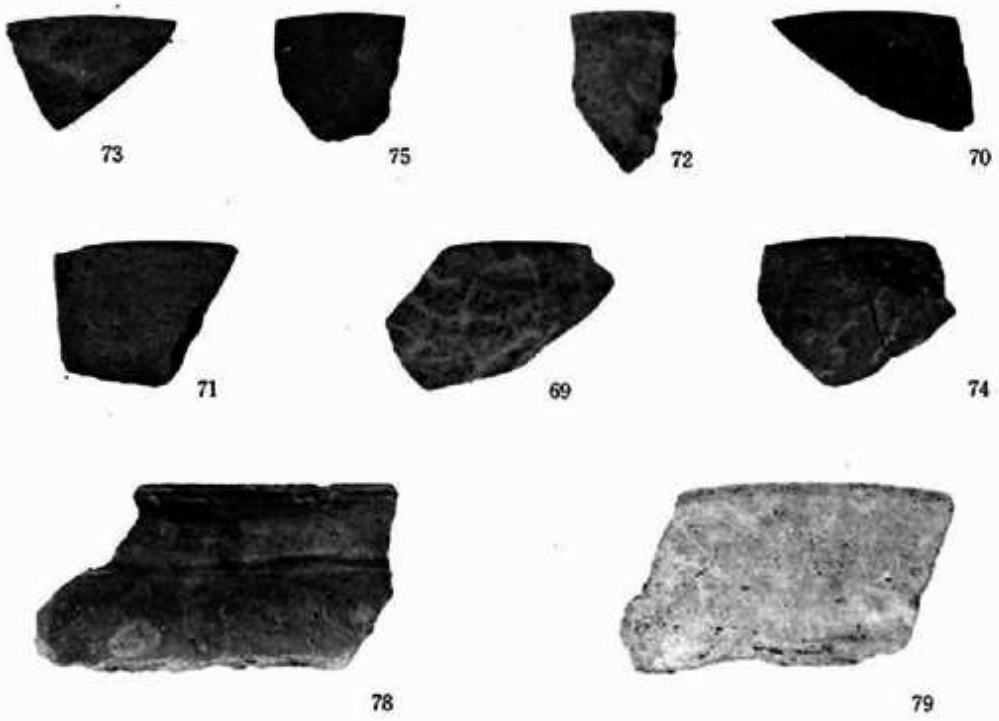
1．弥生土器甕(第4ピット第16層、溝3)



2．弥生土器無頸壺・鉢・高杯脚部(第4ピット第16層)

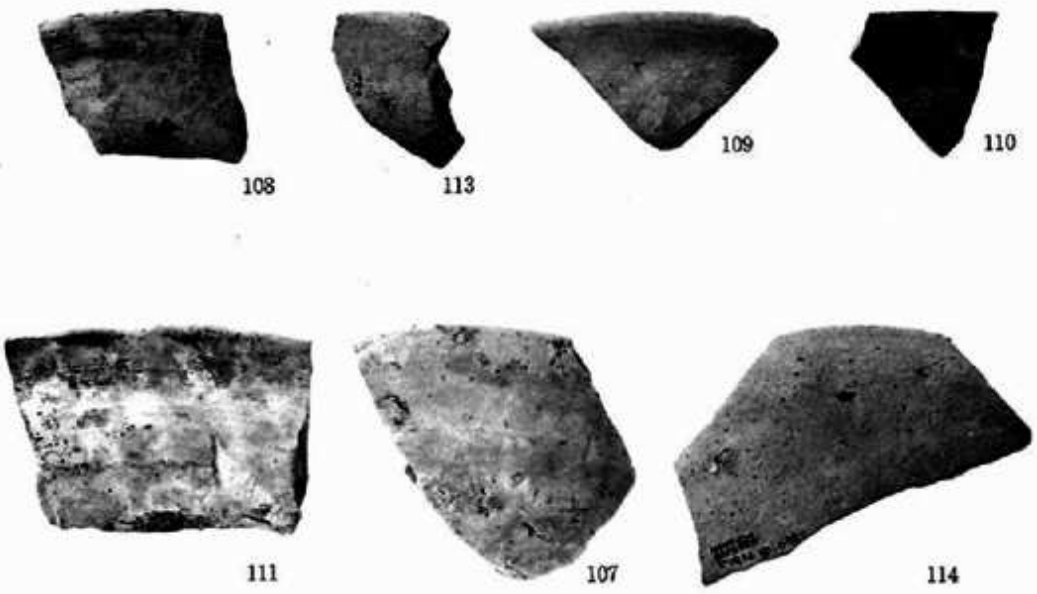
1．弥生土器高杯脚部・底部(第4ピット第16層)

2．土師器甕、須恵器杯(第4ピット第2層)

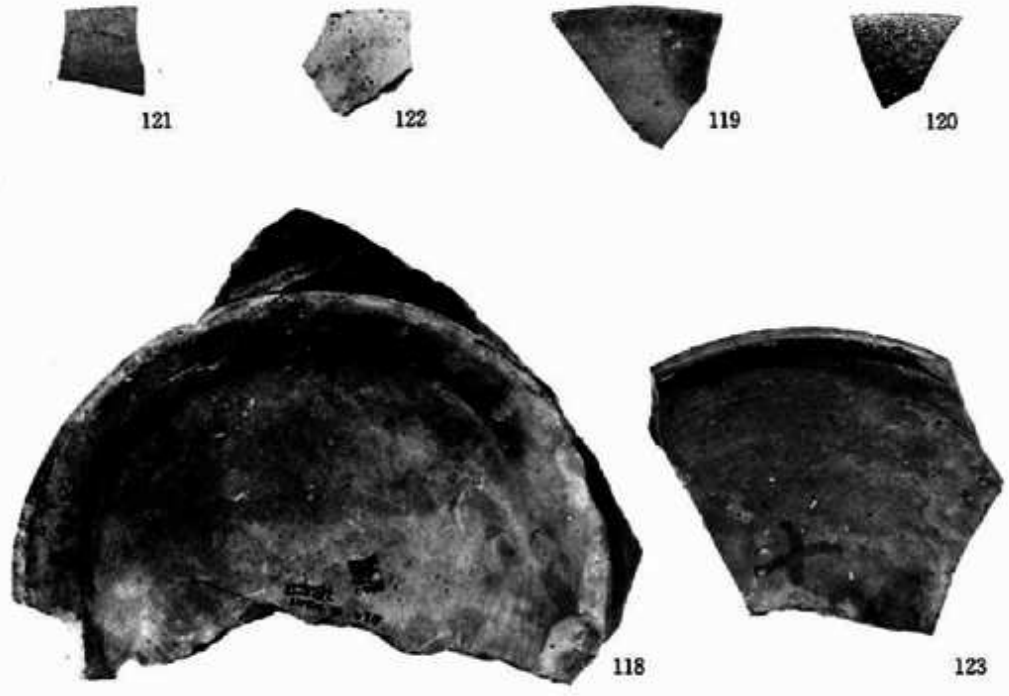


1．土師器杯・甕(第4ピット第2層)

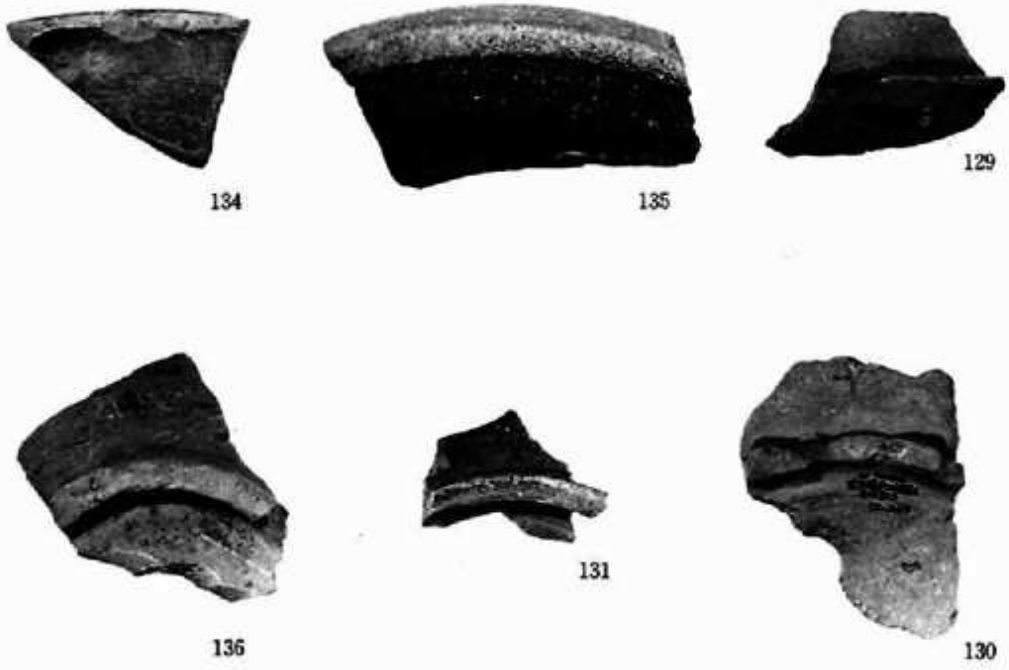
2．砥石(第5ピット井戸1)



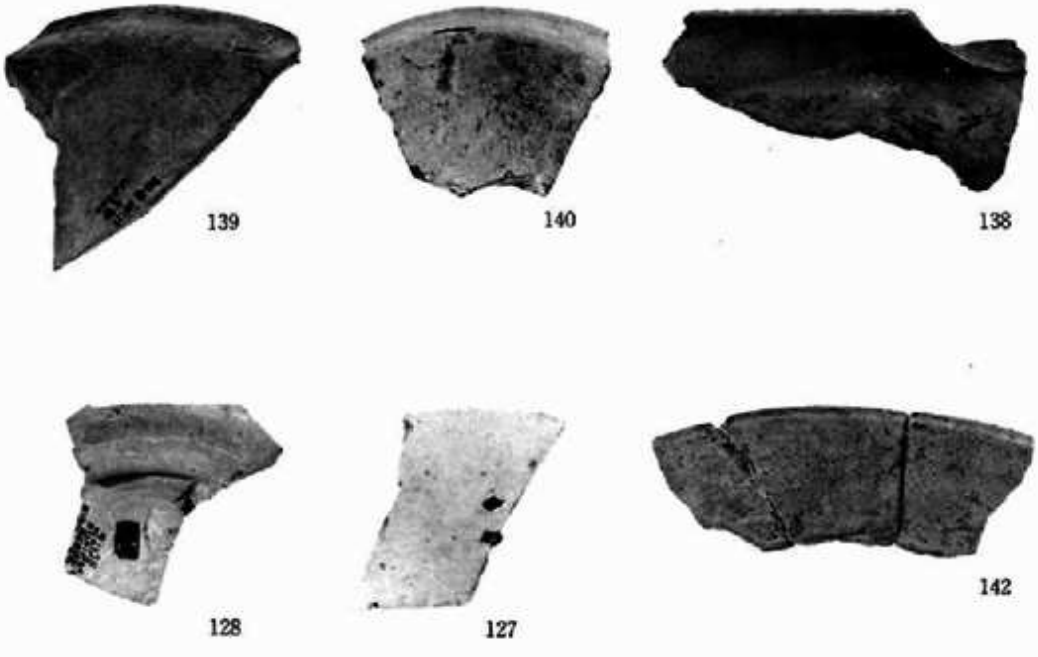
1．土師器杯(第5ピット井戸1)



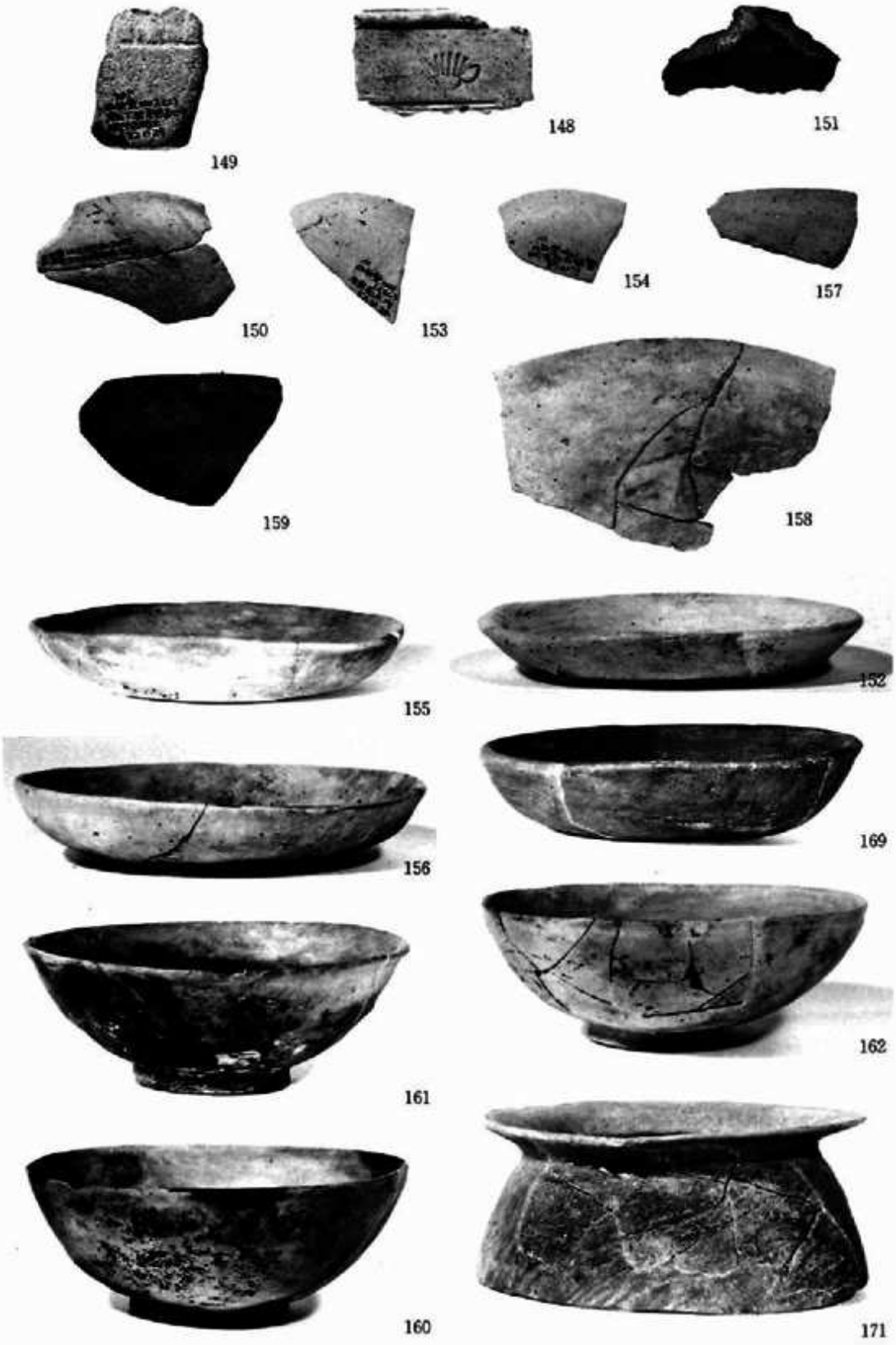
2．土師器底部、須恵器杯・蓋(第5ピット井戸1)



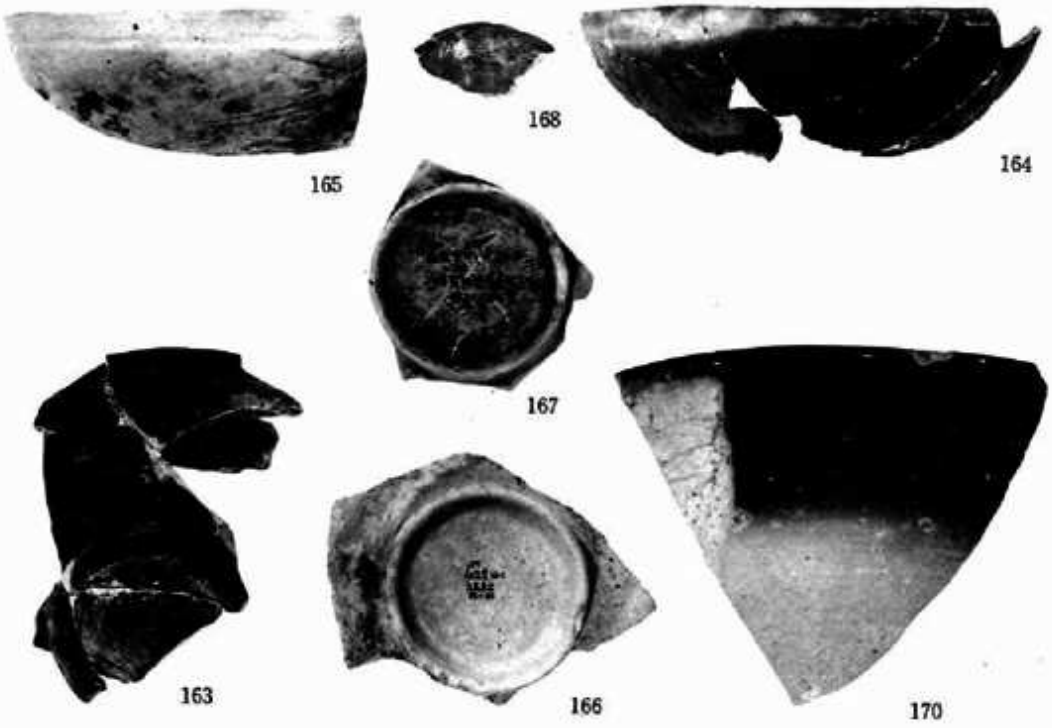
1．須恵器杯・甕・底部(第5ピット第2層)



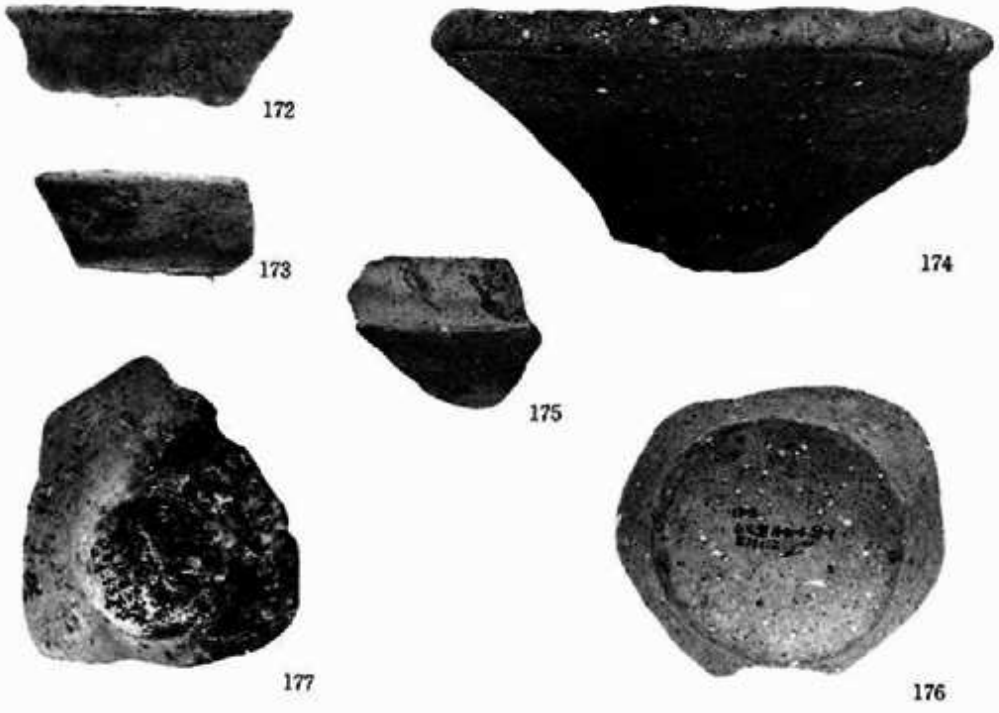
2．土師器杯・甕(第6ピット土壙4・第7ピット溝8・第6ピット第3層)、
須恵器蓋・底部(第5ピット落ち込み1)



埴輪、瓦質土器、土師器皿、黒色土器、瓦器椀、皿(第2層・第4層・土坑2)



1．瓦器椀・皿・鉢(土坑2)



2．土師器、須恵器

178

182

179

181

183

190

180

192

194

193

191

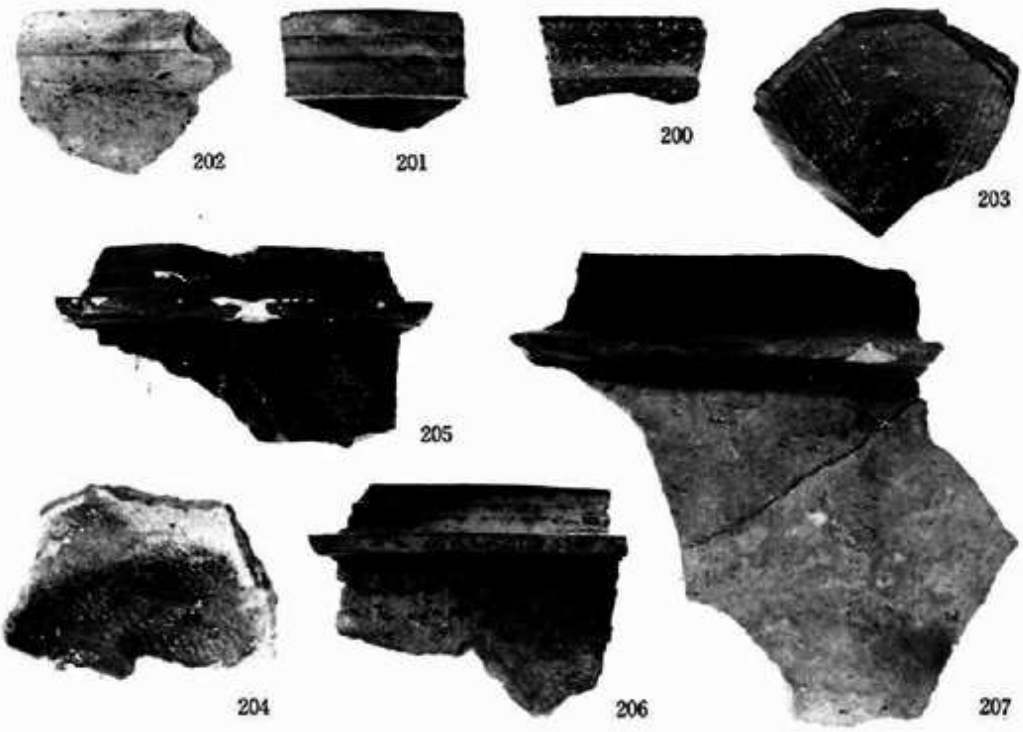
215

186

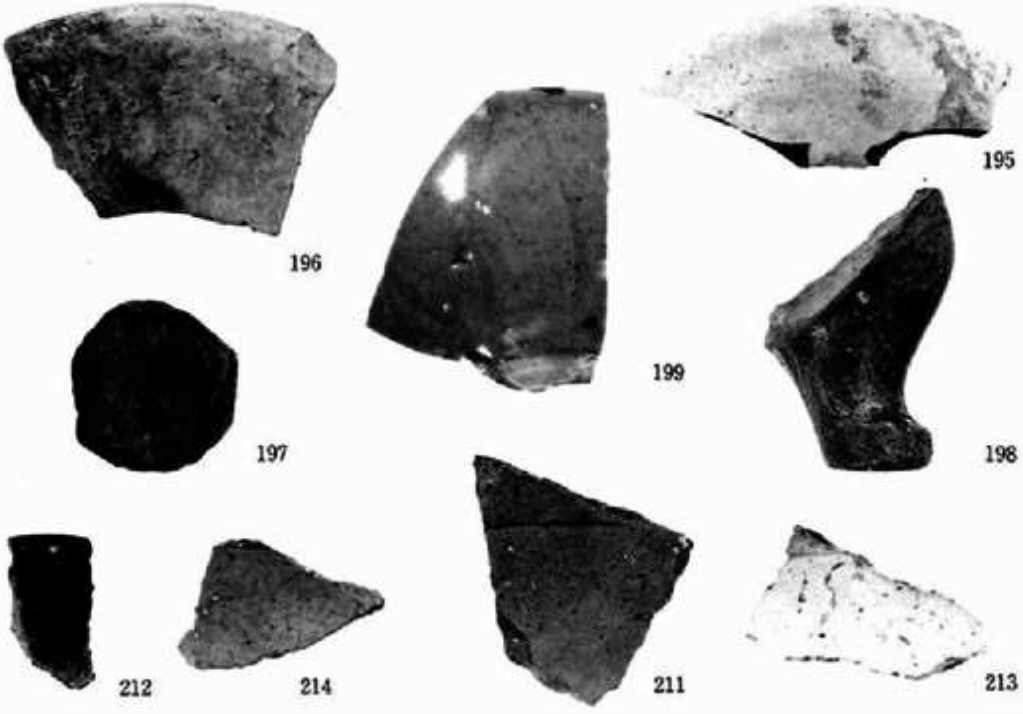
185

184

土師器皿、磁器(第1ピット第2層・第3層・溝1)



1．陶器、瓦質土器(第1ピット第2層・溝1)



2．土師器皿、磁器、陶器、瓦、弥生土器(第1ピット溝1・第14層)

187

188

189

210

209

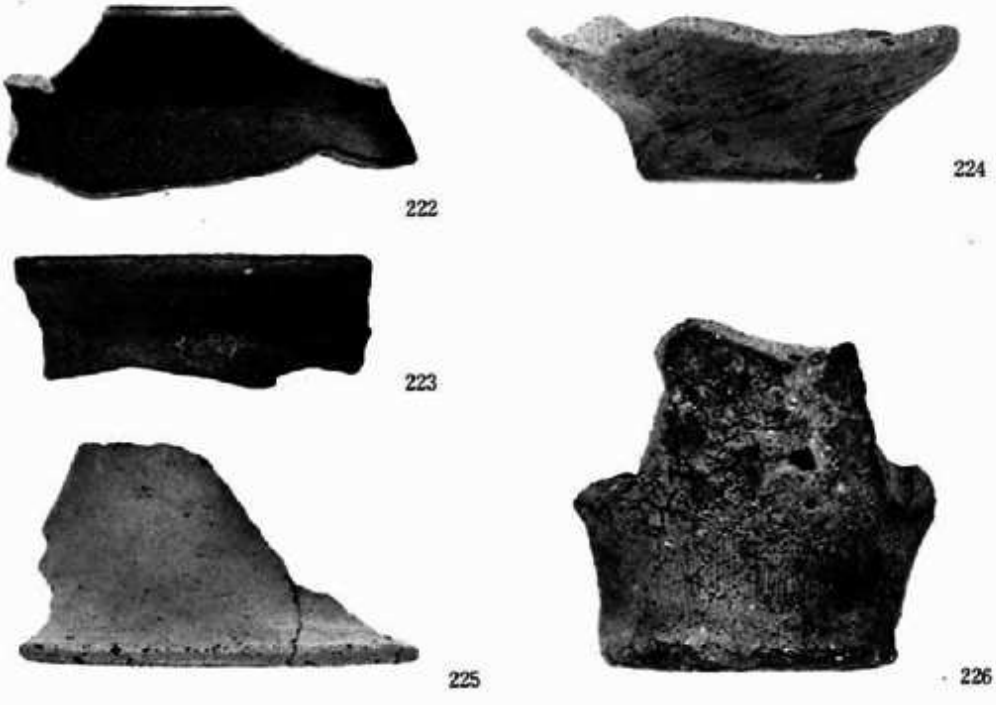
209′

208

208′

埴輪、木製品（第２ピット第２層・溝１）

1．土師器、瓦器椀、羽釜、瓦(第2ピット)



2．土師器(第3ピット)

(財)東大阪市文化財協会年報
1983年度

1984年3月31日

発　行　財団法人 東大阪市文化財協会
印　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所